
G O D E A T E R 第一章 偽りの神を喰らいし神の子

赤の川 大佐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D E A T E R 第一章 偽りの神を喰らいし神の子

【Nコード】

N 8 2 1 5 Q

【作者名】

赤の川 大佐

【あらすじ】

その少年に家族はいない。

本部に心を許せる人間はいない。

だけど、命は尊い。

そんな、心優しき少年は、愉快な人々に出会い、変わっていく。

そんな仲間達は、精神を疲弊しきっているその少年の、厚く、高い拒絶のドアを開いていく。

「……………この世界はいつだってわがままで、理不尽な選択を

要求するんです

プロローグ(前書き)

ちよびっと編集しました

プロローグ

「オラクル細胞」

西暦2050年代頃、それはある日突然現れ、ありとあらゆる物体を捕喰し、喰らった物の特徴を記憶し増殖、その情報を元に、それと同じ者と強固でしなやかな結合をし、巨大な化け物となり多くの命を喰らっていった。

彼らに既存の兵器は一切効かず、各国が連合し対策を行ってもまるで歯が立ず多くの犠牲者を出し、人類の文明は崩壊していった。

そんな神にも等しい強大な力を持つ彼らを極東に伝わる八百万の神にちなんで、人々は「アラガミ」と呼ぶようになった。

そんな彼らに対し怯えきった人類をリードしていったのは、オラクル細胞発見時から彼らの研究を行なってきた生化学企業「フェンリル」だった。

彼らは「オラクル技術による文明の復興」掲げ、各国に支部を展開し、そのオラクル技術の結晶、唯一アラガミを殺せる生体兵器「神機」と、体内にオラクル細胞を接種し神機を操る新人類、神機使い「ゴッドイーター」により、アラガミの脅威から人類、いや地球は絶滅の一手前で踏み止まった。

2062年4月25日

フィンランド、フェンリル本部

ある一室には大人数の大人がいた。彼らの視線はある一点に集中している。

その目には1人のまだ7歳の少年が映っている、初めて会った人ならば女の子と間違えてしまうような可愛らしい顔、白い肌、120cm位の身長、東洋人と窺える漆黒の少々長めの綺麗な髪に二重の目、そんな子供は腕を組み壁に背を当て目を閉じていた。

「あれが世界に1台しかない神機の適合者か」

「どうも生まれた時から特殊な偏食因子が血に流れているらしいぞ」

「ああ、既存のP53偏食因子やマーナガラム計画に使用されたP73偏食因子とは違う新種らしいな」

「せめて2台いてくれれば良かったのにねえ」

「このご時勢贅沢言っな」

そんな自分をネタに広げられている会話など少年は聞いてなかった。ただ待っている、近くにある扉が開くのを。

10分程待ち、やっと扉が開く音が耳に入りつつすらと目を開けた。目だけで聞こえた方を見る。

まず目に入ったのは白衣を着た20代中盤位の青年である。

「待たせたね」

「……………遅い」

壁から離れ、青年の方に体を向かせ声を返す、青年は「こちらへ」と言い扉の中へ少年を招く。

扉の先にあったのは、プレス機に似た機械が1台。

「落ち着いたらその機械の上に右腕をつけておい!？」

青年は驚いて少年を見る、少年はすでに機械の上に右腕を置いていた。

「はあ、まあいい」

「……………早く始めてください」

「ん、了解」

返事をし、青年は無線をポケットから取り出し誰かに指示する。

ガシャンっつっ!!

直後機械の一部が少年の右腕に落ちる。

「ぐっ!!」

右手首に感じる激痛に思わず声が出てしまう。

すぐに機械は上がり元に戻り、痛みから解放された少年は自分の右手首と右手が掴んでいる物を見る、右手首に付いているのは赤い腕輪、簡単に言えばゴッドイーターの証であり神機と接続の為に必要な物である。

しかし少年の付けている腕輪は、まだ成長するのを考慮しても、一般のゴッドイーターの腕輪より小さかった。

そして掴んでいるのは神機、こちらは形の面では他のと差異は無いが、神機の指令細胞群であるアーティフィシャルCNSは血のような赤である。

ちなみにコアとはアラガミの人間でいう脳でありこれを破壊、摘出するとアラガミは結合が解けて塵のように消えるのである。

神機を持ち上げ軽く振る、そんなに重くは感じられない、当然である今や神機は少年の体の一部のようなものなのだから。

少年の耳に手の平と手の平を連続で叩いた音が聞こえる。要は拍手である

「おめでとう、これで君は晴れてゴッドイーターの仲間入りだよ」

笑顔で青年は告げる。

「まっ他の神機使いとは違い君のは可変式、今フェンリル全体が新しいP53偏食因子を探して研究中なのは知ってるね？」

少年は前にフェンリルの偉い先生に聞かされた事を思い出し頷く。

「そんで君は、まだ発見されていないにも関わらず、とにかく先に作った可変式に適合した。それは君の体の中には生まれつき新種の偏食因子があるからさ、そしてその偏食因子が君の脳と共存してて君が変形しろ！って思うと、偏食因子経由で神機が感応し形を変えて剣と銃に変形するんだ」

長々と説明されて、正直少年は青年に呆れていた。とにかく言われた通り、今が剣の状態なので、変形の指示を飛ばす、すると無数の細い触手が現れ剣身と銃身を入れ替える。今さっき神機の先に付いていた剣身は下部に付き、神機の下部に付いていた銃身が神機の先に付く。

「うんOK、じゃあ君はこれからコードネームで呼ばれるけど、君は何色が好きかな？」

「……赤」

「じゃ君のコードネームはRED EATERね」

レッドイーター

青年はポケットからメモ用紙を取り出し書き込む。そして切取り少年に渡す。内容は「極東支部配属、レッドイーター」であった。

「そこで1、2年ゴッドイーターの基本を学んできてね。あと神機の整備は自分でできるよね、特別部屋を手配するよう頼んであるから、そこで整備してね」

この日、コードネーム「レッドイーター」は、極東支部新兵として配属されることが決まった。

プロローグ（後書き）

レッドイーター君の服は
7歳用の、F武装 レッド 上下
です。

神機の各パーツは読者様の想像に任せますね。
一応最初に支給されるパーツで形成されています

第一話、極東へ

フェンリル本部

「レッドイーター君、出発準備できたか」………神機あれば十分です」………ですよねー」

朝から白衣を着た見た目20代の青年のだらしない声と、ヘリの中から聞こえる少年の声、歳は7歳と幼い。見た目は女の子のような可愛らしい容姿の、しかし随分と大人びた口調の音が、フェンリル本部のヘリポートに響く。

「じゃ、極東に着いたら絶対することその1、ペイラー・サカキ博士に会ったら君の血液を渡すこと。その2、可変式というのは、一応本部の機密事項だから極東支部支部長とサカキ博士以外の人物に知られないように。まあ、他のフェンリル関係者の前と、他のゴツドイーターとの共同任務の時だけ、銃身か剣身の回りに包帯巻いてカモフラージュしろ、バレたら殺してOK。以上のことを忘れずに」

所々不味い言葉を挟んだりしているが、一応簡単に上からの命令を目の前の可愛らしい容姿の子供に伝える。無言で頷くその少年はヘリの扉を閉めシートベルトをする。

(さて、新種の偏食因子の潜在能力は、あの激戦区、極東で覚醒すると思うし、さっさと持ち場に戻るかー)

ふああああ、と欠伸を掻きながらヘリポートから離れる。振り返

れば、すでにへりは地面から離れ極東に向かって進んでいた。

4月29日

フェンリル極東支部

フェンリル極東支部、通称「アナグラ」。

かつて日本と呼ばれた国の神奈川県藤沢市にあたる場所を拠点としている支部である。

そして、その周りには人口約数万人が住む第8ハイブが存在し、その第8ハイブ全体を囲む分厚い壁、「アラガミ防壁」により基本どの支部もある程度はアラガミの脅威から身を守っている。

そして現在昼時、アナグラの屋上にあるへりポートには二人の男がいた。

「……興味深い少年の到着はまだかいヨハン？」

先に口を開いたのはペイラー・神、通称「博士」、眼鏡の下の狐目に絶えない笑顔が彼の特徴といえる。フェンリル創設メンバーの1人であり、現在フェンリル極東支部技術開発統括責任者と、ゴツドイーターの座学教官を任されている。

「そろそろじゃないか？本部は可変式神機の「サンプル」を君に任ずると言っているからな、頑張ってくれ」

返事をしたのは博士がヨハンと呼んだ人物、ヨハネス・フォン・シックザール、フェンリル極東支部の支部長である。彼が着ているのは、支部長に支給される純白のコートである。

「そろそろ日本海を越えた頃じゃないのかい？」

待ちくたびれたのか、博士はどこから椅子を取り出し座る。しかし、彼をよく知る人なら、待ちくたびれたとゆうより、気長に待つとゆうのがすぐ分かってしまう。

「ああ、へりのルート上にアラガミはいないから問題無いはずだ」
諜報部からの報告をシックザールは博士に告げる。

ああそつえば、と博士は空を見上げ、シックザールに言う。

「報告では、男の子って言ってたけど何歳位か聞いたかい？」

「いやなにも。だが実戦はあの姉弟に同行するよう言っている。10歳に満たない子供でも、あの2人なら、最悪な事態はある程度まで対処できるはずだ」

シックザールも空を見上げる、どこまでも続くような青い空、よく見るとへりのような物体が近づく。

「来たか」

第二話、それは悪夢

……暗い、時間的に夜なのだろうか。しかし、自分が見てる風景は霧が掛かって分かりづらい。

(「ここは、どこ?」)

ここは2055年のフェンリル本部管理下の病室。

声が聞こえる。自分の声の高さと似ているが、人の発したものは思えない程異質だった。

(2055年?……お母さんはいるの?)

次の日の出産に備えて、寝ている。

(次の日って僕の……)

そう、君ノ、ザザツ、生まれたヒ……。

声にノイズが混じる。そしていつの間にか辺りが光で包まれる。最初に目にしたのは……血だ。

「ア、アラガミ化だ?!?何故一般人が!!???」

見知らぬ男が叫ぶ、そして彼は、彼が叫んだ「一般人」に食い干切られる。

(……お母さん?)

「そう、君のお母さん。君を出産した直後、体の中にあつたと思われるオラクル細胞が体を凄まじいスピードで侵食、結果アラガミ化病院にいる大半の人間を捕喰した後、P53偏食因子を押し付けられ、それから逃れるために病院から脱走。その約1年後、最初期とはいえ、ピストル型神機に適合した神機使い達に討伐された」

声質が自分に近いものではなく、フェンリル本部の上層部の人達に変わってゆく。

「怪我をするんじゃない、君は世界に2つとない貴重なサンプルなんだ」

「子供だからって甘えないで、あんたはただ実験に協力すれば良いのよ」

自分の心を抉っていくフェンリル本部の上層部の奴ら、自分を毎日ただの貴重なサンプルとしてしか見ない、大嫌いな人種。

「お前の母親のせいで、何人の仲間が死んだと思っている!？」

仇がないから、その原因である自分を責める本部の犬ども。

この世の中でも、人は人を憎み、怒りをぶつけてくるなんて当たり前だ。ただ、その対象が今は7歳の、まだ誰かに甘えたい時期の子供にぶつければどうなる。子供はこれ以上傷つかないよう他人を拒絶するだろう。それが今の自分が学び実行していること。

でも、他人を拒絶することができても、浴びせられる言葉までは拒絶できない。そうだ、だから人がだれもいない戦場に行くために、

ゴッドイーターに自分はなったのだ。

元から神機使いになるために訓練をさせられてきたことと、自分に宿る偏食因子の力、可変式神機の性能チェック等の理由により、上層部も許可を出したのだ。今までどおり、ただのモルモット扱いだがそれでよかった、先の目的どおりだから。

「……………い」

なんだろう、声が聞こえる。

「お……………い」

声の大きさが大きくなる。

「起きなよー！！」

「うわッッ!？」

耳元で大声を出され、F武装レッド上下を着た少年、レッドイーターは反射的に立ち上がろうとするが、ベルトをしていた為立つことは出来なかった。とにかく一度冷静になり、自分を起こした人物を睨もうと、振り向く。

「やあ、起きたかい？」

眼鏡を掛け、いつも笑っているような狐目の男が、顔が付くのは？ というくらい物凄く近い距離でレッドイーターを眺めていた。

「きゃあああああー！！！！！！」

レッドイーターは驚きすぎて、女のように叫び、目の前の狐目男の腹を足で蹴り飛ばす。

「おおおう！！、これが神機使いの蹴りかー、初めて喰らうね。ゲフツツ！？」

強烈に痛いはずなのに、空中で蹴りの感想を漏らしながら背中から博士は地面に落ちた。生きているか否かより、蹴り飛ばした男の顔を思い出す。と共に、上層部から貰った、極東支部支部長とサカキ博士の写真を思い出す。

「……………サカキ博士ですか？今の？」

近くで無言でこちらを見る、極東支部支部長の写真と一致している人物に問う。

「いかにも、彼が君の言うサカキ博士だが……………ペイラー、寝てないで起きてくれ。」

寝ているのは分かっているが、支部長は目線からレッドイーターを一度外し、博士の方を少し見て一応、生死を判別する。

死んでないと思うが、自分がどれくらいの強さで蹴ったか言っておく。とゆうより弁解の言葉に近いと思うが。

「……………本気で蹴ったわけじゃありません」

「いや、気にしないでくれたまえ。こちらこそすまなかったね」

博士は、ムクツ、っと体を起こし、首だけ動かしてレッドイーターを見て謝罪する。

レッドイーターはそれを見て、そろそろいいかな、と思いヘリのシートベルトを外し、ちょこん、とヘリから降りて自己紹介を始める。

「……………本日からこちらに配属することになった、レッドイーターです。報告に書かれていますと思いますが、可変式担当です。」

「ああ、話はヨハン 支部長から聞いているよ。僕はペイラー・榊だ、よろしく頼むよ、お嬢さん」

ブチイ！！レッドイーターのこめかみに、血管が浮き出る。

「博士、彼は男性だと言っておいたはずだ」

「ごめんごめん。こんな可愛い容姿なもんだから、つい忘れてしまったよ」

ブチブチブチイッ！！、支部長が博士を注意するが、レッドイーターのこめかみには沢山の血管が浮き出していた。

実は彼、レッドイーターは、女扱いされることを極端に嫌っている。悪口などは綺麗にスルーするが、何故かそっちの方だけ過剰に反応する。ちなみに、今の彼の状態は臨界点ギリギリとゆう危ない状態だったりする 結構短気であった。

支部長は自己紹介が済んでないので、レッドイーターに告げる。

「紹介が遅れた、私はこの支部の支部長を任せられている、ヨハネス・フォン・シッケザールだ。よろしく」

微笑んでいるが、目は笑っていない。レッドイーターの怒りは臨界点ギリギリの状況なので気付いていないが……。

「じゃあ、今夜、20:00に僕の部屋に来てくれ。ラボラトリってゆう区画の奥だから分かりやすいと思うよ」

「では、私も仕事があるから、失礼させてもらうよ」

博士と支部長のどちらも去るのを見届ける。レッドイーターも各区画を覚えた方が良くと思いヘリポートから去る。怒りの収まる気配は微塵もないが。

第三話、適合率

「・・・・・・・・どこ？」

疑問府を浮かべる少年　レッドイーターは自分の部屋がどこかとゆう、結構重要な事を訊くのを忘れていた。

「・・・・・・・・しょうがない」

独り言で諦めを口にしてから、区画移動用エレベーターに乗る。サカキ博士との約束の時間まで、まだ2時間以上あるため。見学の為にエレベーターのボタンを押す。

「地下1・エントランス」

エレベーターは結構早く動く。どうやら早く着きそうだ。

エレベーターの扉が開き、中を少し見る。すると眩むような明かりがレッドイーターの目に焼きつく。

エントランスはとても明るい照明が大量に設置されており、レッドイーターとしては正直驚いた。と、同時にエントランスから声が聞こえる。

「姉上、支部長の言ったた新人君はまだこないんですかね？」

「リンドウ、少し大人しくしろ」

男と女の声、会話からすると姉弟と推測できる。おそらく2人は

自分を支部長から聞かされているらしい。エレベーターから出て声が聞こえた方を向く。

外見は2人とも東洋人で、厳しそうな顔つきをした美女は設置されているソファに座り、その向かいの人物は弟、だろっか？ 美女と同じで整った顔の男が座っていた。

「む、どうやら来たようだ」

女がこちらに向く。その視線を辿って男もこちらを向いた。2人も立ち上がり、こちらに近づく。

「この可愛いお嬢ちゃグハア！！」

不幸なことに、レッドイーターは先ほどサカキ博士に女扱いされる寸前だった。その怒りの逆鱗に触れた男は本気で蹴られる。

「……………僕は男だ」

「ぐふ、この力……、君が支部長の言っていた新人君か？」

冷めた視線で蹴り飛ばした男を見る。それに対し、男は蹴られたところを擦りながら確認をとる。レッドイーターは、誰にも聞かされていないが無言で頷く。

「俺は、リンドウ、雨宮リンドウ。でそちらにいるお姉さんが、俺の姉上、雨宮ツバキだ」

ツバキと紹介された女は、よろしく、と言う。自己紹介されたので、こちらでも自己紹介をすることにした。

「……………本日からフェンリル極東支部に配属になった、レッドイーターです」

「レッドイーター？」

「……………コードネームです」

自己紹介が済んだため、また後で、と2人に告げる。レッドイーターは少しエントランスを見渡して、またエレベーターに乗る。

「ラボラトリ」

まだ早いが待つのも面倒なのでサカキ博士の部屋に行くことにする。

「おお！、僕の予想より129分46秒早い。よく来てくれたねえ」

「……………いいから早く血を持って行ってください」

「うん、分かったよ」

目の前で大量のディスプレイに囲まれた椅子に座りながら、サカキ博士は返事をする。どうやらいつ来てもOKだったらしく、すぐに自分の左手首に注射器の針を刺して採血する。

「さすがは新種、治癒スピードがそこら辺の神機使いより早い。実

に興味深い！」

針を抜いてたった数秒で傷が跡形も無く塞がる。

「じゃあそこに座ってくれるかい？メデイカルテックの時間だよー」

「……………聞いていませんよそんな話」

「大丈夫大丈夫、そこで大人しくしているだけでいいよ」

指示に従い、レッドイーターは近くのソファに座る。それを確認した博士が手前のキーボードを押す、するとサカキ博士の特徴的な狐目を、カツ！と見開き、突然震える。すると……………

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
お！！！！？？？ なんだいこの数値は！？ 適合率が今までに無い
ほど高い！！！！」

「ふにゅ！？」

レッドイーターは可愛い声を出しながら、突然目の前で神機使いすら怯ませる大声で叫び出す博士を見る。

「どうした、ペイラー？」

しばらくして、後ろのドアから仕事をしているはずの支部長が入ってくる。そこまで響きましたかさっきの……、とレッドイーターは心底思っつ。

「目を覚ませ。ペイラー、何があった？」

支部長は事情を聞こうと博士に訊ねる。しかし博士はあまりの衝撃で気絶して、ただの屍のようだ。レッドイーターはチャンスだと思ひ、支部長から部屋の場所を聞き出し、この場を立ち去る事にした。

第四話、自室は役員区画？

「……………はあ」

ついたため息を吐いてしまう。まさか自室が役員区画だとは思わなかった。とりあえず支部長から聞いた番号の部屋を探す。探している間に、レッドイーターはある少年を目に捉えた。

浅黒い肌に銀色の髪。自分より2歳ほど歳が上のような。自分の視線に気付いたのか。少年は話かけてくる。

「……………見ない顔だな。それにその気配…、お前何者だ」

「……………ゴッドイーターですけど何か？ あと名前を名乗る気などありません」

ちっ、と少年は舌打ちをして離れていく。だが、レッドイーターは気になった。彼の体から隠すつもりも無い気配。

そう「アラガミ」の気配を。

「……………もしかして、あれが「マーナガラム計画」の被験者、「ソーマ・シックザール」？」

フェンリル本部の人達が話していた事を纏め上げ、結論を出す。彼とは仲良くできるか？とゆう考えがいつの間にか浮かんだが、却下した。自分と関わっても、良い事などないから……………。

「……………ここか」

やっと自分の部屋に着けた。とゆう満足感を得ながら入室するレツドイーターは、少しばかりその部屋に関心してしまった。

本部で与えられた部屋よりも広いスペースに、別の部屋に繋がるであろう扉。扉の先にあるのは、特別に用意されたであろう、神機を整備するための台に、神機が納められているケースと各パーツ、整備用のターミナルが置かれていた。

「……………悪くない」

そう評価した後に、後ろから人の気配を感じた。

「いやー、先程は取り乱してすまなかつたねえ」

「……………気にしていません」

ゆっくり後ろを振り向き、後ろにいつの間にかいたサカキ博士の言葉に返事をする。

「ふむ、では早速本題に入りたいんだけど。その腕輪、君の偏食因子は自分自身で作れるから、神機との接続、発信機以外の機能を無くした結果なのかい？」

博士が他の神機使いの腕輪より小さい自分の腕輪を見つめる。

「……………だと思えます」

腕輪を撫でながら言葉を返す。確かにそれなら、小型化にするのも可能だろう。と納得する。

「そうだ、あと支部長から伝えてくれって言われたんだけど」

レッドイーターは疑問符を頭に浮かべながら、大人しく博士の言葉を聞く。

「『明日、12:15にて、雨宮ツバキ君と雨宮リンドウ二名とミッションに出てくれ』だってさ」

「……………了解」

支部長からの伝言に頷く。早速神機の整備をしようと、神機整備室に足を運ぶ。

「そうだ、いい機会だから見学させてもらおうよ」

博士も部屋に入ってくる。無言で頷くレッドイーターは、神機ケースから神機を取り出す。そして、神機をターミナルにケーブルで接続させ、自分に合うパーツに付け替える。

「……………できた」

「ふむ、スムーズにパーツの変更をしたけど……………、それでいいのかい？」

なぜ博士はそんな事を言うのか、レッドイーターにはすぐに分かった。

彼の神機は今、クレイモアと呼ばれるバスターブレードに属する重い刀身と、ファルコンと呼ばれるスナイパーに属する長い銃身で形成されている。ちなみに装甲と呼ばれ、盾になる部分は、対貫通バツクラーと呼ばれる比較的軽い盾である。

「君の身長でそれを扱うのは厳しくないかい？」

そう、レッドイーターは身長が120cmなのに対し、彼の神機は160cm以上で重い刀身を装着している。こんな子供がそれを振り回せるのか博士は疑問に感じているのだろう。

「……新種の偏食因子がもたらす力は、大人の神機使い以上になります。それにそこまで重く感じません」

神機からケーブルを外し、片手で神機を持ち上げ、違和感がないか確かめながら、レッドイーターは博士に説明する。

「それは興味深いね。……そうだ！ ちょっと変形させてみてくれるかい？」

博士の要望を聞き、神機に命令を送る、「変形しろ」と。直後、神機から触手が出てくる。そしてあつと言つ間に剣身と銃身が交換が完了する。それを見た博士は感動の声を上げる。

「ありがとう。これで、可変式用の偏食因子の研究に全力を尽くせるよー！」

博士はそう告げると早々と部屋から去る。レッドイーターは神機をまた変形させ、神機ケースにしまう。

部屋に設置されているターミナルと呼ばれる情報端末が鳴る。見てみたらメールだった。メールを開いてみると、送り主の名前は秘匿、と表示されていた。だが、内容から察するに、送り主はあの白衣を着た青年だろう。

「……………雨宮姉弟には、可変式を見せてもかまわない。2人には説明してあるから心配無い。と本部が許可を出した……………」

彼はそのまま自室に設置されているベッドに寝転がり、先のシックザール支部長の伝言を思い出す。そういうことか、と納得し、少年は眠りに落ちた。

4月27～29日 まとめ

4月27日

フェンリル本部

「レッドイーター君、出発準備できたか」………神機あれば十分です」………ですよねー」

朝から白衣を着た見た目20代の青年のだらしない声と、ヘリの中から聞こえる少年の声、歳は7歳と幼い。見た目は女の子のような可愛らしい容姿の、しかし随分と大人びた口調の声が、フェンリル本部のヘリポートに響く。

「じゃ、極東に着いたら絶対することその1、ペイラー・サカキ博士に会ったら君の血液を渡すこと。その2、可変式というのは、一応本部の機密事項だから極東支部支部長とサカキ博士以外の人物に知られないように。まあ、他のフェンリル関係者の前と、他のゴッドイーターとの共同任務の時だけ、銃身か剣身の回りに包帯巻いてカモフラージュしろ、バレたら殺してOK。以上のことを忘れずに」

所々不味い言葉を挟んだりしているが、一応簡単に上からの命令を目の前の可愛らしい容姿の子供に伝える。無言で頷くその少年はヘリの扉を閉めシートベルトをする。

(さて、新種の偏食因子の潜在能力は、あの激戦区、極東で覚醒すると思うし、さっさと持ち場に戻るかー)

ふああああ、と欠伸を掻きながらヘリポートから離れる。振り返れば、すでにヘリは地面から離れ極東に向かって進んでいた。

4月29日

フェンリル極東支部

フェンリル極東支部、通称「アナグラ」。

かつて日本と呼ばれた国の神奈川県藤沢市にあたる場所を拠点としている支部である。

そして、その周りには人口約数万人が住む第8ハイブが存在し、その第8ハイブ全体を囲む分厚い壁、「アラガミ防壁」により基本どの支部もある程度はアラガミの脅威から身を守っている。

そして現在昼時、アナグラの屋上にあるヘリポートには二人の男がいた。

「……興味深い少年の到着はまだかいヨハン？」

先に口を開いたのはペイラー・神、通称「博士」、眼鏡の下の狐目に絶えない笑顔が彼の特徴といえる。フェンリル創設メンバーの1人であり、現在フェンリル極東支部技術開発統括責任者と、ゴツドクターの座学教官を任されている。

「そろそろじゃないか？本部は可変式神機の「サンプル」を君に任ずると言っているからな、頑張ってくれ」

返事をしたのは博士がヨハンと呼んだ人物、ヨハネス・フォン・シックザール、フェンリル極東支部の支部長である。彼が着ているのは、支部長に支給される純白のコートである。

「そろそろ日本海を越えた頃じゃないのかい？」

待ちくたびれたのか、博士はどこからか椅子を取り出し座る。しかし、彼をよく知る人なら、待ちくたびれたとゆうより、気長に待つとゆうのがすぐ分かってしまう。

「ああ、ヘリのルート上にアラガミはいないから問題無いはずだ」
諜報部からの報告をシックザールは博士に告げる。

ああそつえば、と博士は空を見上げ、シックザールに言う。

「報告では、男の子って言ってたけど何歳位か聞いたかい？」

「いやなにも。だが実践はあの姉弟に同行するよう言っている。10歳に満たない子供でも、あの2人なら、最悪な事態はある程度まで対処できるはずだ」

シックザールも空を見上げる、どこまでも続くような青い空、よく見るとヘリのような物体が近づく。

「来たか」

……暗い、時間的に夜なのだろうか。しかし、自分が見てる風景は霧が掛かって分かりづらい。

(ここは、どこ?)

ここは2055年のフェンリル本部管理下の病室。

声が聞こえる。自分の声の高さと似ているが、人の発したものは思えない程異質だった。

(2055年?……お母さんはいるの?)

次の日の出産に備えて、寝ている。

(次の日って僕の……)

そう、君ノ、ザザツ、生まれたヒ……。

声にノイズが混じる。そしていつの間にか辺りが光で包まれる。最初に目にしたのは……血だ。

「ア、アラガミ化だと!? 何故一般人が!!!??」

見知らぬ男が叫ぶ、そして彼は、彼が叫んだ「一般人」に食い干切られる。

(…………お母さん?)

「そう、君のお母さん。君を出産した直後、体の中にあつたと思われるオラクル細胞が体を凄まじいスピードで侵食、結果アラガミ化。病院にいる大半の人間を捕喰した後、P53 偏食因子を押し付けられ、それから逃れるために病院から脱走。その約1年後、最初期とはいえ、ピストル型神機に適合した神機使い達に討伐された」

声質が自分に近いものではなく、フェンリル本部の上層部の人達に変わってゆく。

「怪我をするんじゃない、君は世界に2つとない貴重なサンプルなんだ」

「子供だからって甘えないで、あんたはただ実験に協力すれば良いのよ」

自分の心を抉っていくフェンリル本部の上層部の奴ら、自分を毎日ただの貴重なサンプルとしてしか見ない、大嫌いな人種。

「お前の母親のせいで、何人の仲間が死んだと思っっている!？」

仇がないから、その原因である自分を責める本部の犬ども。

この世の中でも、人は人を憎み、怒りをぶつけてくるなんて当たり前だ。ただ、その対象が今は7歳の、まだ誰かに甘えたい時期の子供にぶつければどうなる。子供はこれ以上傷つかないよう他人を拒絶するだろう。それが今の自分が学び実行していること。

でも、他人を拒絶することができても、浴びせられる言葉までは拒絶できない。そうだ、だから人がだれもいない戦場に行くために、ゴッドイーターに自分はなったのだ。

元から神機使いになるために訓練をさせられてきたことと、自分に宿る偏食因子の力、可変式神機の性能チェック等の理由により、上層部も許可を出したのだ。今までどおり、ただのモルモット扱いだがそれでよかった、先の目的どおりだから。

「……………い」

なんだろう声が聞こえる。

「お……………い」

声の大きさが大きくなる。

「起きなよー！ー！」

「うわッッ！？」

耳元で大声を出され、F武装レッド上下を着た少年、レッドイーターは反射的に立ち上がろうとするが、ベルトをしていた為立つことは出来なかった。とにかく一度冷静になり、自分を起こした人物を睨もうと、振り向く。

「やあ、起きたかい？」

眼鏡を掛け、いつも笑っているような狐目の男が、顔が付くのは？ というくらい物凄く近い距離でレッドイーターを眺めていた。

「きゃああああああー！！！！！！」

レッドライターは驚きすぎて、女のように叫び、目の前の狐目男の腹を足で蹴り飛ばす。

「おおおう！！、これが神機使いの蹴りかー、初めて喰らうねー。ゲフツツ！？」

強烈に痛いはずなのに、空中で蹴りの感想を漏らしながら背中から博士は地面に落ちた。生きているか否かより、蹴り飛ばした男の顔を思い出す。と共に、上層部から貰った、極東支部支部長とサカキ博士の写真を思い出す。

「……………サカキ博士ですか？今の？」

近くで無言でこちらを看着、極東支部支部長の写真と一致している人物に問う。

「いかにも、彼が君の言うサカキ博士だが？……………ペイラー、寝てないで起きてくれ。」

寝ているのは分かっているが、支部長は目線からレッドライターを一度外し、博士の方を少し見て一応、生死を判別する。

死んでないと思うが、自分がどれくらいの高さで蹴ったか言っておく。とゆうより弁解の言葉に近いと思うが。

「……………本気で蹴ったわけじゃありません」

「いや、気にしないでくれたまえ。こちらこそすまなかつたね」

博士は、ムクツ、っと体を起こし、首だけ動かしてレッドイーターを見て謝罪する。

レッドイーターはそれを見て、そろそろいいかな、と思いヘリのシートベルトを外し、ちょこん、とヘリから降りて自己紹介を始める。

「……本日からこちらに配属することになった、レッドイーターです。報告に書かれていると思いますが、可変式担当です。」

「ああ、話はヨハン 支部長から聞いているよ。僕はペイラー・榊だ、よろしく頼むよ、お嬢さん」

ブチイー！レッドイーターのこめかみに、血管が浮き出る。

「博士、彼は男性だと言っておいたはずだ」

「ごめんごめん。こんな可愛い容姿なもんだから、つい忘れてしまったよ」

ブチブチブチイッ！、支部長が博士を注意するが、レッドイーターのこめかみには沢山の血管が浮き出していた。

実は彼、レッドイーターは、女扱いされることを極端に嫌っている。悪口などは綺麗にスルーするが、何故かそっちの方だけ過剰に反応する。ちなみに、今の彼の状態は臨界点ギリギリとゆう危ない状態だったりする 結構短気であった。

支部長は自己紹介が済んでないので、レッドイーターに告げる。

「紹介が遅れた、私はこの支部の支部長を任せられている、ヨハネス・フォン・シックザールだ。よろしく」

微笑んでいるが、目は笑っていない。レッドイーターの怒りは臨界点ギリギリの状況なので気付いていないが……。

「じゃあ、今夜、20:00に僕の部屋に来てくれ。ラボラトリってゆう区画の奥だから分かりやすいと思うよ」

「では、私も仕事があるから、失礼させてもらうよ」

博士と支部長のどちらも去るのを見届ける。レッドイーターも各区画を覚えた方が良くと思いヘリポートから去る。怒りの収まる気配は微塵もないが。

「……………どこ？」

疑問府を浮かべる少年　レッドイーターは自分の部屋がどこかとゆう、結構重要な事を訊くの忘れていた。

「……………しょうがない」

独り言で諦めを口にしてから、区画移動用エレベーターに乗る。サカキ博士との約束の時間まで、まだ2時間以上あるため。見学の

為にエレベーターのボタンを押す。

「地下1・エントランス」

エレベーターは結構早く動く。どうやら早く着きそうだ。

エレベーターの扉が開き、中を少し見る。すると眩むような明かりがレッドドライバーの目に焼きつく。

エントランスはとても明るい照明が大量に設置されており、レッドドライバーとしては正直驚いた。と、同時にエントランスから声が聞こえる。

「姉上、支部長の言ったた新人君はまだこないんですかね？」

「リンドウ、少し大人しくしろ」

男と女の声、会話からすると姉弟と推測できる。おそらく2人は自分を支部長から聞かされているらしい。エレベーターから出て声が聞こえた方を向く。

外見は2人とも東洋人で、厳しそうな顔つきをした美女は設置されているソファに座り、その向かいの人物は弟、だろうか？ 美女と同じで整った顔の男が座っていた。

「む、どうやら来たようだ」

女がこちらに向く。その視線を辿って男もこちらを向いた。2人とも立ち上がり、こちらに近づく。

「この可愛いお嬢ちゃグハア！！」

不幸なことに、レッドイーターは先ほどサカキ博士に女扱いされ怒る寸前だった。その怒りの逆鱗に触れた男は本気で蹴られる。

「……………僕は男だ」

「ぐふ、この力……、君が支部長の言っていた新人君か？」

冷めた視線で蹴り飛ばした男を見る。それに対し、男は蹴られたところを擦りながら確認をとる。レッドイーターは、誰にも聞かされていないが無言で頷く。

「俺は、リンドウ、雨宮リンドウ。でそちらにいるお姉さんが、俺の姉上、雨宮ツバキだ」

ツバキと紹介された女は、よろしく、と言う。自己紹介されたので、こちらも自己紹介をすることにした。

「……………本日からフェンリル極東支部に配属になった、レッドイーターです」

「レッドイーター？」

「……………コードネームです」

自己紹介が済んだため、また後で、と2人に告げる。レッドイーターは少しエントランスを見渡して、またエレベーターに乗る。

「ラボラトリ」

まだ早いが見つものも面倒なのでサカキ博士の部屋に行くことにする。

「おお！、僕の予想より129分46秒早い。よく来てくれたねえ」

「……………いいから早く血を持って行ってください」

「うん、分かったよ」

目の前で大量のデイスプレーに囲まれた椅子に座りながら、サカキ博士は返事をする。どうやらいつ来てもOKだったらしく。すぐに自分の左手首に注射器の針を刺して採血する。

「さすがは新種、治療スピードがそこら辺の神機使いより早い。実に興味深い！」

針を抜いてたった数秒で傷が跡形も無く塞がる。

「じゃあそこに座ってくれるかい？メデイカルテックの時間だよー」

「……………聞いていませんよそんな話」

「大丈夫大丈夫、そこで大人しくしているだけでいいよ」

指示に従い、レッドイーターは近くのソファに座る。それを確認した博士が手前のキーボードを押す、するとサカキ博士の特徴的な

狐目を、カツ！！と見開き、突然震える。すると・・・。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
お！！！！？？？ なんだいこの数値は！？ 適合率が今までに無い
ほど高い！！！」

「ふにゆ！？？」

レッドイーターは可愛い声を出しながら、突然目の前で神機使い
すら怯ませる大声で叫び出す博士を見る。

「どうした、ペイラー？」

しばらくして、後ろのドアから仕事をしているはずの支部長が入
ってくる。そこまで響きましたかさっきの……、とレッドイーター
は心底思う。

「目を覚ませ。ペイラー、何があった？」

支部長は事情を聞こうと博士に訊ねる。しかし博士はあまりの衝
撃で気絶して、ただの屍のようだ。レッドイーターはチャンスだと
思い支部長から部屋の間を聞き出し、立ち去る。

「……………はあ」

ついたため息を吐いてしまう。まさか自室が役員区画だとは思わな
かった。とりあえず支部長から聞いた番号の部屋を探す。探してい

る間に、レッドイーターはある少年を目に捉えた。

浅黒い肌に銀色の髪。自分より2歳ほど歳が上のような。自分の視線に気付いたのか。少年は話かけてくる。

「……見ない顔だな。それにその気配…、お前何者だ」

「……ゴッドイーターですけど何か？ あと名前を名乗る気などありません」

ちっ、と少年は舌打ちをして離れていく。だが、レッドイーターは気になった。彼の体から隠すつもりも無い気配。

そう「アラガミ」の気配を。

「……もしかして、あれが「マーナガラム計画」の被験者、「ソーマ・シックザール」？」

フェンリル本部の人達が話していた事を纏め上げ、結論を出す。彼とは仲良くできるか？とゆう考えがいつの間にか浮かんだが、却下した。自分と関わっても、良い事などないから……。

「……ここか」

やっと自分の部屋に着けた。とゆう満足感を得ながら入室するレッドイーターは、少しばかりその部屋に関心してしまった。

本部で与えられた部屋よりも広いスペースに、別の部屋に繋がるであろう扉。扉の先にあるのは、特別に用意されたであろう、神機

を整備するための台に、神機が納められているケースと各パーツ、整備用のターミナルが置かれていた。

「……………悪くない」

そう評価した後に、後ろから人の気配を感じた。

「いやー、先程は取り乱してすまなかつたねえ」

「……………気にしていません」

ゆっくり後ろを振り向き、後ろにいつの間にかいたサカキ博士の言葉に返事をする。

「ふむ、では早速本題に入りたいんだけど。その腕輪、君の偏食因子は自分自身で作れるから、神機との接続、発信機以外の機能を無くした結果なのかい？」

博士が他の神機使いの腕輪より小さい自分の腕輪を見つめる。

「……………だと思えます」

腕輪を撫でながら言葉を返す。確かにそれなら、小型化にすることも可能だろう。と納得する。

「そうだ、あと支部長から伝えてくれって言われたんだけど」

レッドイーターは疑問符を頭に浮かべながら、大人しく博士の言葉を聞く。

「『明日、12:15にて、雨宮ツバキ君と雨宮リンドウ二名とミッシヨンに出てくれ』だってさ」

「……………了解」

支部長からの伝言に頷く。早速神機の整備をしようと、神機整備室に足を運ぶ。

「そつだ、いい機会だから見学させてもらつよ」

博士も部屋に入ってくる。無言で頷くレッドイーターは、神機ケースから神機を取り出す。そして、神機をターミナルにケーブルで接続させ、自分に合うパーツに付け替える。

「……………できた」

「ふむ、スムーズにパーツの変更をしたけど……、それでいいのかい？」

なぜ博士はそんな事を言うのか、レッドイーターにはすぐに分かった。

彼の神機は今、クレイモアと呼ばれるバスターブレードに属する重い刀身と、ファルコンと呼ばれるスナイパーに属する長い銃身で形成されている。ちなみに装甲と呼ばれ、盾になる部分は、対貫通バツクラーと呼ばれる比較的軽い盾である。

「君の身長でそれを扱うのは厳しくないかい？」

そう、レッドイーターは身長が120cmなのに対し、彼の神機

は160cm以上で重い刀身を装着している。こんな子供がそれを振り回せるのか博士は疑問に感じているのだろう。

「……………新種の偏食因子がもたらす力は、大人の神機使い以上になります。それにそこまで重く感じません」

神機からケーブルを外し、片手で神機を持ち上げ、違和感がないか確かめながら、レッドイーターは博士に説明する。

「それは興味深いね。……………そうだ！ ちょっと変形させてみてくれるかい？」

博士の要望を聞き、神機に命令を送る、「変形しろ」と。直後、神機から触手が出てくる。そしてあつと言つ間に剣身と銃身が交換が完了する。それを見た博士は感動の声を上げる。

「ありがとう。これで、可変式用の偏食因子の研究に全力を尽くせるよ！」

博士はそう告げると早々と部屋から去る。レッドイーターは神機をまた変形させ、神機ケースにしまう。

部屋に設置されているターミナルと呼ばれる情報端末が鳴る。見てみたらメールだった。メールを開いてみると、送り主の名前は秘匿、と表示されていた。だが、内容から察するに、送り主はあの白衣を着た青年だろう。

「……………雨宮姉弟には、可変式を見せてもかまわない。2人

には説明してあるから心配無い。と本部が許可を出した……か」

彼はそのまま自室に設置されているベッドに寝転がり、先のシツクザール支部長の伝言を思い出す。そういつことか、と納得し、少年は眠りに落ちた。

各区画案内（前書き）

ちよつと風邪気味なので、軽くPSPで、各区画の案内をしたいと
思います

治ったよ

復活編集開始

各区画案内

区画案内in極東支部

R、屋上

見晴らしが良く、ヘリポートとしての機能以外にも、風を浴びたり、風景を楽しむ者が多く、主にソーマがいるところ。

F1～5、内部居住区

外部居住区より安全を約束された、約一万人の若者が住む。しかし、神機に適合した場合、強制的に神機使いにならなければならない。

地下1～2、エントランス

ここで神機使い達はミッションを受注して、整備場から神機を出撃ゲートまで持ってきてもらい、外に置かれている装甲車に乗って出撃する。

地下3、新人区画

支部に配属された新人達に支給される自室。休憩スペースにある自動販売機は、子供向けのジュースが多い。

地下4、ベテラン区画

支部から実力を高く評価された者や、ある程度の実績を積んだ者に支給される。支部からの支給品は、新人区画より良い物が与えられる。

休憩スペースの自動販売機は大人向けの飲み物が多い（例、ビール等）

地下5、生活用品開発区画

その名の通り、身の回りの生活用品の開発を担当する区画

地下6、食料生産区画

主にここから食料が生み出される。また、食堂入口があり、そこから地下6・5階に繋がっている。

地下6・5階、食堂

食堂入口から入れる場所。

地下7、ラボラトリ。

負傷した人を治療するための医療室や、アラガミのコアの保管室、榊博士の自室が存在する。

地下8、整備場。

神機の調整や開発、パーツの交換等をする。整備し終わったら、エ

ントランスの出撃ゲートまで神機を運んでくれる。(レッドイーターの神機は自室での整備とされているため、自分で運ぶことになる)

地下9、役員区画。

支部長や、引退した神機使い、他のフェンリル支部からの来訪者の部屋があり。部屋は新人、ベテラン区画の部屋よりも広い。

各区画案内（後書き）

纏めました

第五話、ファーストミッション

4月30日

「起きろ、レッドイーター」

「……天使の寝顔ですね、癒されるー」

声が聞こえる。

「むにゅ」

眠たそうな声を上げてレッドイーターは起きた。

「アホ毛!？」

「んー?」

突然叫ばれ、声が聞こえた方に振り向く。そこにいたのは、雨宮姉弟だった。ちなみに叫んだのは、リンドウである。

「……………なんですか?」

「頭を見る頭」

リンドウから指摘され。鏡を見にベッドから降りる。鏡で彼が見たものは、彼の少々長めの綺麗な黒髪の頭頂部から生えている、アホ毛だった。

彼はいつも起きるとアホ毛が1本生えているのである。

それを確認したレッドイーターは、すぐに髪を元に戻す。そして、自分のアホ毛を見た2人に向き直る。

「まあ、あれだ、可愛かったぞ」

リンドウは親指を立てて評価する。レッドイーターは、へー、と言い、2人に告げる。

「……………あなた達は、僕の300個ある心の地雷の1個を踏みました」

「地雷原!?!」

リンドウは素っ頓狂に驚く。リンドウの行動にため息を吐いたツバキは、今彼女たちがすべき事をレッドイーターに教えておく。

「朝食持ってきたから食べておいてくれ」

「……………ありがとうございます」

「じゃあな」

雨宮姉弟は持ってきた朝食をレッドイーターに渡し、何故か早足で立ち去る。それを見送りながら、レッドイーターは朝ごはんを口にする。

感想、ご飯は美味しかった。

ツバキからエントランスに呼ばれ、レッドイーターは、支部長が決めた初陣の内容を聞かされる。

「よし、今回は鉄塔の森で発見された、オウガテイル2体とザイゴート2体の討伐だ」

「了解だ。オウガテイルは俺が引きつけるから二人で先にザイゴートを頼む」

「……………了解」

作戦を決めて、出撃ゲートで神機ケースを受け取った雨宮姉弟と、自室から神機ケースを持ってきたレッドイーターは、装甲車（運転手はツバキ）でミッションに出撃した。

『聞こえるか？』

『ああ、問題ないぜ』

「……………はい」

レッドイーターは支部から支給される無線機（携帯端末）で2人と連絡を取りつつ、各自、分かれて索敵をしていた。ちなみに今の

彼の神機は銃形態で、いつでも奇襲を仕掛けられることを考えて、ミッション開始前から変形させていた。

『いいか、発見しても攻撃しないで信号弾を上げる、いいな？』

『「了解」』

レッドイーターはDエリアと呼ばれるエリアを、警戒しながら、歩いていた。

目に、空に浮かぶ2つの黒い影が映る。

「……………見つけた」

すぐに体を潜め、バックパックと呼ばれる支部からの支給品から信号弾を取り出す。そして打ち上げ、銃口を黒い浮遊物、ザイゴートに向けた。

第六話、乱入者

「待たせた、ザイゴートはどう仕留めるか考えたか？」

ツバキは足音を立てずに、小声で近づいてくる。こっちが仕掛けの前に見つかってしまえば面倒であるからだろう。

「……………作戦ならあります」

小声で返事をしつつ、氷属性のバレットを神機に装填したレッドイーターは、既に完全に無傷でザイゴートを仕留める作戦を考え終わっていた。

現在、黒く巨大な卵殻に、人魚のような女体の擬態と大きな金褐色の目を納め、重力を無視するように宙を漂うアラガミ、ザイゴート。そのアラガミ2体はGエリアから、Hエリアに向けて一列で、同じ方向を見ながら進行していた。レッドイーターとツバキはFエリアの遮蔽物で身を隠しながら、2体を監視している。

「……………ツバキさんは、僕がザイゴート1体殺したら、飛び出して、残っている方に攻撃を加えてください」

「了解だ、死ぬなよ」

会話が終了した瞬間、レッドイーターは走り出す。対貫通バックラーのスキル、「消音」により気付かれずにザイゴートに接近する。

そして全力で飛ぶ。目に映るのは、後ろの<ザイゴート>の頭上。銃形態の神機の照準をザイゴートの頭に向ける。空を飛ぶ敵の弱点、

それは、頭上からの攻撃。

レッドイーターは容赦なく引き金を引く。直後、銃身、ファルコンから氷属性のレーザーが撃ちださせる。そして……。

「ギヤアアアアアアアアア！！！？！？」

着弾、1体のザイコートは後ろを向く。しかし、敵はいない。

「はあああ！！」

ザイコート2体の間から聞こえる声。レッドイーターは着地と同時に剣形態に変形させ、再び地面を蹴り、ジャンプする。そして、前を飛んでいたザイコートに向かって、神機を振り上げる。

「ギヤア！？」

切られた部分から赤い血を噴出するアラガミに、レッドイーターは、振り上げ終わった神機を振り下ろす。

「グギ！？」

剣に切られながら、引っ掛けられるように地面に落とされるザイコート。しかし、追撃の手は止まない。着地したレッドイーターは、神機を左からおもいきり振り、墜落したくザイコートを深々と切りつける。

「捕喰形態「プレデターフォーム」！！」

振り切った神機から、黒い竜のアギトのようなものが噴き出て、

<ザイコート>に喰いつく。

捕喰形態、生きたアラガミから身体の一部を捕喰すると、体の中にあるオラクル細胞が活性化、一時的に大幅に身体能力が上がる。

「バーストモード」と呼ばれる戦闘においての重要な戦力源である。

しかし、今レッドイーターが行なった捕喰形態は、通常の捕喰形態が溜めの動作をするのと異なり、攻撃の最後に行なう捕喰、「コンボ捕喰」と呼ばれる攻撃である。コンボ捕喰は、通常の捕喰と違い、素早く捕喰形態に移れるが、バーストモードを維持できる時間が半分しかない欠点がある。

だが今の捕喰でコアも摘出したため、残りの、自分が最初に攻撃したザイコートに振り向く。と同時に、ツバキが出てきて弾丸を撃ちだし、正確にザイコートに着弾させる。

そして、レッドイーターは、体を捻るようにし、神機を右肩に乗せる。

「はあああああ!!」

力を溜めてから放つバスターブレード最大の攻撃「チャージクラッシュ」、体の中のオラクル細胞が更に活性化し、それに反応する神機の剣身の根元から、黒いような、紫色のようなオーラを纏った剣が湧き出るように出てくる。通常、チャージクラッシュの形成は2秒程掛かるが、バーストモードの状態では1秒程で完了する。先程のコンボ捕喰はそのためである。

そう、これがレッドイーターの作戦である。先の行動でザイコート1体を始末した後、ツバキの銃弾で残りの1体の足止めをし、そ

の間にチャージクラッシュで切り裂く。とゆう、短時間でアラガミを殲滅させる作戦である。

そして、チャージクラッシュが形成される。剣身の長さは2倍以上になり、レッドイーターは正確にザイゴートを狙い、全力で振り下ろす。

「……………!!???」

断末魔の声すら上げられず、正中線に左右真っ二つにされるザイゴートはコアを破壊され、黒い塵となり、風に流されていった。

ふう、と安堵の息を吐きながら、Fエリアの方にいるツバキを見る、視線に気付いた彼女は、向こうから近づいてくる。

「なかなか良い動きだったぞ。作戦も良い」

「……………どうも」

ツバキは微笑みながらレッドイーターの頭を撫でる。しかし、まだオウガテイルを倒していないので、早急に引き付けてくれているリンドウの支援に行かなければならない。と、考え走り出そうとする2人の無線機が鳴った。無線機を取り出し確認すると、連絡してきたのはリンドウだった。

「どうしたリンドウ?」

ツバキが通話のボタンを押し、リンドウに質問をする。レッドイーターもそれに倣い、会話を聞くために通話ボタンを押し。

『姉上、今すぐ帰還だ。ヴァジュラがいる』

「オウガテイルは？」

『2体ともNエリアでヴァジュラに食われている』

「強い個体なのか？ お前は無事か？」

『オウガテイルを一撃で倒したから、恐らく強い個体だ。俺は発見されてないから無傷。今はAエリアにいる』

ツバキは少し考え、出した結論をレッドイーターとリンドウに伝える。

「我が隊はこれより帰還する。対ヴァジュラの準備ができ次第、リンドウが発見したヴァジュラの討伐に向かう」

『「了解」』

2人は返事を返し、ツバキはすぐに、Aエリアにいるリンドウと合流するために走る。そしてレッドイーターも、その後を追う

その後、無事リンドウと合流し、三人は装甲車でアナグラへと帰還した。

第七話、突破される防壁

「スタングレネードを忘れるなよ？ ヴァジュラの怒り状態中に使
うと、通常時より長く効果を発揮するからな」

「……………」

ヴァジュラに見つかる事無く、無事に帰ってきた三人はエントラ
ンスにあるターミナルで、対ヴァジュラ用のアイテムを30分程整
理していた。

「しかし、その兵装では厳しくないか？ レッドイーター？」

先に準備を終わらせたツバキが、レッドイーターに質問する。

「そうだ、出撃は明日だし、兵装を強化しとくのも良いぞ？ ほれ、
要らない素材とか譲るぞ。金は偉い人が払ってくれるらしいしな！」

「……………聞いてないですが、感謝します」

ツバキに同意するリンドウは、ターミナルで開いたページをレッ
ドイーターに見せる。内容は、リンドウが集めた素材等と、神機に
取り付ける剣身等の一覧である。

「この素材全部使わないしな、俺にはあの刀身が一番振り回しやす
いんでね。欲しいの選んじまえ」

「……………了解」

あの刀身とは、チエーンソウのような、敵を引き裂くような刃を複数並べたリンドウ愛用の刀身だろう。名前は「ブラッドサージ」である。

「確かに使わない素材が複数あっても宝の持ち腐れだろう。遠慮せずには貰っていけば良い」

ツバキからの許可も降りる。

レッドイーターは、ターミナルに表示されている素材名とパーツ名を見ながら、ポケットの中に入っていたメモ用紙とペンを取り出し、目的物と強化、新装備の名前を記入する。そして書き終わったメモを切取り、リンドウに渡した。

「……了解だ、ちょっと待ってくれ」

メモ用紙の中身を確認し終えたリンドウは、ターミナルを操作し、技術開発部にパーツの開発を申請する。

「パーツは何にしたんだ？」

ツバキはレッドイーターにパーツの内容を訊ねた。対してレッドイーターは必要最低限の言葉で返す。

「……ノコギリ、マックス、対属性バックラーです」

レッドイーターは、現在確認されているアラガミへの有効な対処法等を本部で教え込まれていた為、ヴァジュラに有効な兵装などは理解している。

火属性はヴァジュラの弱点属性の1つであり、マックスはその火属性のバレットの射出力が高い銃身である。ファルコンからの派生つまりスナイパーの分類のため、レーザー系のバレットとの相性が良い。それも、ヴァジュラ相手には効果が高い。

ノコギリという剣身は、敵を引き千切る攻撃が合う刃を持ったバスターブレードだ。選択の理由は、ヴァジュラの頭と前足へのダメージが効率良く通るためである。

対属性バツクラーは、雷属性を主体に遠距離攻撃が可能な、虎、もしくはライオンに似た体を持つヴァジュラは、高い機動性で距離を離され易いので、もしもの可能性込みで選らんだバツクラーである。

「どう考えてもヴァジュラと相性の良い兵装だな」

ツバキは遠回しに評価する。と同時に、ツバキお姉ちゃん、リンドウ、と呼ぶ声が聞こえた。雨宮姉弟は振り向くがレッドイーターは興味が無いため無視する。

「お帰りなさい」

「「ただいまサクヤ」」

サクヤと呼ばれた女の子（声で判断）は、レッドイーターに気付いたみたく、リンドウに尋ねる。

「リンドウ。その子は？」

「ん？ えっと……」

サクヤに聞かれ、少し回答に戸惑うリンドウの声が聞こえたため、レッドイーターは、はあ、とため息を吐き、サクヤと呼ばれた人に自己紹介と顔を見せるために振り向く。

目に映るのは、肩に届かない長さに切り揃えられた綺麗な黒い髪のおかつぱの髪型、将来絶対美人になるだろう端正な顔立ちの14歳くらいの少女だった。だが、レッドイーターにとって、そんなことはどうでもいいのである。

「……………昨日から、極東支部に配属になった新兵です。コードネームは『レッドイーター』と言います。ちなみに女じゃないです」

「え、そうなの？ てつきり可愛い女の子だと」

「……………あぁ？」

レッドイーターは不機嫌になり、サクヤを睨みつける。だが、すぐに、ふん、と鼻を鳴らしエレベーターに向かって歩き出した。リンドウは、はあ、と溜め息を吐きながら、サクヤの言葉を注意する。

「サクヤ、それ言ったら駄目だろ？ っと、レッドイーターの部屋に行ってください姉上」

「ああ、サクヤとお茶でも飲んでるよ」

そう言ってリンドウは、レッドイーターと一緒にエレベーターに向かった。

「悪いな、サクヤも悪気があった訳じゃないんだ」

先のサクヤの言葉で傷ついたであろうレッドイーターに、リンドウは謝る。別に気にしていない、とでも言うような顔をしたレッドイーターは、口を開く。

「……………リンドウさん」

「なんだ？」

「……………ヴァジュラ、強い個体って言ってましたけど、通常のくヴァジュラと異なる部位とがあります？」

レッドイーターは、そう言ってる間に、ベッドに座り、リンドウに尋ねる。

「……………え」と

何故か顔を逸らし、曖昧な返事しか返さないリンドウに、レッドイーターは疑問符を頭に浮かべる。

「……………忘れたんですね？」

「申し訳ございません」

思いついたことを、そのままリンドウに訊ねたレッドイーターは、はあ、と嘆息する。と同時に、自室のターミナルが、と鳴

ったのでターミナルに近づき、操作する。内容は、作成を頼んだ神機の兵装が出来たので、そちらに届ける。とゆうツバキからのメールだった。

「……………予想以上に早い」

「支部長が手配したんじゃないか？まあ、俺もこの早さは初めてだけれどな。ビックリしたよ」

後ろから覗きこんでいたリンドウは、推理をレッドイーターに告げる。ならば、とレッドイーターは自室と繋がっている神機整備室に入る。ちなみにリンドウも入ってくる。と同時に、部屋のドアベルが鳴る。

『待たせたな』

「姉上も早いこと」

「……………開いています」

『そうか』

ツバキがドアを開き、自室に入ってくる。

「……………呼びに言ってください」

「あいよー」

リンドウに呼ぶのを頼んだので、レッドイーターは整備用の台に神機を置く。リンドウは、整備室の扉を少し開きツバキを呼ぶ。

部屋に入ってきたツバキは、手に持っていたケースを、台の上に乗せる。

「ノコギリ、マックス、対属性バクラー、ちゃんと揃っているぞ」

「……………どうも」

レッドイーターは、ツバキが持ってきた神機の兵装の取り付け作業をすぐさま始める。

しかし、作業をしていた手がピタリと止まった。どうした？ とレッドイーターの異変に気付いた2人は尋ねる。まるで何かを察知したかのように固まるレッドイーターは、冷静にその気配を探る。その気配は、

「アラガミ防壁付近にアラガミ!!??」

「なんだと!?!」

『ビーーーー!!!! ビーーーー!!!! アラガミ防壁を、ヴァジュラの群れが突破!!! 繰り返す、アラガミ防壁を、ヴァジュラの群れが突破!!! 出撃可能な神機使いは、至急防衛に向かってください!?!』

レッドイーターが気付いた頃には遅く、アラガミ防壁は突破された。冷静に考えたレッドイーターは2人に告げる。

「……………2人はヴァジュラの足止めをお願いします。こちらも、パーツを取り付け次第そちらに向かいますので」

「分かった、急いでくれ！ 行くぞリンドウ！」

「了解！」

走って部屋を出る2人など目もくれず、レッドイーターは神機の整備を急ぐ。

「畜生、数が多すぎる！！！」

そう叫びながら、リンドウは全力で神機を振るい、ヴァジュラの首を切り落とす。ヴァジュラの群れは、かつて無い大規模。この区画でも少なくとも10体はいる。

「ツツ！？ やべえ！！！」

ヴァジュラの群れの内の1体が、逃げ遅れた一般人を襲う。リンドウのような近接型神機では追いつけない。しかし、そのヴァジュラは、前足に無数の弾丸を叩き込まれ、停止する。結果、喰われる寸前だった一般人は、走って逃げきれた。

弾丸を放ったのは、アサルトタイプの遠距離型神機、「モウスイブロウ」の銃口をヴァジュラの群れに構えている女性、ツバキだ。

「戦闘に集中しろ！！ お前が殺し損ねた奴は、私がやる！！！」

「すまん！！！」

ツバキに叱責されたリンドウは、首を落としたヴァジュラのコアを捕食形態で素早く摘出する。そして、思い切り地面を蹴り、ステップする。刹那、先程までリンドウが立っていた地面が、ヴァジュラ数体が放った雷球によって弾ける。

「くそお、邪魔くせえ!!」

雷球を放ち、隙だらけのヴァジュラ数体の足を、薙ぎ払うように切り裂く。そして、ツバキの放つ弾丸で止めを刺す。……はずが、別のヴァジュラが妨害に入り、背中に付いている堅いマントで弾丸はいとも簡単に弾かれた。

しかし、これでもう良い。もう十分なはずだ。

「リンドウ、一般人がシェルターに入った。ここは引くぞ!」

「了解だ!!」

「『『『ギャウアアアアアアアアアアアアアア!!!!』』』」

逃がさない、とでも言うのだろうか。ヴァジュラの群れは、全て怒り状態になり、オラクル細胞の活性化で、元から高い機動性等が強化され、その大きな体躯をリンドウ達にぶつける為に走り出す。

「喰らいな!!」

リンドウはバックパックからスタングレネードを取り出し、その安全ピンを抜いてヴァジュラの群れの目の前に叩きつけた。

「『『『『ギャウアアアアア!!!!?』』』』」

一斉にダウンするヴァジュラなどには見もくれず、2人はこの区画から全力で逃げ出した。

第八話、難敵ヴァジユラ（前書き）

若き日のリンドウはやんちゃなのさ

ドラマCDから推測

第八話、難敵ヴァジュラ

「……………よし」

ようやく神機に兵装を全て取り付けたレドイーターは、神機を専用のケースに入れ自室から走って出て行く。そしてエレベーターに乗り、エントランスへのボタンを押す。警報がまだ鳴っているところからすると、まだ戦闘は続いているのだろう。

エレベーターが動いている間に、バックパックを確認する。問題はない、対ヴァジュラの道具もちゃんと揃っている。

そして、エレベーターが開き、レドイーターは飛び出して出撃ゲートを通り、外に出る。ヴァジュラの群れはもう視認できるほどまでに近づいていた。

「……………ちいっ!!」

舌打ちをしながら神機を取り出し、火属性のバレットを装填し引き金を引く。マックスの砲身から撃ちだされるレーザーは、複数のヴァジュラを貫く。

「…………ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
「!!」「」「」

「こちらに気付いたヴァジュラは、一斉に振り向く……が。」

「はあああああ!!」

剣形態にした神機を持ち、一瞬でヴァジュラの群れに飛び込み、360度をノコギリの刃でヴァジュラの足を薙ぎ払うように斬りつける。そして地面を蹴り、跳躍する。

狙いは1体の無傷のヴァジュラの背中。他のヴァジュラは、足を破壊され動けないため妨害はできない。狙いが逸れば、堅いマントに当たるが、当たったとしてもそのマントを粉碎するつもりのため、レッドイーターは容赦なくその神機を振り下ろす！

「ギヤアア、ア」

マント2枚を粉碎され、そのまま神機によって胴体を真っ二つにされたヴァジュラの赤い血が、レッドイーターの頬に付着する。コアを破壊したため、ヴァジュラは黒い塵のように風に流される。

「……次、次、次」

レッドイーターは神機を変形させ、流れるように足を破壊されたヴァジュラのコアを次々と撃ちぬく。強いプレッシャーを感じた彼は、全滅させたヴァジュラの結合崩壊など見ずに、プレッシャーの感じる方向へ駆け出す。

(……この気配は、ヴァジュラだが、なにか違う。純粹に強い个体か?)

「ついてねえっ!!」

「くそ！ リンドウ、お前の見たヴァジュラはこいつか!？」

ヴァジュラの群れから逃げ切り、一息吐こうとした兩宮姉弟なのだが、彼らの目の前には、3体のヴァジュラがいた。

だがそのヴァジュラの内1体は、先程戦っていたヴァジュラと違い、一回りか二回り大きかった。大きさだけではない。マントの数は6枚に増え、放つ雷球は大きくなり、その高い身体能力も他のヴァジュラより圧倒的に高かった。

「あの傷跡、ゲンさんの部隊とやりあったのか？」

ツバキが気付いたのは、ヴァジュラの左目とその周辺にある、自分の神機の弾丸より小さい弾を無数に喰らった痕である。ピストル型神機と呼ばれる、ツバキ達の神機より1世代前の神機に付けられた傷跡だ。

「だが左目以外そんなにダメージ負っていないようだぞ!? って、危なあ!!！」

リンドウは指摘しながら、雷球を回避する。確かに大きいヴァジュラの左目は潰されているが、その他の部位は傷が少ない。相手がその1体だけなら2人でも対応できたが、他のヴァジュラもいるため、回避に集中する以外の行動が起こせないでいる。

「くそつ!! 増援の期待は……無い!!！」

ツバキがこの状況に諦めかけた、その時。

「うオオおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

お！！！！！」

「ギヤアアアア！？」

突如2体の普通のヴァジュラが腹から血を噴出しながら横に吹き飛ぶ。そして、吹き飛んで宙を突き進むヴァジュラのコアを2本の赤い光が貫いた。2人は目を丸くするが、冷静さをすぐ取り戻し、レーザーを撃った「少年」を見る。

「……………あとはこいつだけ」

「レッドイーター！！！！」

銃形態から剣形態に戻すレッドイーターはスタングレネードを投げ、巨大なヴァジュラの足を止める。そして一気に距離を詰めて、ヴァジュラの右目含む顔の周辺をノギリで引き千切り、距離を離し、ヴァジュラの体液を拭う。

「ギヤアアアアアアア！！！！」

ヴァジュラは両目を失ったことで、がむしゃらにマントから大雷球を放つが、体を少し動かすだけでレッドイーターはそれを避ける。

(……………こいつじゃないな、いったいどこのどいつだ？)

ヴァジュラの、唯一頼りになる聴覚をレッドイーターは逆に利用する為に、地面に神機をぶつけ、巨大なクレーターを作る。その破壊音を聞いたヴァジュラは、躊躇無く聞こえた方向に突進するがクレータの中に入り、勢いを止められず大きな音を立てて転んだ。

「……………無能め」

レッドイーターは転んだヴァジュラの腹にノコギリの刃を入れていき、ノコギリ全体が入った後、そのまま捕喰形態でコアを抽出する。

そこに残るのは黒い塵となって空気に溶けていくヴァジュラと、頬に付いたヴァジュラの血を舐めるレッドイーター。それを見ていたリンドウとツバキは、気の抜けたような顔をしていたが、すぐに助かった安心感で安堵の息を吐く。

「……………進入してきたヴァジュラは全滅させました。さっさと帰りますよ」

…、
いつの間にか近づいていたレッドイーターにリンドウは笑顔で…

「ありがとうー！」

レッドイーターへの感謝の気持ちをそのまま口にした。ツバキも、ありがとう、と口にする。

「ほーれ、帰り道はおんぶして行ってやるー！」

「え、ちょ……」

リンドウは笑顔のまま、レッドイーターを（強制的に）おんぶする。レッドイーターは少し戸惑ったが、何故か気持ち良くなったのと、溜まっていた疲れのせいでそのまま眠ってしまった。

「おやおや、寝てしまったようだな。リンドウ、さっさと戻って、サクヤ手作りの夜ご飯だ」

「了解です」

リンドウはレッドイーターをおんぶしながら、ツバキはレッドイーターの神機を持ちながら、帰還した。

4月30日 まとめ

4月30日

「起きろ、レッドイーター」

「……天使の寝顔ですね、癒されるー」

声が聞こえる。

「むにゅ」

眠たそうな声を上げてレッドイーターは起きた。

「アホ毛!?!」

「んー?」

突然叫ばれ、声が聞こえた方に振り向く。そこにいたのは、雨宮姉弟だった。ちなみに叫んだのは、リンドウである。

「……………なんですか?」

「頭を見る頭」

リンドウから指摘され。鏡を見にベッドから降りる。鏡で彼が見たものは、彼の少々長めの綺麗な黒髪の頭頂部から生えている、アホ毛だった。

彼はいつも起きるとアホ毛が1本生えているのである。

それを確認したレッドイーターは、すぐに髪を元に戻す。そして、自分のアホ毛を見た2人に向き直る。

「まあ、あれだ、可愛かったぞ」

リンドウは親指を立てて評価する。レッドイーターは、へー、と言い、2人に告げる。

「……………あなた達は、僕の300個ある心の地雷の1個を踏みました」

「地雷原!?!」

リンドウは素っ頓狂に驚く。リンドウの行動にため息を吐いたツバキは、今彼女たちがすべき事をレッドイーターに教えておく。

「朝食持ってきたから食べておいてくれ」

「……………ありがとうございます」

「じゃあな」

雨宮姉弟は持ってきた朝食をレッドイーターに渡し、何故か早足で立ち去る。それを見送りながら、レッドイーターは朝ごはんを口にする。

感想、ご飯は美味しかった。

ツバキからエントランスに呼ばれ、レッドイーターは、支部長が決めた初陣の内容を聞かされる。

「よし、今回は鉄塔の森で発見された、オウガテイル2体とザイゴート2体の討伐だ」

「了解だ。オウガテイルは俺が引きつけるから二人で先にザイゴートを頼む」

「……………了解」

作戦を決めて、出撃ゲートで神機ケースを受け取った雨宮姉弟と、自室から神機ケースを持ってきたレッドイーターは、装甲車（運転手はツバキ）でミッションに出撃した。

『聞こえるか？』

『ああ、問題ないぜ』

「……………はい」

レッドイーターは支部から支給される無線機（携帯端末）で2人と連絡を取りつつ、各自、分かれて索敵をしていた。ちなみに今の

彼の神機は銃形態で、いつでも奇襲を仕掛けられることを考えて、ミッション開始前から変形させていた。

『いいか、発見しても攻撃しないで信号弾を上げる、いいな?』

『「了解」』

レッドイーターはDエリアと呼ばれるエリアを、警戒しながら、歩いていた。

目に、空に浮かぶ2つの黒い影が映る。

「……………見つけた」

すぐに体を潜め、バックパックと呼ばれる支部からの支給品から信号弾を取り出す。そして打ち上げ、銃口を黒い浮遊物、ザイゴートに向けた。

「待たせた、ザイゴートはどう仕留めるか考えたか?」

ツバキは足音を立てずに、小声で近づいてくる。こっちが仕掛ける前に見つかってしまえば面倒であるからだろう。

「……………作戦ならあります」

小声で返事をしつつ、氷属性のバレットを神機に装填したレッドイーターは、既に完全に無傷でザイゴートを仕留める作戦を考え終

時に剣形態に変形させ、再び地面を蹴り、ジャンプする。そして、前を飛んでいたザイコートに向かって、神機を振り上げる。

「ギヤア!？」

切られた部分から赤い血を噴出するアラガミに、レッドイーターは、振り上げ終わった神機を振り下ろす。

「ゲギ!？」

剣に切られながら、引つ掛けられるように地面に落とされるザイコート。しかし、追撃の手は止まない。着地したレッドイーターは、神機を左からおもいきり振り、墜落したくザイコート>を深々と切りつける。

「捕喰形態「プレデターフォーム」!!」

振り切った神機から、黒い竜のアギトのようなものが噴き出て、<ザイコート>に喰いつく。

捕喰形態、生きたアラガミから身体の一部を捕喰すると、体の中にあるオラクル細胞が活性化、一時的に大幅に身体能力が上がる。

「バーストモード」と呼ばれる戦闘においての重要な戦力源である。

しかし、今レッドイーターが行なった捕喰形態は、通常の捕喰形態が溜めの動作をするのと異なり、攻撃の最後に行なう捕喰、「コンボ捕喰」と呼ばれる攻撃である。コンボ捕喰は、通常の捕食と違い、素早く捕喰形態に移れるが、バーストモードを維持できる時間が半分しかない欠点がある。

だが今の捕喰でコアも摘出したため、残りの、自分が最初に攻撃したザイコートに振り向く。と同時に、ツバキが出てきて弾丸を撃ちだし、正確にザイコートに着弾させる。

そして、レッドイーターは、体を捻るようにし、神機を右肩に乗せる。

「はあああああ!!」

力を溜めてから放つバスターブレード最大の攻撃「チャージクラッシュ」、体の中のオラクル細胞が更に活性化し、それに反応する神機の剣身の根元から、黒いような、紫色のようなオーラを纏った剣が湧き出るようになってくる。通常、チャージクラッシュの形成は2秒程掛かるが、バーストモードの状態では1秒程で完了する。先程のコンボ捕喰はそのためである。

そう、これがレッドイーターの作戦である。先の行動でザイゴート1体を始末した後、ツバキの銃弾で残りの1体の足止めをし、その間にチャージクラッシュで切り裂く。とゆう、短時間でアラガミを殲滅させる作戦である。

そして、チャージクラッシュが形成される。剣身の長さは2倍以上になり、レッドイーターは正確にザイゴートを狙い、全力で振り下ろす。

「……………!!??」

断末魔の声すら上げられず、正中線に左右真っ二つにされるザイコートはコアを破壊され、黒い塵となり、風に流されていった。

ふう、と安堵の息を吐きながら、Fエリアの方にいるツバキを見る、視線に気付いた彼女は、向こうから近づいてくる。

「なかなか良い動きだったぞ。作戦も良い」

「………どうも」

ツバキは微笑みながらレッドイーターの頭を撫でる。しかし、まだオウガテイルを倒していないので、早急に引き付けてくれているリンドウの支援に行かなければならない。と、考え走り出そうとする2人の無線機が鳴った。無線機を取り出し確認すると、連絡してきたのはリンドウだった。

「どうしたリンドウ？」

ツバキが通話のボタンを押し、リンドウに質問をする。レッドイーターもそれに倣い、会話を聞くために通話ボタンを押し。

『姉上、今すぐ帰還だ。ヴァジュラがいる』

「オウガテイルは？」

『2体ともNエリアでヴァジュラに食われている』

「強い個体なのか？ お前は無事か？」

『オウガテイルを一撃で倒したから、恐らく強い個体だ。俺は発見されていないから無傷。今はAエリアにいる』

ツバキは少し考え、出した結論をレッドイーターとリンドウに伝

える。

「我が隊はこれより帰還する。対ヴァジユラの準備ができ次第、リンドウが発見したヴァジユラの討伐に向かう」

『「了解」』

2人は返事を返し、ツバキはすぐに、Aエリアにいるリンドウと合流するために走る。そしてレッドイーターも、その後を追う

その後、無事リンドウと合流し、三人は装甲車でアナグラへと帰還した。

「スタングレネードを忘れるなよ？ ヴァジユラの怒り状態中に使くと、通常時より長く効果を発揮するからな」

「.....」

ヴァジユラに見つかる事無く、無事に帰ってきた三人はエントランスにあるターミナルで、対ヴァジユラ用のアイテムを30分程整理していた。

「しかし、その兵装では厳しくないか？レッドイーター？」

先に準備を終わらせたツバキが、レッドイーターに質問する。

「そうだ、出撃は明日だし、兵装を強化しとくのも良いぞ？ほれ、

要らない素材とか譲るぞ。金は偉い人が払ってくれるらしいしな！」

「……………聞いてないですが、感謝します」

ツバキに同意するリンドウは、ターミナルで開いたページをレットイーターに見せる。内容は、リンドウが集めた素材等と、神機に取り付ける剣身等の一覧である。

「この素材全部使わないしな、俺にはあの刀身が一番振り回しやすいでね。欲しいの選んじまえ」

「……………了解」

あの刀身とは、チエーンソウのような、敵を引き裂くような刃を複数並べたリンドウ愛用の刀身だろう。名前は「ブラッドサージ」である。

「確かに使わない素材が複数あっても宝の持ち腐れだろう。遠慮せず貰っていけば良い」

ツバキからの許可も降りる。

レットイーターは、ターミナルに表示されている素材名とパーツ名を見ながら、ポケットの中に入っていたメモ用紙とペンを取り出し、目的物と強化、新装備の名前を記入する。そして書き終わったメモを切取り、リンドウに渡した。

「……………了解だ、ちょっと待ってくれ」

メモ用紙の中身を確認し終えたリンドウは、ターミナルを操作し、

技術開発部にパーツの開発を申請する。

「パーツは何にしたんだ？」

ツバキはレッドイーターにパーツの内容を訊ねた。対してレッドイーターは必要最低限の言葉で返す。

「……ノコギリ、マックス、対属性バツクラーです」

レッドイーターは、現在確認されているアラガミへの有効な対処法等を本部で教え込まれていた為、ヴァジュラに有効な兵装などは理解している。

火属性はヴァジュラの弱点属性の1つであり、マックスはその火属性のバレットの射出力が高い銃身である。ファルコンからの派生つまりスナイパーの分類のため、レーザー系のバレットとの相性が良い。それも、ヴァジュラ相手には効果が高い。

ノコギリという剣身は、敵を引き千切る攻撃が合う刃を持ったバスターブレードだ。選択の理由は、ヴァジュラの頭と前足へのダメージが効率良く通るためである。

対属性バツクラーは、雷属性を主体に遠距離攻撃が可能な、虎、もしくはライオンに似た体を持つヴァジュラは、高い機動性で距離を離され易いので、もしもの可能性込みで選らんだバツクラーである。

「どう考えてもヴァジュラと相性の良い兵装だな」

ツバキは遠回しに評価する。と同時に、ツバキお姉ちゃん、リ

ンドーウ、と呼ぶ声が聞こえた。雨宮姉弟は振り向くがレッドイーターは興味が無いため無視する。

「お帰りなさい」

「ただいまサクヤ」

サクヤと呼ばれた女の子（声で判断）は、レッドイーターに気付いたみたく、リンドウに尋ねる。

「リンドウ。その子は？」

「ん？ えつと……」

サクヤに聞かれ、少し回答に戸惑うリンドウの声が聞こえたため、レッドイーターは、はあ、とため息を吐き、サクヤと呼ばれた人に自己紹介と顔を見せるために振り向く。

目に映るのは、肩に届かない長さに切り揃えられた綺麗な黒い髪のおかつぱの髪型、将来絶対美人になるだろう端整な顔立ちの14歳くらいの少女だった。だが、レッドイーターにとって、そんなことはどうでもいいのである。

「……………昨日から、極東支部に配属になった新兵です。コードネームは『レッドイーター』と言います。ちなみに女じゃないです」

「え、そうなの？ てつきり可愛い女の子だと」

「……………あぁ？」

レッドイーターは不機嫌になり、サクヤを睨みつける。だが、すぐに、ふん、と鼻を鳴らしエレベーターに向かって歩き出した。リンドウは、はあ、と溜め息を吐きながら、サクヤの言葉を注意する。

「サクヤ、それ言ったら駄目だろ？　っと、レッドイーターの部屋に行ってください姉上」

「ああ、サクヤとお茶でも飲んでるよ」

そう言ってるリンドウは、レッドイーターと一緒にエレベーターに向かった。

「悪いな、サクヤも悪気があった訳じゃないんだ」

先のサクヤの言葉で傷ついたであろうレッドイーターに、リンドウは謝る。別に気にしていない、とでも言っような顔をしたレッドイーターは、口を開く。

「……………リンドウさん」

「なんだ？」

「……………ヴァジュラ、強い個体って言ってましたけど、通常の<ヴァジュラ>と異なる部位とがあります？」

レッドイーターは、そう言ってる間に、ベッドに座り、リンドウ

に尋ねる。

「……………え」と

何故か顔を逸らし、曖昧な返事しか返さないリンドウに、レッド
イーターは疑問符を頭に浮かべる。

「……………忘れたんですね？」

「申し訳ございません」

思いついたことを、そのままリンドウに訊ねたレッドイーターは、
はあ、と嘆息する。と同時に、自室のターミナルが、と鳴
つたのでターミナルに近づき、操作する。内容は、作成を頼んだ神
機の兵装が出来たので、そちらに届ける。とゆうツバキからのメー
ルだった。

「……………予想以上に早い」

「支部長が手配したんじゃないか？まあ、俺もこの早さは初めてだ
けどな。ビックリしたよ」

後ろから覗きこんでいたリンドウは、推理をレッドイーターに告
げる。ならば、とレッドイーターは自室と繋がっている神機整備室
に入る。ちなみにリンドウも入ってくる。と同時に、部屋のドアベ
ルが鳴る。

『待たせたな』

「姉上も早いこと」

「……………開いています」

『そうか』

ツバキがドアを開き、自室に入ってくる。

「……………呼びに言ってください」

「あいよー」

リンドウに呼ぶのを頼んだので、レッドイーターは整備用の台に神機を置く。リンドウは、整備室の扉を少し開きツバキを呼ぶ。

部屋に入ってきたツバキは、手に持っていたケースを、台の上に乗せる。

「ノコギリ、マックス、対属性バツクラー、ちゃんと揃っているぞ」

「……………どうも」

レッドイーターは、ツバキが持ってきた神機の兵装の取り付け作業をすぐさま始める。

しかし、作業をしていた手がピタリと止まった。どうした？ とレッドイーターの異変に気付いた2人は尋ねる。まるで何かを察知したかのように固まるレッドイーターは、冷静にその気配を探る。その気配は、

「アラガミ防壁付近にアラガミ!!!???」

「「なんだと!?!」」

『ビーーーー!!! ビーーーー!!! アラガミ防壁を、ヴァジュラの群れが突破!!! 繰り返す、アラガミ防壁を、ヴァジュラの群れが突破!!! 出撃可能な神機使いは、至急防衛に向かってください!!!』

レッドイーターが気付いた頃には遅く、アラガミ防壁は突破された。冷静に考えたレッドイーターは2人に告げる。

「.....2人はヴァジュラの足止めをお願いします。こちらも、パーツを取り付け次第そちらに向かいますので」

「分かった、急いでくれ! 行くぞリンドウ!」

「了解!」

走って部屋を出る2人など目もくれず、レッドイーターは神機の整備を急ぐ。

「畜生、数が多すぎる!!!」

そう叫びながら、リンドウは全力で神機を振るい、ヴァジュラの首を切り落とす。ヴァジュラの群れは、かつて無い大規模。この区画でも少なくとも10体はいる。

「ツツ!? やべえ!!!」

ヴァジュラの群れの内の1体が、逃げ遅れた一般人を襲う。リンドウのような近接型神機では追いつけない。しかし、そのヴァジュラは、前足に無数の弾丸を叩き込まれ、停止する。結果、喰われる寸前だった一般人は、走って逃げきれた。

弾丸を放ったのは、アサルトタイプの遠距離型神機、「モウスイブロウ」の銃口をヴァジュラの群れに構えている女性、ツバキだ。

「戦闘に集中しろ！！ お前が殺し損ねた奴は、私がやる！！」

「すまん！！」

ツバキに叱責されたリンドウは、首を落としたヴァジュラのコアを捕食形態で素早く摘出する。そして、思い切り地面を蹴り、ステップする。刹那、先程までリンドウが立っていた地面が、ヴァジュラ数体が放った雷球によって弾ける。

「くそお、邪魔くせえ！！」

雷球を放ち、隙だらけのヴァジュラ数体の足を、薙ぎ払うように切り裂く。そして、ツバキの放つ弾丸で止めを刺す。……はずが、別のヴァジュラが妨害に入り、背中に付いている堅いマントで弾丸はいとも簡単に弾かれた。

しかし、これでもう良い。もう十分なはずだ。

「リンドウ、一般人がシェルターに入った。ここは引くぞ！」

「了解だ！！」

そして、エレベーターが開き、レッドイーターは飛び出して出撃ゲートを通り、外に出る。ヴァジユラの群れはもう視認できるほどまでに近づいていた。

「……ちいっ!!」

舌打ちをしながら神機を取り出し、火属性のバレットを装填し引き金を引く。マックスの砲身から撃ちだされるレーザーは、複数のヴァジユラを貫く。

「……ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
「!!」「」「」

こちらに気付いたヴァジユラは、一斉に振り向く……が。

「はあああああ!!」

剣形態にした神機を持ち、一瞬でヴァジユラの群れに飛び込み、360度をノコギリの刃でヴァジユラの足を薙ぎ払うように斬りつける。そして地面を蹴り、跳躍する。狙いは1体の無傷のヴァジユラの背中。他のヴァジユラは、足を破壊され動けなため妨害はできない。狙いが逸れれば、堅いマントに当たるが、当たったとしてもそのマントを粉碎するつものため、レッドイーターは容赦なく神機を振り下ろす!

「ギャアア、ア」

マント2枚を粉碎され、そのまま神機によって胴体を真っ二つにされたヴァジユラの赤い血が、レッドイーターの頬に付着する。コアを破壊したため、ヴァジユラは黒い塵のように風に流される。

「・・・・・・・・次、次、次」

レイドイーターは神機を変形させ、流れるように足を破壊されたヴァジュラのコアを次々と撃ちぬく。が。強いプレッシャーを感じた彼は、全滅させたヴァジュラの結合崩壊など見ずに、プレッシャーの感じる方向へ駆け出す。

(・・・・・・・・この気配は、ヴァジュラだが、なにか違う。純粹に強い个体か?)

「ついてねえっ!!」

「くそ！ リンドウ、お前の見たヴァジュラはこいつか!？」

ヴァジュラの群れから逃げ切り、一息吐こうとした雨宮姉弟なのだが、彼らの目の前には、3体のヴァジュラがいた。

だがそのヴァジュラの内1体は、先程戦っていたヴァジュラと違い、一回りか二回り大きかった。大きさだけではない。マントの数は6枚に増え、放つ雷球は大きくなり、その高い身体能力も他のヴァジュラより圧倒的に高かった。

「あの傷跡、ゲンさんの部隊とやりあったのか？」

ツバキが気付いたのは、ヴァジュラの左目とその周辺にある、自分の神機の弾丸より小さい弾を無数に喰らった痕である。ピストル

型神機と呼ばれる、ツバキ達の神機より1世代前の神機に付けられた傷跡だ。

「だが左目以外そんなにダメージ負っていないようだぞ!? って、危なあ!」

リンドウは指摘しながら、雷球を回避する。確かに大きいヴァジユラの左目は潰されているが、その他の部位は傷が少ない。相手がその1体だけなら2人でも対応できたが、他のヴァジユラもいるため、回避に集中する以外の行動が起こせないでいる。

「くそっ!! 増援の期待は……無い!!」

ツバキがこの状況に諦めかけた、その時。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
お!!!」

「「ギャアアアア!」」

突如2体の普通のヴァジユラが腹から血を噴出しながら横に吹き飛ばす。そして、吹き飛んで宙を突き進むヴァジユラのコアを2本の赤い光が貫いた。2人は目を丸くするが、冷静さをすぐ取り戻し、レーザーを撃った「少年」を見る。

「……あとはこいつだけ」

「「レッドイーター!!!」」

銃形態から剣形態に戻すレッドイーターはスタングレネードを投

げ、巨大なヴァジュラの足を止める。そして一気に距離を詰めて、ヴァジュラの右目含む顔の周辺をノコギリで引き千切り、距離を離し、ヴァジュラの体液を拭う。

「ギャアアアアアアアア！！！！」

ヴァジュラは両目を失ったことで、がむしゃらにマントから大雷球を放つが、体を少し動かすだけでレッドイーターはそれを避ける。

(……………こいつじゃないな、いったいどのどいつだ?)

ヴァジュラの、唯一頼りになる聴覚をレッドイーターは逆に利用する為に、地面に神機をぶつけ、巨大なクレーターを作る。その破壊音を聞いたヴァジュラは、躊躇無く聞こえた方向に突進するがクレータの中に入り、勢いを止められず大きな音を立てて転んだ。

「……………無能め」

レッドイーターは転んだヴァジュラの腹にノコギリの刃を入れていき、ノコギリ全体が入った後、そのまま捕喰形態でコアを摘出する。

そこに残るのは黒い塵となって空気に溶けていくヴァジュラと、頬に付いたヴァジュラの血を舐めるレッドイーター。それを見ていたリンドウとツバキは、気の抜けたような顔をしていたが、すぐに助かった安心感で安堵の息を吐く。

「……………進入してきたヴァジュラは全滅させました。さっさと帰りますよ」

いつの間にか近づいていたレッドイーターにリンドウは笑顔で…

「ありがとうー！」

レッドイーターへの感謝の気持ちをそのまま口にした。ツバキも、ありがとう、と口にする。

「ほーれ、帰り道はおんぶして行ってやるー！！！」

「え、ちょ…！」

リンドウは笑顔のまま、レッドイーターを（強制的に）おんぶする。レッドイーターは少し戸惑ったが、何故か気持ち良くなったのと、溜まっていた疲れのせいでそのまま眠ってしまった。

「おやおや、寝てしまったようだな。リンドウ、さっさと戻って、サクヤ手作りの夜ご飯だ」

「了解です」

リンドウはレッドイーターをおんぶしながら、ツバキはレッドイーターの神機を持ちながら、帰還した。

5月9日～5月10日 まとめ

5月9日

「……………ミッシェンコンプリート」

レッドイーターは1人、今コアを抜かれ、空気に溶けていく同種のアラガミ2体と戦っていた。

体格は人と同じ……と言えなくも無い体。大きさは人の2倍以上程。肩甲骨に近い所から1対に生える巨大な翼　に近い先端に拳が付いている腕羽。

シユウと呼ばれるアラガミである。正直に言うと、レッドイーターは少し苦戦した。何故か？ シユウの腕羽と下半身はレッドイーターの腕力を持ってしても、破壊するのに手こずったのである。倒せた頃には破壊し終わっているが……。

(……………で、迎えはまだかな?)

リンドウ達は鎮魂の廃寺と呼ばれる所で任務だと聞いている。それが終わったら迎えに来るとも聞いていた。しかし、いつ終わるかなど聞いていなかった。

(……………へりに乗る前に聞くべきだった)

鉄塔の森のようなアナグラから凄く離れている所は、装甲車ではなくヘリコプターなのだ。故に今日のレッドイーターはヘリで攻撃

したのだ。

1時間程だろうか、レッドイーターはそこから辺から、神機の素材に使える金属や機械を探していると、ようやく装甲車の迎えが来た。それは彼の横で停止する。

「待ったか？ さつさと帰るぞ」

運転手のツバキは口数少なめで謝罪する。それに対してレッドイーターは無言で頷き、装甲車に乗り込む。横に座るリンドウはとても疲れたような顔をしているが、相変わらず元気そうである。思ったレッドイーターにリンドウは話掛けた。

「おお、相変わらず無傷での帰還か！ どうだ？ 神機、強化できそうか？」

「……………ええ。鳥神翼節4個と、鳥神爪1個」

今回の任務は純粋に、ノコギリの強化のための素材集めだ。初めての敵を2体同時は先の理由もあり、苦戦した。

「そついやこの前のでかいヴァジュラ、最近目撃情報が多くてな、今日はその討伐の任務だったんだ」

「……………前に苦戦してませんでした？」

「あれは単に、スタングレネードと、姉上の神機の貯蔵オラクルが

切れただけさ。俺が神機でオラクル細胞回収すれば良いんだが、攻撃する隙がなくてな」

遠距離式の神機は、基本近接式神機と組むのが基本セオリーとされる。理由は、弾にするためのオラクル細胞を切らした神機に、近接式の神機がアラガミのオラクル細胞を回収して渡すためだ。

「……不便」

「はは、まったくもってその通りだよ。俺ももっと強くならんな！」

「……いきなり強くなろうと思って死んだら洒落になりません」

「うーん、そうなんだけど」

少し考えこんでしまうリンドウは、どうしたら良いか、みたいな表情で唸っていた。

そこで、レッドイーターは、良い言葉を思いついた。

「……リンドウさん」

「お、もしや」

少し目を光らせるリンドウに考え付いた言葉を教える。

「……死なない。死にそうなら、逃げる。そして隠れる。隙を見つけたら殺せば良いです」

少し目を丸くしたリンドウは……。

「え、何そのいい加減な命令みたいな言葉」

「いやリンドウ、よく考える。その命令を守ったら生還率高くなるぞ」

運転中のツバキがレッドイーターの言葉を、現実に置き換えたら、とリンドウに告げる。

「う、姉上がそう言うなら、そうなんだろうけど……」

リンドウは渋々といった感じで賛成した。

「……では命令は、死なない。死にそうになったら逃げる。そして隠れる。隙を見つけたら殺す。ってことで」

「凄く上官っぽい!!」

なんやかんやで無事に帰れた3人であった。

ちなみに、ノコギリがノコギリ改に強化されたのは、次の日の朝だ。

いつもは、生きて帰ってこれて良かった!! などを言い合う場所イコール食堂、という認識を持ったレッドイーターは、目の前で

今日の夜ご飯を口に運んでいるツバキを睨みつける。

「……………Really(本当)?」

レッドイーターは日本人らしく、好物の納豆を混ぜながらツバキに「何か」を尋ねる。対してツバキは。

「本当だが?」

サラツ、と答える。レッドイーターは、疲れた顔をしているリンドウを見る。

「いやホント、コンゴウ30体以上はムリムリ(笑)」

「……………ムリムリ(笑)じゃないでしょ」

簡単に言うと、廃寺まで行って来てヴァジュラを倒した後、コンゴウの大群と遭遇、急いで逃げた。という話である。

「しかし、中型のアラガミの大群を発見できないとはな……………、まったく、諜報部は何をしている」

「……………怒ってるんですか?」

「当然だ」

レッドイーターはツバキの心は読めないが、敵はヴァジュラと違い、個々の質より数による連携が強みのアラガミ、コンゴウ。作戦を念入りに考えなければ全滅もありえる。ツバキも同じ考えなのか、黙って考えている。

「（もぐもぐ……くん）……正直、最初から各個撃破は無理。痛手を負わせて陣形を崩し、乱戦に持ち込み、コンゴウの攻撃を回避して別のコンゴウに当てて倒していくのが良いかと」

「ああ、私もそれが良いと思う」

という訳で作戦は決まった。ツバキは眠っていたリンドウの頭を叩き、作戦を告げる。

「出撃は明日の9：00、スタングレネードは緊急用に持っておけよ。以上だ」

「え、一日連続最近多いですよ」

目をこすりながら、リンドウは言うが、まだ神機使いも多くない現在では、少しでも多く働かないといけないという事ぐらい彼も理解している。

「……ちそうさまでした」

「ご飯を食べ終わったレッドイーターは食器を持ち、食堂担当の職員に渡す。

「……では」

「ああ、また明日」

レッドイーターは自室に戻り、ゆっくりと目蓋を閉じる。

5月10日

「はあ、はあ、はあ　クソがあああああああっ！！！！」

レッドイーターは強化されたノコギリ改を構え、白く巨大な猿に突っ込む　　が横から振られる剛腕に吹きとばされる。

当初の討伐対象は、コンゴウの筈だった。だが目の前に居るのは、その局地適応型墮天種、コンゴウ墮天だった。

1体だけなら良い、しかし相手は20体を軽く超える大群であった。同行者のリンドウとツバキは、コンゴウ墮天の巧みな連携攻撃により、随分と離されてしまった。今は生きているかも分からない。

「死ね！！」

銃形態に変形させ、マックスの砲身から撃てる限りのレーザーを放つ。それにより、1体は殺した。だが劣勢なものには変わらない。

しかし、ついに神機を持つ力さえ失ったレッドイーターは、重力にしたがって雪に体全体を乗せる。それを見ていたコンゴウ墮天は、取り囲むように近づいてきた。

(・・・・・・僕は……死ぬの?)

心臓が鳴るスピードが速くなる。目の前には巨大なコンゴウ墮天の足。

(・・・死ぬのは 嫌だ、生きたい)

体を小刻みに震わせるレッドイーターの上から、コンゴウ墮天の大きな拳が、振り下ろされる。

生きなさい

声が聞こえた、優しい女性の声。刹那

降り積もっていく雪の中、鮮血が飛び散った。

しかしレッドイーターの無い。囲むような陣形を組んでいたコンゴウ墮天の群れからだ……。

突然のことに、コンゴウ墮天の生き残りは、ただ呆然としていた。視界に入るのは、原型を留めていない仲間の姿と『神機』。そこに、人間は「いない」。それを確認し終えたコンゴウ墮天達に……。

赤い軌跡が、襲い掛かる。

「レッドイーター!!」

「おい！ 生きているなら返事をしてくれー!!」

どういう訳か、レッドイーターと逸れた2人を追ってきたコンゴウ墮天は、片手で数える程度しか存在せず、それを討伐した2人は、逸れたエリア付近でレッドイーターを捜す。

「あの数だったのに、追ってきたのはあれだけ……、という事は、つまりレッドイーターはコンゴウ墮天の大群と交戦している事に……」

ツバキは自分を恥じる、もしかしたら、もう喰われているかもしれない、そんな考えが脳裏を過ぎる。

「ツツ!!?? レッドイーター!!」

「何!？」

リンドウが叫び、指の指す方をツバキは見る。辺りより赤い液体で雪が染まっている先には、レッドイーターが壁に背を預け、倒れている。

「レッドイーター!!」

リンドウに呼ばれ、ピクツ、とレッドイーターは震える。生きている、だが様子がおかしい。リンドウが近寄り、話を聞く。

「コンゴウ墮天の群れは!!??」

「……全滅……ウツ!? ゴホツ!!」

吐血したレッドイーターは、息も絶え絶えである。

「良かった！！ 本当に！！」

「待ってる！！ 今装甲車を取ってくる！！」

リンドウはレッドイーターを抱き付く。ツバキは今にも死にそうなレッドイーターを早急にアナグラに運ぶために、装甲車を置いている方へ駆け出した。

「重症のはず……なんだけど、少なくとも傷は治りかけているね」

サカキ博士は、ベッドで寝ているレッドイーターの傷を見ながら
両宮姉弟に告げる。リンドウは心配そうな顔で博士に問う。

「吐血していましたが、内臓の方は？」

「ああ、そちらも治りかけていると思う」

「そう、ですか」

博士の返しに、リンドウは。ほっとする。

「じゃあ、聞かせてもらえるかい？ 今回の件について」

「はい」

博士に尋ねられ、ツバキは語り始める。

「そろそろ、出てきて欲しいもんだね」

「……………今はまだ早いです」

リンドウの愚痴を、レッドイーターは遠回しに、嫌だ、と答える。

「どつやら、来てしまったようだな」

「……！」

ツバキのつぶやきで、全員が戦闘態勢に入る。そして目の前に降り立つ、コンゴウの群れ……では無かった。ツバキは驚きのあまり口にする。

「馬鹿な！ 墮天種だと!？」

目の前でこちらを捕捉したコンゴウ『墮天』が一斉に叫びあげる。

「まさか、この1日で墮天したのか!？」

「……………そう考えるのが妥当、と言ったところですね」

リンドウの叫び声に、レッドイーターは回答する。

「……………逃げ道も塞がれました……………やばいですね」

額に汗を浮かべながら、状況の感想をつぶやく。

「来るぞ！ 散開！！」

全員がステップを踏み、その場から離れる。直後、立っていた場所に氷塊が落ちる。積もっていた雪を吹き飛ばし、地面を抉っていた。

「あの破壊力、喰らっただけでも不味い！！」

リンドウは叫び、次の氷塊を避ける。

「つつ！！」

しかし避けた先にも氷塊が落ち、あと少してリンドウは潰されるところだった。

「くそ！ リンドウ、レッドイーター！！ 撤退するぞ！！」

ツバキの叫び声に反応して、レッドイーターはスタングレネードを投げ、コンゴウ墮天の視界を奪うが。

「「「ガアアアアアアアアアアアアアア！！！！」「」「」

「………賢い」

コンゴウ墮天の増援により、レッドイーターの逃げ道が完全に塞がれる。

レッドイーターは舌を打ち、雨宮姉弟に目を向ける。

「……………ツバキさん達は逃げてください」

「「な!?!」」

「……………迷っている暇なんて無いです。早く……………!!」

レッドイーターの声に従ってリンドウ達は逃げる。数体が追いかけていったが、あの2人なら倒せる。

「……………困まれたか」

2人を追いかけなかったコンゴウ墮天の群れは、レッドイーターを中心に囲んでいた。

「それからは、分からないんだね？」

「……………はい」

ツバキは悔しさで、拳を強く握り締めていた。掌の皮を爪が破き、微量の血液が滴り落ちる。

5月9日～5月10日 まとめ (後書き)

今日はここまで

10話分を3つに纏めましたw

あの建設話は幻になりましたけどね(汗)

第十二話、記憶が無い

5月12日

「う……………?」

頭がくらくらする、そんな感覚を不快に感じながらレドイーターは目を覚ます。

腕を軽く動かし、体に問題が無い事を確認したレドイーターは、寝かされていたベッドから起き上がる。掛け布団で見えなかったが、病人用の服を着せられていた。

(……………病室? 僕、助かったの?)

目で部屋を観察し、結論に至ったレドイーターは、棚に置いてあった無線機を手に取る。時間と日付が表示されているので、まずは確認、といったところだ。

5月12日

22:00

(……………二日以上も、ねえ)

任務に出たのが10日だったのは覚えている。二日も寝るとは、よほど重症だったのだろう。

そして、レドイーターは自分が恥ずかしくなった。恐らく、コ

ンゴウ墮天の群れから助けしてくれたのはリンドウ達だろう。迷惑を掛けてしまったし、アイテムも大量に消費させてしまっただろう。

（……………明日、謝らないと……………そういえば、いつから意識が無かったんだろう？）

コンゴウ墮天の群れとの戦闘は、吹き飛ばされた後、銃形態で1体を始末するところまでしか覚えていない。

「……………はあ」

つい溜息が出てしまう。体は動くし、少し夜のアナグラを満喫しようと考え、床に置かれているスリッパを穿き、病室を後にする。

「ベテラン区画」

今更だが、エントランス、ラボラトリ、役員区画以外の施設を回っていないな、と自動販売機にフェンリルチップ（略してf c）と呼ばれる通貨を入れ、子供向けのジュースを取り出しながら、レッドイーターは思った。

「む？ レッドイーターか、起きて平気か？」

「……………ツバキさん」

いつの間にか後ろに立っていたツバキは、心配そうな顔で尋ねてきた。

「……………ええ、もう傷も完治しましたし、明日からまた前線に戻れそうです」

言い終え、ジュースを飲み始めるレッドイーターを見て、ツバキは安心した、とでも言いたいのか、レッドイーターの頭を撫でる。

「……………ごめんなさい」

「ん？どうした急に？」

「……………僕を助けるために、アイテムとか大量に消費したのかと思って、一応」

「ああなるほど。……………レッドイーター、私達はそこまでアイテムを消費していないぞ？」

「……………？」

「私達を追いかけてきたコンゴウ墮天を始末した後なんだが、戻った頃には、コンゴウ墮天の群れは全滅していた。覚えていないのか？」

再び心配そうな顔をするツバキを見て、しまった、とレッドイーターは心の中で舌打ちをし、機嫌直しにジュースを一気飲みする。

ふう、とジュースから口を離し、会話を進める為に口を開く。

「……………でも、僕は気絶してたと思うのですが」

「そうだ、だがなレッドイーター。お前以外、あの場には居ない」
飲み終えたジューズをダストボックスに入れ、次の可能性を模索する。

「……………強力な新種のアラガミ……、いや、それは無いか」
もしそうだとすれば、力尽きているレッドイーターや雨宮姉弟にも危害が加わっているはず。だが、全員生きて帰還したため、その可能性は低い。

「神機の暴走の形跡も無いしな」
ツバキも可能性の1つを消していく。

「……………無意識下での神機使いの暴走？ いやそれもない」
その場合、アラガミを「殺す」事しか頭にないたため、簡単に不意打ちを受けて絶命する、と本部の人達が言っていた。

「まあ、今は休んでおけ。明日には戦線復帰なんだろう？」
「……………もう少しアナグラを回ってからにします。では」
軽く頭を下げ、ツバキに別れを告げる。

その後、長い夜になりそうだと、思いつつ他の区画をレッドイーターは見学していた。

第十二話、記憶が無い（後書き）

ちよつと学校のテストがあるので、もしかしたら、今週と来週の前
半は投稿できないかもしれません。

まあストーリーの大まかな流れは記憶していますから、テスト終了
次第、投稿していきたいです。

第十三話、新種

5月26日

「エントランス」

13:00

「レッドイーター」

「………なんです？」

丁度任務から帰ってきたリンドウとレッドイーターは、出撃ゲートの手前にあるソファで、机の上に今日の配給を並べて、食べていた。ドーム状のパンとパンの間に野菜を詰めた、いわばハンバーガー（肉無し）である。

リンドウは、ハンバーガー（肉無し）を食べながらレッドイーターに質問する。

「ひよもえしやいきんねりゆてにやいなろ？」

「………話すなら、口に入ってるもの流し込んでからにしてください。お前最近寝れてないだろ、で良いですか？」

何故か伝わっているが、二人とも気にした様子は無い。

リンドウは、コクコク、と顔を縦に振って、手元の水で口の中にある食べ物を胃に流し込む。

「ぷはぁ！……そうだ、だってお前今日の動き悪かったじゃないか」

「……………結構鋭いですね。よく僕を見ているようで」

「顔に出ているんだよ。疲れが取れていない、ってな」

レッドイーターは驚かずに聞いている。ちなみに今日の討伐対象はザイコートの群れの撃破である。

「子供なんだから、いっぱい食って、体動かして、早く寝ないと駄目だろ？」

「……………怖いんです」

「どっしって？」

レッドイーターの、小さい声に、リンドウはさらに心配になったため、質問をする。

「……………寝ると、自分が自分じゃなくなる気がして……………」

（ありやりや、こりや何が原因だ？つと）

リンドウは手がいつの間にかハンバーガー（肉無し）ではなく、目の前の、10にも満たない子供の頭を撫でていた。

「……………自分でも分かりません。あの、コンゴウ墮天の群れとの戦闘の後なのは、後なのは確かなのですが……………」

「……そうか」

触ってみたらすぐにわかった、レッドイーターは震えている。本当に何かに恐怖しているんだな、とリンドウは心の中で呟いていた。

「（もぐもぐ、ぐくん）……………ごちそうさま」

「ああ、寝れなくても体は休ませておけよ？」

「……………了解」

そう言って立ち上がり、エレベーターに向かうレッドイーターの背中を、リンドウは黙って見送る事しかできなかった。

「レッドイーターの部屋」

15:00

「……………ふう」

リンドウに言われた通りに、ベッドで体だけでも休ませてみた。レッドイーターは、正直こんなに疲れが取れるとは思わなかった。さつきよりも体に力が入る。

ターミナルにメールが届いた着信音が鳴る。ベッドから起きたレッドイーターはターミナルに自分のIDを認証させ、メールを表示させる。

(……サカキ博士から?)

メールには、ちょっと大事な話があるから、19:00に僕の部屋まで来てね、と短い文しか書いていなかった。

レッドイーターは4時間程、何をするか考えた、でその結果、昔のアニメでも見るか、という結論に達した。

(……アニメなら時間を余裕で潰せるし、ガダムでも見るか……)

「サカキ博士の部屋」

19:00

何故か博士に呼ばれ、いつものメンバーが揃っていた。レッドイーターはソファに座っている。

「いやー、いきなり召集してすまないねえ」

「で、内容はアラガミに関して、ですか？」

相変わらず至近距離まで接近して話すサカキ博士と、ツバキを見ながら、レッドイーターは、もぐもぐ、と夜ご飯を口にしていた。リンドウは机に突っ伏して寝ている。

「そうなんだ、本部から送られてきたメールでね、<ボルグ・カムラン>が極東に上陸した可能性がある、レッドイーターにはこれのコアの回収を任せる、……ってね」

その言葉に、レッドイーターが質問する。

「……新種のアラガミですか？まだ戦闘経験がないので、詳しく教えてください」

「いやー、それが、……本部の人たち、なかなか教えてくれなくてねえ」

「……自分で確かめろ、か」

レッドイーターは、使えない連中の集まりか本部、と心で毒を吐いておく。

「まあ、エイジス計画の足しになるんなら、俺頑張りますよー」

リンドウが机に伏せたまま呟く。レッドイーターは最近作ってもらった、「レールガン改」と、「対貫通バツクラー改」の使用を考えていたので、試しに使ってみることにする。

「それじゃ、頼むねー」

退室していくツバキ達に博士は手を軽く振る。そして、彼らに付いていこうとしていたレッドイーターの肩を軽くつつく。

「レッドイーター君、君は少し待ってくれない？」

「？」

第十四話、中々の敵、V S <ボルグ・カムラン>

6月2日

「愚者の空母」

17:00

「太陽に照らされ、こがねいろ黄金色に光る海が……眩しいぜ……」

いきなり意味不明な発言をしているリンドウを無視し、レッドイーターは、レールガン改を装備した神機のバレット装填を終わらせる。

ちなみにレールガン改は、雷属性のバレットの射出力の高いスナイパータイプの銃身だ。

「……………偵察部隊が発見してくれたおかげで、こんな時間に出撃。……………はあ」

「まあ、その際戦闘してくれたおかげで、氷と雷属性に弱いのが判明したから、責めようがない」

愚痴るレッドイーターと同じように、ツバキは話ながらバレットを装填する。

同日、約15:00において、<ボルグ・カムラン>の発見を偵察部隊が報告。小規模な戦闘が行なわれた結果、氷及び雷属性に弱

い事が判明した。そして、本部からの命令でレッドイーター達は出撃することになった、という経緯である。

「……………こんな時間に出撃させられた恨み、強化ノコギリの錆にしてやる」

そう言い、レッドイーターは剣形態の神機を軽く持ち上げる。

剣身の形はノコギリのまま、だが赤い塗装が少々加えられている。「強化ノコギリ」、ここ最近現れた、シユウの上位個体を倒し、その素材で強化できたノコギリ改の強化版。

本来、剣身での攻撃は「切る」等とは若干違う、神機のオラクル細胞により「喰い切る」ことで、アラガミの結合を切り分けるのだが、強いアラガミには、その強固な結合を断ち切る事ができる程の「喰い切る」力が必要であり、神機の強化は、そういった意味で重要なのである。

「ほどほどにな」

ツバキは、くくく、と笑いながら神機に不備がないか確認する。彼女も怒っている模様である。

一通り確認し終えたレッドイーターは神機を両手にしっかり握る。

「……………さてと」

「行きますか!」

「だな」

「………鎧が夕日に照らされてかっこいい」

Dエリアで、何かを捕喰しているアラガミに、ついレッドイーターは感想を漏らす。

<ボルグ・カムラン>

その体は、サソリのようなだが、騎士の鎧のような外殻に、13個程ある兜状の突起。袂に当たる部分は巨大な盾。長い尻尾の先端に付いている、鋭いランスのような針。どれも魅力的だった。

「なーんか、もったいないような気がしたが、気のせいだよな？」

リンドウはいつでも走り出せる体勢になりながら呟く。そしてツバキは敵に気付かれない程度の声で、作戦開始の合図をする。

「よし、いくぞ！」

「了解！」

ツバキの言葉で、一気にボルグ・カムランに接近し、レッドイーターとリンドウは、その長い尾の根元を切り裂く。そして横にステップし、ツバキの撃ち出した弾丸が着弾する。

「跳べ!!」

「了解!!」

ツバキの指示を聞いた瞬間、3人は地面を蹴り、高々と跳ぶ。

その真下を、体を360度回転させ、地面と平行にした尻尾が通過する。

「……………これでどうだ!!」

重力に引かれ、落下したままレッドイーターは強化ノコギリを振り下ろす。

しかし、ボルグ・カムランの盾にぶつかり、火花を撒き散らす。

「!!??? ちいつ!!」

さらに神機に力を込めるレッドイーターは、盾を蹴り、再び空中に跳ぶ。

そして、空中で神機を変形させ、ボルグ・カムランに向けて一点を集中的にバレットを放つ。

……レーザーでは無い、粉碎系のバレットをだ。

「グギャアアアアアアアアアアアアアアアア!」

効果は高く、ボルグ・カムランの硬い盾は粉碎され、血が飛び散る。

再び剣形態に神機を變形させ、空中で回転し、落下速度による威力上昇に加え、遠心力も付ける。

「ぶっ壊れるおおおおおおおお！！！！」

レッドイーターは全体重を乗せた一撃は、盾を破壊されたボルグ・カムランを、深く、深く切りつける。

「グ……ガ」

力の無い声を出しながら、ボルグ・カムランは完全に足の力を失い、戦闘不能になった。

着地したレッドイーターは、神機に付いたアラガミの体液を拭う。

「……強かった」

僕達の方が何枚も上手だけどね、とレッドイーターは心の中で呟いておいた。

第十四話、中々の敵、VS<ボルグ・カムラン>(後書き)

原種は尾針破壊されない？

ゲームでは破壊できずとも小説なら問題ないですよWW。

外伝も始動しました。詳しくは

「ゴッドイーター 偽り神喰らい戦記 補完物語」

のあらすじをご覧ください。

第十五話、スターゲイザー榊先生（前書き）

20000アクセスとユニーク3000と総合評価100超えに激

しく感謝

読者様、ありがとう（泣）

テスト中なのに何やっとなる僕w

は一日、書いたものです

第十五話、スターゲイザー榊先生

6月3日

「榊博士の部屋」

7:00

「むー」

寝ぼけて、アホ毛を直すのを忘れていたレドイーターは、サカキ博士の部屋に設けられているソファに座っていた。

こんな朝早くから何故博士の部屋に居るか、というところ。

新人の神機使いは、入隊した後、定期的にサカキ博士の講義を受ける事になっている。

レドイーターも例外ではなく。この1ヶ月と少しで何回も受けた。そうしている間に、自然と博士の行動基準も分かってくるものだ。

そう、例えば、

「いやー、先日のボルグ・カムランの戦闘結果聞いたよ。凄いねえ」
「？」

「むにゃ……近づく過ぎです。離れてください」

「おおつと、失礼」

興味深い事があると、細長い狐目と絶えない笑みのまま、急接近する等だ。レッドイーターは慣れたつもりだが、やはり慣れない。

「うむ。新種のアラガミのコアはアラガミ防壁のアップデートに必要不可欠だからねえ」

「……………今日の講義の内容変わっていませんか？」

レッドイーターはそう言いながら、サカキ博士のすぐ横にある電子ボードに目を向ける。

ボードには【各部隊の役割について】と表示されていた。

レッドイーターはどの部隊にも属していない。各部隊の主な任務を知らないからその解説、というのが今回の講義の内容である。

「ああそうだった、ごめんね。さて、まずはツバキ君達が所属している、『第一部隊』について話そうかな？」

博士の声に合わせてるように、ボードの画面が変わる。

「この部隊は、君が今まで行なってきた、『アラガミのコアの回収』が優先される任務を受ける部隊なんだ。防壁の外で戦う分、強力なアラガミ複数との戦闘が多いから、実力のある神機使いで構成されているね」

ボードに【第一部隊の人員構成】凄腕のベテラン、又は、期待の新人」と表示される。レッドイーターは眠い事この上ないので、テ

ーブルに肘を着く。そしてアホ毛がピコピコと揺れる。

博士は笑みを崩さないまま、口を開く。

「次に第二部隊だね。この部隊はアラガミ防壁が突破された際、一般人の非難誘導と、アラガミの撃退の役割を担っているんだ。鉄壁、とは言い難いけど、防壁と第二部隊、この二段構えは良く機能しているよ」

【第二部隊は簡単に言うと防衛班】と表示されたボードを、目を擦りながら見ているレッドイーターは質問する。

「……その部隊の神機使いの使用神機は、基本どういうパーツを使用されていますか？」

「うん、これは第二部隊の人から訊いた話んだけど、一般人に襲い掛かるアラガミを、高い機動力で一歩手前で止めていくのがショートブレード、又は連射性能に特化したアサルト。一般人の逃げ道を作るバスターブレードと、ブラスト。が多いらしいよ」

自分から質問したのに、眠そうな顔をして俯いているレッドイーターのアホ毛を、博士は面白そうな顔で、人差し指を使っていじくる。

「で、最後に第三部隊だね。この部隊は……まあ支部長やリンドウ君達に聞いているだろうけど、『エイジス計画』の要、エイジス島の防衛が主な仕事だね。神機が近接型なら船で、遠距離型ならヘリで防衛に当たるんだ」

いじくられ、アホ毛を直すのを思い出したレッドイーターは、急

いで直すと同時に、意識が完全に覚醒した。目をボードにやると、
【第三部隊「エイジス島の守護」と表示されていた。

博士は、その様子を見ながら話を進める。

「これは神機使用の人数が少ないから当たり前なんだけど、第二、
第三部隊の増援としても機能しているね。逆の場合もあるんだ」

ボードに【各部隊の人員は任務によって交換や増援もある】と付
け加えられる。

「……………その点についてはどの支部も同じですよ」

「ふふ、外見は子供でも、中身はもう大人みたいだねえ」

博士はレッドイーターを褒めるが、レッドイーターの方は、む、
と口を閉じてしまう。

「……………別に大人なんか、なりたくないですよ」

「はは、っと、もう時間だね。じゃ、今日の講義は終了」

「ありがとうございますと言いつつ部屋から出て行くレッドイーター
はお腹が空いてしかたがなかった……」

「……………今日の討伐対象はザイコート墮天（炎）かな。墮天
使殻が欲しいし」

と同時に、神機の強化用素材集めのスケジュールにも抜かりは無
い。可愛らしい子供だった。

第十五話、スターゲイザー榊先生（後書き）

地震の被害、僕の場合

- 1、テスト期間が延びた
- 2、水戸のひいお婆ちゃんとお爺ちゃんとお婆ちゃんとお爺ちゃん、師匠（叔父）が心配なのに、電話が使えない。従妹は……まあ生きているでしょう。

特にそれ以外は被害が無かったでござる

第十六話、緊急事態、VS<グボロ・グボロ>1

7月17日

「エントランス」

16:40

『ブーーーーー!!ブーーーーー!!緊急連絡、アラガミが第三部隊を突破!!アナグラにいる神機使いは全員緊急出撃してください!!繰り返します、アラガミが第三………』

第三部隊が突破された、つまり『エイジス島』へのアラガミの進撃を許してしまった、という事になる。

「……………ちい!!」

「おいおいおい!!今アナグラにいるの俺達だけじゃねえの!?!」

「慌てるな!!行くぞ!!」

レッドイーターが舌打ちだけなのに対し、リンドウはパニックに陥っているが、ツバキがそれを宥めつつ、2人に指示を出す。

「……………オペレーター、敵の情報は?」

レッドイーターは、任務の受付などをしているオペレーターに尋

ねる。

「グボロ・グボロの群れです！！個体数は不明！！」

「……………分かりました」

そい言い、レッドイーターは、走って自室に置いてある神機を取りに行く。

「技術開発部！！今すぐ私達の神機を持ってきてくれ！！」

『分かりました！！』

ツバキは無線機で神機の手配をする。リンドウに目をやると、落ち着きのある程度取り戻したようだ。

「エイジス島外周部」

17:20

「……………予想はしていましたが、やはり海を泳ぐのに特化しているだけあって速いですね」

リンドウは船、残り2人はヘリに乗り、第三部隊と合流、エイジス島へ向かってくる影を見る。

神機のシリンダーを回し、単発式のレーザーを装填する。

「……………行くぞリンドウ!!」

「了解!!」

「俺達もだ!!第三部隊の名にかけて、絶対に止めるぞ!!」

「了解」「」

ツバキの声に負けなくらいの大きさで、第三部隊の神機使い達は声を上げる。

レッドイーターは神機の銃口を、グボロ・グボロに沿える

「……………ここがお前の墓場だ」

引き金を、引いた。

第十六話、緊急事態、VS<グボロ・グボロ>1（後書き）

すぐに次話投稿します

パーツは

剣身、強化ノコギリ

銃身、レールガン改

装甲、対貫通バツクラー硬
です

第十七話、命の重さ、VS<グボロ・グボロ>2

18:00

「止まれ、止まれよ!!--」

リンドウは、グボロ・グボロに神機を振り下ろす。だが、グボロ・グボロはそれを軽々と弾き、水中から飛び出し、リンドウに襲い掛かる。

「や...っべ!!--」

「伏せるリンドウ!!--」

リンドウはその声に反射的に伏せる。

直後、リンドウの真上を通過した弾丸が、口を大きく開けていたグボロ・グボロの口内に叩き込まれる。

「すまねえ姉上!!--」

怯んでいるグボロ・グボロの口に、ブラッドサージを入れ、横に引き裂く。

「はあ、はあ、たく、何体いるんだ...よ!!--」

リンドウはそのまま、グボロ・グボロの鼻のような砲塔に、全体重を掛けて切りかかる。

これでやっと一体、少しだけ回りを見渡すリンドウは、ある事に気付く。

レッドイーターだ。

「どうしたんだ、レッドイーター」

レッドイーターは、神機も構えずに、ただじっと、何かを見ているようだ。

「レッドイーター!!」

リンドウは大声で呼ぶが、返事は無かった。

「・・・・・・・・」

近接式の神機使いの援護射撃を止め、レッドイーターは、海の方から来る何かを見ていた。

全体的に丸いシルエット、巨大な体、レッドイーターは古い動物
図鑑で見ることがある。

「……………クジラ？」

種類など、レッドイーターには分からないが、1頭だけではあるがそれは間違いなくクジラだった。

アラガミがうるつき回っているこの時代、野生の動物のほとんどが喰われていった。それを見かけるのは、中々稀だろう。

だが忘れてはいけない。今は『アラガミ』と戦闘中である事を。

「……………来…る…な」

レッドイーターは、小さい声で伝えようとするが、たとえクジラに聞こえたとしても、理解できないだろう。

危険を察知できていないのか、クジラは戦闘区域に向かってくる。

「来るな、来るな来るな！！」

アラガミに気付かれたら最後、肉片など一片たりとも残らず、喰われてしまう。

クジラはそのまま戦闘区域に入ってしまった。

グボロ・グボロ数匹が、その巨体に気付く。

「止める」

ご馳走が来たと言わんばかりに、アラガミはクジラに向かって泳ぐ。

精神世界1

白い、どこまでも続くような白い空間で、レッドイーターは立っている。

1人？ いや『2人』いた。目の前の『少年』にレッドイーターは質問する。

「……………君は誰だ」

「俺はお前だ」

少年はそう告げる。

顔、身長、どれもレッドイーターと一致する、まさに瓜二つだ。

だが、両目と髪の色が違った。赤なのだ、真っ赤な血のような赤。

「……………嘘だ!!」

「嘘なんて言っていない、俺はお前、お前は俺なんだよ」

レッドイーターは、少年に掴みかかろうと足に力を入れる。

だが動かない。レッドイーターは足元に目をやる。

「……………なんだよ…」これ」

細く、黒い、無数の『手』が、レッドイーターの両足を掴んでい

た。

「お前はなあ、黙って見ていれば良いんだ…よー!!」

「がっ!?!」

少年は動けないレッドイーターの鳩尾に、拳を叩き込む。

「悪いな、俺はこうでもしないと、『表』に出れないんだ」

意識が朦朧とするレッドイーターに、少年は告げる。

レッドイーターは、鳩尾を手で押さえながら、苦しそうな声で質問する。

「………表…って、なんだ…よ」

「ああ、そうか」

「？」

「お前は『コンゴウ墮天』の時に気絶してたもんなあ？」

少年は顔をレッドイーターに近づける。

「あれを殺ったのは」

「にやあ、と笑い、レッドイーターの耳元で囁く。

「『俺』だ」

そう言い、レッドイーターに指を向ける。

「
やれ」

その言葉が耳に入った直後、レッドイーターは意識を失った。

精神世界1（後書き）

16話の後書きに

レッドイーターの、現在使用中の神機書きました

「大鎌」

その一言と同時に、黒い塵を掴むように手を握り、引きずり出すように腕を動かす。

引きずり終えたレッドイーターの右手には、奇怪な大鎌が握られていた。

黒い柄は鎌らしい長さ、少し太いが握る部分はクッションに手を乗せたように凹み、持ちやすい形になる。

鎌の刃の部分は根元から少し離れ、半透明な金色の光を放つ刃。

柄の先があり、刃の根元に当たる部分は、ザイコートのような細長い赤い目が付いている。

刃の反対側には、小さなひし形の中に目を入れたような物体が5個付いており、その先には、鎌の刃と同じ光を放つ斧があった。

「きひひひ」

レッドイーターは少し笑い、大鎌を一振りする。直後、

「ググオオオオオオオオオオ！？」

鎌から離れた刃が勢い良く射出され、30m以上離れたグボロ・グボロの背ビレを半分に切る。

「うーん、やっぱ近接戦闘の方が確実かな？」

レッドイーターは、よし、と声を上げる。刹那、背ビレを切られたグボロ・グボロとの距離を、赤い軌跡を描きながら、一瞬で詰める。

「くく」

レッドイーターは笑いながら、大鎌を振り、その命を一瞬で刈り取る。

他のグボロ・グボロ達は、レッドイーターを危険な存在と認識したのが、一斉に襲い掛かる。

「ばーか」

レッドイーターは、べー、と舌を出しながら告げる。

「くくくグゴオオオオオオオオオ!?」「」「」

グボロ・グボロ達の腹に、巨木のような物体が当たり、水中から引きずり出される。

「にしし、拘束だよん」

十字架のような物体が空中に大量に現れ、そこから出てくる触手が、グボロ・グボロを拘束する。

「むふふー、今からずっと俺のターンなのだよー!!」

ふざけたような声で、レッドイーターは鎌を構える。

第十八話、もう1人の自分、VSくぐボロ・くボロく3 (後書き)

大鎌は早くて明日挿絵として入れます!!

第十九話、支部長のオーラ

「支部長室」

19:00

「ふむ、簡単に言うところこういう事かね？ 大声で叫んだかと思っただら、彼は、性格が豹変し、奇怪な大鎌を振るい、アラガミを殲滅した、と？」

シクザール支部長は、人を殺せるくらいの、冷たくて鋭いオーラを発しながら、今回のエイジス防衛に就いていた神機使い達に訊ねる。

対してツバキだけは、いつも通りに返事をする。

「はい、その通りです」

「そうか」

支部長は目を閉じながら、静かに返事をする。

そして、再び目を開け、口を動かす。

「レッドイーターの調子はどうだい？」

「え、えと」

「現在、40 弱の熱を出している為、病室に寝かせています」

報告しようとするが口が動かないリンドウの変わりに、ツバキは支部長にレッドイーターの容態を伝える。

「そうか……、まあいい」

支部長はさっきまで発していたオーラを消し、柔和な笑みを作る。

「今日のご苦労だった。各自、部屋で休んでくれ」

「了解しました」

ツバキは敬礼をし、退出する。

「第三部隊の諸君、今回の事は他言無用で頼むよ」

「……りよ、了解」「」「」

第三部隊の神機使い達も返事をする。そしてそれぞれ足を動かし、退出する。

それと入れ替わるように、サカキ博士が部屋に入ってくる。

神機使い達は一瞬目を丸くしたが、疲れが溜まっているせいか、再び足を動かし自室に戻っていく。

「……やっと来たか」

「ごめんごめん、ちょっと……ねえ？」

「そう言い、2人だけになったのを確認する。」

「うん、じゃあ早く渡してもらえるかい？」

「そう焦るな」

支部長は、机の上に置いてあるノートパソコンから、1枚のディスクを取り出す。

「これが、今回の戦闘が録画されたディスクだよ」

「ありがとう」

「そう言い、ひょい、と博士はディスクを取る。」

「君も気になるのか？」

「興味深い事は調べたいものじゃない？」

「ふっ、やっぱり勝てないなあ」

支部長は微笑んだ、これはいつもとは違う、博士のような特別な存在にのみ見せる笑みだ。

「へりに極秘裏にカメラを設置するのは、君くらいじゃない？」

「本来は、レッドイーターの『いつも通り』の戦闘を撮るつもりだったんだが」

「それが『予想外』の戦闘になった……ふふ」

「それは、本部にも送っておく。そうでもしないと五月蠅いからな」

「じゃ、私はこれで失礼するよ」

そう言い、さっさと博士は出て行った。

「病室」

19:20

レッドイーターは、ベッドに寝かされていた、意識があるとは思えない。

身体中から嫌な汗を流し、時節、苦しそうな声を漏らす。

ゴッドイーターはオラクル細胞の新陳代謝もあり、風邪や病気を引く事は物凄く稀なのだが、引かない訳ではない。

しかし、レッドイーターの場合、表面上は風邪に見えても、実際は

別のものと戦っている訳だが……。

第十九話、支部長のオーラ（後書き）

えと、この日本の状況下、訊くのもあれなんですけど。

今の連載中の作品を、今の通り章形式でラストまで持っていくか、シリーズに分けるか迷っています。

どっちにした方が良いですかね？

そして話変わってリアル、原発話題。

……メルトダウンだけは勘弁だよ（泣）

精神世界2（前書き）

十八話少し変えました

そういえば、あの大鎌の名前どうしましょう？

ちょっと案のある方はどんどん言ってください
もしかしたら選ぶかもしれないので。

精神世界2

「……………」

「ぶーぶー、親御さん、取り合えず解放してくれない？」

レッドイーターは白い空間から出現した黒い手で、少年を拘束していた。

「……………へえ、この世界、精神力が力を左右するんですか」

「はーなーせー!」

ジタバタする少年に、レッドイーターは質問する。

「……………あの大鎌何？」

「はぁ？決まってるんだろ？ オラクル細胞だよ！分かってんだろ？ てか、お前今使ってるじゃん！」

「……………それは分かっている、僕が気にしているのは……………」

一拍置いて、レッドイーターは鋭い目つきで少年を睨む。

「どうしてあの鎌は、『人』を殺すのに特化しているんだ？」

「おーやま、バレちったか」

少年は相変わらずふざけた様子だった。レッドイーターは少年が使用した大鎌を作りだす。

「…………お前は人を殺すのに何を感じている？」

「うーん、簡単に言うとお、快樂？」

レッドイーターは鎌を一振りして少年の胸を真っ二つに切る。簡単に切られた体から、血が溢れ出る。

だが、切れていたのはほんの一瞬で、すぐに元通りになった。

「…………もつぱら『殺人鬼』ってところか」

「くひひ、俺はお前に足りない部分を持つ人格だからねえ」

「…………共通点も多々あるようだが？」

レッドイーターは、大鎌の刃を少年の首に押し付けながら続ける。

「…………それに、お前の人格が変わったからって、僕の体がどうしてあそこまで動く？」

「本当に無知ですなあ。いいか、あれは簡単に言えば、『潜在能力の開放Lv2』だ」

「…………お前はあの体に慣れているようだが？」

「言つたる？俺はお前の『足りない部分』を持っているって」

「・・・・・・・・・・Lv2つてなんだ？」

「あれはLv5までありましてね、俺もLv3以上出すにはもつと成長しないと無理」

「・・・・・・・・・・体の成長に関係があるのか？」

「体の成長に合わせて、体内のオラクル細胞が強力になるんだよ」

「・・・・・・・・・・この、『オラクル操作能力』もその副産物に過ぎないのか？」

「勝手に名前決めちゃってるし……。まあ、副産物じゃなくて、必要だから備わっているんだけど」

「・・・・・・・・・・Lvとの関係は？」

「Lv3以上から、自由度が上がる。」

「・・・・・・・・・・つまり、僕もお前も、Lvを除けば、能力は同等なのか」

「お前まだLv2使いこなせていないじゃん」

「・・・・・・・・・・いや、お前の人格データを調べていく内に分かったよ」

レッドイーターはゆっくりと目を閉じる。

「……………自分の体の中にある、オラクル細胞を感じれば良いんだ」

その言葉を口にしてしている間に、レッドイーターの髪は赤く染まっ
ていく。

「……………づぐ」

片膝を着きながら、レッドイーターは目を開ける。

真っ赤に染まっている、その目と髪は、目の前の少年と区別を付
けられない程酷似していた。

「無理しちゃってえ」

「……………慣れれば使いこなせるはずだ」

「まあ、頑張ればあ？」

「……………最後に1つ良いかい？」

「なんだ？お袋の話以外なら答えるぜ？」

「……………それも気になるが、ちよっとね」

「まあいい。で、何？」

「……………僕は、適合試験の時に、好きな色は赤、って答えた。

でも今は何故か好きでも嫌いでもないんだ」

「ああ、それ多分俺が原因だな」

少年は、にしし、と笑いながら口を開ける。

「適合試験のちょっと後まで、俺達は少し同化してたんだと思うよ？」

「……………そりゃどうも」

「ふわぁああぁ」

少年は眠そうな顔で欠伸する。

「もう俺寝るわー……ZZZZ」

「……………」

レッドイーターは、初めて「ゼットゼットゼット」と言いながら寝る人を見たかもしれない。

そんな事を考えている間に、視界が、白い光に包まれた。

第二十話、極東の日常

7月19日

「エントランス」

8：30

「ふわぁああぁ、っと」

リンドウは腕をぐるぐる回しながら欠伸をする。実に眠たそうな顔だ。

第三部隊と兩宮姉弟は、一昨日の任務の疲れを癒す為に昨日は任務に出なかった。そういう訳で体力があり余っているリンドウは、とりあえず受け付けで今日出されている任務を見ることにする。

「あー、またボルグ・カムラン出たのか」

しばしその依頼書を見つめるが、リンドウも馬鹿じゃない、あの戦闘力に対し自分1人で行っても苦戦は免れないのは、6月2日の戦闘で良く知っている。

「そっいや、あいつももう目覚ましたかな？」

あの日の戦闘を思い出している間に、現在大熱出して倒れているレッドイーターを思い出す。

ちなみに一昨日、いきなり意識を失って落下したレッドイーターは、海で溺れそうになっていたが、リンドウが海に飛び込んで無事救出された、というのを、レッドイーターは知らない訳であるが…。

「コクーンメイデンが空母の残骸に複数いるのを確認。オラクル発電の為にオラクル細胞が足りないので回収求める……うん、これにしよう」

オラクル発電とは、アナグラに備わっている発電方法の一つで、オラクル技術により大量に発電できる。……と、細かい所はともかく、リンドウは、サカキ博士の講義を思い出す。ちなみに、他の発電方法は地熱発電だ。

「リンドウ、出撃か？」

「あ、ゲンのおっちゃん！」

背後から聞こえてくる声に、リンドウは笑顔で返事をする。

百田^{ももた}・ゲン

アラガミ発生前から、日本に存在した自衛隊出身のピストル型神機を使う神機使いだ。なんでも自分から志願したらしい。軍出身なのもあり、体術はずば抜けて高い。

「おっちゃんも行くか？」

「ああ、そうさせてもらおうよ」

「じゃ、オペレーター、同行者に百田ゲンって入れて」

「わかりました」

「病室」

9:00

「むにゃ、……あ、そうか」

やっと熱が下がり、ぼんやりする頭（アホ毛付き）でレッドイーターはどうにか状況を判断する。

「……あの野郎、……絶対に次は現させない」

手を使ってアホ毛を直しつつ、レッドイーターはボソリと一人（？）の不幸をここに誓う。

「……先生は出払っているのか？ まあいいや」

ベッドから起き上がり、フラフラと危ない足取りでドアを開いて部屋を出る。

神機は大丈夫だろうか、Lv2になる練習をしなくては、……とやる事が多すぎて頭が痛くなる。

アナグラの大部分が地下に建造されているのもあり、気温の変化が少ないのが、今のレッドイーターには少しつらい。

結果、エレベーターで屋上に行くか、外部居住区に出るかという選択肢が出る。

人が多い外部居住区に出るのは、レッドイーターはちょっと引くため、屋上に出ることにする。

「……………はぁ」

ボタンを押し、エレベーターが来るのを待つレッドイーターは、ついたため息をついてしまう。

(……………任務以外で関係を作るなんて、まっぴらだ)

レッドイーターは、リンドウ達と一緒に食事をしていたりするが、あくまで『任務』の為だ。

(……………死ぬのだって、バカバカしい)

死んだって、ゲームたくりセットなんてできない。死んだって、自分は得をしない。これは、本部に居たところにレッドイーターが学んだことだ。

(……………なのに)

その考えを覆す事を、レッドイーターはしてしまった。

(……………なんで、あの時自分が囿になって、リンドウさん達を逃がしたんだろう)

エレベーターに乗り、屋上に向かうボタンを押しながら、『もう一人の自分』が初めてでてきた、コンゴウ討伐（正確にはその墮天種）の任務を思い出す。

「……………はあ」

再びため息。エレベーターはすぐに上がり屋上へとレッドイーターを送る。

「屋上」

9：05

そこには、銀色の髪と、浅黒い肌を持った、『化け物』ソーマ・シクザールがいた。

ソーマは、屋上で一人、仰向けに寝ながら、風を肌感じていた。

「…悪くねえ」

ボソリと感想を漏らす。が、耳にエレベーターの到着音が入ってきた為、心で舌打ちをしながら起き上がる。

「…お前」

「……………」

エレベーターから出てきたのは、4月の終わりに出会った少年、
もといレッドライターだった。

レッドライターは、ソーマを無視して、とりあえず深呼吸をする。

そんな行動を無視して、ソーマはレッドライターに変な感じを覚
えた。

「…お前、どうして俺と同じ気配を放っている？」

唐突に、ソーマはレッドライターを睨みながら、訊ねる。

「……………ふん」

「ちっ」

ソーマはそっぽを向いたレッドライターに対し、舌打ちをする。

だが舌打ちをしていたのは、ソーマだけでなくレッドライターも
同じだった。

(……………人がいないなら、Lv2の練習でもしようと思っ
ていたのに)

仕方がないので、支部長に任務を貰ってこようと、役員区画のボ
タンを押し、レッドライターはその場を去った。

「……………はあ」

三度^{みたひ}ため息をつきながら。

第二十話、極東の日常（後書き）

外伝で、大鎌（まだ名前の募集中）以外にも、双剣（作者は、MHに被るから双刀にしたかった）らしき物が出てきました。

第二十一話、練習成果（前書き）

前の話から1ヶ月半くらい、L V 2の練習ばかりなので、そちらは外伝にて載せますね。

第二十一話、練習成果

9月4日

「愚者の空母」

14:50

「……………でかくない？」

レッドイーターは双眼鏡を覗きながら、ついそんな感想を漏らす。

ちなみに、雨宮姉弟は別の任務の為、同行者はいない。

「……………あ、ミサイル放った」

さつきからレッドイーターは何を見ているか、と言つと。

「……………<クアドリガ>ってアラガミだよね？」

今日の朝、極東にパターンの合わないコアの信号をキャッチした。と、諜報班から、緊急のミッションを用意された挙句、今アナグラに他の神機使い居ないから1人で行け、と支部長から命令されたので、渋々任務に出たら、最近本部が公式発表した新種のアラガミ<クアドリガ>だった。というのが今回の流れ。

諜報班がどうしてアラガミを探知できているか、と言つと、アラガミが発している特殊な『パルス』を機械でキャッチしているからだ。

だが、精度は微妙なので、たまに……、いや、よくアラガミ防壁付近まで接近を許してしまう。

と、サカキ博士が講義で言っていた事をレッドイーターは思い出す。

話は戻るが、クアドリガを発見したレッドイーターは、見つかる前にさっさと引き返し、ターミナルで神機の兵装を整えてから、再び出撃して現在に至る。

弱点属性は氷属性らしい、ターミナルで裏サイトにアクセスしたら載っていたので、最近やっと作れた銃身、『アルバトロス』を使ってみることにした。氷属性のバレット射出力が特化した、ファルコンの形をしたまま強化された銃身だ。

「……情報が無いよりマシだね？」

独り言を言いながら、双眼鏡から目を離し、神機のシリンダーを回し、氷属性のバレットを装填する。

「……腹からミサイル撃ちだすなんて……、アラガミが無機物を完全に再現している証拠だよ……」

ボルグ・カムランやコンゴウといったアラガミの外殻が、無機物に近い事はだれもが知っていた。しかし、本当に無機物を再現している、という証拠が無いため研究が進められていた。

恐らく、いや絶対に、クアドリガは強力な火力を持っているはず。

ミサイルも、前面装甲（？）以外からも撃つ可能性だってある。

「……………なら、L V 2を実戦投入だ」

そう言い、レッドイーターは目を瞑る。

この1ヶ月半、ただアラガミを殺しているだけでは無かった。人目が通らぬ所で、毎日毎日練習をしたのだ。

体中を流れるオラクル細胞を感じる。

オラクル細胞にバーストモード以上の活性化をさせる。

それに、体が反応するように、髪が赤く染まる。

「……………ふう」

瞑っていた目を開く。変色した真っ赤な瞳は、全てを射抜くような鋭さを放っている。

「……………まだ完璧じゃないけど、行ける！」

右手を力強く握り締め、自身の戦闘力が上昇したことを実感する。

「？」

神機に違和感がある。そういえば神機を持ちながらL V 2になった事が無かったな、……と、レッドイーターは今更ながら思った。

神機も、レッドイーターや、レッドイーターの適合神機のコア、

アーティフィシャルCNSと少し違うが、もともと黒色（変形時に触手を出したり、捕喰形態時のメインユニット）だった部分が、黒味を帯びているが、赤くなっていた。

神機も強くなるのかな？、と、正直な感想をレッドイーターは心の底で呟いた。

（ぐうおおおおお！？ 耳があー！！ 俺の耳があー！！）

「……………どうした？」

声が聞こえたり聞こえなかったりのもう1人のレッドイーターは、いきなりレッドイーターに訴えるような声色で絶叫する。

ちなみに、耳から聞こえる訳ではないので、レッドイーターの頭に直接響いてくる。レッドイーターは頭がクラクラした。

（頼む！今すぐLv2解け！！）

（……………何様？そして何故？）

突っ込みながら力を抜くように息を吐く。そうするとLv2の状態から、いつもの黒い瞳と髪に戻った。

もう1人の彼は、息を切らしながら、レッドイーターを精神世界へ引きずり込んだ。

視界が白い光に包まれている間、レッドイーターは、Lv2の練習はもつと頑張らなくては、……と、状況を無視して心に誓った。

第二十一話、練習成果（後書き）

明日で大鎌の案の募集終了ですよーw

精神世界3 (前書き)

精神世界では、少年は、レッドイーター (裏) と表記します

精神世界3

「……………よし、まずは腹に力入れる馬鹿野郎」

「なんで!?!」

白い空間の中、レッドイーターはいかにも不機嫌そうな顔で、少年（レッドイーター 裏）だけを見つめる。

対して、レッドイーター（裏）は、頬をつつすらと赤く染め、もじもじといった感じに口を開く。

「や、やだなあ、そんなにジロジロ見るなよ」（ブチイ!!!）ゴフォー!?!」

ノーモーションで放たれる蹴り（オラクル操作能力で、鎧のようなブーツ付き）は、レッドイーター（裏）の鳩尾に吸い込まれるように叩き込まれる。

「ゲホ!、ゴフ!、アバス!!!」

そして、拳もオラクル操作能力で、とにかく硬い物で包んだレッドイーターは、顔面、鳩尾、急所（男の象徴）の順で高速で殴る。

いくら常時Lv2で身体能力全般が強化されていても、これは痛かったのか、レッドイーター（裏）はピクピクと悶絶する。

「（ゴリイ）……………さっさと用件話せ」

悶絶するレッドイーター（裏）の頭に右足を乗つけたまま、レッドイーターは大鎌を作り出し、レッドイーター（裏）の首筋に刃を当てる。

「えっと、その……、なんていうか」

「……お母さん関連？」

「（ギクリ） そそそ、そんなことないですよ？」

「……まあいい、僕もあまり知りたいたと思わないし」

レッドイーターは母について、本部の人間全員を拷問してでも吐かせようと企んでいたが、正直知ったところで何になる？ と思いつ断念した事がある。

今レッドイーター（裏）から吐かせても構わないが、この自分と同じ体をした少年の口から出てくる真実に、レッドイーターは耐えられないと直感した。

「そ、そうか！ じゃあとりあえず足上げてくれない？」

「（グググググ！）……え？ なんか言いました？」

さらに足に力を入れると、レッドイーター（裏）の悲鳴しか返ってこなかった。

「じゃ、じゃあ話題変えようー！」

「……うん、めんどくさい」

「まだ何も言ってるねえ！」

子供みたいにピーチクパーチク騒いでいるレッドイーター（裏）に、レッドイーターはしょうがないな、といった感じに聞くことにする。

「その大鎌さ、俺のお気に入りだからさ、なんかそれらしい名前付けてくれない？」

「えー」

「お前聞くの！？聞かないの！？」

「………見て、あそこに日本刀が落ちてるよ」

「話の逸らし方が雑！！」

レッドイーターは少し遠い（10m前後）ところに刀を作り、指を指す。当然、レッドイーター（裏）は頭を動かせないで見れないが。

足元で暴れるレッドイーター（裏）が鬱陶しいので、頭を踏みつけている右足に全体重を掛け、残った左足で男の象徴を蹴る。するとすぐに大人しくなった。

「と、とりあえず、名前決めたら出してやるから、な？」

「お前気絶させれば済む話だろう？」

「……………キルサイズで良いか？」

「おお、俺と相性良さげの名前だな！」

相変わらず、年相応の子供らしい笑顔の中に悪質なものを含んだような笑顔を、レッドイーター（裏）は浮かべる。

「……………いいからさっさとここから出せ」

「うん、了解だよん」

パチン、と指を鳴らすと、レッドイーターの視界が白い光に包まれていく。

「あ、神機持ちながらLv2になるなよ？」

いつもとは違い、真剣な顔をしたレッドイーター（裏）に、正直レッドイーターは驚いた。

精神世界3（後書き）

30000アクセス及び、40000ユニークありがとうございました！

大鎌の名前は、くきわかめ先生案の『キルサイズ』に決定いたしました！

第二十二話、爆走戦車、VS<クアドリガ>（前書き）

シユウ師匠のソロ戦闘は書けませんでした、それに変わってクアドリガにぶつけていきますよw

パソコン使用時間が切れた為、今日は誤字を直せそうにないです。
すいません（泣）
PSPより

4:00

お母さんのアカウント借りましたw

第二十二話、爆走戦車、VS<クアドリガ>

『グワアアアアアアアア』

ミサイルによって仕留めた別のアラガミの死体を喰い終えたクアドリガは、鉄を擦り合わせるようだが声を混ぜたような音を出し、前進する。

レッドイーター（裏）から開放され、任務に集中しているレッドイーターは、クアドリガの真後ろを歩いていた。

クアドリガの全体的に茶色い巨体は近ければ近いほど、体中を外殻ではなく装甲が包んでいる事が分かる。

前足はキャタピラのようなもので包まれ、後ろ足は鉄で完全に覆っている。

レッドイーターが遠くで見ている時にミサイルを撃ち出した腹は、黒い装甲で包まれている。

背中から生えた一对の箱状の物体は、まるで何かを隠しているような感じだった。

「……………本当に体のほとんどが無機物でできているな」

クアドリガは、視覚より聴覚が発達しているとサイトに載っていたが、対貫通バックラー硬のスキル、消音のおかげで後ろを尾行していても気づかれていない。

神機の銃口をクアドリガの腹に当たらないようギリギリの距離で構える。

「……………まずは腹」

引き金を引き、その腹に氷属性のレーザーを放った。それは、この戦いの始める一撃を意味した。

『グワアアアアアアアン！』

クアドリガは即座に反応するが、レッドイーターはクアドリガがこちらを向く前に距離をとる。

ミサイルを出す装甲は前面だけ茶色い、恐らくそこを開閉してミサイルを放つ、と簡単に予想できた。

その前面装甲の真上に存在するのは、まるで人の骸骨の上半身をくっ付けたような擬態だ。

両腕には扇状に広がる物体に、背中より少し高い位置には、レーダーのような機械的なものが付いていた。

クアドリガは背中に付いている箱のような物を開く。

「……………何がくる？」

いつでも回避できるように、神機を変形させ、強化ノコギリを構成する。

その僅かな時間だけで十分だった。

「はあああああああああ！！」

地面を蹴り、間合いをすぐに詰めたレッドイーターは、神機を構える。

そして放たれた斬撃は、厚い装甲で包まれている前面装甲に直撃する。この程度で怯む筈が無いので、レッドイーターは続けて叩き切り、最後にコンボ捕喰を決める。

「……………もらった！」

そして体を回転させ、クアドリガの右前足に、強化ノコギリの刃を強引に捻じ込む。

「うおおおおおおおおお！！」

力の限り神機を振り、キャタピラに包まれた足を切るうとする。しかし、それを許さないクアドリガは、前足を上げて、神機ごとレッドイーターを投げ飛ばす。

背中にやわらかい物体を作り、レッドイーターはそれで衝撃を吸収する。

捕喰に成功したことにより、バーストモードとなっているレッドイーターは、クアドリガの右側面を取り、先ほど攻撃した右前足を、今度は反対側から切る。

糸が切れるように右前足は切断され、クアドリガはバランスを崩

「・・・・・・・・甘い」

クアドリガとレッドイーターの距離は15メートル程。

レッドイーターは『クアドリガの』結合崩壊したオラクル細胞込みで、10m位で太さが半径4m程の巨木を目の前に発生させる。

それは突進してくるクアドリガを迎え撃つかのように力強く立ち、衝突する。

いとも簡単に、と言えば嘘だが、巨木はへし折られ、黒い塵になり空気に溶けていく。

だが、巨木の先にレッドイーターはいない。クアドリガは自慢の聴覚で探そうとするが、レッドイーターの消音スキルにより発見できない。

クアドリガは視覚でレッドイーターを探すも、どこにも見当たらない。

そう、地面には、

「はあああああああああああああー!!」

レッドイーターは巨木に隠れながら10mぎりぎりまで踏み台を作り出し、そのまま跳んだレッドイーターは、巨木が折れると同時に空中で赤い板を作り、クアドリガに照準を合わせた銃形態の神機の引き金を何度も引く。

着弾する前に飛び降り、落下しながら変形させて、剣形態にする。

空中から飛来する無数のレーザーは、骸骨の擬態の両手に付いている物体を破壊し、その擬態に強化ノコギリを深く喰い込ませる。

『グワアアアアアアアン!?』

予想外の場所からの攻撃に、クアドリガの体はボロボロになっていた。

容赦などしないレッドイーターは喰い込んでいた神機に力を込め、擬態を切り飛ばす。それは黒い塵となって空気に溶けていった。

『グ…ワアアアアアアアン!』

最後の力を振り絞り、クアドリガは空高く跳ぶ。真下にいるレッドイーターの体など、この質量に潰されれば肉塊すら残らないだろう。

だが、レッドイーターは逃げない。むしろ迎え撃つつもりだ。身を低くし神機を右腰付近に構える。

クアドリガが跳んで、落ちてくるまでの1秒。それは両者とも最後の1撃だ。

『グワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアン!』

「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

落下してくるクアドリガに、レッドイーターは神機を突き出す。

と同時に、レッドイーターの周りから刺が現れ、空中でクアドリガを串刺しにする。

『グ…ワアア…アン！？』

串刺しのままのクアドリガの腹に、神機を喰い込ませ、捕喰形態でコアを抽出する。

「……………ミッションコンプリート」

レッドイーターはクアドリガからゆっくりと神機を引き抜き、その場から去った。

第二十二話、爆走戦車、VS<クアドリガ>（後書き）

改変しましたww

第二十三話、変え時（前書き）

直せたかな？

第二十三話、変え時

「支部長室」

17:00

「今日はここまで足を運んでくれたことに感謝するよ」

シックザール支部長は、目の前で立っている子供、レッドイーターを見る。レッドイーターは興味が無いとでも言いたげな瞳で、支部長の目を見つめる。

「………パターンの、新種を倒した後は博士の部屋に行くと思いました」

「いつもならね。だが今回の任務で嬉しいお知らせがある」

支部長は、腰掛けイスに背中を預けながら、もう一度口を開く。

「君の働きは、本部の方でも話題になっていてね。本部長らに、そろそろ階級を上げてても良いのでは？ って言われたんだよ。ツバキ君の意見を訊いたのだが、彼女は君に指揮官としての才能が有るって言ってる……」

支部長は柔和な笑みを作りながら、机に置いておいた書類を、レッドイーターに渡す。

「君は部隊長レベルの活躍をしている、これからも期待しているよ」

支部長の言葉に返事をしないまま、レッドイーターは書類に目を通す。

「……………上等兵通り越して曹長に上がる神機使いなんて、聞いた事ありません」

レッドイーターは不満げに声を出す。

神機使いの人数が少ないこともあり、曹長以上の神機使いは1部隊の指揮をする事が極めて多い。新人の実地演習も手伝わなければいけないのだ。手を抜くつもりは無いが、同時にやる気も湧き出てこない。

そんなレッドイーターの下がっていくテンションを無視して、支部長は口を開く。

「それだけ、周りは君を認めているんだよ」

「……………『戦力』として、でしょう?」

レッドイーターは、支部長の笑っていない瞳を睨みながら、これにて失礼します、と告げ、部屋から出て行った。

「エントランス」

17:10

「……………で、なんですか？」

「レドイーターの階級上がったって姉上が言っていたから、じゃあ服でも買ってあげようかなあ、ってな」

リンドウは、へへへ、と笑いながらターミナルを操作する。

支部長室とレドイーターの部屋は同じ区画の為、そんなに歩く必要は無かった。

だが自室に入る前に、帰還していたリンドウに捕まり、現在、エントランスまで連れて行かれた次第である。

「ほれ、欲しいのあるか？」

服を購入するためのページを開きながら、リンドウはターミナルの操作を後ろで立っていたレドイーターと交換する。

（え、マジマジ！？　じゃあちよつと俺に選ばせて！）

（……………つざい）

（よし決まったー！！）

（……………早いよ、僕まだお前に決定権譲ってないよ）

レドイーター（表）は、脳に直接響くレドイーター（裏）に突っ込む。だが、レドイーター（裏）はそんな事は無視するので

止める事は不可能だ。

(そう、それぞれ)

(……………それぞれって言われて理解できるとでも?)

とか言いつつちゃんと理解しているレッドイーター(表)は、リンドウに裏の要望を言っておく。

「……………リンドウさん」

「決まったか?」

「……………バリエーションモッズ上と、ワイルドモッズ下でお願いします。」

「あいよー」

リンドウは再びターミナルを操作し、注文をする。

「明日には出来上がるだってさ」

(ひゃほいー)

「(うぜえ)……………ありがとうございます」

リンドウはレッドイーターの頭をがしがしと撫でながら、笑顔で「じゃあな、と言って立ち去る。」

レッドイーター(表)はそれを見送りつつ、レッドイーター(裏)

に指摘をする。

(・・・お前ちょっとは黙れないの?)

(俺は眠りたいときに眠って、暇な時に起きる性格なんで)

(・・・自分勝手すぎる)

頭痛に悩まれていそうな顔で、レッドイーターのテンションは支部長室の件で元から低いのに(右肩下りだった……)。

第二十三話、変え時（後書き）

さて、ちょっと心の中である設定を読者様達に伝えたいと思います
ゴッドイーター開始の2071年、仮に主人公が入隊したのが1月
1日なら？というわけでこの場を借りて書いていきます。

ゴッドイーターやってない人は、ネタバレを含むのであまり読むこ
とを薦めません。

あくまで仮です。主人公は男です

1月1日～1月10日、訓練

1月11日～16日、リンドウ～サクヤ～ソーマ（&エリック）

1月12～15日、リンドウらと簡単なミッションで訓練

1月16日、コウタと一緒にコンゴウ討伐

～1月24日まで自分に合った任務

1月25日、アリサ（ぶっちゃん大好きです）配属

1月26日～2月12日、時々アリサ込みで任務。

2月13日、リンドウMIA、アリサ精神的に危うい

2月14～20日、リンドウ搜索

2月21日、搜索中止

2月22日、ツバキとサクヤの会話

3月23日～27日、主人公はアリサの精神回復に貢献

3月28日、アリサとりあえず復活

3月29日～4月1日、アリサと一緒に任務、アリサ完全に復活（
デレ期突入）

4月2日～12日、普通に任務

4月13日、主人公はサリエル討伐と同時にリーダーになる

4月14日～19日、普通に任務

4月20日、シオを捕獲（？）

4月21～27日、普通に任務

4月28、主人公とシオとソーマでシユウ墮天

4月29日～5月12日、普通に任務

5月13、特務でウロヴオロス討伐

5月14～27日、プリティヴィ・マータ討伐込みで任務

- 5月28、デイヤウス・ピター討伐、リンドウの神機と腕輪回収
- 5月29～6月2日、普通に任務
- 6月3日、シオに異変
- 6月4日、シオ回収
- 6月5日～8日、シオの食事前のコアの回収
- 6月9日、サクヤとアリサはエイジスに進入
- 6月10～12日、シオの食事前のコアの回収
- 6月13日、シオが浚われる
- 6月14日、第一部隊全員でエイジス突入、アルダノーヴァ討伐、感動のエンディング。ゴッドイーター終了
- 7月21日～23日、大車ダイゴの八つ当たり、本人死亡
- 9月15日、ハンニバルと戦闘、主人公戦闘不能
- 9月16日、レン参戦
- 9月17～25日、アルダノーヴァ復活&討伐込みで任務
- 9月26日、博士が搜索任務を再開と宣言

9月27～10月13日、第一部隊除く全員で搜索開始

10月14日、黒いハンニバルと主人公がエイジスで戦闘、リンドウ帰還。バースト終了

11月28日、フレンドシップ・デイ FSD

12月14日、ガーランドが支部長に就任

12月18日、アリサ達ピンチ、だが主人公復活

ソーマのアルダノーヴァによりフェンリルは捕喰されるが、アルダノーヴァは暴走、主人公により喰われるがソーマは救出される

同日、ガーランドの野望乙、漫画終了

12月25日、リンドウとサクヤの子供、レン誕生

12月27日、行方不明のリンドウ帰還

以上です

あとがきの方が長いかな？

第二十四話、遂に届いた服（前書き）

この作品は、前回のあとがき基準です W W

第二十四話、遂に届いた服

9月5日

「役員区画通路」

10:00

「よっくらせつと」

リンドウはレッドイーターの部屋の前に開発班からの預かり物が入ったダンボールを置く。

そのままリンドウはドアをノックせずに開ける。どうやらレッドイーターは神機の整備中みたいだ。

「レッドイーター、服できたってよー」

リンドウは遠くに聞こえるように声を出す。すると整備室のドアが開かれ、F武装上下レッドを着た少年、レッドイーターが顔を出す。

「……………そこに置いといて貰って結構ですよ」

「ん、了解」

ちなみに、昨日レッドイーターが曹長になった事で、上司から部下にリンドウはなっていたりする。だがレッドイーターは、階級より経験が大事と言っていつも通りの対応を望んでいた。

「そうそう、レッドイーターさんや、今日新しい新人が入るんだと」
「……………そうですか」

どうでもよさそうな顔でレッドイーターは返事をする。だが、リンドウは茶目つ気たっぷりの顔で告げる。

「で、その新人をお前の部下にしてくれ、って本部の人が言ってたらしいぞ?」

「……………」

部屋に戻ることにすら忘れ、ただ呆然と立っているレッドイーターの肩に、リンドウは手をやさしく乗せる。

そして笑顔で親指を立てる。

「ガンバ」

「いやあああああああああああああああああああああああああああああ
あ!……!」

レッドイーターは久しぶりに、日常会話で絶叫した。

1時間後

「落ち着いたか？」

「……………へい」

いや全然落ち着いてないよね？ とリンドウは突っ込みたかったが、そこは堪え、よしよしとレッドイーターの頭を撫でる。

「まあそうだよなあ。俺も他人を守りながら戦える自身まだ無いし」
同情ぎみに言うが、リンドウはふとちょっと前、レッドイーターが考え付いた命令を思い出す。

「……………ああ、あれ良いんじゃないかね？」

「？」

レッドイーターの顔の目の前に、リンドウは笑顔で人指し指し薬指の3本を立てる。

「お前が考えた命令だ」

やさしい口調で、リンドウは続ける。

「命令は3つ」

「死ぬな」

「死にそうになったら逃げろ」

「そんで隠れる」

「隙を見つけたらぶっ殺せ」

「……………あつ」

「ありゃ、これじゃ4つか」

失敗失敗、と笑いながらリンドウは、レッドイーターの頭を撫でる。

「……………そっか、それがありましたね」

「お前が考えたのに、忘れるなよお」

レッドイーターは早足で自室に戻る。

正直見ていられない状況になりそうだったので、ドアに鍵をかけた。

「……………さてと」

リンドウが持ってきたダンボールを開く。

中から取り出したのは、新品のバリエーションモッズ上と、ワイルドモッズ下だった。

鏡を取り出し、F武装レッド上下を脱ぎ、新しい服を着てみる。

「……………ちょっとぶかぶか」

リンドウの悲鳴をBGMに、レッドイーターは鏡に映る自分の姿を見る。

リンドウ（現在、悲鳴が途絶えた）が、レッドイーターの体はまだまだ成長するからサイズを少し大きめにしてくれたのは、分らないかもしれない。

リンドウに、心の中で感謝しておく。

「……………さて、ツバキさんもどっか行ったようだし、エントランスへ行くか」

ツバキのヒールが地面を叩きながら離れていくのが耳に入り、ド

アの鍵を開いて、外に出る。

するとレッドイーターは誰かにぶつかり、尻餅をついてしまった。

「……………あう」

「あ、あの大丈夫ですか？」

まだ若い声を出している人間は、雨宮姉弟でも、サクヤでもなかった。

その人物はあわてて右手を差し伸べてくる。

その右手首にはまっている物を、レッドイーターは見逃さない。P53アームドインプラント、レッドイーター以外の神機使いが絶对着けているハーネス、通称『腕輪』。

レッドイーターは顔を上げる。

手を差し伸べてくるのは、160cm位の身長に薄い茶色い髪、緑色の瞳を持ち、新人に支給されるF正式上下カーキで身に包んだ14歳くらいの少年だった。

「……………心配いりません」

「そ、そうですか。あの……………」

レッドイーターは立ち上がり、少年の顔を不思議そうに見る。

「貴方が、その、レッドイーターさんですか？」

第二十四話、遂に届いた服（後書き）

さすがに、まだ旧型の神機使いになって1年じゃ上等兵くらいでしょ、リンドウさん。

対して新世代の神機使いが優遇が良いのは当然。

とりあえず、今日はこんな感じで終了です

さあ、この少年は誰だ！？

第二十五話、新人

「貴方が、その、レッドイーターさんですか？」

レッドイーターは相変わらず、素早くこの状況を把握した。

「……………貴方が、新人さんですか？」

ついさっきまで、自分に用がある人間は、せいぜい雨宮姉弟かサカキ博士に限られてい『た』。

今は1人追加され、その新人は自分の部下になるのだ。馬鹿でも分かる。

「あ、はい。今日入隊した、黒沢タツヤ新兵です」

レッドイーターの目の前にいる少年、タツヤは、緊張こそしているが、ある程度は冷静さを保っている辺り、中々見込みがある神機使いだと、レッドイーターは悟った。

「……………すみません。資料がまだ届いていなかったもので、……………黒沢、タツヤさんで良いんですよね？」

「は、はい」

「……………緊張しなくてもいいですよ」

レッドイーターは自室の鍵を掛けながら、指でタツヤについて来い、と指示をする。

役員区画の通路を歩きながら、レッドイーターは口を開く。

「……………タツヤさんは、もうメデイカルチェックは終わらせましたか？」

「サカキ博士に見てもらいましたけど？」

「……………じゃあ、訓練ですか？　これから」

後ろを歩いているタツヤの顔を、レッドイーターは歩きながら振り返り、見つめる。

何故かタツヤは顔が赤くなっていた。レッドイーターは背中に変な悪寒を感じたので、質問を変える。

「……………もしかして」

「はい？」

「……………タツヤさんは、僕の事『女の子』だと思っている？」

レッドイーターは、男物のモッズ系の服を着ているのに、気づかない訳が無いと思っていた。

女の子、と言われるのを凄く嫌がるレッドイーターは、着てみて都合が良いとも思っていたのだ、間違われたら殴る気も起きない。

「え、女の子…じゃないんですか？」

「エントランス」

11:40

「うっ、ぐす」

「本当に、本当にすいませんでしたあー!!」

「まあまあ、新人君、落ち着け」

順に、レッドイーター、タツヤ、リンドウである。リンドウの顔は殴られた跡があった。

リンドウが、よしよしとレッドイーターの頭を撫でながら、タツヤに注意する。

「タツヤ、レッドイーターの容姿が世界のどの女性、女の子を敵に回しても圧勝するのは、もうしょうがないんだ」

(・・・ぐす、裏よ、聞こえるか?)

リンドウがさらに追い討ちするものだから、レッドイーターは最終手段をとろうと、殺人鬼のレッドイーター裏を呼ぶが。

(……………ZZZ……………)

(……………)

熟睡していた。

レッドイーターは、もう涙を流すのも馬鹿馬鹿しい程、世界に絶望した（アラガミ関係なし）。

「……………ふう、落ち着きませんでした」

「「逆!?!」」

驚く2人は放置。

涙を堪えて、レッドイーターは話を再開する。

「……………タツヤさんの適合神機って、なんです?」

「あ、近接式です」

「……………あ、そう」

自分から話を振っておいて、レッドイーターのテンションは底辺レベルのままだった。

リンドウは、しょうがない、と言った感じの顔で、タツヤに指示をする。

「今のうちに、飯食って、訓練に備えた方が良いぞ?」

「りょ、了解です」

「そう緊張するなって、レッドイーターの部下って事は、俺と姉上

とも組む可能性があるからな」

「わ、分かりました、1秒余裕をください、ふう、できました」

「早くね!？」

首をかしげるタツヤに、リンドウはどうしたもんか、と心の内で
呟きながら、頭を掻く。

色々諦めかけているレッドイーターは、オペレーターの前まで近
づく。

「……………なんか、手ごたえのあるアラガミいますか？」

「そうですね……………、あ、ヴァジュラ6体の群れの駆逐の依頼があり
ますね」

「……………もう、それでいいです」

レッドイーターは、依頼書にサインをしながら、任務開始時刻と、
生息区域を見る。

「……………2:00に嘆きの平原」

「サイン、確認しました、生きて帰ってきてくださいね」

オペレーターの女性が、よしよし、とレッドイーターの頭を撫で
る。

レッドイーターは、可愛がられてるんだらうなあ、と内心そう思

いながら、自室に戻った。

精神世界4

「でさ、でさ、これ見て！」

「……………」

レッドイーターは不機嫌そうな顔で、レッドイーター（裏）が手に持っているものを見る。

「……………双剣、ねえ」

「そう！ 改良の末、殺傷能力が上がっているのだよ！」

さて今回、どうして唐突に精神世界に引きずり込まれたか、と言いつつ。

嘆きの平原でのミッションがへりに乗って移動の任務だったので、アラガミによって喰い散らかされた世界を無表情で見っていたら、レッドイーター（裏）がいきなり起きて、しかも精神世界で見せたい物がある、とレッドイーターの返事も待たずに引きずり込んだ次第である。

レッドイーター（裏）は、胸を張って双剣の特徴を継げる。

「1つ1つの目を、キルサイズみたいなひし形で囲んで、刃の部分も同じようにひし形の先つちよに繋がっているんだ！ それによるリーチの上昇に加え、ひし形の部分を微振動させることで殺傷能力を大幅に上昇させる事にも成功だ！」

「……………暇そうだな」

「暇とは何だ！ 俺は俺で武器の改良を」

「暇なんだね？」

「すみません」

レッドイーター（裏）は簡単に押し切られた。

実はレッドイーター、アラガミを殺し易くしてくれているのは感謝していたりする。

でも、なんか物足りない気がするので指摘する。

「……………お前らしさを出す改造案がありますよ？」

「え、何々？」

「……………剣、と言うより、鉤爪みたいな形の方が、殺し易いと思うな」

「それ、採用！！」

馬鹿だな、とレッドイーターは言いたかったが、面白いので観察する。

「えーと、剣をちよつとづつ、曲げながら引き伸ばして…」

自分より子供らしいじゃないか、とレッドイーター思ったが、言

葉に出すのは自分のタイプじゃないので却下。

代わりに、別の話題を出しておく。

「……………名前とか、そういうの決めていないの？」

「ルナティック・ツイン」

レドイーター（裏）は即答した。

へー、とレドイーターは観察しながら声を上げているが、先程の単語は実にお前らしい、と内心褒めていた。

「出来たぜ！」

「……………」

早い、とツツコム前に、ルナティック・ツインの形状を見る。

斬ることを前提としていた剣は、鉤爪のように曲がり、切り裂くことや、決る事が可能になっていた。

「……………中々良いじゃないか」

「えへへ、ま、お前が人を褒めるのも、珍しいがな」

レドイーター（裏）は、双剣、ルナティック・ツインを手放す。するとルナティック・ツインは空気に溶けるようにして消えていった。

「……………次の戦闘で、使えるタイミングがあるなら使っよ」

「おう、そうしてくれ」

「……………ああ、あと、」

レッドイーターは、レッドイーター（裏）に近寄り、掌に黒い塵のような物を纏わせ、

「相手の返事は待て」

レッドイーターは一瞬でLv2になり、レッドイーター（裏）の鳩尾に鉄拳を叩き込んで、その意識（？）を刈り取った。

「……………ふん」

視界が白い光に包まれる中、意識を刈り取られて倒れているレッドイーター（裏）を見下しながら、レッドイーターは機嫌が良さそうな顔で彼の頭を蹴った。

精神世界4（後書き）

くきわかめ先生が出してくれた名前を、大鎌キルサイズと同じように、使わせてもらいました。
ありがとうございます！

第二十六話、タイミンゲ、VS<ヴァジュラ>4

「嘆きの平原」

2:00

ヴァジュラは進化した。

いや、本当は現在の姿がアラガミとしての一種の完成体なのかもしれない。

赤いマントは6枚になり、その体は、一回り、二回り大きくなっていた。

世界中でこの姿のヴァジュラが目撃されてからは、4枚のマントを持った旧ヴァジュラは目撃されなくなってきた。

それでも狩らなくてはいけない、荒ぶる神々を、人間、いや新人類ゴッドイーターが……。

「GO!!」

「……ミッシェンスタート」

作戦開始時間を迎えると同時に、レッドイーターはへりから飛び出して、神機ケースから神機を取り出し、そのまま真下にいるヴァジュラに巨剣を振り下ろす。

内1体が、レッドイーターに突進してきた。

援護射撃のように、もう1体のヴァジユラは大雷球を放つ。

「……甘い」

左手で神機の柄を持ちながら装甲を展開、対貫通バツクラー硬で、大雷球を防ぎ、レッドイーターは呟く。

だが右から突進してくるヴァジユラは、今にもレッドイーターを肉塊に変えようと突っ込んで来る。

だが、その力強い前足は、血を撒き散らしながら空中に舞った。

『キルサイズ』

レッドイーターの右手には、大鎌、キルサイズが握られていた。

高速で振られたその大鎌は、糸も簡単に、ヴァジユラの前足を切断したのだ。

「ふっ！」

もう一振り、だが通常以上の威力を発揮するために、斧に近いパーツが『爆ぜた』。

さらにスピードが上がったキルサイズは、ヴァジユラのマントとマントの間、つまり胴体に喰い込む。

そして、コアを切り裂いた。

確認などせず地面を蹴り、Lv2を解きながら、後方宙返りで空中から落ちてくる神機を掴み取る。

「……………喰らえ」

そして、空中で神機を変形させ、一寸の誤差もない、アルバトロスの銃身から出る正確な射撃が、1体のヴァジュラのマントとマントの間に入っていく。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ヴァジュラは反撃と言わんばかりに、傷を無視して突っ込んでくる。

だが、走っている、ということは、地面を踏むごとに、体重が地面を踏んでいる足に多く掛かる。

レッドイーターは、掌を、突進してくる哀れな獅子に向ける。

直後、掌から巨木が生え、ちょうど前足で地面を踏んでいたヴァジュラを、上から叩き伏せる。

着地と同時に、オンプル（銃形態時に射撃に必要なオラクル細胞を補充する道具）を嚙下したレッドイーターは、再び射撃を再開する。

屍となった仲間を乗り越えて、ヴァジュラ2体が、大きなカーブ

を描きながら、左右から挟みこむような形で突進してくる。

だが、レッドイーターの方が速い。

右からくるヴァジュラに、逆に近づき、剣形態の神機に変形させ、強化ノコギリを振り下ろす。

ヴァジュラの顔面は粉々になり、自分に何が起きたか理解する前に、叩き伏せられる。

後方から迫るヴァジュラに対し、レッドイーターは地面から刺を生やし、動けなくする。

やろうと思えば粉碎できる刺に足を喰ったのが運の尽き。

レッドイーターは神機を投合する。

ヴァジュラは、投合された神機を顔面に喰らい、しかも、押し込むように、レッドイーターは巨木で神機を押しす。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

それが、そのヴァジュラ最後の雄叫びだった。

レッドイーターは巨木を消し、近づいて神機の柄を持ちながら咳く。

「捕喰形態<プレデターフォーム>」

神機から溢れ出てくる黒い何かは、みるみる内にアギトに変わり、

ヴァジュラのコアを、抽出した。

神機に付いている血を拭って、レッドイーターはこの場に転がる
6つの死体を見る。

「……………ふん」

空気に黒い塵となって消えていくヴァジュラを見ながら、つまら
なそうな顔で、レッドイーターは無線機で迎えを要請した。

第二十六話、タイミンゲ、VS<ヴァジュラ>4（後書き）

終わるのが速かったような……

第二十七話、愉快？

「エントランス」

3：00

ざわざわと、仕事を終えた職員達が、神機ケースを片手に持ちながら帰還したレッドイーターを見ながら話をしている。

「聞いた？ あの子、でかいヴァジユラ6体を3、4分で全滅させたって」

「ああ、俺も聞いた。前代未聞だな」

「神機をどう扱ったらああなるんだろう」

と、本部にいた頃のような、レッドイーターを人間と見なししていないような感じではないが、やはり居心地が悪い。

レッドイーターとしては、いい加減慣れた為、この手の雰囲気には溜息一つ漏らさずにエレベーターに向かう。

チーン、と、エレベーター到着の音が鳴り、ドアが開く。

レッドイーターは、さっさと自室に戻ろうとしたが……。

「おい、レッドイーター！」

……と、リンドウが呼ぶ訳で、足を止めて振り返る。

「おつす！ お疲れ！」

「お疲れ様です」

リンドウに続いて、タツヤも話しかける。ちなみにリンドウは、いきなりレッドイーターの頭を撫でた。

「ヴァジユラ6体相手に無傷なんて、やっぱり凄いな！」

「……………攻撃が単調なだけですよ、コンゴウの連携攻撃程の脅威じゃありません」

「でさ、こつこつという任務の報酬って、どれくらい貰えるの？」

「……………10000fcですね」

「うっし、今度そつこつミッションあったら行ってみるか！」

普通、1人でどうこつこつできるレベルでは無いので、ツバキらと一緒にでも出るのだろう。

レッドイーターは、止める気0の顔で、ふーんと鼻を鳴らす。

タツヤを見ると、今の会話に感動したような顔でレッドイーターを見るため、話を変える。

「……………初めて神機を振った感想、どうでしたか？」

基本、最初の訓練は、神機の扱いに慣れることからだ、レッドイ

「ターミたく、ゴッドイーターになる前から訓練している人間は珍しい。」

「えと、ショートブレードが、自分の手にしっくり来ました」

「……………ほう」

これはまた好都合な、とレッドイーターは思ってならなかった。

基本的に、兩宮姉弟としか組まないレッドイーターは、ショートブレードという戦力が無い事に、微妙ながら不満を感じていた。

レッドイーターがバスターブレード、つまり一撃重視なら、ショートブレードは手数での勝負が基本だ。

手数を稼ぐには敵を錯乱させる事が当たり前のため、それをさらに利用して、バスターブレードによる強力な一撃を、何回も連続して出せる。というのが、レッドイーターの考え。

これは物にするべきだ、と思ったレッドイーターは、タツヤに告げる。

「……………明日からは、僕が貴方の教官を務めますよ」

これに関しては、リンドウも同感なのか、うんうん、と首を縦に振る。

加えてレッドイーターは、これは上官命令です、と付け足してお
く。

「は、はい!」

タツヤは、背筋を伸ばして返事をする。レッドイーターとしては、別にそこまでする必要は感じなかったが、ありがたく受け取っておく。

「……………では、今日はこれで」

「おう、また明日!」

リンドウは、手を振り、別れの挨拶をする。

エレベーターに乗り、レッドイーターも軽く手を振りながら、役員区画に向かうボタンを押す。

エレベーターが役員区画に向かう中、レッドイーターは、腕を組みながら目を瞑る。

「……………こんな生活も悪くない……………」

「レッドイーターの部屋」

「……………あまあま」

レッドイーターは子供向けの配給、チョコを表面上は無表情に近くても、美味しそうに食べていた。

写真に収めれば、小動物が美味しそうにチョコを食べている、この時代では稀な光景と言えよう(?)

ある程度口にした所で、水を口にする。

不意に、ドアがプシュン、と音を立てて開いた。

「レッドイーター！、っと、お菓子タイムか、わりいわりい」

「ぶ——————！！！！」

突然の訪問にびっくりして、レッドイーターは水を盛大に吹いてしまった。

「……………うう、って何のようです？ リンドウさん…とツバキさん」

「いやさ、まあ細かい話は姉上に聞いて」

レッドイーターは若干涙目で雨宮姉弟を見る。対してリンドウは頭を掻きながら、ツバキにバトンタッチする。

ツバキは、リンドウの頭をグーで叩きながら(無論本気で)話を

始める。

「いや、簡単な話だ、新人とチームを組む可能性が高くなるなら、ポジションの確認をしておきたいだけだ」

「……………可変式の僕は遊撃ですよね？」

「ああ、それは分かっている。だが、私と愚弟が新人にどう合わせれば良いか、訓練の終わりに言っただけだ」

愚弟、という単語に、リンドウは肩を落とした。もちろん2人は無視しながら話を進める。

「……………了解ですけど」

「そうか、今日はそれだけ言いたかっただけだ」

「……………ほう」

レッドイーターの目つきが鋭くなる。ちなみに彼の視線は、床に広がる水+混じっていたチョコの破片に向けられている。

「……………うう」

少し涙目になりつつも、2人に自分で片付ける、と言い、雑巾で拭き始める。

「はあ、リンドウ、せめてノックぐらいしろ」

「すみません……、じゃあ、レッドイーター、お詫びとしてチョコ」

あげるから許して」

手と手を合わせて、リンドウは謝り、ポケットからチョコを取り出し、テーブルの上に置いた。

レッドイーターもまだまだ子供な為、親指をグツ、と立てて口を動かす。

「……………許しましょう」

ツバキは、いいのか？とレッドイーターに訊いたが、レッドイーターは同じ言葉で即答した。

「ありがとう！　じゃ、また明日な！」

「失礼した」

そう言い、2人はさっさと出て行ってしまった。

2、3分かけて、やっと拭き終わったレッドイーターと言えば…。

「えへへ」

天使のような笑顔で、チョコレートを口にしていた。これまた写真に撮りたいワンシーンである。

チョコを口にしながら、この後本部から、タツヤと一緒に出る任務で可変式を隠す必要は無いと言われるんだろうなあ、とレッドイーターは予想し、夜のメールで、見事命中していた。

第二十八話、初陣、VS<オウガテイル>、RE視点(前書き)

RE||RED EATERレッドイーターの略です。

第二十八話、初陣、VS<オウガテイル>、RE視点

9月12日

「贖罪の街」

10:00

僕とタツヤさんは、神機をしっかりと握り、BエリアからCエリアに向かって歩いていった。

「あの、レッドイーターさん」

「………なんです？」

剣形態の適合者で、ショートブレード（現在、ナイフ）使いのタツヤさんは、不安そうな顔で僕を見詰めてくる。

現在、僕ことレッドイーターは、スパルタと言っても過言ではない指導により、一週間でタツヤさんを一般の神機使いと同じ体力、技量を持たせる事に成功した。

なにしろ、物覚えが良い。

人の話はちゃんと聞き、言われたとおりに難易度の高い訓練をやり遂げたのだ。

それでも不安なんて…、まあ僕みたいなイレギュラーを除く、ど

の新米にも共通する事だから仕方ないけど。

「……………訓練通りに動き、敵を混乱させられれば、あっという間に終わりますよ」

「ちょっと、自身無いですけど…頑張ります」

タツヤさんは、本当に自身無さそうな顔で、無理に笑う。

僕は、彼に自身をちゃんと持って欲しかった。さすがに体の訓練はできても、中身の訓練は専門外である。

「……………危なくなったら、僕が助けますよ」

リンドウさんの影響かな、最近何故か笑えるようになってしまったため、表面上だけでも微笑む。

タツヤさんは、僕を男と認識できている筈なのに、何故か顔を赤くする……………っておい。

「……………タツヤさん、何度も言ってしまったんですけど、僕は男です」

「は、はい！ それは分かっているんですけど…」

あ、ちょっと涙目だ、これ以上は作戦の障害になりかねない。

新人の相手は大体オウガテイルと、暗黙の了解だが、落ち着いて戦わなければ命を持っていかれる。

横にステップすることで、どうにか避ける。

「……………攻撃の手を休めないで！」

「了解！」

僕の指示に彼は頷き、ブレーキをしているオウガテイルの横っ腹に、素早くナイフを振り、斬撃を3発叩き込む。

あと一撃でも加えられれば、オウガテイルはダウンするだろうが、深追いするのは危険だ、僕が言う前にタツヤさんは敵から離れる。

直後、目の前をオウガテイルの巨大な尾が通過する。

「つつつ!!！」

オウガテイルが尾を振り終わる前に、タツヤさんはナイフで切り込む。

「ガアアアアア!?」

鋭い一撃は、少ない時間ながらオウガテイルのダウンを奪えた。

「捕喰形態くプレデターフォーム>!!！」

迷わず神機を変形させ、オウガテイルの肉を喰らう。

「はああああああああああああああ!!!!！」

身体能力が格段に上昇したその腕で、彼は神機を振る。

スピードを上げ、鋭さが増したその斬撃は、オウガテイルの肉を引き裂いていく。

「ガ…アアアアアアアアア！」

オウガテイルは起き上がり、彼に噛み付こうとその大きな口を開ける、だが、

「ガ？」

「……………不発」

タツヤさんは、オウガテイルの真上を跳び、神機の切っ先をオウガテイルに向ける。

「うおおおおおおおおお！！！」

彼の一撃は、オウガテイルの肉の厚さなど無視し、コアを貫いた。神機をオウガテイルから引き抜き、タツヤさんは荒い息を何回もする。

「はあ、はあ、や…った？」

「……………ええ、しつかり殺しましたよ」

回収班の要請のために無線機を取り出しながら、僕は片手に持った神機で、オウガテイルの死体を解剖する。

「……………コアがないでしょう?」

「はあ、はあ、本当だ…」

タツヤさんは、大粒の汗を流しながら、その場に座り込んでしま
う。

ちなみに、僕の評価だと今回は、一応合格点、と言った所だ。

「……………あ、こちらレッドイーター、回収班を要請します」

『了解です、お疲れ様でした』

ピツ、と無線機を切りつつ、僕はバックパックから、水とタオル
を取り出す。

「……………びっぞ」

「あ、ありがとうございます!」

その後、彼はタオルで汗を拭きながら、僕は今日のミッションの
予定を考えながら、回収班のへりに乗った。

第二十八話、初陣、VS<オウガテイル>、RE視点(後書き)

と、まあいつもとは違った書き方をしてみましたw

第二十九話、FSD1月前

10月28日

「エントランス」

10:00

今日のレッドイーターは、非常に……。

非常に……。

「………猫耳……ふふ、悪ふざけもぶつぶつ………」

非常に不機嫌だった。というより、裏の人格も少しだけ出てきている。

彼の頭に着いているのは、誰が調達したのかも分からない、猫耳が付いたカチューシャだった。

ちなみにレッドイーターの周りには、男女問わず群がっていたりする。中には写真を撮る者もいた。

レッドイーターは、事の発端を思い出す。そう、あれは朝食をとっていた頃……。

レッドイーターは、耐え切れずに叫んでしまう。

普通なら迷惑な行動だが、周りも同じくらい（？）盛り上がり、おり、誰も気にしなかった。

リンドウは、少しむっ、と口にし、反論を始める。

「お前のその容姿なら、男女問わず落とせると、俺は自負している
！！」

「自信満々に言われてもこっちが困るんですけどねえ！？」

「よしよし、落ち着いてね。リンドウ、冗談もそれぐらいにしてよ
いつもの口調を失い、もはや暴走状態に近いレッドイーターを、
一緒に食べていたサクヤが静める。

ちなみに、タツヤも一緒なのだが、彼は困ったような顔をして、
3人を見ている。

とりあえず彼はフォローに回る。

「いくら僕達にも出展命令が出るからって、それはちょっと……」
「なんだと！？ お前はレッドイーターと書いて、可愛い子猫と読
められないのか！？」

「無理だあああああああああああああああああ……！！！！」

レッドイーターとタツヤ、共に反論。サクヤは諦めたのか、ため息を漏らす。

レッドイーターはイスから立ち上がり、リンドウに指摘する。

「第一に！ 猫耳なんて無駄な物、こんな時代に無いでしょう!？」

「ああ、そうか。本人は知らないんだよなあ」

リンドウは、水を飲み、ふう、と言いながら、後ろを向く。

そこにいるのは、レッドイーターに、何故か熱い視線を送る男女の集団だった。

リンドウは、笑顔で口を開いた。

「おい、『レッドイーターちゃんLOVE!!』の会の諸君、猫耳持っているかね？」

「「「「あるよー、どれが良い?」「「「「「

「嫌だあああああああああああああああああああああああ
!.....!」

まさかの集団に、レッドイーターはさらに混乱し、走り出すが、リンドウに拘束される。

サクヤとタツヤも、目を丸くしている、どうやらリンドウ以外彼らの存在を知らなかったようだ。

抵抗虚しく、頭に猫耳を着けられた上、リンドウがツバキに許可を貰ってしまったため、外す事もできなくなってしまった。

「……………うう」

「よしよし、私からリンドウに言うておくから、とにかく身を隠しなさい」

「どこも隠れるとこ無いですけど？」

レッドイーターは、サクヤとタツヤに慰めてもらった、もちろんその場ののぎだが……………。

260

「外部居住区」

10:10

……………という経緯である。

レッドイーターは自暴自棄になり、外部居住区に出ていた。

「……………外部居住区なら、隠れる場所もあるかも」

そんな期待を胸に、バリアントモツズのフードを被りながら、隠れる事が出来そうな場所を探す。

1時間後

「……み、見つからない」

レッドイーターは忘れていた。

アナグラは、世界の各フェンリル支部の中で最も生産・消費活動が自己完結している、アーコロジードという事を。

つまり食料目的で、第8ハイヴに来る人間が多すぎて、人口密度が馬鹿にならない程小さいのだ。

まあ、子供が遊ぶような公園もあるわけで、現在、そこに設けられているベンチに腰を掛けている。

「……はあ」

神々によって荒らされた地球でも、空は蒼い、その空を見ながら、レッドイーターはため息を吐く。

不意に、ちよんちよん、と肩をつつかれた気がしたので、そちらに目を向ける。

「どじしたの？」

レッドイーターは、初めて天使を見たのかもしれない。

レッドイーターに匹敵する程の容姿。

青みが掛かった、腰まで届く銀髪。

レッドイーターの瞳を覗いている、空と同じような蒼い目（スカイブルーとも言つ）。

その女の子は、レッドイーターのすぐ近くに顔を寄せていた。

第三十話、少女と少年

11:20

「……………」

言葉を失ってしまう程、レッドイーターは目の前の少女に釘付けだった。

歳は1つか2つ下だろう。

「遊ばないの？」

少女は再び質問する。レッドイーターの頭はやっと正常に運転しだし、会話を始める事にした。

「……………友達じゃないのに遊ぶのは、他人に迷惑でしょ？」

「えー、あの子達はおにいちゃんが入りたいって言ったら、入れてくれると思うよ？」

レッドイーターは、公園でドッジボールをしている子供達を視界に入れる。

「……………なら、どうして君は遊ばない？」

「あはは……、私はちょっと他の子より体が弱いただけ」

無理に笑おうとしている所を見ると、そうなのかもしれない。

レッドイーターの眼は、また少女に釘付けになり、言葉が出なくなる。

なんで釘付けになったか、自分でも理解できなかった。ただ、そこにあるのは、初めて人に感じる安心感。

その安心感は、レッドイーターがもつとも嫌悪するものだった。

人は、簡単に他人を裏切る。自分も同じ。

人は、簡単に欲に走る。自分も同じ。

人は、簡単に死んでいく。自分も同じ。

そんな言葉がレッドイーターの頭を過ぎる。

初めてだから、どういつ対応を取れば良いか分からなくなる。だから適当に返した。

「……僕も、体が弱いんだ」

「なら、ヒカルと同じだ」

そう言いながら、少女は、レッドイーターの隣に座る。

ヒカルと名乗った少女は、無邪気な笑顔を、レッドイーターに向けてる。

レッドイーターは、自分がついた嘘が恥ずかしくなった。ゴッドイーターが体が弱い訳が無い。

腕輪も、他の神機使いと違うから、神機使いごっこをしている子供、と外部居住区の人達には見られている。

「……………僕と関わっても、不幸になるだけですよ?」

「そんなことないよう、だって、ヒカルは今とっても心が落ち着くよ?」

なんでだ、と言う前に、レッドイーターは口を動かすのを止めた。変わりに、顔が赤くなる。

「すう、すう」

ヒカルは、レッドイーターの腕に抱きつき、寝てしまったからだ。

これでは動けないので、レッドイーターも寝る事にした。

なんだか、今だけは気持ち良く寝れる気がしたから……。

「おい」

そう呼ばれて、レッドイーターは眼を開ける。

白い空間、恐らく裏の人格に呼ばれたんだろう。

そう、のんきに考えていたら、目の前に黄金色の光を放つ大鎌が振り落とされた。

「聞いてんのか？」

「……………なんだ？」

「こんな時まで自分を隠すか……、っと、ばれているって今思った？ 当然だろ？ 俺はお前なんだから」

レッドイーターは舌打ちする。この世界で嘘は通用しないようだ。

今までの馬鹿だのなんだの全てお見通しと言う事になる。

「まあ、単刀直入に言おう、あの女から、今すぐ離れる」

「!？」

なんで、と声が出ないくらいのショックに、レッドイーターは動く事も、話す事も出来ない。

「理由は言わねえ」

「な……なん……で？」

言葉が出て、レッドイーターは相手を止める事が出来ないと思った。

なら、レッドイーター（裏）を気絶させれば良いだけ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお！！」

レッドイーターは、ルナティック・ツインを作り出し、片方をキルサイズを押さえるために、もう片方は目の前のもう1人の自分を殺す（気絶させる）ために動かす。

「甘ええ！！」

「がっ!?!」

鎌ではなく、蹴りでレッドイーターは吹き飛ばされる。手元から離れたルナティック・ツインが、空気に溶けるように消えていった。

「う…ぐあ」

腹を押さえて、レッドイーターは苦しそうな声を出す。

レッドイーターは起き上がろうとするが、レッドイーター（裏）は、キルサイズの刃を、レッドイーターの首筋に付ける。

「もう一度言う、今すぐあの女から離れろ」

「くっ！ まだ…まだあ…！」

足元を爆発させて、身を削って距離をとる。

1秒で相手はレッドイーターとの距離を詰められる。レッドイーターはこのままでは勝てないので、更に身を削り、Lv2となる。

「喰らえ!!」

2人のレッドイーターは両手にキルサイズを作り、一瞬で近づき、両手の大鎌をぶつけ合う。

レッドイーターは後方宙返りをする。すると、立っていた場所に数え切れないほどの刺が打ち込まれた。

レッドイーターは、範囲ギリギリまで2本のキルサイズを巨大化させ、振るう。

「はん！ 隙だらけなんだよ!!」

巨大鎌は簡単に回避され、近づく事を許してしまう。レッドイーターは咄嗟の判断で巨大鎌を手放し、新しいキルサイズ2本で弾く。

レッドイーターは、相手が距離を離すために下がっているのを見ながら、右手のキルサイズを消し、掌をレッドイーター（裏）に向ける。

向けている間に、ブウオン、という音が複数鳴る。

「.....Fire」

レッドイーターは掌を握る、すると空中に複数作り出された、6

つの砲身を束ねたの銃身（ガトリング砲）が弾丸を乱射した。

命中率が低いから、数でカバーしたのだ。

だが、レッドイーター（裏）は、目の前に赤みを帯びた厚い壁を作り、ガードする。

しかし、

「っ！？ やべ」

やべえ、と言い切る前に、後頭部に強い衝撃が加えられ、レッドイーター（裏）はその場に倒れた。

その後ろには、Lv2の反動で苦しそうにしているレッドイーターがいた。

どうしてこうなったか、と言うと簡単である。

あえて遠距離攻撃によって、相手に壁を作らせ、視界が狭くなつたと同時に高速で後ろを取り、巨木を作って後頭部を叩いたのである。

最後に気づかれたみたいだが、振り返る前に叩いたので問題ない。

視界が、白い光に包まれる。

「………次は、勝てないだろうなあ」

同じ手が二度も通じるとは思わない。そういう相手なのだ。

「だいじょうぶ？」

「……」

意識が現実リアルに変わると同時に、レッドイーターはまた言葉を失ってしまった。

ヒカルが顔を、レッドイーターの顔に近づけていたからだ。

レッドイーターは顔が赤くなる前に、立ち上がる。

「もう…帰らないと」

「行っちゃうの？」

レッドイーターの袖をつかみ、ヒカルは寂しそうな顔で声を上げる。

レッドイーターはどうしようと考えた時に、ヒカルは小指だけを彼に向ける。

「また、合えるよね？」

その強い願望に、レッドイーターは答えるしかなかった。

「……………うん」

……………と。

レッドイーターも、小指を立てて、ヒカルの小指に近づける。

「約束だよ？」

「……………FSDの時に、会えるかもね」

「じゃあ、その時に一緒に屋台回るっ？」

「……………ああ」

2人は、小指を絡めて、静かに約束した。

第三十話、少女と少年（後書き）

この後終業式なんで、夜まで更新できないかもしれませんw

第三十一話、寒い？暑い？、VS<クアドリガ>2（前書き）

タツヤ君の神機

剣、獣剣 陽 改

装甲、猿甲 コウケイ 硬

ですよーw

第三十一話、寒い？暑い？、VS<クアドリガ>2

10月29日

「鎮魂の廃寺」

13:55

「寒いー!!」

リンドウとタツヤの2人は、現在氷点下10度の廃寺地区のAエリアの高台で震えていた。

ちなみに、今回の任務は、クアドリガ2体のコアの回収である。

ちなみに、タツヤはレッドイーターの訓練のおかげで、旧ヴァジユラを1人で討伐できるほどの急成長を遂げた。足手まといにはならないと、レッドイーターは自負している。

そんな2人を無視し、ツバキとレッドイーターは、それぞれバレットを装填する。

「レッドイーター、ちょっと良いか？」

「……………クアドリガですよね？」

ツバキは頷く、レッドイーターは神機を銃形態から剣形態に変形させながら、話を始める。

ここにいる、レッドイーターを除いた3人は、まだ誰もクアドリガとの戦闘経験が無い。だから彼女は、クアドリガが行う攻撃を聞きたいんだろう。

「……………遠距離から中距離は、巨大なミサイルか、小型の計6発のミサイルで攻撃してきます。ミサイルのほとんどがホーミングしてきますね。そして近距離は、肉弾戦法を多く取ります」

「他には？」

「……………わかりません。1人での任務なので、さっさと終わらせましたし」

「そうか、いや、それだけ聞いただけでも結構楽になる」

レッドイーターは、高台に座り、作戦開始の合図を待つ。ツバキも無線機の時計を見ながら待っていた。

リンドウとタツヤは体を動かして、軽く体を温めていた。

「……………っ!?!?」

レッドイーターは、何かに反応して、立ち上がった。

リンドウ達は、どうした？ と訊ねたいみたのだが、彼らも何かを感じ取ったのか、神機を構える。

「……………来た」

その言葉とほぼ同時に、開始時刻になる。

だが、そんな事はお構い無しに、レッドイーターは強化ノコギリを前面装甲に叩き込んだ。

そんな攻撃では怯まないクアドリガは、体をびくびくと震えさせながら、骸骨の擬態を高い位置に移動させる。

その行動の間に、クアドリガの体から、黒い煙のような物が吹き出た。

「!?!」

レッドイーターは、急いでHエリアにある高台に昇る。

直後、空から降ってくる雪は一瞬で水になり、そして蒸発した。

クアドリガを中心に、炎が広がったのである。高台に避難したレッドイーターも暑いと感じる程の高温だった。

「.....だけど、出が遅い!」

炎が治まったと同時に、レッドイーターは高台から跳び、クアドリガの背中に飛びつき、その巨剣をクアドリガの背中に突き込む。

そして、鋼鉄みたいな装甲を破り、中の肉を抉り出した。

『グワアアアアアアアン!?!』

今の攻撃に痛みを感じたのか、クアドリガは怯み、レッドイーターを振り落とすのに遅れる。

バランスを崩し、前面装甲を開きながらダウンしてしまったクアドリガに、レッドイーターは神機を変形させ、装甲内の柔らかい肉に、連続でレーザーを撃つ。

そして数え切れない程の穴が開いたクアドリガに、レッドイーターは神機を剣形態にし、

「……弱い」

捕喰形態でコアを抜き取った。

全くを持って無傷、それがアラガミに近い人間の實力だった。

<ツバキチーム方面>

〇エリアで何かを捕喰している機械的な体を持つ巨体、クアドリガを、ツバキ達は見つける。

「俺とタツヤが先に行く、姉上はその後で頼む」

「了解」

小声で言い合い、リンドウとタツヤはクアドリガに足音を立てず

に近づき、神機を捕喰形態にする。

「喰らえ!!!」

『グワアアアアアアアン!?』

2人と1体の声が聞こえた直後、ツバキは引き金を引き、ミサイルポッドに弾丸を一発も外さずに当てる。

そして、2人は二手に別れ、リンドウは前、タツヤは後ろから切り込む。

リンドウとツバキを視界に収めたクアドリガは、箱状のパーツを開く。

「ミサイル来るぞ!!!」

ツバキは、叫ぶと同時に建物に身を隠し、リンドウは雪を蹴り、クアドリガの腹と雪が積もった地面の間を滑る。

直後、クアドリガを中心に広範囲が爆発する。

箱状のパーツ、ミサイルポッドから、6発の小型ミサイルが地面に落ちたのだ。

「ちいっ!!!」

リンドウは、クアドリガの後ろ足で、雪の上を滑る体を止め、すぐに起き上がり、タツヤと一緒に後ろ足に切り込む。

『グワアアアアアアアン!!』

鬱陶しいとでも思ったのだろうか、クアドリガは前足に力を込め、後ろにバツクステップする。

後ろに張り付いていた2人は、地面を蹴って右に避けるが、2人の頭上に、小型ミサイルが落ちてくる。

「装甲開けえ!!」

「はい!!」

リンドウの声にタツヤは返事をする。2人は、同時に装甲を開き、ミサイルから身を守った。

ツバキは、バツクパツクから、スタングレネードを取り出し、

「眼を瞑れ!!」

ピンを抜いて、地面に叩きつけた。

『グワアアアアアアアン!?!』

視界を奪われ、行動を止めるクアドリガに、3人は一気に畳み込む。

ミサイルポッドは、まだ撃てるようだがボロボロになり、

後ろ足を形成していた鋼鉄のような足を一部破壊され、

前面装甲にヒビが入った。

『グワアアアアアアアン!!』

ようやくクアドリガは視界が回復し、行動を再開する。

クアドリガは、体から黒い煙を上げ、前面装甲は縦に裂け、中から巨大なミサイルが顔を出す。

「離れるタツヤ!」

「は、はい!!」

地面を蹴り、2人は煙が届かない場所まで避難する。

そして、地面が燃える。

こんなに寒いのに、暑いと感じる程の高熱だ。

そして、ミサイルは腹から勢い良く飛び出し、ツバキに向けて突き進む。

「くっ!!」

どうにか避けようとするが、ミサイルはツバキを追い、軌道をどんどん変えて、ツバキに近づく。

バンッ!!!!!!

「おお、レア物か!？」

リンドウは、光る神機のコアを見ながら喜び、

「……………ミッションコンプリート」

レッドイーターは、銃を下げ、

「お疲れ様です」

タツヤはタオルを皆に配り、

「回収班の要請を頼む」

ツバキは無線機で、アナグラと連絡する。

アナグラの神機使い達は、このチームワークで激戦を生き抜いているのか、とレッドイーターは心の中で感想を述べた。

第三十二話、嫌な話題

「レッドイーターの部屋」

4：00

「……………特に提案は無いです」

「そうか、じゃ次は……………」

リンドウは、昨日の猫耳カチューシャを片手に、ソファに座りながら、この部屋にいるメンバーの顔を見ていく。

現在、レッドイーター、ツバキ、リンドウ、タツヤは、ソファに座りながら、FSDで何をするか提案中なのだ。

ちなみに、レッドイーターが終わり、次はリンドウのターンであったりする。

「俺か！」

「……………背筋に悪寒が走ったのでパス」

「ええー」

リンドウが何かを言う前に、レッドイーターは却下した。

だがリンドウは、一歩も引かずに（座っているのだが）口を開く。

「やっぱり、屋内ならお化け屋敷でしょ！」

「あれ？ リンドウさんなら伝統的に、メイド喫茶とか、バニー喫茶とか言っていると思いました」

「……………それやったらFSD強制的に中止にさせます」

タツヤの放った衝撃的な事実にも、レッドイーターは警戒し始めた。

レッドイーターは大きな瞳を、ツバキに向けるが……………、

「……………ツバキさん……………」

発言力大のツバキにレッドイーターは助けを願っても、みんなに任せる、と言ったきり、テーブルに置いてあるFSDでの出し物を記入する紙をずっと睨んでいるため、ぜんぜん気付いていない。

レッドイーターは、この際もうどうでもよくなり、じゃあお化け屋敷でいいです、と言ってしまった。

その発言に、リンドウの眼が光る。

「ならレッドイーターは、猫娘だ!!！」

「そう来る!?! ってツバキさん!?!」

レッドイーターは、却下と言おうとした瞬間、ツバキが紙に記入してしまっただため、あえなく撃沈。

リンドウは、絶対にふざけているでしょ、とレッドイーターが言いたいくらい輝いていた。

「レッドイーター、君にこの猫耳を貸そうー!」

「なんで強制的なんですか!」

「一番似合うからだ!」

「あんた実は僕の事嫌いだろ!?!??」

抵抗虚しく、レッドイーターの小さな手に握らされたのは、猫耳付きのカチューシャと、これまたどこから仕入れたのか、げげの鬼太郎に登場する猫娘の衣装だった。

話はそのまま進行し、場所はレッドイーターの部屋を改造したお化け屋敷となった。開いている時間は朝の7時から12時までだ。

顔を落として、どんよりした空気を作りながら、レッドイーターはツバキに質問する。

「……………僕の別の部屋の手配は?」

「新人区画が空いているらしい」

即答され、ため息すら吐くのもだるいレッドイーターは、テーブルの上に置いてあるコップに注がれた水を飲む。

そんなレッドイーターを見ながら、リンドウは、そういえば、とタツヤに質問する。

「昨日、レッドイーターってなんかあったのか？」

「僕は聞かされてないですね」

「いやさ、夕方くらいにレッドイーターが珍しく外部居住区から帰ってきてよ、なんか出会いをしたような顔をしていたから、タツヤは聞かされたのかなあ、って思っただけ」

「うほっ！！」

レッドイーターは水を吹きそうになったが、どうにか堪えられた。

リンドウはそんな姿のレッドイーターを見て、ほほう、と右手を顎に添える。

「どんな子だった？」

「……………」

レッドイーターは最強の抵抗手段、話さないを実行したが、リンドウは、その壁を崩しにかかった。

「なんか同僚が言ってたんだけどさ、お前とよく任務に出ている赤い服の子供が、その区画一番の美少女とベンチで寝ていた、って言うて…：ただけど？」

壁を崩されたその瞬間、レッドイーターは覚悟を決めた。

「（ガシャ）……………皆さん、強く生きてね」

「あなたをお父さんと思ったことなんて無いわ!!」

変な誤解を招く前に、レッドイーターは潰しにかかった。

その後、タツヤが仕入れた話によると、廊下に響く程の二人の声
が、その日、凄く目立ったらしい。

第三十三話、ストーカー

11月2日

「外部居住区」

7:00

「ふわぁああ」

朝から欠伸をしたのは、レッドイーター（残念ながらアホ毛無し）だった。

場所は、ヒカルという子に出会った公園。

今日はオフの日なので、自分の予定を言うために、これまた珍しく外部居住区に出てきたのである。

早すぎたかな、とレッドイーターは思ったが、FSD開催1ヶ月前のアナグラは騒がしいので、今更戻る気はしなかった。

まあ、戻らなくても、実は彼を監視している人間が2人隠れているのだが……。

「R1、聞こえますか？ over」

「こちらR1、ああ、しっかり聞こえている、over」

「了解です、R2、現在レッドイーターさんの右顔が見えています、over」

レッドイーターは気付いていなかった、リンドウとタツヤが、一目、超絶美少女を見ようとレッドイーターを尾行していた事を。

ちなみに、リンドウがR1、タツヤがR2である。

彼らは、無線機の音量を、ギリギリまで下げ、レッドイーターに見つからない場所で隠れて見ている。

潜伏場所は、レッドイーターから見て真後ろの家の屋根の上になり、リンドウ、少し離れているが、右の細い通りにタツヤである。

彼らも休暇を取っていた為、仕事をする気は0である。

「………来ないのかなあ」

そんなストーカーじみた事をしている2人がいる事を知らずに、レッドイーターは肘を太股に付けて、気長に待つ。

しばらくして、朝から元気な子供が、次々と家から出てくる。だが、青みが掛かった銀色の髪の毛の女の子の姿は見えない。

リンドウとタツヤも、同僚からのヒントを元に、双眼鏡で必死に探す。

「こちらR1、情報と一致する少女は見えない、そちらはどうだ？

over」

「こちらR2、こちらも見できません、over」

「まだ時間は早いからな、気長に待つぞ、over」

「了解です、こんな時に備えて、ある程度の食料は持ってきました、over」

(2人の)持久戦争が、今、この時をもって始まった。

2時間後

「もぐもぐ、ふう」

ポケットに入っていたスナック菓子を食べ終え、またレッドイーターは肘を着く。

リンドウは、背中に当たる日光が気持ち良すぎて、強烈的な睡魔に襲われていた。

だが、そんな状況でも、リンドウは双眼鏡で少女を探す。

その時、白いワンピースを着た1人の、100人が100人美少女と認めるような、レッドイーターと比べて、勝らずとも劣らずの

端正な顔立ちの少女が、公園に入ってきた。リンドウは慌ててコンタクトを取る。

「こちらR1、どうやら来たようだ、お前から見て右前方だ、over」

「こちらR2、こちらも見えました、over」

レッドイーターを見つけて、少女は嬉しそうな顔で駆け寄る。

タツヤは、レッドイーターの反応を期待して、双眼鏡で彼の表情を見た。

レッドイーターの頬は紅く染まり、少女を眼から外さない。

「わーい！」

「「「！！！！????」」」

レッドイーターとストーカー2人は、同時に驚く。

当然である、ヒカルは、走りながらレッドイーターに抱きついてきたのだから。

「こちらR2！ レッドイーターさんの顔が凄く赤いです！ over」

「彼女の方は、天使のような笑顔でレッドイーターから離れない！ over」

「どつちも羨ましいです！ 声は聞こえますか！？ over！」

「ああ、すっかりと聞こえるぞ！ 聞こえた言葉をそのまま言う！ over！」

本格的にやばい2人が見ているのに、レッドイーターは気付けない。

ヒカルは、やっと満足したのか、抱擁を止める。その瞬間、レッドイーターは神速でバリアントモツズのフードを手にして深く被る。彼の顔は、信じられないほど真っ赤だ。

フードのせいでレッドイーターの表情が見えないヒカルは、ベンチに座り、彼の右腕に抱きつく。

「また、会えたね」

「………そう…だね」

「嬉しいなあ」

ぎゅ、っとヒカルはレッドイーターの右腕に更に密着する。

レッドイーターは、何度も呼吸し、どうにか心を落ち着かせて、フードを外す。

「これもうできてんじゃねえの！？」

「嘘ん！？ 馬鹿な！？ あの歳でできている筈が！？」

ストーカー2人は、ヒートアップして、2人を見守る。

「そう言えば、自己紹介してなかったね」

そう言い、ヒカルはレッドイーターの右腕から離れ、ベンチから立ち、彼の眼の前で両腕を後ろに組みながら笑顔で口を開く。

「私は、蒼月あおつきヒカルって言うの、叔母さんと二人暮らしなんだ」

「………そ、そうなんだ」

長い銀色の髪が放つ甘い匂いに、レッドイーターはまた頬が紅くなる。レッドイーターの方が女の子みたいだ、というツツコミをストーカー2人はほぼ同時に呟く。

レッドイーターも、自己紹介をしていなかったため、言おうと口を開くが、

「な…まえ」

自分の名前を言えずに、レッドイーターは口を閉じてしまう。

これは当然であった、本部で生まれ、父も母もない彼は、研究者達から、サンプル、又はお前、あんたとしか言われたことがないのだ。

持っている名前が、本当に自分の物なのか、レッドイーターは疑ってしまっているのである。もしかしたら、嘘の名前なのかもしれない、そういった考えが、脳裏を過ぎる。

「……………名前は、……………無い」

「なんで?」

「……………理由は言えない、でも、コードネームならある」

「コーどねーむ?」

子供には難しかったかな、とレッドイーターは反省し、口を再び動かす。

「……………あだ名、みたいな物だよ。レッドイーターって言うんだ」

「レッドイーターさん?」

レッドイーターは、無言でコクリと頷く。

レッドイーターは、もう本題に入っても良いかな? と思い、激しく跳ねる鼓動を無視し、ヒカルに告げる。

「……………FSDの件なんだけど、僕は午後12時に屋上にいるから、できればその時に合流できない?」

「うん、良いよ!」

ヒカルは微笑みながら、再びベンチに腰を降ろす。

その笑顔を見て、レッドイーターも自然に微笑み返してしまった。

だが自分の顔が笑っている、と認識すると同時に、レッドイーターはペタペタと、自分の顔を触る。

「どうしたの？」

「……あまり笑ったことがないから、ちゃんと笑えているかどうか確認しただけ」

レッドイーターは恥ずかしそうな顔をして、彼女が自分の顔を見えない方向へ顔を逸らす。

「「いやいやいや!! レッドイーター(さん)の笑顔に問題なんて無いよ!」」

ストーカー2人は、レッドイーターの行動に、つい突っ込んでしまふ。無線で連絡するのすら忘れて……。

「……あ、あの」

「何？」

レッドイーターは目だけ動かし、ヒカルの笑顔を見る。するとレッドイーターは俯き、胸の前で指と指でつつき合いながら、小さな声で彼女に告げる。

「……今日だけ、アナグラに来てみる？」

「い、良いの? わーい!」

「「な、なんだってー!!??」」

「邪悪な気配!!」

リンドウとタツヤの声が聞こえ、レッドイーターは、隠していたホルスターから拳銃を抜き出し、近くにいたリンドウに構える。ヒカルは、おお! と眼をキラキラさせながらレッドイーターを見る。

「やべえ、見つかった! 退却する、over!」

「了解! (ブツン)」

2人は神機使いの身体能力を活かして、さっさと立ち去っていった。

レッドイーターは拳銃をホルスターに収め、ヒカルに叔母さんに言うてからまたここで集合、と言うて分かれた。

第三十三話、ストーカー（後書き）

次回は、あれだね！ デー（以下略）

???

「(アルファ)6(シックス)、配置に着きました、over」

『了解、作戦開始時刻と同時に、教会内にいるアラガミ信者達の殲滅作戦を開始する、over』

「了解、通信を切る」

手にしていた無線機を切り、フェンリル治安部隊標準装備のアサルトライフルを握る。

これはあくまで、『サンプル』の身体能力の確認。作戦失敗は許されない。

夜の教会を包囲している特殊部隊の人数は、わずか6人。

対して、アラガミ信者達の数、未知数。

勝てるかどうかすら判らない戦いの中に、6歳の少年がいた。

艶やかな黒の髪に、生気を感じさせない黒い瞳。

その少年は腕時計を確認し、作戦開始時刻を迎えるまで待つ。

(10、9、8、7、6、5、4、3、2、1)

心の中で残り時間を数えながら、ベルトに付けてあるグレネードを手に取る。そして、

(0)

時間を迎えると共に、走り出し、教会の壁をグレネードで破壊する。

「フェ、フェンリルの犬どもか!？」

「くそ!! 撃て! 撃つんだつ!!」

煙の向こうから何人も人間が銃を構えて応戦してくる。

だが、特殊部隊のメンバーは、誰一人として銃弾を喰らわない。むしろ、正確な射撃で、頭を、心臓を、どんどん撃ち抜いていく。

「クソツ!! グレネード投げろ!!」

その言葉が聞こえると同時に、ピン、と何かを引き抜く音が聞こえ、そのまま黒い物体が近づいてきた。

少年は銃を撃ちながら走り出し、人とは思えない程の脚力で地面を蹴り、空中を彷徨うグレネードをキャッチし、余裕で投げ返す。

グレネードは、信者達が密集している方向へ飛んでいき、爆発した。

だが安全圏にいた信者達の内、3人程が、空中を跳んでいる少年に拳銃を構え、一斉に発砲した。

何発もの弾丸が、少年に近づいていく。

パシユン！！！！

しかし少年は、再び人間離れした行動を起こした。

アサルトライフルの引き金を、発砲した信者達とほぼ同時に引き、放たれた弾丸が向かってくる『全て』の弾丸にぶつかり、空中で弾き飛ばしたのだ。

「クソ、化け物か！！ ガツ！？」

少年に対し、未だに銃の引き金を引く信者達は、その隙を突かれ、特殊部隊の隊員に撃ち殺される。

着地と同時に少年は地面を転がりながら、マガジンを取り換え、そして、

ガガガガガガガガガガガガガガガガガツ！！！！

特殊部隊全員で、残った信者達を完全に包囲し、掃射を開始する。

銃声が連続して鳴り、悲鳴が教会の中で響き、鮮血が飛び散る。

弾が尽きる頃には教会の床は血で染まり、頭や胸に銃創が残っている死体が転がっていた。

「うぶっ！？」

少年は、死体とはまったく別の方向を向き、銃を捨てて両手で口を塞ぐ。

人を殺める事への罪悪感に苛まれ、胃の中にあるものが喉もとま
で逆流してくる。

その嘔吐感をどうにか抑えて、少年は教会から走って出て行った。

???

(後書き)

久しぶりです&ごめんなさい(汗)

予想より更新が遅れた上に、短文、ええ……自分でも、えー、って
思いましたよ……。

明日も用事があって、更新できるか微妙ですが、頑張ります

明後日は暇なので、更新をしまくるかも？w

第三十四話、条件

10:30

「お待たせ〜！」

叔母に話を通じたであろうヒカルは、走りながら公園へ戻ってきた。

ベンチで気長に待っていたレッドイーターは、ヒカルに軽く手を振り、口を動かす。

「……………行こうか」

そう言い、さっさとレッドイーターはベンチから立ち、いつもと変わらないペースで歩き出した。

ヒカルはレッドイーターの手を握り、同じペースで歩く。

歩くだけではつまらないと思ったのか、ヒカルはレッドイーターの手を握りながら、会話を始める。

「どうして、アラガミなんて出たのかな？」

「……………始まりは『南極』」

「南極って？」

レイドイーターは、少しだけ目を丸くするが、すぐに納得のいく答えを導き出した。

外部居住区の人々は、そういつた学問を修める機会が無いため、せいぜい極東は昔『日本』と呼ばれていた程度しか知らないのだから。

「……南極って言うのは、まあ、地球で最も南にあつて、寒い所って言えば分かる？」

「うん！」

「……アラガミを形成するオラクル細胞、それは南極で初めて発見された。当初は、アメーバっていう眼じゃ見えない程度のもとも小さい生物と似た形をしたアラガミだった。と言っても、その時はまだ『アラガミ』なんて名は無いんだけど」

「眼に見えないくらい小さかったのに、なんで今あんなに大きいのか？」

「……そこは、やっぱり捕喰による細胞の増殖、つまり増えていったから。そして、満腹なんて言葉が通用するか判らない程のスピードで、1年で大陸1つ滅ぼしたんだよ。人が持つ通常兵器、つまり銃や剣じゃ殺せないから当然だけどね、核爆発が通じるかまだ未検証らしいけど」

「かくばくはつ？」

「……えと、ターミナルで調べただけど、エネルギーの多くが爆風および熱放射として現れ、その他、電離放射線なども発

生して、これらによって発生する火球の温度は数百万度にも達する。つていう旧人類が作り出した、とても危険な物だよ。最近じゃ、そんな物騒な物を『連合軍』は使おうとしているらしいけど……」

話しているうちに、ヒカルが握っていない方の手が震えた。

『連合軍』、アラガミという全人類共通の敵を目の前に、各軍事国家が協力している軍。

だが連合軍は、フェンリルの持つ神機等の、アラガミを殺すことができる戦力を持っていない。せいぜい、弾に低純度のオラクル細胞を塗布した火器程度で、良くて撃退する事しかできない。

アラガミを殺せる『フェンリル』、殺せない『連合軍』、その両者の関係は険悪と言っても過言ではなかった。

そして、本部直轄の特殊暗殺部隊に所属していた頃、連合軍の士官を殺した過去を、レッドイーターは思い出してしまった。

殺した理由は、アラガミ信者達を率いて、本部の重要施設の破壊を計画していたからだ。

そうして、物心ついた頃から対人戦闘を強いられてきたレッドイーターの手は、血で汚れてしまっている。

レッドイーターは震える手を無視して、ヒカルの顔を見る。

彼女は無邪気な笑顔で、レッドイーターの瞳を覗いてくる。

その笑顔を守りたい、それはレッドイーターが今、初めて思った

言葉。

(・・・もう、これ以上、命を奪うのは嫌だ。これからは人を守る)

(無理だね、ガキが)

(ツッ!?)

最近全く出てこなかった裏の音が、頭に直接響く。

(くはは! お前が奪わないと決心しても、俺が奪うぜえ!?)

(・・・くっ)

(ガキみたいな思考しやがって。おい、ちょっと体変われ)

(・・・ヒカルさんか?)

このタイミングなら、いつでも精神世界に引きずり込まれる可能性が高い。レッドイーターは、闘う心の準備をする。

(お前さあ、気付いてんだろ? そいつの正体)

(・・・どういう意味?)

(あん? 俺に対してとぼけたって無駄だぜ?)

レッドイーターはその言葉に黙ってしまふ。

裏は、奇怪な笑い声を上げ、話を続ける。

(そんなに殺して欲しくなかったらさあ……)

裏は、くくく、と笑い、レッドライターが、今、一番したくない事を告げる。

(条件として、今から『2ヶ月以内』に、人間40人ぶつ殺させる)

(なっ!?)

その言葉を境に、裏の声は聞こえなくなる。

だが、意味は簡単だ。今から2ヶ月以内に、人間を殺すために入れ替わらなければ、レッドライターの人格を潰し、ヒカルを殺すのだらう。

「どうしたの?」

「……えと、なんでもない。そろそろ着くはず……」

レッドライターは、息を吸うことを忘れてしまった。

アナグラから、黒い煙が上がっていたのだ。

「え? 何あれ?」

煙の意味が判っていないヒカルは、煙に人差し指を指す。

だが、レッドイーターは、ヒカルの手を離し、無線機で、今頃もう戻っているであろうタツヤ達に連絡を取る。

発信音が3コールくらい鳴った頃に、ようやくタツヤの無線機に繋がる。

「……………どうしたんですか？」

『大変です!! レッドイーターさんは、そのまま彼女さんと一緒にどこか隠れてください!!』

「……………落ち着いて。何があつたんです？」

『アナグラを襲ったアラガミ信者達が、恐らくそちらの方へ……………』

レッドイーターの眼は、大きく見開かれる。そして、舌打ちと同時に通話を切り、酸素を胸いっぱい吸い込む。

外部居住区の人口は万単位、大声で声を出さないと聞こえ難くなる。

「皆さん!! よく聞いてください!!」

その大声に、周りの人間がレッドイーターに振り向く。

「今、武装したテロリストが、こちらに迫っているという情報を得ました!! この区画にいる住民は、別の区画に逃げてください!!」

！」

訊き返してくる人間はいない、恐怖の色で染まった住民達は、それぞれが一目散に走って逃げていく。

避難誘導が大体終わった頃に、レッドイーターは隣で不思議そうな顔をしているヒカルの手を取り、走るよ、と言って、逃げていった住民達と同じ方向へ走り出した。

「ちょ、ちよつと、よく判らないよう！」

「そのまんま！」

唐突な事態に、ヒカルは状況を理解できていないようだ。レッドイーターは、彼女のペースにできるだけ合わせながら走る。

そして200mくらいを走った頃には、彼女は息を切らしていた。

「……………ここで待ってて」

「はぁ、はぁ、はぁ」

荒い呼吸を繰り返しながら、ヒカルは頷いた。レッドイーターは彼女の頭を軽く撫で、再び走り出す。だが、走っている方向は、先程通った道、つまり逆走だ。

(いいねえ、40人いるかなあ?)

(……………今日だけは、やめてくれない?)

裏は、その言葉に、一瞬黙る、そしてレッドイーターの斜め上を
行く答えが返ってきた。

(……………分かったよ、今日だけな。その代わりに、2ヶ月を1ヶ月に
変更)

(……………以外だな)

本当に以外だと、レッドイーターは走りながら思った。

第三十四話、条件（後書き）

新しいiPhoneに機種変しました！

これでいつでも投稿可能です。やったね！！

第三十五話、人を超えた力

11:00

アナグラのエントランスを攻撃したアラガミ信者達は、出撃ゲートに置かれていた装甲車を乗っ取り、フェンリル治安部隊を蹴散らしながら爆走していた。

そんな邪教徒達が乗った装甲車の前に、巨大な火器を持った子供が立ち塞がった。

その巨大な火器は、昔、ヘリ等に乗った兵士が地上目標に対する制圧射撃用に使用する兵器だった。

M134、開発経緯から、通称ミニガンと呼ばれている、6本の銃身を束ねたガトリング銃。新しい銃器よりも、神機の開発が優先される現代では、こういつた旧世代の物を使う場合が多い。また、使用される弾丸、7.62mm x 51 NATO弾は、低純度オラクル細胞塗布版である。そのため砲身の一部をアラガミ防壁と同じ、P53偏食因子製の素材に変えており、所々明るいオレンジ色になっている。また、弾丸は巨大なボトル状の物体に詰め込まれており、それはM134の下部に取り付けられていた。

大量の弾丸や、砲を回転させる大容量バッテリー込みで100kg以上の重量。また、激しい反動のため、人間の体力では携行不可能の武器であり、子供どころか、大人すら持てるような代物ではない。

だが、それを携行する人間が、『人を圧倒的に超える力』を持っていけば、可能なのではないか？

子供、レッドイーターは片手でその武器を構え、6本の砲が回転しだすと同時に、毎分2000〜4000発の速度で弾丸を放つ。

空薬莖を撒き散らしながら無数に放たれた低純度オラクル細胞塗布弾は、装甲車のアラガミ防壁と同じ材質の装甲に小さなくぼみやがて大量の穴を作り出す。その時間、わずか10秒。

そして装甲車が止まったところで、レッドイーターはM134を放り捨て、ホルスターから拳銃を引き抜き、穴だらけの装甲車に向かって引き金を引く。威嚇射撃と言つものだ。

カンツッ！！！！ という甲高い音を上げ、弾かれた弾丸は地面に転がる。

「ヒッ！！！」

アラガミ信者の誰かが、そんな情けない声を出す。

レッドイーターは、銃を構えたまま、地面に転がる空薬莖を気にせずに、ゆっくりと歩き出す。

「か、構える！！！」

その言葉と同時に、アラガミ信者達は古いアサルトライフルを構える。

それを目にしても、レッドイーターは構わず歩み寄る。

距離が5mを切ったところで、レッドイーターは口を開く。

「……………最後の警告です。今すぐ武器を捨て、立ち去りなさい」

投降ではない、立ち去れ。

つまり逃がしてやる。と言うことだ。

頭の回転が速い信者は、アサルトライフルを捨て、急いで装甲車から飛び出す。それに続いて他の信者達も逃げていった。

レッドイーターは、誰もいなくなると同時に、無線機を手にし、再びタツヤに連絡を取る。

『レッドイーターさん!! 無事でしたか!?!』

「……………逃げられた」

『あんた何やってんの!?!』

「……………というわけで、支部長によろしく」

『よろしく じゃないでしょ!! えっ!?! えっ!?! レッドイーターさん戦闘したの!?!』

「……………武装解除させたら逃げられた」

『大人を武装解除させる7歳の子供って何!?! 怖いです!?!』

『レッドイーターと話してんのか？ タツヤ』

『あ、リンドウさん、聞いてくださいよー』

そこまでの所で、レッドイーターは通話を切り、M134を拾い上げる。

実はこれ、レッドイーターが昔、連合軍から奪ったものである。

そして威力向上のために、オラクル細胞を塗布し、フェンリル極東支部に配属からしばらく経った頃に、外部居住区の、大人が通れないとても狭い路地に隠しておいたのだ。

部品の劣化の可能性が気になったが、特に問題なかったので、そのまま使った、ということである。

また隠すのも面倒なので、肩に担ぎながら、レッドイーターはヒカルを待たせている方向へ歩き出す。

しかし、この世界の本当の脅威は、人ではなくアラガミであることを、レッドイーターは、この時少しだけ忘れていた。

バゴンー！

そんな破壊音が、近くのアラガミ防壁から聞こえた。

第三十五話、人を超えた力（後書き）

今回はこれぐらいです

ちよつと水戸の実家に行つてきます、無論、部屋の片付けの手伝い
ですけどw

できれば夜ぐらいに更新しますね

ちなみに作者は銃器に詳しくないですw

第三六話、無力（前書き）

師匠のPC借りましたw

第三六話、無力

11:10

アラガミ防壁は気休め程度だ。

もちろん人間の力で破れる程脆い訳ではない。

だが、たとえオウガテイル程度のアラガミでも、嗜好がアラガミ防壁に使用されているP53偏食因子と合わせれば、簡単に突破できる。

そして、天高く、厚い装甲を持つアラガミ防壁が破壊されていても、アラガミ防壁という籠に入っている人間達は、最終装甲が破壊されるまで気づけないのだ。

結果、最終装甲を突破したと同時に、アラガミ達はその大きな口で、全てを喰らって行く。

そして今、黒い鎧と、髪に紫電を纏った1体のアラガミが、『一撃』で防壁を破壊した。

そのアラガミは、外見こそボルグ・カムランだが、その体は一回り、二回り大きく、ランスのように鋭い尾針は、神機の剣身と似たような形をした大剣になり、両腕に付いている盾の部分は、神機の捕喰形態と同じ、黒いアギトとなっていた。

そして、胸に隠された口を開き、一瞬で驚きを隠せない人間たち

を喰らった。

その光景を見た人々は、叫び、生き残るために必死に足を動かす。

だがそれも一瞬で、アラガミが放った数本の光線が、人の体を、次々と貫いた。

まるで、本当の神のような威厳を持つアラガミは、赤い服を身に付けた少年を見て、ゆっくりと少年の走って行った方向へ歩き出した。

爆発音が耳に入った瞬間、レッドイーターはヒカルが待っている所へ、周りの住人にシエルターに行くように指示をしながら走り出した。

レッドイーターは、今までにない恐怖感に包まれていた。

感じた事がないアラガミの気配、それは、他のアラガミとは比べ物にならない威圧感を放っていた。

「ヒカルさん！！」

人混みを避けながら、ヒカルの名前を呼ぶ。

だが、その声は、後ろから聞こえる人の悲鳴と、断末魔によって

打ち消された。

レッドイーターは、M134を構えながら、すぐに後ろを向く。

まず彼の眼に入ったのは、

地獄。

その言葉が似合う光景だった。

ボルグ・カムランに近い姿をし、白銀の鎧とは逆の、漆黒の鎧を纏った巨体が、両腕に付いている神機の捕喰形態に似た口と、胸に隠された口で、逃げ惑う人々を喰っていたのだ。

敵の行動を見ずに、レッドイーターは引き金を引く。

数秒間高速で回転し、連続して鳴る銃声と同時に、弾丸の嵐が、黒い巨体を襲う。

殺せはしないが、低純度のオラクル細胞を塗布した弾丸は、アラガミの動きを止められる事で有名だった。

なのに、そのアラガミは、構わず歩み寄ってくる。

弾丸を撃ち尽くしたレッドイーターが理解したこと、それは、

「……………狙いは僕か」

このアラガミは、レッドイーターを目的に侵入した、ということだ。

M134を放り捨て、無線機を手取る。

『こちら、フェンリル極東支部！ 要件をどうぞ！』

「雨宮ツバキ、リンドウ、黒沢タツヤは今そちらにいますか？ 彼らに僕の神機を持って来させてください。場所は、侵入したアラガミの近くです」

『分かりました！』

レッドイーターは、通話を切ると同時に、横に跳ぶ。

その瞬間、地面は溶けるどころか、消失した。

レッドイーターの眼は、空から光線が落ちてきた瞬間をしっかりと見ていた。

嫌な汗を掻きながら、レッドイーターは武器を作り出そうとする。

だが、武器を握るための手を止めてしまう。

当然だ、彼はいままで人前でオラクル操作能力を見せていない。

その理由は2つ。神の細胞を自由に扱える事を、もしアラガミ信者達が知ったら、フェンリルへの反発感情に一気に火が点く。

そして、この力を恐れられ、人にこれ以上嫌われなくなかったから。

アラガミの出す光線を回避しながら、レッドイーターは、出して嫌われるか、出さないで見殺しにするか迷っていた。

その時、レッドイーターの視界の端に、青みが掛った長い銀髪を持った少女が入った。

アラガミの尾の先に付いている大剣が、レッドイーターの頭に振り落とされる。

レッドイーターはその攻撃を回避し、ルナティック・ツインを両手に握る。

その眼には、迷いの色は無かった。

誰かを守るのなら、ヒカルを守るなら、彼は、嫌われても構わなかった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！
！……！」

地面を蹴り、一瞬で黒いアラガミとの距離を詰める。

そして、振り下ろされる鉤爪は、その巨体を、

切り裂けなかった。

「なっ！！」

弾かれた訳でも、折られた訳でもなかった。

ただ、黄金の刃がアラガミに触れた瞬間、空気に溶けていったのだ。

そのアラガミは、左腕のアギトを、レッドイーターを薙ぎ払うように振るう。

レッドイーターは盾を作り、その攻撃を防ごうとする。

そしてまた、アラガミの体に触れた瞬間に、盾は空気に溶け、その横に振るわれたアギトは、レッドイーターの華奢な体を吹き飛ばす。

勢いよく吹き飛ばされ、家を何件も貫通しながら、地面に転がる。

「ふ、ふほ！ く…そ！」

レッドイーターは傷だらけの体に鞭を打ち、起き上がる。

そうしている間に、アラガミは歩いて近寄ってくる。

「まだ……まだああああ……」

キルサイズを作り出し、体を捻りながら、渾身の一撃を、アラガミに向かって振るう。

そして、また消える。

その瞬間、レッドイーターの足元が光り、そして爆発した。

「ぐあああああああああああああああああああああ
！」

肌が焼け、身体中にダメージを負い、レッドイーターは地面に膝を着く。

先程吹き飛ばされた所の近くにいたヒカルが泣きながら、止めて、と何度も言っているが、無情にもアラガミは尾先に付いている大剣を、レッドイーターに向かって振り下ろす。

だが、その大剣は、何発もの弾丸によって止められた。

レッドイーターは、弾丸が来た方向に眼をやる。

「レッドイーター！！」

何台もの装甲車の先頭に乗っていたリンドウが、神機ケースをレッドイーターに向かって投げた。

レッドイーターは、飛んでくるケースに右手で触れ、バカン！という音と共に、開いたケースから神機を取り出す。

「こいつはどうだあああああああああああああああああ！

！」

アラガミの真下、4本足のほぼ真ん中にレッドイーターは跳び込み、強化ノコギリを振り上げる。

今度は消えなかった、だが、手応えが少ししかない。

わずかに傷ついた事へ怒ったのか、アラガミはボルグ・カムランと同じように、体を360°回転させ、地面と水平にした長い尾が、近づいてくる装甲車を破壊する。

幸い、乗っていた神機使いのほとんどがベテランだったのか、装甲車から飛び降り、尾による攻撃を回避した。

だが、行動の終了と共に、アラガミは、破壊され、穴の開いたアラガミ防壁に向かって走り出す。

「逃げるつもりか！」

「止める、ツバキの嬢ちゃん」

「ゲンさん……」

咄嗟にツバキは神機を構えるが、近くにいた、ゲンと呼ばれる歳を取った神機使いに止められた。

そんなことをしている間に、アラガミは防壁を通り、外へ出ていった。

レッドイーターは、それを確認し、力尽きて地面に倒れる。

「レッドイーター!？」

リンドウは倒れたレッドイーターを抱き上げ、何度も彼の名を呼ぶ。

息はしており、死んではないが、神機使いでも無視できないレベルの重症だった。

リンドウは少し考えた後、自分の腕輪を、レッドイーターの腕輪に付ける。

「リンクエイド」

その言葉と同時に、レッドイーターの焼けた肌はある程度癒え、傷口も塞がる。

それと同時に、リンドウの体から力が少し抜け、脱力感を感じる。

『リンクエイド』

大怪我を負った神機使いの体内にあるオラクル細胞を、他の神機使いが活性化させ、戦闘中なら戦線復帰できる程度まで回復させる、神機使いだけが持つ能力だ。

だが、リンクエイドをした側は、それを行うと同時に体力を消費し、された側とは逆に危険な状態に陥る。

それを承知で、リンドウはレッドイーターにリンクエイドしたのだ。

その後、救援隊が到着し、レッドイーターは病室へ運び込まれた。

時代設定&武器設定ver 1 (前書き)

これに伴い、前回より前の部分で、作者が「あ、これ矛盾している」と思ったところを直しました。読み返して探してみてもいいかがでしょうか？w

もしもまだ直っていない箇所があればご指摘ください。

時代設定 & 武器設定 ver 1

時代設定

2052年

理論上では、神機という武器は想定されていたが、これを使用するための「偏食因子」の人体投与に難があった。

同年、マーナガラム計画始動。

2053年

胎児段階でP73偏食因子を埋め込まれた人間、ソーマ・シッケザールが生まれると同時に、その母であるアイーシャ・ゴージュ氏がアラガミ化。

計画の失敗と同時に、神機開発の研究も凍結される。

2055年

ペイラー・榊博士により発見された低強度のP53偏食因子が、人体への影響が少なく、神機との適合を実現した。それに伴い、神機の研究が再開。

アラガミ防壁の研究がされる。

レッドイーター誕生。

それと同時に、妊娠中にオラクル細胞を大量に吸ってしまったレッドイーターの母がアラガミ化。マーナガラム計画時、アラガミ化したアイーシャを止めたのと同様に、P53偏食因子を押し付けられるが、それから逃れるために、病院から脱走する。

レッドイーターから、未知の偏食因子が見つかる。

2056年

フェンリルは、ついにピストル型神機の実用化に成功。また、それと同時に、神機を操る人間、ゴッドイーターが誕生した。

アラガミ防壁の開発にも成功。支部を覆うように設置された。

ゴッドイーターの誕生の後、本部周辺を彷徨っていたアラガミ化したレッドイーターの母は討伐される。

2059年

雨宮ツバキが極東支部に入隊、ゴッドイーターになる。

レッドイーターはフェンリル本部直轄の特殊暗殺部隊に入隊させられる。

2060年

極東支部支部長に、ヨハネス・フォン・シックザールが就任。

それと同時に、ペイラー・榊もフェンリル極東支部技術開発統括責任者を、シックザールに任される。

2061年

雨宮リンドウが極東支部に入隊、ゴッドイーターになる。

2062年

遠近どちらにも対応可能な可変式神機が試験的に開発され、レッドイーターの神機となる。

フェンリル極東支部に、レッドイーターが配属される。

2065年

核融合炉を人為的にメルトダウンさせ、その時に生じる核爆発でアラガミを殲滅する作戦を、連合軍は計画し、実行するが、核爆発はアラガミに捕喰され、組織を維持する人員にも事欠く状態になった連合軍は、その名前だけが残る、有名無実の存在になった。

この連合軍の作戦は、シックザール支部長曰く、「旧人類最後の足掻き」とのこと。

作戦後、逃げたアラガミを討伐していたリンドウは、ディアウス・ピターと戦闘し、撃退に成功する。

その後、その場を訪れたりディア・ユーエヴナ・バザロヴァによって、クローゼットに隠れていたアリサが発見され、保護される。

2066年

極東地域のアラガミが爆発的に増加。本格的に激戦区になった極東では、エイジス計画が実行中であり、人々は人類最後の希望をアラガミが破壊しに来たのかと恐怖した。

2069年

榊博士によつて、新型用のP53偏食因子が発見され、フェンリルは、レッドイーターの扱う可変式神機と同じ能力を持つ、新型神機の適合者創出を乗り出す。

だが、新型神機の適合者は数少なく、2071年前半では、まだ10人いるかないか程度だった。

フェンリルロシア支部が誕生。

2070年

2070年の終わり頃、15歳を迎えたアリサ・イリーニチナ・アミエーラは、フェンリルロシア支部初めての新型神機使いになる。

2071年

主人公が極東支部に入隊、極東初めての新型神機使いになる。リンドウ復活。

これは、ゲームをやってみてください。やったことの無い人は、2100円（今はどうか不明。少なくとも安いことは確か）で、ゴッドイーターバースト<アペンド版>を買って、ゴッドイーター（

無印)のUMDを友達から借りるなどしてみれば良いです。

武器設定

オラクル操作能力

キルサイズ

黒と赤のフレームと、中心に大きな赤い邪眼を持つのが特徴の大鎌

大鎌の刃の部分は根元から少々離れた位置に存在しており、黄金色の光を放っている。主にこの部分が攻撃に使われる。射出も可能であるが、命中精度は悪い。

鎌の刃とは逆の部分に、ひし形の中に邪眼が入っている物体5つと、その先に斧のような黄金色の光を放つ刃が付いており、レッドイーターは主にこれを爆発させて、その際生じた爆風により、驚異的な速度で敵を切っている。

また、精神世界では柄を除く全てを範囲ギリギリまで巨大化させていた。

ルナティック・ツイン

全体的に黒い双剣。

剣の根元から刃の根元にあたる部分には、キルサイズと同じ邪眼がついている。

表のレッドイーターの案により、刃の部分が鉤爪のような形になる。ひし形の中に眼が入っているパーツは鉤爪に5つ並べられており、その先を結ぶように、黄金の鉤爪が存在している。

通常兵器

フエンリル治安部隊標準装備のアサルトライフル、及び拳銃

詳細は、ゴッドイーター 救世主メアの帰還3巻にて、アサルトチームが持っていたものを参照。

M134

レッドイーターが特殊暗殺部隊所属中に、連合軍から奪ったもの。

レッドイーターによって改造されており、パーツを所々アラガミ防壁と同じ素材に変更しており、そのため低純度のオラクル細胞を塗布した弾丸を使用できている。

低純度のオラクル細胞を塗布した弾丸は、対人戦や破壊活動では、高い戦闘能力を発揮し、アラガミも撃退する事が可能となっている。

ちなみに、総重量は100kg以上あるが、レッドイーターは生ま

れた時から偏食因子の代謝を受けており、軽々と持っている。

第三十七話、第一種接触禁忌アラガミ

11:40

「支部長室」

「……第一種^{タブー}接触禁忌アラガミ、<スサノオ>か」

「ついに現れたねえ」

デスクに置かれた資料に目を通しながら、シックザール支部長は嬉しそうに呟く。

彼の目の前に立っているサカキ博士もまた、支部長とは別の意味で嬉しそうであった。

接触^{タブー}禁忌アラガミ。

捕喰を行なうに連れ、外観どころか、元々危険な能力がとても強力になったアラガミ達。

その中でも、第一種、第二種の分類に入るアラガミは、通常の接触禁忌アラガミ以上に強力であり、また、別の理由からも神機使い達を苦しめる。

「アラガミの発する偏食場パルスが強力で、体内のオラクル細胞どころか、肉体や精神にも干渉するアラガミ……。興味深いねえ」

博士は笑いを堪えるように、手を口に添える。

支部長は、短いため息を吐き、博士との会話を始める。

「レイドイーター君の状況は？」

「意識不明の重体さ。外傷はほとんど癒えているけど、未だに意識を取り戻さない」

「怪我については、リンドウがリンクエイドした、と報告されている」

「意識が回復しないのは、偏食場パルスの影響……かもね」

博士は添えていた手を口から離し、いきなり真面目そうな顔をし、細長い狐目に隠された眼を露にする。

支部長の方も、デスクの上に置かれているノートパソコンを操作できるように、近くに寄せる。

「あれのコアは、絶対に手に入れなければならない」

「『計画』を隠すためのアラガミ防壁をアップロードするためにか
い？」

「言わなくても分かっている筈だが？」

支部長は、慣れた手つきでキーボードを叩きながら、スサノオの情報を集める。

博士は、話しても邪魔にはならないと知っているため、口を再び開く。

「レッドイーター君が、外部居住区である能力を行使したらしい」

「君が先日私に話したやつかい？」

「ああ。そろそろ、タツヤ君達に話さなくてはならない」

「任せるよ」

「そうかい」

その一言を残し、博士は支部長室を後にした。

13:00

「サカキ博士の研究室」

「集まってくれてありがとう、3人とも」

サカキ博士はいつものように電子ボードの横に立ちながら、ソファに座るツバキ、リンドウ、タツヤの顔を見ていく。

「話って何だ、サカキのおっさん？」

病室に運び込まれたレッドイーターの手をさっきまで握っていたリンドウは、今すぐにでも戻りたい感情を押し殺し、博士を睨みつける。

博士の方も、いつもとは打って変わって、笑っているように見えていた狐目を微かに開き、じっと3人を見ていた。

そして、電子ボードに、映像が映し出される。

それを見たツバキは、驚きを隠せずに立ち上がり、口を開く。

「これは……!!」

「あんときのか……!!」

リンドウもその映像に釘付けになり、それ以降黙り込んでしまう。

唯一タツヤだけが、不思議そうな顔でその映像を見る。

「何ですか？ この映像。真ん中で空中に立っている、赤い髪の子供は」

「レッドイーターだ」

「え!？」

ツバキの回答に、タツヤは目を丸くする。

最初は、彼が不良みたいな人物だったのかな？　と思ったが、その考えはすぐに間違いだと悟った。

電子ボードの映像が変わり、レッドイーターが黒い大鎌を振り、十字架らしき物体から生えた触手に拘束されたグボロ・グボロを両断している映像になった際、彼の表情が明らかに別人だったからだ。

「サカキのおっさんも……、レッドイーターがもう一つ人格を持っていると思うているのか？」

「……可能性は否定できないね。今回話したいのは、それも含めて多くあるんだ」

博士は電子ボードを凝視しているリンドウに話題を聞かせ、顔をこちらに向かせる。

「彼の持つ大鎌や十字架、あれは空気中のオラクル細胞をかき集めて作り出している、って僕は推測しているんだ」

「……生身の人間による、オラクル細胞の制御ですか」

ツバキはそう言いながら、ソファに座りなおす。

「かもしれない。実際、アラガミの結合を断ち切れるのは、オラクル細胞を用いた神機だけなんだ。だがもしも、人為的に空気中のオラクル細胞で武器を作り出し、それをアラガミにぶつけたら、同じ効果が得られると思わない？」

「でも、オラクル細胞だって生き物だろ？　そんなもん操作するなんて」

「不可能じゃない。実際、神機だって脳からの命令に従って装甲を展開するんだからね」

その言葉と同時に、電子ボードの映像が再び変わる。

「なんだこれ？」

リンドウは気が抜けた表情で、電子ボードに表示された写真を見る。

フェンリル治安部隊の制服を黒く染めた物を着ている人間達の、前列の人間は座り、中列の人間は中腰になり、後列の人間は背筋を伸ばして立っている写真だ。

「よく見てごらん」

博士は人差し指を立てて、電子ボードのある部分を指差す。

「「「!!!??」」」

そこには、女性隊員達に頭を撫でられ、愛でられているレッドイーターが座っていた。

だが彼は、気を失ったような目をしながら、カメラのレンズとは全く違う方向に顔を向けていた。

「本部直轄の特殊暗殺部隊「レイヴン・シールド」」

「特殊暗殺部隊ってどういう事だよ!？」

血相を変えて、リンドウがソファから勢いよく立ち上がり、博士に近づく。

「これを見つけたのは、僕がレッドイーター君の許可を取らずに、勝手に部屋を調べていた時さ」

「おっさん何やってんの!？」

「まあまあ、まずは席に座りなさい」

「流すなよ!」

「落ち着けリンドウ」

「そうですね。例え暗殺部隊？に所属していても、レッドイーターさんモテモテで微笑ましい写真じゃないですか」

「ある意味憎たらしい言い方するね!？」

そう言ってる間に、リンドウは落ち着きを取り戻し、ソファに座る。

「で、これを発見して、本部に訊いたんだ。そしたら、あるデータが送られてきてね、プリントアウトしたんだけど」

博士はそう言って、どこからか資料を取り出し、3人に配る。

「これは!？」

その資料には、色々な数字が書かれており、ツバキ以外は特に判らない様子で首をかしげる。

ツバキは、テーブルに資料を叩きつけ、いつもとは違って冷静さを欠いた様子で、黙り込む。

「おっさん、これは？」

「……………。……………レッドイーター君の、人との戦闘をした際の身体能力のデータ数値さ」

「……………レッドイーターは、あの歳で人を殺しているのか？」

「アラガミ信者達や、フェンリルに牙を剥いた連合軍の兵士の暗殺が主な仕事らしいけど、時には激しい戦闘をしたらしい。中でも彼は、他の隊員より多くの任務をこなして行ったらしいね」

「クソ！ 本部の奴ら、腐ってやがる！」

リンドウは吐き捨てるように、資料をツバキと同様にテーブルの上に叩きつける。

博士も同じ心境なのか、叩きつけられた2人資料を回収し、適当に放り投げる。

そして、再び彼らに向き直り、口を開く。

「僕の推測だと、任務を遂行している間に、生き物の命を刈り取るのが大好きな人格が形成されていき……………」

「あの日に、完全に目覚めた？」

「ツバキ君のいう通りかもね、そんな話は本部の人達は言わなかったからねえ」

博士はそんな事を言いながら、いつも彼が座っている、ディスプレイに囲まれた席に座り、備えられているキーボードを打ち、それに応じて電子ボードに表示されている映像が変わる。

そして表示されたのは、レッドイーターを襲ったアラガミ。

「第一種接触禁忌アラガミ、スサノオ。現在、世界中で少数が確認されているアラガミだよ」

「スサノオっていうのか、あのアラガミ……。で、このアラガミがレッドイーターの意識不明に何の関係が？」

「関係大有りかもね。まあ、落ち着いて聴いてくれ、リンドウ君」

「了解、了解っと」

「レッドイーター君の出生についても、本部から送られてきたんだ、彼の母親は、彼を生んだと同時にアラガミ化、ちょうど僕がP53偏食因子を発表した後で、それを用いて撃退に成功。その1年後、神機使いが生まれ、彼の母親は討伐された」

「「「……………」」」」

とても重い空気になるが、博士は口を止めない。

「そして、レッドイーター君の血液中に、未確認の偏食因子が発見され、それ以降、神機使いになるための過酷な訓練を積みされたよ。うだよ。まあ、とりあえず、僕はこの偏食因子を『P103偏食因子』と呼ぶことにした。このP103偏食因子は、P53偏食因子や、友人の計画に使用されたP73偏食因子以上の力を持っているんだ」

「そんなもんがあるんなら、さつさと他の神機使いにも」

「ところがリンドウ君、本部がモルモットにその偏食因子を投与したら、どうなったと思う？ そのモルモットはね、投与されて数分後、木っ端微塵に爆発したんだ。その際のデータによると、モルモットの体温が全体的に急上昇したらしい」

「沸騰でもしたのか？」

「普通に考えるとそうなるね。そして、その木っ端微塵になったモルモットの肉は、すぐに消えていった、まるで何者かに綺麗に食べられたように……ね」

「……うおえっ」

タツヤはこみ上がる嘔吐感を必死に耐える、嘔吐感が引くまで、博士は話を中断したので、吐くことはなかった。

「すみません」

「落ち着いたようだね？ じゃあ、続きなんだけど、次に、胎児段階で投与することになった。しかし、その実験においても、その実験台になったモルモットの子宮が大爆発を起こして、失敗。つまり、

P103 偏食因子の投与は不可能であり、身に付けるには、母親に色々な条件込みで出産と同時にアラガミ化する必要があるんだ」

「悪夢じゃないか……」

「実際悪夢だったらしい。病院の患者や医師のほとんどは捕喰され、1年後の討伐作戦でも、神機使いの半分を失う程の大被害だったらしいからね。で、ここで本題んだけど、レッドイーター君の偏食因子はあまりにも特殊すぎて、第一種接触禁忌アラガミの『偏食場パルス』の影響を受けやすいのかもしれない」

「偏食場パルスとは？」

ツバキが真剣な目つきでスサノオの映像を見ながら、博士に訊ねる。

博士は、待ってましたと言わんばかりにキーボードを押す。

スサノオの映像の隣に、第一種接触禁忌アラガミとは？ と表示される。

「偏食場パルスというのはね、どのアラガミも出している物なんだけど、第一、二種接触禁忌アラガミに関しては、そのパルスが強すぎて、体内のオラクル細胞を不安定にさせ、肉体や精神をも蝕むんだ。レッドイーター君は、君達よりもアラガミに『近い』力を持つから、受ける影響力も半端じゃないのだと思うよ」

「じゃあ、どうやって戦えば良いんだよ？」

リンドウは、腕を組んで、首をかしげる。

「そもそも、影響を受けるのは、長時間戦闘するか、連続で戦うかのどちらかなんだ。だから、短期決戦に持ち込めれば勝算はあると思うよ。だが、先の理由で、レッドイーター君は影響を受けやすいから、すぐにその症状に見舞われるんだ」

「なるほどね、納得いったよ」

リンドウは腕組みを解き、両手を膝に乗せる。

これで終わったと思ったのが、タツヤは席を立つ。

だが、博士は流れるようにキーボードを叩く。

「今届いた映像なんだけど、見てくれないかい？」

「ほえ？」

電子ボードに、少々画質の悪い映像が映る。

「これって……」

タツヤは、呆然としながら映像を見る。

それは、レッドイーターが大鎌を振るうが、その大鎌がスサノオに接触した瞬間、黒い塵になって消えていく動画だった。

「どうやら、この武器もパルスの影響を受けるみたいだね。解析の結果、構成の為に結合しているオラクル細胞が、接触と同時に不安定になり、強制的に結合崩壊しているんだ」

「レッドイーターの能力は封じられた……か」

ツバキは、顎に手を添え、考え込んでしまう。

「もう終わりだろ？ また何かあったら連絡よろしく」

「そうだね、判ったことがあれば、また呼ぶよ」

「ありがとうさん…っつと」

リンドウは、頭をポリポリと掻きながら立ち上がり、ボーっとしているタツヤの肩を軽く揺する。

「行くぞ」

「あ、はい！ 失礼しました！」

そのままタツヤは、リンドウと共に部屋を出て行った。

第三十七話、第一種接触禁忌アラガミ(後書き)

禁忌＝タブーと読むので忘れずにw

第三十八話、怒り

11月6日

「病室入口前」

2:00

『……あううー』

「ん？」

病室から小さな呻き声が聞こえ、暗い廊下をぶらぶらと歩いていたらリンドウは顔を顰めた。

現在、レッドイーターと、ある『女の子』しか病室にはいないので、恐らくどちらかが目を覚ましたのだろう。

だが面会時間は過ぎているため、朝になるまで会えない、なのでリンドウはその場を去った。

「病室」

2:05

「……むにゃ？」

重く感じる目蓋を開き、レッドイーターは自分の状況を確認する。

明かりが点いていないため、暗く、視界が悪い。だが置かれている物のシルエットや、自分が寝かせられているベッド、胸に貼り付けられている測定器や、手首に付いている点滴用の針やそれに繋がっているチューブを見て、病室だと理解した。

「アラ…ガミに…負けた？」

記憶が曖昧で、レッドイーターはボーっとしながら、上半身だけベッドから起き上がり、点滴用の針を強引に引き抜く。

抜かれた瞬間、針が刺さっていた部分はすぐに癒える。

上半身は測定器に繋げるための吸盤を付けるために裸になっていた。だが、彼は別に恥ずかしい訳ではなく、ただ当然だな、と心の中で呟きながら吸盤を外していく。

その時、妙に足が動かない気がしたレッドイーターは、足が隠されている掛け布団を見る。

そこに広がるのは、青く、長い銀髪。

その正体は、言わなくてもレッドイーターは判っていた。

心臓が、バクンバクンと、はち切れんばかりに鳴る。

その青い銀髪を持つ子供は、軽く寝返りを打ち、顔をレッドイーターに向けた。

自分とは違う、天使のような、本当に可愛らしい子供の寝顔。

いつの間にか顔が赤くなっているレッドイーターは、ヒカルを視認しないために横を向く。

だが、その時、レッドイーターの目に、何個もシルエットが重なり、それぞれが何なのか判らない小さな物体が、病室に備えられている机に置かれていた。

(……嫌な予感しかしないんですけど)

だが、とりあえず、近くにあった懐中電灯を手に取り、スイッチを入れる。

パツと、机の上だけが明るくなり、そのシルエットの正体が明らかになる。

その正体を見たレッドイーターの手から、スルリと懐中電灯が抜け、ベッドの上に落ちる。

レッドイーターの顔は、既に赤から青に変わっていた。

彼が見た物体、それは、

に飛び込む。

だが、その瞬間、リンドウの正面から黒い影が迫った。

「何しとんじゃゴリアアア!!」

「ゴフウツツ!!」

元々病室に備えられていた机（猫耳カチューシャ複数が乗っかっている物）を、レッドイーターはリンドウの腹に叩き込んだ。

その衝撃でリンドウは後ろに飛ばされ、壁に叩きつけられる。

「ちょー！ リンドウさん!?!」

たまたまそこを通りかかった今日の出撃前のタツヤは、持っていたバックパックから回復錠を取り出し、リンドウに近寄る。

だがリンドウは気を失っており、返事どころか、ピクリとも体を動かさない。

タツヤは、慌てて病室の入口を見る。

そこには、床に散らばった様々な猫耳カチューシャを踏み壊しながら、ゆっくりとこちらに近づいてくるレッドイーターだった。

ちなみに、レッドイーターの後ろに居るヒカルは、あわわわと、この訳の判らない状況に戸惑っている。

（えー!?! ウソウソウソ!?! やだー！ まだ死にたくないよ！

バンジーとか何でもするから待ってー！！ ……あ、やっぱりバンジー無理いー！！）

タツヤは、生命の危機を感じて、そこから動けなくなり、ただ体を震わせる。

「アアアアアアアアア」

レッドイーターの黒い目から放たれる、身体を鋭く突き刺すような視線に、ついにタツヤは震える事すらできなくなった。

レッドイーターは右腕をゆっくりと上げる。

最初、タツヤにはその行動で何をするのか考えられなかった。

しかし、パリンツ！ という、ガラスを割ったような音が、タツヤのバックパックからしたため、恐る恐る確認する。

その瞬間、バックパックから、黒い塵が大量に飛び出し、レッドイーターの開いた手元に集まる。

レッドイーターは微量なオラクル細胞を集め、作成した無数の小さい針で、タツヤのOアンプルのガラス管を割ったのだ。

黒い塵は、レッドイーターの小さい掌に凝縮されるかのように集まる。

そして、彼は、黒い塵を掴むように、指を曲げ、引きずり出すように腕を下げていき、黒い塵から武器を作り出す。

そして、その手に握られた物は、

（……ハリセン！　ハリセンだぁー！！！　しかもデカッ！）

タツヤが心の中で叫んだ通り、巨大な（彼の目測だと、1m程）ハリセンが、レッドイーターの手に握られていた。

だがタツヤは忘れてはいない、そのハリセンはオラクル細胞でできており、既存のハリセンとは性質が全然違うと。

つまり、殺傷能力は絶大なのである。

レッドイーターは、無言でハリセンを肩に担ぎ、余った手でリンドウの服の襟を握り、エレベーターの方向へ引きずっていった。

ただただ呆然とその光景を黙って見る事しかできなかったタツヤは、先程の状況の理由を集める事にした。

タツヤは、レッドイーターの彼女（と、タツヤを含めて周り）が思っている（に話を訊くことにした）。

「……えと、ヒカルちゃん？　ちょっと話を訊いても良い？」

「はい？」

「ガハッ！！」

微笑みながら首をかしげたヒカルが可愛いすぎて、タツヤは振り返って壁に額を勢い良くぶつける。

ちなみに、レッドイーターが意識不明の間、主に彼と任務に出る
タツヤと兩宮姉弟は、レッドイーターの容態を確かめるためにアナ
グラに訪れていた彼女から自己紹介を受けていた。

タツヤは、額にジンジンと感じる痛みのおかげで、正常な思考回
路に戻る。

再び振り返り、ヒカルの顔をしっかりと見て、口を開く。

「（ぼたぼたぼた）ヒカルちゃん、レッドイーターさん怒っていた
けど、原因とか知っているかな？」

「その前に鼻血を止めないの？」

再び首をかしげるヒカルを見たタツヤは、いつの間にか出た鼻血
が更に激しく噴出したのに気付き、慌ててポケットからティッシュ
を取り出し、ごしごしと拭く。

「失礼しました。で、レッドイーターさんが怒っていた原因って？」

「うんとね、30分くらい前かな。朝食を運ぶのを手伝っていた
んだけど」

第三十八話、怒り（後書き）

次回に続く！！w

第三十九話、ヒカルの回想

「射撃訓練場」

9：10

基本、ここは治安部隊所属の役員しか使わないため、今は誰もいない。

そう、ある少年と青年を除いて、誰一人として……。

バンッ！……！

「危なああああ！！」

発砲音からほんの僅か間を置いて壁に弾丸が当たり、弾ける。

叫んだのはリンドウである。

ある理由で、少年の逆鱗に触れた彼は、現在射撃訓練場で、レットイーターの射撃訓練で、狙われる的として発砲されまくっていた。もちろん、リンドウは自分の限界に近い反射速度で弾丸を避ける。そして、発砲をした少年を睨みつける。

その少年改めレットイーターは、脱がされていたバリアントモツ

ズを着て、身長がマガジンを置く台に届かないという理由から台の上に拳銃を両手で持ち、狙いを定めながら立っている。

その手に握られているのは、デザートイーグルと呼ばれる大口徑マグナム自動拳銃だ。これも、レッドイーターがある任務で連合軍のとある銃マニア（任務のため殺害した）の部屋から盗んだ代物である。

グリップの前後幅は短く、レッドイーターの手にしっくりくるため、基本的に暗殺以外の任務での非常事態時は、彼はこれを使用していた。威力が高く、ボディーマーを着た兵士も撃ち殺せるため、戦力としては信頼できる一品だ。

レッドイーターは睨んできたリンドウに、逆に鋭い視線を浴びせる。

ふっ、と鼻で笑い、レッドイーターは引き金に指を掛ける。

「……………あとどれくらい持つんです?」

「別の質問を要求する!」

バンバンバンツッ!!!!!

躊躇無くレッドイーターは引き金を引く。リンドウは人の限界を超えて、ドラマのような超人的な身のこなしで弾丸を避けていく。

事の始まりは、レッドイーターがヒカルから聞いた話からだった……………。

「病室」

8時25分

まず、レッドイーターは、起きたと同時にヒカル抱きつかれた。

泣きながら自分の胸に顔を埋める彼女に、レッドイーターは片手で頬をポリポリと掻きながら、

「……………ありがとう」

余った手をヒカルの頭の上に乗せ、優しく撫でる。そして、レッドイーターは先生を呼ぶが、返事は返ってこない。

「……………出てるのかな？」

ちょっとした怪我が死に繋がる戦場から帰ってくる神機使い達の手当てをしに行っているのだろう、とレッドイーターは勝手に結論を出す。

まあ、そんな事より、もっと気になる事があるのだが。

(……………夜中に『これ』を見て絶叫したと思うんだけど……………、
彼女は起きなかったのかな?)

彼の言う『これ』とは、ベッドの隣に備えられている机に置かれ

ている、大量のカチューシャ（猫耳が付いている）だ。

レッドイーターは、夜中に目を覚まし、近くにあつた懐中電灯でそのカチューシャを見た際、絶叫と共に意識を失ったのだ。自分でも、夜中に出すような音量だとは思っていないが、それでも彼女の様子を見ると、それで起きたとは思えなかった。

「……………ねえ、夜中に音聞こえなかった？」

唐突だが、とりあえずレッドイーターはヒカルの顔をハンカチで拭き、訊いてみた。

「なにかあつたの？」

首を軽く傾げて、頭の上に？を出すヒカルは、どうやら本当に起きていないようだった。

「それより、朝ご飯食べよ？」

レッドイーターが質問を続ける前に、ヒカルは別の机からおかゆを持ってくる。

点滴で栄養を補給していたレッドイーターは、久しぶりの食事を味わいながら、もぐもぐと食べていった。

食べ終わった後、10分くらい2人で話し合いながら、レッドイーターは情報を集める。

そして、彼女に部屋の場所とIDを教えて、服を取ってきてもらう事になった。

「……………リンドウさん達と自己紹介済ませたんだ」

落ち着いた口調で独り言を呟き、レッドイーターはベッドに再び体を預ける。

そして約15分後、リンドウがレッドイーターの逆鱗に触れる事態が起きた。

「ごめん、遅れちゃった」

「……………うん、いいよ、ありがとう」

微笑みながら、レッドイーターはバリエーションモッズ上をヒカルから受け取る。

しかし、その瞬間、レッドイーターはあることに気づいた。慌ててポケットに手をつ込む。

「……………あれ、無い、無い、無い」

「どうかしたの？」

ヒカルがレッドイーターに事情を訊くが、時すでに遅く、ポケットに手をつ込んだまま、レッドイーターは思考停止した。変わりに、ふつふつと湧き上がる怒りに応じて、額に血管が浮き上がった。

彼が慌てた理由、それはまだ残る幼さを感じさせる理由である。

「……………チヨコどこいった……!!」

彼を中心に、部屋のオーラが黒く染まっていくなのが、ヒカルにも判った。

彼女は慌てて、そういえばと理由を教える。

「リンドウのお兄さんが食べていたような……、ヒカルは、駄目だよって言ったんだけど」

「ほ、ほほう……！」

言葉に負の感情を混ぜながら、レッドイーターはベッドから降りる。そして、目の前にある猫耳カチューシャが大量に載せられた机を睨みつけた。

「……………これも、あの馬鹿が？」

「うん。あと、他にもお姉さんとかお兄さんとかが、1人1つづつ置いていったよ？」

「……………馬鹿込みで45人だな」

「レッドイーター……！」

パシュン、という音と、リンドウの声を聞いた瞬間、レッドイーターは机の両端を両手で思い切り掴み、ドアにいるリンドウに高速で近づく。

そして、その腹に机を叩き込んだ。

「という事なんです」

「自業自得じゃないの？」

ヒカルの説明に、タツヤは、長いため息を吐きながら、肩を落とす。

その後、射撃訓練場にいた2人は、病室の先生達によって押さえられたらしい。

第三十九話、ヒカルの回想（後書き）

45人〓前回の猫耳の数

現在、4月24日まで、シリーズにするべきか、各章にするべきかアンケート中です。

余裕があれば、教えてもらえると嬉しいです

ちなみに明日は無理っばいですw

あれ？ 45人じゃね！？

明日、少ない時間を利用して誤字+aを直しますわ（zzz）

第四十話、邪教徒達のテロ(1)

11月26

19:00

フレンドシップ・デイ

FSDまであと2日と迫った夜のアナグラ。この時間帯なら、神機使い達は普通に帰還して、食堂へ走って行く時間だ。

しかし、FSD2日前というのは、どうやら特別な日なのか、食堂には出展命令が出されているレッドイーター、リンドウ、

ツバキ、タツヤ、いつの間にかアシスタントとして参加してきたサクヤ以外、数える程度しか人はいなかった。

レッドイーターは、キャベツの千切りとポテトコロツケが盛りられた皿に箸を付けずに、ただポーっとしながら、ツバキに訊ねた。

「……ここも騒がしくないと、逆に辺な雰囲気ですね」

「明日は神機使い達も揃って各部署の手伝いをするから、今日の内に片付けられる仕事は片付けているんだ」

ツバキに何故、この状況が作り出されているのか説明され、レッドイーターは納得がいったかのように、止めていた手を動かし、食事を進める。

「そつえば、最近支部長見ませんね」

「ああ、現在本部に出張中だとさ」

「あの人よく本部に顔を出しに行くのよね」

「そういえば、この前レッドイーターさんがハリセン持ちながらリンドウさん引きずり回していたみたいですけど、叩かれました？」

「子供風で言うなら、『ホームラン!!』って感じで、ようやく意識が戻った俺をハリセンで叩き飛ばして、射撃訓練場に立たせた」

タツヤとリンドウとサクヤは、軽い世間話をしながら、食べ物を口に運んでいく。

平和って、こんなもんか？ とレッドイーターはコロツケをよく咀嚼し、喉に通す。

だが、フェンリルが抱える問題が、その無駄に平和な状況を破壊した。

(そろそろかなあ)

(……………どうした?)

(ん? 何ってそりゃ)

『 ツザザー! ザザザ、ザ』

久しぶりの裏人格との会話が始まり、彼が何かを話そうとした所で、放送が流れる。やけに雑音が多かった。

リンドウ達や、周りの職員達も会話を止め、その放送に耳を傾ける。

レッドイーターは席から立ち上がり、食堂に設けられている大画面のディスプレイに近寄る。こちらにも、画面が白と黒の点で埋まっている上ちらつきが多く、騒音が発せられていた。

「……………何が」

そう口にした瞬間、ちらついていた画面中央には、黒い覆面で顔を隠したごつい体格の男が映し出され、流れていたノイズも消える。その男の周りには、同じ覆面をし、旧世代のアサルトライフルを携えた、いかにもこれからテロをしますといった雰囲気を出している人間達がいた。

画面中央にいた男が、マイクを口元に寄せる。レッドイーターは反射的に、懐に隠しているホルスターへと手を伸ばす。

『神の敵である、愚かな狼よ！ 内部居住区と放送、通信室は占領した！ 今すぐ、この支部に蓄えられている物資、食料を我々に提供すれば、住民の安全を保障する！ この条件を呑まなければ、30分ごとに、内部居住区にいた子供達の頭を撃ち抜く！』

（俺が、毎晩、寝たお前の体を1時間くらい、こっそり乗っ取って、アラガミ信者、つまり邪教徒どもの反発感情を仰ぎまくったから、そろそろ来るかなー、っと）

（……………あとで覚えておけよ。まったく、治安部隊は何をし
てるんだ）

レッドイーターは肺に溜まった二酸化炭素を体外へ出すために、ため息を軽く吐き、頭をぱりぱりと掻きながら、振り返って自分の座っていた席に歩み寄る。画面からは、人質とされている子供達の泣きながら親に助けを請っている声が流れていた。

『画面から右の順で、30分ごとに子供を射殺する。変な抵抗や、治安部隊を送り込んだ際にも射殺していく。これは脅しではない!』

そんな大声で流される放送を無視し、レッドイーターは席に着く。

だが、リンドウ達は、目を画面に釘付けにされながら、レッドイーターに顔だけを向ける。彼はティーカップに注がれた紅茶を口に含まながら、不思議そうにそれぞれの顔色を窺う。

子供達が心配なのだろうと思ったレッドイーターは、落ち着いた声色で語りかける。

「……………治安部隊がどうにかしますよ」

「そ、そうじゃないんです。画面を、画面を見てください」

タツヤの指示に従い、レッドイーターは、目だけをディスプレイに向ける。画面に表示されるのは、銃口を向けられながら泣きじゃくっている子供達。関心が薄いレッドイーターは、子供達の顔を見ていく。

カシャン!!

そんな音が、沈黙が続いていた食堂に鳴り響く。

音源はレッドイーターの足元、手にしていたカップを落としたのだ。だが、レッドイーターは画面に釘付けになり、カップの破片を拾おうともしない。

当たり前だ、彼の瞳には画面から右三番目で正座させられている一人の少女しか映っていないから。

「ヒ、カルさん？」

恐らく、内部居住区に遊びにでも来ていたのだろう、そしてテロリスト達に捕まったのだ。右から3番目、つまり最低でも彼女の命を救うためには約90分しか無いという事。

「……………90分。いや、30分あるなら」

ゆらりと、レッドイーターは席から立ち上がり、階段を昇った先にあるドアに向けて走り出した。走っている間に、レッドイーターは右手でホルスターから、本部で支給された拳銃を引き抜く。

「余裕だ！」

パシユンという、自動ドアが開く音と同時に、レッドイーターは食堂から飛び出し、通路の先にある区画間移動用エレベーターに向けて走り出す。

ちょうど何者かがエレベーターを使っていたのか、目的の区画に着いた際の伝達音が通路に鳴り響く。レッドイーターは、反射的に近くのドアを開き部屋に身を隠し、頭から眼だけを少し出し、エレベータ付近を調べる。

エレベーターから出てきたのは、先程の男の仲間なのか覆面を被り、古いアサルトライフルを構えながら通路を歩いてくる男女だった。人数は8人。それぞれが前後左右をカバーする兵になり、4人1チームに分かれながら通路を歩く。

彼らは各ドアをこまめにチェックしながら、どんどんレッドイーターが隠れている部屋に近づいてくる。

今ドアを閉めたら、閉めた音に反応してテロリストが真っ先に確認してくる筈なので、閉めようにも閉められないレッドイーターは、さらに隠し持っていたサバイバルナイフを左手に持ち、戦闘体勢を作る。

そして、遂にテロリストは、レッドイーターが隠れている部屋まで5mと迫った。

「ツツッ!!」

レッドイーターは部屋から飛び出し、テロリスト達に無謀にも突っ込む。

だが、テロリスト達が動揺している間に掛かった時間の間に、レッドイーターは1グループのほぼ真ん中に進入し、サバイバルナイフを振るって3人の足の腱を切り、残る1名の頭を拳銃で撃ち抜く。そして腱が切られ、骨と筋肉を離され、地面にひれ伏したテロリストのアサルトライフルを、返り血で使えなくなったサバイバルナイフを捨てた手で奪い取り、まともな照準を付けずに引き金を引く。

まともな照準を付けなかったせいか、弾丸は一発も敵に当たらなかった。だが、威嚇射撃になったのか、残る4人は一歩か二歩後ず

さる。

その間に、別のアサルトライフルを奪い取り、再び敵に向かって突撃する。次は照準を定めながら発砲したため、次々と鉛弾がテロリストの眉間に叩き込まれる。

「雑魚は黙って逝くか、道を開けるッ！！」

出来上がった5人の死体に対し怒りの籠った大声で罵倒し、レットドクターはエレベーターに乗り込む。だが、今すぐ人質救出をする訳ではない。

内部居住区に外部居住区の住民が実力行使で進入したとは考えにくい。つまり、アナグラに『反逆者』があり、その人物がアナグラのメインコンピュータを乗っ取り、アラガミ信者達の進入の手助けをした。

向かうべきは、メインコンピュータが置かれている施設、ラボラトリ。

第四十話、邪教徒達のテロ(1)(後書き)

食堂は、設定資料集や、漫画版でアリサが久しぶりにサクヤと会う
たところだ。

第四十一話、邪教徒達のテロ(2)

19:05

ゴスツッ!!

ゴスツッ!!

ゴスツッ!!

ゴスツッ!!

そんな鈍い音を連続で立てながら、メインコンピュータールームの入口前を防衛していたテロリスト達は、気を失っていく。

もちろん、意識を奪っていったのはレッドライター以外の何者でもない。彼は、気を失った邪教徒の男の片足を掴みながら、頑丈な部屋のドアを、掌から生えた巨木で強引に破る。

バゴンツッ!! という破壊音に、メインコンピュータールームにいた反逆者達は、驚きのあまり、口を開きながらレッドライターを見詰める。ちなみに彼らの周りには、反逆者でない職員達が、口をテープで塞がれ、足と手を紐で結ばれて身動きが取れない状況である。

「……………ふっ」

レッドライターは鼻で笑い、邪教徒の男を引きずりながら入室する。

しかし、ようやく我に返った反逆者達は、備えられているデスクの引き出しから拳銃を取り出し、引き金を引く。だが、レッドイーターは邪教徒の男の片足から襟の部分に高速で持ち替え、男を盾にする。何発もの弾丸を喰らった男は、意識を覚醒すると共に、断末魔の悲鳴を上げる。

「ヒッ!?!」

そんなだらしのない声を口から出した反逆者の女に、レッドイーターは血だらけの死体を思い切り投げ付けた。空中で血を噴出し、死体は女の顔面に鈍い音を立てながら直撃する。

レッドイーターは、気にせず他の反逆者との距離を一瞬で詰め、鳩尾に重い一撃を入れていき、意識を奪っていく。制圧するのに、1分も掛からなかった。

「……………大丈夫ですか?」

「ああ、すまない」

レッドイーターは、拘束されていた職員達の紐を解き、口を塞いでいたテープを剥がす。彼らは、喜びながらレッドイーターの手を握り、感謝の言葉を連呼した。

「……………そんな事より、手伝ってもらおう事があります」

そう言い、レッドイーターはメインコンピュータールームにあるキーボードを叩き、複数の監視カメラから送られてくる映像を見ていき、そして目的の映像を見つける。画面には、食堂のディスプレイ

イに映っていたゴツイ体格の男、恐らくリーダーとその仲間、そして、内部居住区の子供達とヒカルが映っていた。

男達は何かの会話をしているようだ。レドイーターは振り返り、職員達に尋ねる。

「……………こいつらの会話って聞くことができます?」

「可能だ」

「……………やってください」

その言葉を合図に、各々が作業に取り掛かる。さすがはプロと言ふべきか、あつという間に音を拾い、多少ブレはあるが理解できる話し声が聞こえてきた。

『協力者達の言っていた書類を取りに行ってくれ。場所は支部長室らしい、子供達を後ろから5人連れて行け』

『了解しました』

短い会話だが、レドイーターはその言葉に反応し、メインコンピュータールームから飛び出す。

エレベーターは、未だにラボラトリに止まったまま、レドイーターはドアを開き、役員区画に向かう為のボタンを押した。

「役員区画通路」

19:19

エントランスに駐留している本隊から別れたアラガミ信者達8人は、リーダーの指示通り区画間移動用エレベーターを使い、役員区画へ到着した。

前を歩くのは5人の子供達、一言で言うなら人質だ。もし襲われたら、その子供達を盾にしてやり通せば良い、と7人の統率を任されているカズオは、警戒を緩めずに通路の先にある支部長室を指す。

「いいか、メインコンピュータールームの協力者達は、この区画は支部長室以外、ロックした筈だが、あくまで『筈』だ。警戒、怠るなよ」

カズオは、同胞達と自分に、そう言い聞かせる。

「後方、問題なし」

アサルトライフルを構えながら、同胞が安全を確認する。左右を警戒している同胞達も、安全だと言う。

だが、1人として警戒は解かない、その安全は今だけなのだろうから。

ポチャン

不意に8人の中央に雫が落ちたような音が聞こえ、カズオは1人に前の警戒を任せ、音のした床を調べる。

落ちてきたのは赤い液体だ。そう、それはまるで血ではないか。

ポチャン、ポチャンと今度は連続して、カズオの覆面や服に液体が付着した。彼は、アサルトライフルを構えながら、上を見上げる。

「ツツ……………!?」

ユウタは口の中に溜まっていた唾を飲み込む。そこ（天井）に貼り付けられていたのは、仲間の死体。見るも無残に、何発もの弾丸をその身に浴びたその死体から、血が垂れていたのだ。

カズオは、歯を食いしばり、周りの同胞に命令する。

「警戒を緩めるな！ あいつらは絶対に攻めて」

バンツ！！

言い切る前に、左側を警戒していた同胞と、カズオの体は吹き飛ばされ、彼の人生は幕を閉じた。

約1分前

「レッドイーターの部屋」

「・・・・・・・・ショットガンは、使えるかな？」

頭に疑問符を浮かべながら、レッドイーターは連合軍開発部が開発した（もちろん、盗んだ物）ショットガンを片手に持ち、自室のドア前に立つ。

余っている手で無線機を取り出し、メインコンピュータールームで解放した職員達に連絡を取る。

「・・・・・・・・ドアの開閉を確認、これから待ち伏せをするから、そちらの監視カメラからタイミングを見計らって、全てのドアを強制解放してください」

『了解』

レッドイーターは、彼らに部屋に掛かっていたロックを外してもらい、治安部隊とも合流できた。

何故、治安部隊が動けなかったのか？ それは今日は今後の活動方針を、ある一室で皆で考えていたら、突然ロックが掛かり、出れなくなった、と言うことらしい。

彼らに待ち伏せの命令をして、現在各々が部屋で待機している。

（ああ、そっぴやお前にどうやって、あのカス共を煽ったか教えてないよな？）

唐突に、しかし結構気になっていた事を、裏人格はレッドイーターに囁き始めた。

(あれは、そうだなあ、 11月7日あたりか？)

11月7日、つまり、レッドイーターが目覚めて次の日、という事になる。

(1日目、アラガミ信者1人を拘束、拷問によって仲間の住所を特定。2日目、拘束したアラガミ信者の心臓を抉り取る)

(……グロイ)

レッドイーターは、今すぐ銃を捨て、耳を塞ぎたくなるが、彼の声は、耳ではなく脳に直接響く感じなので、我慢する。

(それから毎晩、首吊りだったり、首を180度回転させたり、四肢を流れる血を止めて、身動きできない間に内臓をごちゃ混ぜしたり)

『 来ました、準備してください』

(ちっ、もう来たか)

「 ……了解」

言い足りなさそうだが、空気を読んで、裏の人格は引っ込む。レッドイーターとしてはラッキーと言える。

数秒待ち、レッドイーターはいつでも撃てるように、左手で銃身を支え、心を落ち着かせる。そして、パシユンとドアが強制開放されると同時に、レッドイーターは引き金を引いた。

バンッ！！

複数の鉛弾に分かれた弾丸は、2人の男を吹き飛ばす、恐らく即死だろう。他のアラガミ信者達も、足や腕に当たるなど、若干ながら足止めに成功した。

レッドイーターは空薬莖を手動で排出し、再び引き金を引く。と同時に、別の部屋から飛び出した治安部隊所属の役員達も、邪教徒（敵）にアサルトライフルを構え、5人が子供達を抱きかかえて後退すると同時に、アサルトライフルの引き金を引いた。

そうして、8人の邪教徒の命は、ほんの数秒で絶たれた。

「エントランス」

19:25

「連絡が来ないとは、何があった？」

アラガミ信仰宗教のテロリストのリーダーの男は、鬼のような形相で、部下を睨みつける。

「はい、カズオ率いる部隊は、恐らく全滅したかと」

「今すぐ、同胞達をエントランスに集結させろ」

そう言い、リーダーの男は仲間召集の合図をする。彼らは、散り散りになり、同胞達を呼びに行った。

「さて、目的の物^{ぶつ}3つ（・・・）は集まるだろうか……」

目的の物の内1つ目は食料、2つ目は、協力者達が欲しがっている資料、そして3つ目は……、

顎に手をやり、リーダーの男は考え込む。しかし、その3つ目の物が、彼の背後を取った。

「らあー!!」

「ツツ!!」

リーダーの男は前転で攻撃を回避し、襲撃者にアサルトライフルを向ける。相手は小さい子供だが、情報が正しければ、その子供がターゲットの1つである。

彼は迷わず引き金を引く。だが、弾丸は宙を舞いながら、何も当たらずに遠くに飛んでいく。

リーダーの男は、弾丸を回避した襲撃者を睨む。襲撃者、レッドイーターは、ルナティック・ツインを手にし、子供達の安全を確認し終え、無言で睨み返していた。

リーダーは、鉤爪のような形をしている双剣に目を配る。

「貴様が、トライ（・・・）エッジ（・・・）か？」

獣のような咆哮と共に、ただの凡人は、『荒神』になった。

第四十二話、邪教徒達のテロ(3)

「ぐ、ガ……!!」

リーダーの男は、焦点の合わない眼で自身の右腕、正確には右手を見詰める。人間特有の、細かい作業を可能としている骨が砕けていく音がする。皮膚は弾け、血は飛び散り、中から『何か』が現れた。

剣だ。

神機の剣身のような、その不気味なくらい黒い剣は、男の右手首から飛び出したのだ。

「やはり、オラクル細胞を……!!」

先程、男が体内に摂取した液体には、恐らく高濃度のオラクル細胞が入っていたのだろう。反逆者達が渡した可能性が、最も高い。

そう結論付けたレッドイーターは、ルナティック・ツインを逆手に持ち直し、両脚に力を入れる。だが、リーダーの男の表情が視界に入り、込めていた力が抜けてしまう。

激しい痛みが、腕どころか全身に襲い掛かっている筈なのに、男は、ただただ笑っていたのだ。その目に映る光は、圧倒的な力を手に入れ、自惚れた狂人と同じ、危険な眼光だ。

レッドイーターは、ルナティック・ツインを、相手に当たらない距離から振るう。そして刃の役割を担う、黄金の刃は射出された。

だが、そんなレッドイーターの華奢な体は、亀裂が入っている剣以外の剣によつて壁まで吹き飛ばされ、叩きつけられる。

「がっ！！ ごほっ！！」

床に足が着くと同時に、レッドイーターの両脚から力が抜け、四つん這いになりながら、喉に溜まっていた血を床に吐き出す。

「くそ、なんだ……！？」

レッドイーターは、裾で口元の血を拭いながら、自身を吹き飛ばした黒い剣を視界に収める。そして、驚愕した。

男の右肩から、『第3の腕』が生えていたのだ。そして、その腕の先には、右手と同じ、黒い剣が生えていた。

第四十三話、邪教徒達のテロ(4)

これは、外部居住区の子供達の会話です。

「なあ、聞いた？ トライエッジ 三爪痕の話」

「なにそれー？」

「この前、ここに黒いアラガミが入ってきたの知ってるな？」

「当たり前じゃん」

「お父さんから聞いたんだけど、その日から、毎晩、知り合いのおじさんとか、首が反対に曲がっていたり、お腹を裂かれたりして死んでるんだって」

「嘘くさー」

「だよねー」

「むう、黙って聞いてるよ。その死体には、必ず、三本の切り傷が残されているんだって。まるで、三本の爪に引き裂かれたようだから、トライエッジ三爪痕トライエッジって呼ばれてるんだってさ」

「ふーん」

「……………あんなんかに、殺されて……………」

キルサイズを握っていない手を、床に乗せる。

直後、床から無数の触手が生え、一直線に男に向けて飛び出す。しかし、右腕と第三の腕から生えている黒い剣が、易々と触手を切断していく。

そして、第三の腕に変化が訪れた。剣先から肘に掛けて、一筋の亀裂が入る。そして、腕は2本に枝分かれした。

物を挟める形状になった剣は、レッドイーターの首を挟みこむ。苦しい、レッドイーターは、片手で必死に剣を外そうとするが、あまりにも力が強すぎて手に負えなかった。

抵抗していたレッドイーターの腕から力が抜け、床に音を立てながら落ちる。

男の眉がピクリと動く、そして期待外れとも言いたいのか、無造作にレッドイーターを放り投げる。彼は死んではない、だが、放っておけば自然に死ぬ、そう判断したのだろう。

数分の戦いの間に、男の同胞達は集まっていた。彼らを視界に収めた男は、ふっ、とほくそ笑み、ジェスチャーで、グレネードを渡してくれ、と伝える。

同胞の1人が、男の手にグレネードを渡す。

「ありがとう。さて、そこに横たわっている子供を包囲しろ」

そう言い、男は、息も絶え絶えのレッドイーターを見詰める。同胞達は、迅速にレッドイーターを円陣に囲む。

「ガキの癖に、なかなか良くやったよ。せめてもの手土産だ、受取レ」

そう告げ、男はグレネードのピンを口で引き抜き、レッドイーターの顔面に放り投げる。

(ああ、)

目の前から、放物線を描きながら迫るグレネードを見詰めながら、レッドイーターは心の中で嘔く。

(死ぬのか。嫌だな、まだやりたい事、いっぱいあるのに)

(……くくッ)

正常に機能していない頭の中に、聞きなれた笑い声が響く。

自分の裏の人格は、この状況でも笑うのか？ とレッドイーターは呆ける。だが、事態は別の意味で危険な状態へ迫っていた。

(お前、なんで笑っている?)

(いいから、さっさと意識手放しなノロマ。ここから先は、)

レッドイーターの目の前で、爆発が生じる。

黙々と上がる黒煙を囲むアラガミ信者達が、ケラケラと笑い転げる。

男も、大声で笑う事に抵抗はしなかった。自分達の手でも、神機使いが殺せた、その事実には、笑えない者などここには存在しない。

ヒュンツッ

不意に、そんな音が男の耳に入ってくる。

直後、レッドイーターを囲んでいた同胞数人の首が飛ぶ。否、首だけではなく、首、胴体、片腕、片脚、その4つのパーツが、宙を舞った。

「俺のターンだ」

その声に、周囲で聞こえていた笑い声が静まる。そして、黒煙の中から、『何か』が現れた。

紅蓮の炎を纏う、『何か』は、両手に三叉の双剣を握っていた。その瞬間、アラガミ信者達の脳裏に、ある単語が過ぎる、それは、

「トライエツッ三爪痕!?!」

黒煙から姿を現したのは、赤い髪と眼を持った少年だった。両手に握られている三叉の双剣は、ルナティック・ツインを3方向に分裂したような物だ。

リーダーの男に代わり今度は、少年、レッドイーターが口の両端を吊り上げていた。両脚の骨折は、既に完治している。

「あはっ！！ ほらほら！！ さっさと逃げないと、死んじまうぜえ！？」

後ずさるうにも、背中に着くのは赤い壁だけ。アラガミ信者達は、悲鳴も上げられず、目の前の屍人形を見詰める。

1人の男が、目尻に涙を浮かべながら、開かなかった口をどうにか動かす。

「な、なあ、クワタあ、お、俺達、な、仲間だろ？」

そんな声は、屍人形達には届かない。彼らは、今となっては、レツドイーターの命令に従う下僕なのだから。

屍人形は、死んでいることもあり、通常なら30%しか出せない人間の力を100%使える。屍人形は、男の両腕をしっかりと掴み、全開の口を、ゆっくりと男の首元へ近寄せせる。

「来るな、来るな来る」

大声で来るなど言うのも虚しく、男の首は屍人形によって3分の1ほど喰われていた。

「今すぐやめさせろ！！」

リーダーの男だけには、屍人形は近寄らない。何故なら、

「やだ。お前は俺直々に殺すからだ」

笑みを崩さないレッドイーターは、ゆっくりと男に近づき始める。だが、男は以外にも冷静さを保っていた。

「皆、よく聞け！！ この子供を殺せば、そいつらは止まるはずだ！！」

その言葉を聞いた者達は、すぐさまアサルトライフルの銃口をレッドイーターに向けた。そして、躊躇せず発砲する。

連続する発砲音が、各々のアサルトライフルから響く。だが、レッドイーターはやはり常識を超えていた。三叉のルナティック・ツインの片割れだけで、全ての銃弾を弾く、ではなく喰らった（・・・）のだ。

発砲していた彼らのアサルトライフルの弾は底を尽き、貴重な銃器を捨て、ナイフを取り出す。そして、屍人形を押しつけて、一斉にレッドイーターに走り寄る。

「く、喰らえ！！」

そう呟いた女は、誰よりも早く、ナイフを振り下ろした。

レッドイーターは、凶器が自分に接触する前に、ため息と同時に三叉のルナティック・ツインを消す。そして、

「なんつ……！？」

振り落とされるナイフの切っ先を、親指と人差し指だけで押さえる。そして、余っている腕で、女の鳩尾を殴った。

その光景を間近で見ってしまったナイフを構えていた男が、腰を抜かしてその場に座り込む。だが、その男を屍人形が困んだ。

「や、止めるお！！ 来たら、来たら切るぞ！！」

無茶苦茶にナイフを振り回しながら、男は大声で威嚇する。

だが、ナイフを握っていた男の首や腹は、屍人形達によって食い散らかされる。

また1人、また1人と、死者によって命を絶たれていく。

「く、クソ！！」

「おにいさん」

リーダーの男は、レッドイーターの行為を吐き捨てると同時に、後ろを取られた（抱きつかれた）。

レッドイーターの手が、男の顔を優しく掴む。レッドイーターは、邪悪ではなく、天使の笑顔で男の耳に口を寄せる。

「死にな」

直後、ぐりん、と、男の頭は、180度回転させられる。レッドイーターは断末魔の表情を、覆面を外し、じつくりと眺める。

「ひひ、たーのしっ!?!」

第四十三話、邪教徒達のテロ(4) (後書き)

ゴッドイーターじゃなくね!?

書いてて思いましたw

第四十四話、FSD当日(前書き)

今日から少し書き方変わって……いるかな？ W

第四十四話、FSD当日

11月28日

結局26日のアラガミ信者達のテロはフェンリルの情報操作によって無い事にされた。

リーダーの男の右腕と第三の腕から生えた黒い剣に関しては、神機や神機使いに使用されている、『人工的に調整を施されたオラクル細胞の突然変異』という調査結果で終わった。

リーダーの男がレッドライターに討たれた後、各階に潜伏していたアラガミ信者達は治安部隊によって捕縛、今はどうなっているかは誰も知らない。

そんな大事件から2日後、施設に目立った傷は無く（レッドライターが床から生やした触手の根元程度）、FSDの開催は予定通り行なわれる事になった。

「屋上」

11:30

レッドライターは仰向けになりながら空の向こうに在る太陽の日光を浴びる。

アラガミの出現以降、極東の平均気温は大きく変化した。アラガミ発生前に話題になっていたという地球温暖化なのか、アラガミの仕業なのか誰にも分からないが少なくとも極東^{アナケラ}支部周辺の気温は上昇していた。寒い場所など、廃寺地域くらいだろう。

秋の終盤である極東の気温は、寝るのにちょうど良いくらいの温度だ。暑からず寒からずと言えば聞こえは良い。

レッドイーターも、好き好んで屋上で寝ている訳ではない。リンドウ提案のお化け屋敷は、猫耳を付けた美少女が最後に出てくる、という噂が人々に伝わっていき、結果大人数の大人や子供が押し寄せお化け屋敷と化していたレッドイーターの部屋は閉鎖されてしまったのだ。

不幸だ、と、ため息混じりに小声で呟く。

閉鎖されただけなら、レッドイーターはラッキーなのだ。だが閉鎖された後、各階をぶらぶらと歩き回っていたらメイド喫茶店を出している役員達に捕まりかけた。理由は君がいれば店にたくさん人が来る、ということらしい。

レッドイーターはいろんな意味で遠慮した。1つ、これからヒカルと店を回る。2つ、手伝わたらお化け屋敷の二の舞になるかもしれない。3つ、女装趣味は無い。

そんな訳で、体の力を完全に抜き、いつでも寝れる状態を作り出す。

(.....気持ちええ)

(おっさん臭い)

レッドイーターは顔をしかめる。正直少し癢に触ったのですぐに言葉を返した。

(……………裏の人格の癖に生意気な。さつさと消えちゃえ)

(へーへー、さいですか)

レッドイーターは挑発したつもりなのだが、どうやら裏人格には通用しないようだ。心の底で舌打ち(裏の人格には筒抜け)をしながらむくりと起き上がる、と同時にエレベーターの開く音がした。

エレベーターから顔を出したのはヒカルだった。

「あれ、レッドイーターさん？」

「……………ちわーっす」

先程まで寝ていたせいか、返事がおかしくなる。だが気にせずヒカルはレッドイーターの隣に座った。レッドイーターは一瞬、ドキッ！ としたがすぐに平静を保つ。

「……………早かったですね」

「うん、リンドウさんが、『お化け屋敷潰れた……………』とか呟きながらふらふらと歩いていたので見て、レッドイーターさんは屋上にもういるのかな、って思いました」

「……………そういえば、ヒカルさん歳いくつ？」

会話に脈絡は無いなど内心思いつつも、レッドイーターは今気になつたことを訊いてみた。

「6歳です」

本当に6歳なのか、と疑いたくなるほど、レッドイーターと同じく大人びた口調でヒカルは話す。

レッドイーターも自分の年齢を彼女に教える。たつた1歳しか離れていない事に、ヒカルは少し驚いた。

「以外に離れていないんですねえ。と、いう訳で、早く行きましょうよー」

ヒカルはさつきとは打って変わって、歳相応の口調になり、レッドイーターの腕を引っ張る。レッドイーターはそれに逆らわずに立ち上がる。

エレベーターに乗り、先程のメイド喫茶に行ってみることにした。

ドアが開いてすぐにメイド喫茶が見える。ヒカルはレッドイーターの腕に抱きつきながら、彼を引っ張る。そして、メイド喫茶の入口にあと3歩くらいで着くと同時に、レッドイーターは結構会いたくなかつた人物を見つけてしまった。

「ここでのんびりするか〜！」

メイド喫茶に入るのは、先程のヒカルの発言からして落ち込んでいた筈のリンドウだった。

「あ、リンドウさんだあ」

「……………立ち直ってる」

そんな感想を小声で呟きながら、レッドイーターはリンドウの服を軽く引つ張る。

「おおっ!？　って、レッドイーターか……、びっくりしたよ」

「……………何驚いてるんですか」

「サクヤだったらどうしよう、って不覚にも思ってしまった」

「……………あー、はいはい」

レッドイーターはとりあえず無視の方針を取った、付き合いきれない、と口には出さないが心の底で毒突く。リンドウを無視する関係でする事は1つになる。

「……………ヒカルさん、さっさとメイド喫茶に入ろうか」

「はい」

今度はレッドイーターがヒカルの手を引き店に入る。こういう店で美人な人っていないよね、というレッドイーターの推測と違い、綺麗な女性もいれば、体が全体的に成長中の女子もいた。

だが特に興味を示さないレッドイーターは、空いてる席にヒカルと並んで座る。

「……………で、リンドウさんはなんで隣に座るんです？」

「ん？ 他に空いてなかったからに決まってるだろ？」

「嘘だよッ！！ 絶対嘘だッッ！！」

レドイーターは何故か隣に座ってきたリンドウを拒絶する。リンドウは気にした様子も無く、アナグラパフェなる物を注文した。レドイーターもリンドウが無害だと悟り、近くにいたメイドにチョコパフェを頼む。そんなレドイーターを見てリンドウは微笑みながら口を開いた。

「レドイーターってホント、チョコが好きなんだなあ」

「……………これでも子供です」

「嗜好以外なら精神年齢はタツヤと同じくらいじゃないか？」

「……………そんなもん、自覚する人いませんよ」

レドイーターは、ため息混じりに呟く。リンドウは、そうかと苦笑しながらとても早く届いたパフェを口に含む。甘い食べ物を食べられるだけでも幸福なのは、全ての人類共通なのでリンドウは頬の筋肉を緩める。

「……………ねえ、リンドウさん」

「どした？」

テーブルに肘を着けながら、レッドイーターは目蓋を閉じる。脳裏を過ぎるのは黒いアラガミ。

「スサノオか？」

「……はい」

リンドウにはレッドイーターの心が読めていた。

だいにじゅうしゅうせつしゅうくたん
第一種接触禁忌アラガミ、スサノオ。

レッドイーターの偏食因子とオラクル操作能力との相性は最悪だ。レッドイーターの予想だと、30分程交戦するだけで意識を失ってしまう。もしかしたら自我すら崩壊するかもしれない。

レッドイーターが独自に情報を集めた結果、最悪の場合はアラガミ化。通称、墜ちた者。フォルマン自我が崩壊し、アラガミと何の違いも無い。ただ喰らうという本能に従う、人の姿をしたアラガミ。

「戦うつもりだろ？ 俺達が忠告している間に止めておけ」

「………やっぱ、バレバレですよね」

レッドイーターは自身の無力さに、自嘲気味に鼻で笑う。話について来れないヒカルはレッドイーターと同じ物を頼んでいたようで、それを嬉しそうに食べていく。

ヒカルを見ているレッドイーターの頬の筋肉が緩む。守れる目標があるほど、嬉しい事はなかった。

「……………今まで、自分だけが特別だと思っていました。でも、やっぱりどんなにアラガミに近くても、人は人…なんですよね」

「お前が無理をする事はない。お前の背中には、俺や姉上、タツヤが守っているんだからな」

「……………ふふ、リンドウさんのそういうところ、結構好きですよ」

レッドイーターは、ようやく届いたチョコパフェのチョコクリームをスプーンですくい、口に含む。甘い、と感じられるだけで、レッドイーターの心は温まった。

今、ここで生きていられる幸福。今、ここで人と話し合える幸福。レッドイーターは、心の中で思ったことを口から出す。

「……………世界が平和でありますように」

「そのために、俺達は戦うんだ」

「……………はい!」

飛び切りの笑顔で、レッドイーターはリンドウに返事をした。リンドウは微笑みながら彼の頭を優しく撫でる。

その後、夜になるまでレッドイーターはヒカルと遊び回った。

第四十四話、FSD当日（後書き）

長かった、長かったよ11月!!

リンドウへの好感度アップ、あくまで仲間としてです。か、勘違い
しないでよね!!

今回は、結構時間が経った後の話になると思いますw

第四十五話、出張

12月10日

9:00

神機とは唯一アラガミを倒せる武器である。そのため案外複雑な構造をしており、神機使いの判断で整備士にオーバーホールをしてもらうことができる。

その中でも変形でき、内部部品の磨耗が激しい可変式神機にはここ最近不調が現れ始めた。レッドイーターがその事に気付かない訳がない。だが、ここで1つ問題が発生した。

「……………この神機のオーバーホールには専用の施設がないと駄目か」

いつも通り、神機の点検をしていたレッドイーターは呟く。

神機の現在の不調を挙げれば、変形完了に1〜2秒ほど掛かる。剣身に配列されるオラクル細胞が時節不安定になる。バレットが予想より右5〜10度ずれて発射される。などなど、小さな問題のようで、放っておくと病気のように悪化する問題ばかりだ。

神機のオーバーホールには専用の施設が必要であり、アナグラには非可変式神機のオーバーホールの施設はあるが、可変式神機対応の施設はない。

レッドイーターが知っている、可変式神機専用オーバーホール施

設といえは本部に存在する、次世代神機開発施設くらいだ。

レッドイーターの額に大粒の汗が噴出す。正直な話、レッドイーターは本部に戻りたくなかった。

理由は省略するが、そこでしか整備できないとなると本部長辺りが手を回してくるだろう。そうなたら飛行機を使つても早急に戻ることになる。

リンドウ達に相談するべきか、独学で可変式神機のオーバーホールを行なうか、それとも本部に一旦腰を下ろすか、レッドイーターは神機を何度も変形させながら悩む。

うーん、と首を捻っている時に、ターミナルがメールの受信を報せる音を鳴らす。とりあえず神機をケースに納め、ターミナルが置かれている自室に戻る。

ターミナルを起動し受信メールを確認するが宛先人は不明だった。

「……おかしくない？」

通常、メールのやりとりは個人に与えられるIDを使用しないと送れない。受信したメールには宛先人の名が必ず表示される。

とりあえずメールを開く。と同時に、目に入った最初の一行からレッドイーターは目眩がした。

『レッドイーター、元気に戦い抜いてますか？ 正直お兄さんは心配だ！…！』

(・・・心配って、神機の事でしょっよ)

というか、これほどまで人懐っこい話をするのはリンドウくらいしか知らない。しかし、元気に、後の文章から察するにリンドウではないだろう。

『君の話は本部にも届いてるよー、支部長さんからの報告も想像以上の戦果だったし、いや〜驚いたw』

今時メールで『w』を付ける人をレッドイーターは初めて見た気がする。それより気になったことといえば、

(・・・本部？　つまり送信したのは本部の誰か？)

といっても、レッドイーターが知っている本部の役員は本部上層部のお偉いさん達やその助手程度である。今思ったが案外人の顔や名前を覚えていた自分にレッドイーターはびっくりした。

だがその中で1人もレッドイーターに優しかったり、理解しようとしている人間はいなかった筈だ(特殊部隊の隊員除く)。ただ、短い間一緒になり、その本性を知らない人物がいたような気がする。

(その人物は、20代中盤くらいで、白衣を着ていて、短い銀髪に青い眼……、じゃなかったっけ?)

(・・・お前意外と使えるな)

心はいつもフリーダム(自由)の裏人格の発言により、レッドイーターは適合試験監督を務めた青年を思い出した。レッドイーター本人としては髪や眼の色を覚えていなかったのだが。

レッドイーターは半月ほどは本部に残されると思っており、ツバキやタツヤにも伝えてある。

「……………帰ると言っても、出張みたいなものです」

「あ、じゃあお願いがあるんだけど、OK？」

「OK」

リンドウの質問に即答する。彼はサルミアッキのキャンディーをお土産として買ってきてくれ！　と言い残し走り去ってしまった。レッドイーターはそれを見て、もう1人の自分と同じくらい心がフリーダムな人だな、と思ってしまう。

不意に、レッドイーターの無線機に連絡が入る。レッドイーターは無線機の画面に映る人物名を見て、ため息が出してしまった。とりあえず通話のボタンを押した。

『おはようレッドイーター君。私だが、良いかね？』

最初の声が何度も頭の中に響いた気がした。相手はシックザール支部長だ。

「……………大丈夫です」

『そうか、本部から伝えられている筈だと思うので、細かい話は省略させてもらおう』

レッドイーターとしては、正直細かい話とやらで時間を喰って欲

しかつたが、そんな事を口にしたら何されるか分かったものではないので黙って話を聞く。

『午前11時には飛行機が出る、それまでに昼食を取っていてくれ、以上だ』

プツン、と、通話が切れる音が妙に耳障りだった。幸か不幸か、飛行機に乗るのは初めてだが、それほど興味は無い。

さつさと荷物を整理して出かける準備をしなくては、と何度も眩きながらレッドイーターはまず食堂へ向かった。今月中極東最後の食事になるかもしれないから……。

第四十五話、出張（後書き）

次回は本部編ですな。

そういえば、これ一章なんですけど、三章も同時に始めることになりました。モンハンの堅苦しい雰囲気嫌いな人はオススメ…できないかなあ？

URLは、`http://ncode.syosetu.com/n7879s/`、です

一章終わったら二章をやると思います！

追記

本部でアラガミ戦を考えているのですが、どのアラガミが皆さん好みですか？

言ってもらえれば、そのアラガミを出そうと思います。

第一種接触禁忌アラガミ、ハンニバル種、ウロヴオロスなど、時代に合わないアラガミは無理です（私は出したいのですが……）

第四十六話、本部での1日

12月11日

「フェンリル本部」

8:00

いつ見ても本部はアラガミの被害を受けていない土地面積の半分を研究所のような施設で埋め、各地に存在する支部には知られていないオラクル技術を持っている。そんな感想を元自室で寝ていたレツドイーターは、ぼけーとしながら考えてしまう。

この場所は嫌だ。主に生理的に……。

彼の元自室は監視カメラが隅々に配置されており、常に固定で備えられているディスプレイには最新の極秘ニュースが表示されている。置かれている物は机やベッドと必要最低限の物ばかり。観察室と呼ぶのに相応しい部屋だ。

片腕を枕代わりにしながら寝返りを打つ。その時、バリアントモツズのポケットに入れておいた無線機がベッドの上に落ちた。そんな事を気づく筈もないレツドイーターは寝たままディスプレイを見る。

《12月8日 大車ダイゴ、オラクル技術による精神ケアの論文を本部に訴える。しかし本部長層部はその件に一切返事をしない》

《12月10日 大車ダイゴ、謎の失踪》

《12月11日 新人ゴツドイーター、シロナ・アリアス新兵が本部史上最高の適合率を示す》

正直どうでもいい記事ばかりである。今日の記事なんて、レッドイーターが影の存在だと言わんばかりではないか。

ため息をついたレッドイーターはそのまま二度寝しようとする目蓋を閉じる。だがベッドの上で静かに転がっていた無線機が大音量で着信を知らせた。

大きな音に不覚にも慣れてきたレッドイーターは、目を瞑ったままポケットに手をつ突っ込む。しかしどんなに手を動かしても無線機が無いので、とりあえず起き上がって……、

「ふにゃあ!?! って、ヲおおおおおおおおおおお
!?!」

ズドン!! と、大きな音を立ててレッドイーターはベッドから落ちた。顔面から落ちたようで、骨などに異常は無いものの、地味に痛い激痛にレッドイーターは両手で顔を押しさえながら床の上で悶絶する。

ようやく痛みが引いた所でベッドの上に落ちた無線機を取り、高速で通話ボタンを押す。ちなみに、ベッドから落ちて通話ボタンを押すまでに、アホ毛が30回ほど跳ねた。

『あつはつはつはつは!! ちょ、ウヒ! ゴメ! ヤバッ! 朝からこんなに笑ったの初めてだよ、うははははは!!』

「……………で、用件は？」

『な、何で疲れていないの？』

「慣れ」

本当に慣れである、原因は言わずもがな。20代中盤の青年は息を切らしながら、えーっと、報告があるんだけど、と、一旦話を切つて、報告改め命令を告げる。

『近くに交戦件が少ない新種のヴァジュラが現れた。正直強すぎるから今の本部の神機使い達じゃ手に負えなくてね、現在コアどころか討伐すらされていないんだ』

「……………本部の他のモルモット……………ちゃんを出せば良いでしょう？」

『今無駄に戦力を減らすわけにはいかない。アラガミが強力になっているなら尚更さ』

「……………それで、出撃は？」

『神機のメンテナンスが終了次第、準備完了後出撃して欲しい』

レッドイーターは片手を軽く振って了解と告げ、頭を何度も撫でてアホ毛を消してから部屋を後にする。

朝のご飯ラツシユ（神機使い達にとって、ある意味生死を分ける食事競争）の時間も過ぎ、役員達しかいない食堂で、レッドイーターは黙々とパンで腹を満たす。

周囲から不思議そうな目で見られるのにも慣れた、理由は何度も言うが、言わずもがな。

「あの〜」

そんな孤独な一匹狼状態のレッドイーターの耳に若い女性の声が届く。真後ろから唐突に声を掛けられたため、彼は反射的にパンを全て食し（約1秒）、真後ろに高速で振り向く（約0.3秒）。

そこには、気弱そうな女の子がトレイを両手に持ちながら立っていた。身長は160cm前後、歳は15歳くらい、F狙撃上下という服から露出している肌は雪のように白い。顔はとても整っており、眼の色は綺麗な碧^{みどり}、腰まで届く金髪からは心が落ち着くような匂いがした。

ちなみに出るところは出て、締まるところほっそりとしており、まさにボン！ キュ ボン！ であった。レッドイーターは（・）特に反応を示さなかったが。

（なかなかの乳じゃないですかあ、ああーもう！ 揉みたい揉みたい揉みたい揉みたいーいーいー！）

（……身近な所に危険人物いたね、うん）

裏の人格がド変態さんなのは良く分かりました。と、さりげにレッドイーターは毒突く。

「……………で、なんです？　一緒に食べますか？」

「あ、良いんですか？」

「……………ええ、体の保障はできませんけどおお……………」

最後の方がやたら伸びたのは、既に彼女が目の前の椅子に腰を掛けたからである。よく見れば、彼女の右手首には赤い腕輪が填まっていた。

少女はレッドイーターの顔を見て微笑む。そして、

「よろしくお願ひしますね。レッドイーター教官」

「……………はい？」

第四十六話、オラクル操作能力について

「よろしく申し上げますね。レッドイーター教官」

「……………はい？」

教官、という言葉にレッドイーターは混乱した。ゴッドイーターになってまだ1年も経っていないのに、タツヤに加えて目の前の少女の訓練にも付き合え……、ということなのだろうか？

目を丸くしているレッドイーターに少女は、失礼しました、自己紹介まだですよ。と言いつくを開く。

「私は、シロナ、シロナ・アリアスです。適合したのは遠距離型の神機です」

「……………あの、少しいいですか？」

「はい？」

シロナと名乗った少女は首を傾げる。レッドイーターは気に留めず、疑問に感じていた事を彼女に訊いた。

「……………そういう話まだ聞かされてないんですけど。あなたは誰にそれを？」

「え？ 昨日の適合試験の立会いをしてくださった短い銀髪のお兄さんですけど……」

ピキィ

レッドイーターの額に血管が浮き上がる。短い銀髪辺りに心当たりがあったのだ。彼はドス黒いオーラを全身から放ち、無言で椅子から立ち上がりながらバリアントモツズのフードを深々と被る。その身に纏っているオーラが食堂の空気を凍らせたような錯覚をシロナは受けた。

懐から拳銃を取り出したレッドイーターは出口に向かって、ゆっくりと、ゆっくりと歩き始めた。目的地はメインコンピュータールーム。施設内に張り巡らされた監視カメラで白衣を着た青年を見つけるつもりだ。

出口まであと5歩くらいのところまで、自動ドアが開く。だがセンサーが反応したのはレッドイーターではない。

「あれ？ レッドイーター君？」

あの白衣の青年だ。

フードの下から青年を睨むのは赤黒い瞳。対して青年はどうしたと言わんばかりに首を傾げる。

食堂に銃声が鳴った。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおー！！」

本部の広大な施設内で人2人分の足音と荒い息、そして銃声が何度も鳴り響く。

1人分の足音と荒い息の音源は走って逃げる青年。もう1人の足音と銃声の原因は歩きながら、しかし常人が走るのと変わらない速度で近づくレッドイーター。彼は大雑把に狙いを決めて拳銃の引き金を引く。

放たれる弾丸を走りながら回避する青年はレッドイーターに事の始まりを話そうとするが、銃弾を避けるのに精一杯で口を開けない。

だが所詮は拳銃、撃てる弾がなくなれば武器としては殴打程度にしか使えない。

何発もの銃声の後、ある一発の弾丸が放たれた後に銃声が止む。それと同時に、青年はある施設に飛び込む。そして自動ドアに高度なセキュリティを掛けてレッドイーターの進入を阻もうとする。

そんな彼の後ろから、唐突に声がかげられた。

「開発部長、何をしているんです？」

「命掛かってます！！」

青年は近くのノートパソコンと自動ドアを繋げるための端子をデスクから引き出し、そして繋げて高速でキーボードを叩く。そして凄腕のアタッカーでもハッキングするのは難しいセキュリティを引き、非常用シャッター全てを下ろした。

だが、実はLv2状態になっているレッドイーターの前に人の作った壁など意味は無く、あっさり蹴破られた。そしてレッドイーターの赤黒い目は既に白衣を着た青年だけではなく、この『次世代神機開発施設』全ての作業員（役員）に向けられていた。

「……………遺言はある？」

「「「「いやいやいやいや！！」「」「」

ほぼ全員がレッドイーターにそう返す。ふん、と、鼻で不機嫌だと主張するレッドイーターはLv2を解き、通常の黒い瞳と髪に戻る。

「誤解以前に早まってもらっては困る！！」

白衣を着た青年は頬を膨らませながらレッドイーターの説得に入ろうとする。だが、勢い余って懐から一枚の書類と名刺が落ちた。書類にはシロナの個人情報。

（バスト89、ウエスト59、ヒップ88……。ぐへへへへへへへへ！！）

裏の人格の上品な笑い声がレッドイーターの頭の中に響く。そして名刺には、

「……………『ミハイル・トルストイ』？」

「僕の名前だよ。教えてなかったっけ？」

レッドイーターは無言で頷く。結構前世代の名前にも知識がある

レッドイーターは首を傾げる。

「……………名前からして、旧ロシア国籍？」

「そだよ」

すっかり元の調子に戻った二人を見て、役員達は各々がため息をつき、神機のレッドイーターの神機のフルメンテナンスや、新しい型をした神機の案を出し合う作業に戻った。

レッドイーターも、暴走した自分のため息をついてしまった。L V2の反動で眩暈がするが長時間使用しなければ問題は無かった。

「……………それで、シロナさんの教育係になった理由を訊きたいんですが」

「おお、そうだった。ほら、タツヤ君？ 彼の神機使いとしての急スピードの成長はレッドイーター君の訓練のおかげ、とかシックザール支部長が言っていたもんでねえ。では神機のオーバーホールをしている間に新人君をレッドイーターに任せよう、というのが上層部のお話さ」

結構信頼されているねえ、と、ミハイルは微笑みながらレッドイーターの頭をフード越しに撫でる。愛でているつもりなら殴ってやるのか、とレッドイーターは考えるが、面倒なことを押し付けられた際の脱力感によって水に流される。

そういえば、と、ミハイルは何かを思い出したかのようにレッドイーターを見詰める。

「……………なんです？」

「さっきの赤い髪と瞳って、支部長が持ってきた映像のやつだよ？ 詳しく教えてくれる？」

その言葉にレッドイーターはバツの悪そうな顔をするが、黙っていても意味が無いと悟り、知っている限りの説明を始める。

「……………先程の力はもう1人の僕曰く、Lv2だけ！！という状態らしくて、身体能力が何倍も強化されてオラクル細胞を操作することが可能な範囲が伸びます」

「ちよつと待つて、オラクル細胞を操作？」

「……………そつちから？ では、オラクル操作能力について話しましょうか」

(それなら俺に任せて！ あ、あと新人の教育も全て俺に！！)

(……………ちよつと黙ってる)

面倒なことをされても困る、主に人間関係等で。

「……………これは、空気中にあるオラクル細胞に命令を飛ばす事で、一種のアラガミを形成させます。しかしコアを持たせると自立してしまうので、コアの無いアラガミと言ったところでしょう。この力によって……、」

レッドイーターはルナティック・ツインを作りだしてみせる。ミハイルは目を輝かせながら、白衣のポケットからメモ帳とペンを取

り出し、レッドイーターの言葉を全てメモ帳に写す。

「……剣や大鎌を作り出します。でも、遠距離攻撃はちょっとキツイですね」

「なんでさ?」

「……激しいわけではないのですが、遠距離攻撃に限って頭痛がするんです。でも、地面から生やすように作ったり、自身の体とくっ付いていれば頭痛はしません。でも欠点があつて、何度も作り出すと体内のオラクル細胞の活性化が一時的に弱まっていますよね」

そう言い、レッドイーターはアラガミ化したアラガミ信者達のリーダーを思い出す。想像以上の攻撃力によってキルサイズが何度も破壊され、遂には手を踏まれてもいつもなら逆に持ち上げることができるのに、踏まれたままになつてしまふ程に弱体化した。

「アラガミのコアへの干渉はできないのかい?」

「ん?」

あまり思い出したくない過去を思い出していたレッドイーターは、説明を再開するのに少しだけ手間取った。

「……コアに干渉するのは無理みたいです。たぶんパルスの影響なんでしょうね。それに、自身を中心に離れれば離れるほど操作精度とかが下がりますしね。ちなみにいつもの状態……Lv1?の状態での操作可能範囲は10m前後くらいです。あ、ちなみに今持っている双剣はルナティック・ツインって名前です」

レッドイーターはルナティック・ツインを消す。ミハイルは、名前を付けるほど愛着があるのか、と訊いてきたが、それほどでもない、と軽く受け流す。

「……………それでLv2なんですけど。これはLv5まであるらしくて、体の成長に合わせて体内のオラクル細胞が強化されていくらしいです」

「らしい?」

「……………僕が二重人格だって、支部長からもう聞いているんでしょう? 彼がそう言っていたんです。ちなみに彼とは毎日のように会話してますよ」

聞かれたら漫才みたいな会話ですけどね、とレッドイーターはため息混じりに呟く。裏の人格は今の発言に、失礼な! と怒り出すが気にしない。

「ふむ、大体分かったよ。じゃあさ、ちょっと良いかい?」

ミハイルはメモ帳とペンを片方の手で掴み、余った方の手で顎を擦る。そして、彼はとんでもない事を口にした。

「オラクル操作能力とやらで、猫耳とか尻尾とか体に付けられるの? 極東支部で有名なFSDで君がそんな役をしていたって聞いたんだけど」

「……………」

第四十六話、オラクル操作能力について（後書き）

さて、そろそろ予定を変えて2章も同時に、

考案中

泣いた、ええ、作者のくせに泣いたよ！！

第四十七話、進撃の獣神

12月12日

「訓練場」

9:00

さすがは本部、と言うべきか。

適合率の高い神機使いを集め、甘い教育プログラムなど組まず、徹底的に強力な神機使いを作り上げる。まあ、何を言いたいのかというと、

「……この人数は聞いてないよ？」

レッドイーターは数人の神機使いの訓練を任されたのである。参加者は、新人から最近新人を卒業した人まで。彼が脇に抱えているノートパソコンには各々の個人情報詰められた極秘ファイルが存在している。

もちろん給料は貰える事になってるので断る訳にはいけない。長いため息をを吐きながらレッドイーターは壁に背を預け、ノートパソコンを操作していく。

彼以外誰もいない訓練場にキーボードを叩く音が響く。レッドイーターは個人情報を見ながら教育プログラムを組んでいるのだ。

体重、身長、握力、腕力、脚力、背筋力、学歴（この時代でも学校は存在している）、その他にも色々あるが、人によって効率の良い訓練というものがある。レッドイーターは今考えられる指導全てを想定し、先の情報を頼りに個人個人に当てていく。

ミハイル曰く、メンテナンスの終了は4日掛かるらしい。最初の1日は新人に神機を慣らせ、経験者の欠点（無駄な動き等）を見つける予定だ。

50分は作業していただろうか、背中から出てきた汗が服に染み、数分後に汗が冷えて体が冷える。そんな事を無視してでも作業を進めるレッドイーターの額に浮かんだ汗を誰かがハンカチで拭く。

少し驚いてノートパソコンの画面から目を離し、ハンカチで汗を拭いてくれた人物を見る。

「……あなたですか」

「お疲れ様です！」

元気良く返事したのはシロナだ。その後ろには数人のゴッドイーターがおり、全員こちらを神機を持ちながら注目していた。集合時間は10時、まだ集合まで10分前後はあるはずだが全員揃っていた。

瞳から漏れる感情を覗けばある新人はテンパっており、またある実戦経験者（予測）はどうしてこんな子供が教官？ と思っているのだろう。当然と言えば当然の反応だ。そしてシロナの感情は、

（可愛いなあ〜）

まだ幼さが残るがそんな感情を見せている。記事の情報からして最も適合率が、もとい潜在戦闘能力が一番高いのは彼女の筈だが自覚は無いと見える。

とりあえずレッドイーターは一瞬だけLv2になり彼らを脅してみた。するとどうだろう、シロナ以外は全員放心状態である。一瞬で全身どころか精神にまで届く強力な殺気のはずだが、どうやらシロナは根っから精神だけは強いらしい。

「……………ほら、さっさとアップ始めてください」

「……………りよ、了解！」「……」

(ぎゃっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！)

見事に怯えた声が重なり、それをレッドイーターを中継して聞いた裏の人格は馬鹿笑いする。

だが、レッドイーターは急に体を震わせた。裏の人格の馬鹿笑いも止まる。

感じた(…………)。

スサノオ程ではないが、明らかに並のアラガミではない気配。そして懐かしい感じ。それは、

(……………あの時の、ヴァジュラ！)

(く、ははは！…なるほどねえ)

2人は理解する。これは極東支部に配属された後すぐに感じたヴ
アジユラの気配。それはこのフェンリル本部目指して高速で近づい
てくる。

危険だ。本能がそう教えてくれる。レッドイーターが動く前に、
本部施設に設置されている警報が鳴り、放送が流れる。

『緊急事態！ 緊急事態！ 現在ヴァジユラの群れがフェンリル本
部に向けて前進中！ 非番の神機使いは急遽防衛に当たってください
い！！ 繰り返します！ 現在 』

「……………と仰うことらしいです。皆さんはここで待機してい
てください。2時間後には戦闘が始まるでしょうけど」

「ちょ、ちょっと待ってください！！ 僕達も神機使いなんですよ
！？」

「……………だから？ 死にたくないのなら出てこないくださ
い」

そう言うと、その場にいる全員が黙った。レッドイーターはため
息を吐き、ノートパソコンを閉じて新しい無線機を取り出す。連絡
先はミハイルだ。

「……………こちらレッドイーター、今すぐ全ての役員を僕の神
機のメンテナンスに当ててください」

『そんな事だろうと思ってたよ。言われなくても大丈夫、アラガミ
の接近情報が流れる前から近くにいるという情報を聞いて全員で作

業に取り掛かっているさ。既に君の神機は最終調整の前まで済ませ
てある』

「……………ふん」

上出来です、そう言い通話を切った。そのタイミングで、黙って
いた新人達の内の1人の少年がぶつぶつと呟く。

「（俺達だって……………神機使いとしての力があるのに……………!）」

とても小さな声で呟いた一言を驚異的な聴覚力で聞き取ったレッ
ドイーターは無表情のまま反論する。

「……………違いますね。貴方はアラガミがどういふ存在なのか
も知らない、ただの無力な人間です」

「お前みたいな子供に言われたくねえ!!」

「あ……………?」

レッドイーターの表情は無表情から一転。明らかに怒りが籠って
いる表情へと変わった。いや、人格が変わったのだ。その証拠に髪
と眼は赤黒く染まっていた。

「てめーぶざけた事ぬかしてんじゃねえぞ?」

「ヒッ!？」

突如として現れた赤い壁が少年の側面と後方の逃げ場を封じた。
そしてレッドイーターはキルサイズを作り出し、その黄金の刃を少

年の喉元に近づける。

唾を飲み込む音が聞こえた。それと同時にレッドイーターの人格が元に戻る。

「……………上官命令です。さっさと自分の部屋に戻って待機」

そついい残したレッドイーターは、キルサイズを手元から消し訓練場から立ち去った。

「アラガミ防壁外周部」

12:00

地面が弾け、雷鳴が鳴り響き、獣神の断末魔の悲鳴が大地を揺るがす。

交差するエネルギー弾と雷撃、そして近接型神機使いとヴァジユラの近接戦闘が繰り広げられる。その中でも飛びぬけて強かったのがレッドイーターだ。

「オラアアアアアアアアアアアアアアアア！」

そんな中、咆哮を上げながら、レッドイーターは誰よりも前線でおラクル操作能力で威力が増した強化ノコギリですれ違ったヴァジユラの胴体をマントごと両断していく。もう20体は倒したという

のに、ヴァジュラはまだ50体以上もいる。

普通ならここで諦める者が出てきたかもしれない。しかし距離もあり、よく見えた訳ではないがレッドイーターの戦闘能力を目の当たりにした神機使い達は諦めなかった。主にプライド面で。

「ガキに遅れを取るな!!」

「これでも長く神機使いやってんだ!!」

神機使い達は剣を振るい、引き金を引く。勢いだけならヴァジュラの群れ以上にも見えた。

レッドイーターは空高く跳躍し、銃形態にした神機の引き金を引き、空中で静止し衝撃を加えたら爆発するバレットを放っていく。それにより、ヴァジュラの行動に制限を付ける。

再び地面に足を着けるときには神機を剣形態にし、再び流れるようにヴァジュラをしめていく。

横に振られる巨大な足はそのまま切断し、放たれる大雷球は上手く誘導して別個体のヴァジュラに当て、突進してくるヴァジュラは正面から真つ二つにする。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

ようやく半分ほど倒したところで、レッドイーターの足元に冷気が漂う。レッドイーターは急停止し、そのまま地面を蹴って後方へ下がる。

第四十七話、進撃の獣神（後書き）

はい、実際サリエルでもママジュラでも良かったのですが

ママジュラの方を求める声が多かったので今回はそちらでw

だからどうした？

地面から生えた無数の巨木のような物が、空中を高速で突き進む数本の氷槍をアッパーの如く破壊し、後続の氷槍もその厚い装甲で受け止める。

そうして、さらにレッドイーターの姿も隠したその巨木の内一本が、真つ二つに割れた。上からだ。

「これで、ラストおおおおおおおおおおおおおおおおお
！！！！！！」

振り下ろされるはチャージクラッシュ。その全長は通常の2、3倍はある。完全に死角から落とされた大剣が、新種のヴァジュラの青いマントを切断（むしろ粉碎）し、その巨体を断ち切ろうと更に強く振り下ろされる。

「ギアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「　　ツツツ！？」

胴体に剣が入り、30cm程剣が入った所で、剣が新種のヴァジュラの体から滑るかのように抜け落ちた。よく見れば、新種のヴァジュラの冷酷な女神像に近い口からは、目に見えるほどの冷気が溢れていた。

恐らく、それがこのヴァジュラの怒り状態を示しているのだろう。そして、その怒りに反応するかのように全身が硬化した。

第四十九話、胸キユン？（前書き）

とある感想の一言。

『ラブコメ希望』

・・・・・・・・（ボタボタボタ） 鼻血

え、行っちゃっ系？

マジで!？

第四十九話、胸キユン？

「はっ、はっ、はっ」

神機を構えた人影が、外部居住区の道を走る。

それも1人や2人ではない。何人もの人影がアラガミ防壁目指して一直線に突き進んでいた。レッドイーターが担当する筈の訓練生達だ。その中にいない神機使いといえば、シロナだけである。

「おい！ あの女、本当に置いていっても良かったのか？」

レッドイーターに首を刎ねられかけた少年が、隣りを走る男の同僚に問う。対して彼は、首を縦に何回も振った。

「『教官、いえ上官命令だから。それに、私達が行っても足手まといです』だっけ？ それでも天下のゴツドイーターか！ っつの」

「くはは！ 似てねえぞ？」

「うるせー!!」

同僚の軽口につい反応してしまい、少年は顔を赤くする。他の神機使い達もそれを見て、微かに笑みを浮かべた。しかし、

「もうすぐだな」

誰かが、そう呟いた。

初めての戦場。初めての实战。まだ本格的な訓練を積まされていない彼らがアラガミと、中でも強力な種類であるヴァジュラと戦うのは不可能に近かった。

それは皆理解していた。今だって身体中の筋肉が強張って、変に力が入ってしまう。だが、役に立たない訳ではない。

彼らのバックパックには、大量の回復錠とOンプルが詰められている。これを先輩の神機使い達に渡して、どうにか勝ってもらおう。そう彼らは考えていた。

外部居住区を走りぬけ、アラガミ防壁に辿り着く。やや赤みがある厚い壁には、それと同じくらいの厚みがある横スライド式の門があり、今は人がギリギリ通れるくらいの隙間ができていた。

隙間の向こうからは、爆発音、獣の咆哮、そして断末魔の叫び声が聞こえた。

「うっ、鉄の匂いにする」

鼻を摘みながら、少年は呟く。明らかに血の匂いだ。だが神機使いとヴァジュラ、そのどちらの物かは定かではない。

「すげえ……!!」

軽口を叩いていた同僚の男が、真剣な表情で門の隙間から『外』を覗き込み、そう呟いた。

他の訓練生達もどうした？ と言わんばかりに覗き込む。少年も例外ではなかった。

まず目に入ったのは、ヴァジュラと呼ばれる、猫科の動物に近い姿をしたアラガミの死体。それは緑の無い大地に50以上も転がっていた。だが、凄いと思っただけでは無かった。

『もつとだあ!! もつと来い!!』

『こんなにいるんなら、報酬も金もたんまりだぜ、ひゃっひゃっひゃ!!』

何故か、神機使い達の土気がその空間を支配していたのだ!

無言で彼らの戦闘を眺める。既に人間の域を超えているだろう、同僚の男はボソツ、と呟く。当然誰の耳にも入っていないが……

『ああっ!?!』

大声で、それも数人が同時に驚き、というより恐怖の感情が混じっている悲鳴を上げる。なんだなんだ、と少年は『外』を隅から隅まで見ていく。そして、先に悲鳴を上げた者とは違い、腰を抜かしてしまった。

生き残っているヴァジュラが、ジッ、とこちらを見詰めていた。見つかっている、と思うより早くヴァジュラが動いた。

地面を揺らしながら近づいてくる巨体を前に、訓練生達の中からは逃げ出す者、悲鳴を上げる者、諦める者が出てくる。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

勝てたのだ。どうしてあの子供が教官の立場になっているのかようやく理解した。

たかが（……）ヴァジユラが何体いても、レッドイーターには勝てない（……）。それほど戦闘能力を秘めた人物だったのだと……。

戦闘は神機使いの圧勝という形で終結した。だいたい一般の神機使いが、1人当たり2体前後を仕留めたという計算だ。

一般でないレッドイーターの戦績はすさまじい物だ。ヴァジユラを50体以上。それと新種のヴァジユラ神属であり、第二種接触禁忌アラガミである”プリティヴィ・マータ”1体をも単独で討伐したのだから。

今、レッドイーターは廊下を歩いていた。神機ケースの中で強制睡眠させられている神機の整備ミスをミハイルに指摘するためだ。

一回の戦闘ではたいした事はない。変形、剣身パーツのオラクル細胞の配列、どれも直っていた。だが銃形態時、バレット射出の際未だに予想より左右2度、4度ずれている。

廊下をのんびりと歩きながら、レッドイーターは神機ケースの側面を片手で撫でる。この世界で神機と神機使いとは救世主である。彼も例外ではない。

ただ、一般の神機使いとは少し違う。金稼ぎ、家族や友人を守る、

アラガミを殺した際の快樂を求める者など多々いるが、彼は本部の連中から逃げるために神機使いとして戦っているのだ。

本当は自分で神機のフルメンテナンスをした方が気が楽だ。だがそのような技術はまだ持ち合わせていないので、仕方なく、神機を預けるしかなかった。

「きょくうくかくん」

そんな嫌々オーラを発しまくっている彼の背後から、何者かが唐突に抱きついた。いや、抱いたという方が分かり易い。

柔らかい2つの塊が後頭部に当たり、形を変える。レッドイーターは初めてそんな感触を身に受けた。

とりあえず裏の人格とコンタクトを取ろうとするも、彼も同じ心境なのか、黙って何も言わない。

リンドウ辺りなら殴り倒して、マットで身を拘束してアラガミの群れに放り込むのがレッドイーターという人物だが、初めての経験には何の対処も出来ない。

「……………すいませんが、離れてもらえますか？」

そう言うのが精一杯なのだが、

「うわー、教官良い匂いがするー」

レッドイーターの胸辺りに両手を置いて、彼の頭をクンクンと嗅ぐ女性は聞いてない様である。

レイドイーターはどうにか拘束を解こうと行動に出た。神機ケースを壁に叩きつけ、その音で少し怯んだ隙に脱出した。

「……………って、シロナさん？」

「はい？」

何故かエプロン姿のシロナは首を傾げる、と同時に裏の人格が叫んだ。

(裸エプロン!!!)

(いやいやいや、明らかにおかしいだろ?)

これにはさすがに突っ込みを入れるが、

(を要求する)

(そっち!?)

底の見えない人物の相手をするほど面倒くさい事はない。だが、裏の人格はまだ止めない。

(というか、な、なんだ？ この胸の高まりは？ ハッ!!! これ
が『恋』か!?)

(……………いや、単に殺したいだけでしょっ?)

(ですよね?)

裏の人格はそう言い、ふっつりと声を聞かせなくなった。

ため息を吐きながら、レッドイーターはさっさと三マイルに神機を渡しに行こうとするが、

「……………何故に手を繋いでいるのでしょうか？」

「教官、ケーキ作ってみたんですけど、食べてみませんか？」

食べたいが、今は神機の方が優先順位が高いと判断したレッドイーターは、シロナの誘いを後回しにしようと口を開いた。

「……………今はじん「ちゝなゝみ」に、チョコケーキです」
「…今行きます」

チョコ系統の食べ物が好きなのが災いして、レッドイーターは誘いに乗ってしまった。

第四十九話、胸キユン？（後書き）

続き

あー、でも意味も無くシロナ登場させた訳じゃなくてですね。

話変わって

3章より2章やるべき？（現在これで頭痛をおこしていますw）

第五十話、2つの計画（前書き）

これが始まり早3ヶ月。ちょうど五十話目とはW

第五十話、2つの計画

カタカタと、キーボードを叩く音がある一室で鳴る。壁に複数設置されたディスプレイには、レッドイーターの戦闘を記録した様々な映像がスローで映し出されている。中には細い棒が現れ、映像を拡大するなどの作業も行なわれていた。

ここはミハイル・トルストイに与えられた自室だ。つまり現在映像をディスプレイに映し、それを見ているのはミハイル本人だ。キーボードを高速で叩く指を休めることも無く、彼は黙々と作業を進めた。

複数のディスプレイに様々な映像が映し出される中、ただ一台だけ映像が映し出されていない物があった。それは本部上層部との連絡時に使うために置かれており、基本的に彼からはそれを使わない。

そんなディスプレイに、突然光が灯り、映像が鮮明化してくる。

報告時間か、とミハイルはため息混じりに呟く。誰にも聞こえない音量で、かつ見られないように。

床に置かれたスピーカーが短い時間だがノイズを放ち、次第に収まる。すると男の声が聞こえてきた。画面には本部の上層部、幹部というべき人物が映し出されていた。

彼は口を開く。

『トルストイ開発部長、何か分かったことは？』

毎回同じ質問だと厭あきるな、とミハイルは心の底から思う。しかし、これも強力なアラガミの殲滅に必要な事だ、と自分に言い聞かせ、告げた。

「ええ、面白いことが」

『ほづ』

と呟いたところで、画面の中央に黒い線が引かれ、映し出されていた男の映像が1つの枠の中に収められ、徐々に小さくなりながら右に寄せらる。反対に左には別の男の顔が映っていた。

右に寄せられた男は驚きもせず、ただ訊いた。

『君も聞くのかい？』

『《アーサーソール計画》 第一段階指揮官からの報告は聞いておかなばなるまい？』

回答として、男はさらりと極秘の計画を口にする。

《アーサーソール計画》

内容は、強固な洗脳状態によって身体能力や反応速度を上げた強化ゴッドイーターを作り出す、という非人道的な計画だ。その計画の指揮、つまりスケジュールを決める役にミハイルは選ばれていた。

もちろん彼は反対した。しかし、人質というものほど便利なものはないのだろう。ミハイルは、どこか遠くの支部で保護されているはずの娘の名を何度も心の中で呟く。

数年前、出産に耐え切れず、心身共に疲弊した妻は死んだ。どうにか生まれ落ちた娘は、よりにもよってフェンリル本部に保護、正確には攫われたのだ。

妻の遺体を見せないどころか、娘を人質にし、ミハイルを「犬」にする事ができた本部は《アーサーソール計画》を立案し、有能な彼に全権を委ねた。

ちなみにレッドイーターは《アーサーソール計画》第一段階観察対象ゴッドイーターであるが、本人は知らないだろう。正直可哀想だ。だからミハイルはレッドイーターに構う。まるで自分の娘とのコミュニケーションを取るが如く。

死なせはしない。そう考えながらも、アラガミとの戦闘は死と隣り合わせだ。

ミハイルは奥歯を強く噛み締め、作り笑いで報告を始める。

「彼の能力、本人は『オラクル操作能力』と言っていました。これは我々の希望です。僕が調べた限りだと、あれは神機使い特有の超微弱な偏食場パルスで空気中のオラクル細胞に命令、結合をさせています」

『そんな事が面白い報告なのかね？』

鼻で笑いながら、画面左に映し出されている男は呟く。それに対してもう一人の男が注意する。

『続きを聞くんだ』

『ふん。失礼した、続けてくれ』

「了解です」

作り笑いを崩さずに、ミハイルは報告を再開する。

「もしも、あの神機の内なるアラガミが共振し、その効果を増幅させたらどうなるでしょう？ 私はそれによってアラガミのコアに干渉、制御が可能だと思います」

それを聞いて眉を顰めた男達を見て、ミハイルの作り物の笑顔は本物の笑顔になる。

「もしかしたら、これは一般の神機使いも可能なのかもかもしれません。以上です」

『確かに、面白いとは思うな。分かった、私はこれで失礼する』

『私もだ』

2人はそう言い、ブツン、と画面に灯っていた光が消えた。

それを見届けたミハイルは、不敵な笑みを作った。

「無知って、罪だよねえ」

ポツリと呟いた彼は、まだ、彼らに重要なことを話してはいない。

「よく集まってくれたね」

そう言い、極東支部支部長ヨハネス・フォン・シックザールは笑みでない笑みを、支部長室に集まった3人、リンドウ達に対して浮かべた。

「それで、また貴方は勝手に……」

「面白そうだからねえ。つい、来ちゃったよ」

「まったく……」

壁に背を着け、腕を組み、シックザールとは本質の異なる笑みを浮かべているのはペイラー・榊。そんな彼にシックザールは笑みを崩してため息を吐いた。

それを見てタツヤは笑わないように顔を逸らした。それに比べて、兩宮姉弟は、先ほどから同じ表情を貫いている。ツバキは威厳のある面構え。リンドウはいつもより無表情だ。

タツヤはそれを見て、できるだけ平静を保とうとする。そうした所で、シックザールは告げた。

「レッドイーター君の帰還は、しばらく未定だ」

「えっ!?!」

そんな重大発表にタツヤは驚きの声を上げる。しかし、だれ1人

として彼には反応しない。

「本部の報告だと、ヘリや飛行機で移動する際の道ルートをザイコートの群れが塞いでいるのが原因だ。レッドイーター君にそれを殲滅した後、帰還させる予定らしい」

それでだ、とシックザールは両肘を執務机に乗せ、両手を自身の顔の前に組む。

「その間に神機使いの諸君には、しばらく第一種接触禁忌アラガミ、スサノオの搜索に当たってほしい。この件は他の神機使いにも話してある。慎重に事に当たってくれたまえ。以上だ、下がりなさい」

『了解』

3人同時に返事をし、ドアを通過して部屋を出た。すると、それまで黙っていたサカキが眼鏡を掛け直し、くっくっく、と笑い始めた。

「やはり、時間稼ぎなのかい？」

「ああ、そうさ。レッドイーター君には力を付けてもらい、本部の目を釘付けにさせてもらう」

シックザールは言葉を続けるに連れ、額にしわを寄せていることに気付いた。それを指で撫でながら、そうしてだ、と呟く。

サカキの狐目が少しだけ開いた気がしたのは気のせいではない。長年付き合っていれば自然と分かるものだった。

「強くなった彼にスサノオのコアを摘出してもらい、それをノヴァ

に……」

「……ねえヨハン、」

「ん？」

ととととと歩き、サカキはドアの前に立つ。会話を聞く限りは仲の良い関係に見えるが、直接見てみると2人は対立しているようにも見えた。

サカキは組んでいた腕を解き、再び眼鏡を掛け直す。

「何度も言ってしまったってあれだけど。本当に……」

「やるしかないさ」

サカキは言い切る前に、シックザールは口を挟む。

「私の《アーク計画》こそ、真に人類を救うのだからね」

第五十一話、新たな力、TGS（前書き）

くははは。

GEの最新作……か。ふふふ、

ギレンの真似「あえて言おう、出たら絶対に買いますと……！」

そしたら他のゲーム買えなくなるけどね……。

つか、これにも集中できなくなっているけどね……！

第五十一話、新たな力、TGS

「…………お粗末さまでした」

レッドイーターは両掌を合わせ、軽く頭を下げる。目の前には小皿があり、その上にとても小さな、スポンジケーキのカスが残っていた。

簡潔に言つと、彼はシロナお手製のチョコレートケーキを食べた。

レッドイーターはシロナに感謝の言葉を述べる。美味しかったです。と。すると、シロナは片手を口に沿え、微かに笑った。それを見たレッドイーターは眉を顰める。

「……………なんです？」

「教官つて、何歳なんです？」

レッドイーターは、うつ、と言葉を詰める。このパターンだと最終的に『可愛い』と言われる。そんな気がしてたまらない。

(嫌だなあ…………よし)

若干顔を赤くしながら、レッドイーターは話を変えることにした。

「……………なんで、教官つて呼ぶんです？」

「ふえ？」

上目遣いでレッドイーターは呟いた。シロナは目をパチクリさせながら、

「戦闘技術を教えてくださる方を、教官と呼ぶのでは？」

と答える。うへー、とレッドイーターはつい言葉に出してしまう。教官なんて面倒くさい、ついさっきそう思ったばかりだ。

彼は、普通にレッドイーターと呼んでください、と言って、椅子から立ち上がる。そして神機ケースを担ぎ、部屋を出ようとする。

「あの、きょう、……じゃなくて、レッドイーターちゃん！」

「……ええー」

何故にちゃん付けですか？ と小声で愚痴りつつ、何ですか、と返した。シロナは微笑みながら、

「また、食べに来てくださいね！」

それを聞き、レッドイーターは若干驚きつつも微笑み、また来ます、と答えた。

初めて会ってまだ2日しか経っていないのにレッドイーターの心を掴む人間を見つけ、ある男が叫んだ。それは、レッドイーターの裏人格『様』である。

(なんか状況がピンクだぁー！！！！！)

まるで耳元で絶叫されたかのように、反射的にレッドイーターは

神機ケースを持っていない、空いている手で耳を押さえる。心の中で舌打ちをしつつ、シロナに軽く頭を下げ、部屋を後にした。

さて、ここから先は、

(・・・五月蠅いんだけど?)

(チクショウ！ 俺は話したかったんだ！ あのグラマーな人と！)

(お前そこしか考えてなくない!? 馬鹿だろ!)

(勉強はできるはずさ！ 俺はお前なんだから!)

(この世には勉強できる馬鹿もいるんですう!!)

(テメエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!)

兄弟喧嘩に近い、暴言と暴言の投げ合いの始まりだ。彼らは、精神世界で殴りあい発展するかもしれないほど喧嘩した。

レッドイーターという体は『次世代神機開発施設』に向かって歩く。その間、約30分ほど喧嘩は続いた。その後両者は、この喧嘩は不毛だ、と結論を導き出して、しばし無言タイムに入った。

パシユン、という音と共にドアが開き、レッドイーターはそれをくぐって『次世代神機開発施設』に入った。

神機関連の施設はどこに行っても騒音や機械油の匂いで満ちている。施設内は鼻を摘むような匂いで充満しているが、彼も神機を整備している身なので、それを嗅いでも気にせず、施設を回ってミハイルを探す。

(……さつさと神機を直してもらおう)

レドイーターは心の底からそう思う。神機なくして戦えない、もとい本部長層部の人間達から逃げられない。

可変式神機のオーバーホールには特別な施設が必要だ。つまり、それはこの『次世代神機開発施設』であり、その中の持ち出し可能な技術で今まで可変式神機の整備をしてきた。それなら自分でやればいい、と思うがそうはいかない。こういうのは残念ながらプロに任せたほうが良い。

そのプロ集団の中で、一番偉いのはミハイルだ。彼は開発部長という役職、つまり新世代の神機にとっても詳しい。

とりあえず施設を一周したが、どうということか、ミハイルが見つからない。役員に尋ねても皆、知らないと言つ。

そうこうしている内に、激しい睡魔がレドイーターを襲った。いや、それだけではない。突然眩暈がして、体が揺れる。そして体が後ろに倒れ、ドン、と尻餅を着いてしまった。

「　　ツツたあ〜」

レドイーターは目尻に涙を浮かべながら、腰を片手で軽く擦る。

どつやら腰も床にぶつけたようだ。

考えられる原因は、先ほどの戦闘。

適合率が高い人間は、その高い潜在能力によってより強い力を出せる。しかし、その分身体への負担も高く、大抵は彼のように眩暈が起きる。だが、レッドイーターはあまり無理をしない。今までも戦闘の直後にこのような眩暈はしなかった。

『偏食場パルス』

ついさっき討伐した白いヴァジュラ、プリティヴィ・マータは禁忌指定されていた。もしかしたら、強力な偏食場パルスを持つアラガミを禁忌指定にする傾向があるのかもしれない。

クソッ、と吐き捨てると同時に、後ろから人の足音がした。それはどンドン近づいてくる。

「レッドイーター君」

名を呼ばれ、振り向くと、視界に赤い布で覆われた大きな袋が現れる。

「………ミハイルさん、これは？」

袋を手に取り、レッドイーターはそれを渡したミハイルを見上げる。その顔からは、達成感、だろうか？ そのような雰囲気が出ていた。

「君の、新しい力さ」

「・・・・・・・・チカラ？」

何を言っているんだ、その感想はあながち間違っではない。

レッドイーターには神機がある。そしてその神機は壊れていない。仮に壊れていても、オラクル操作能力で軽くカバーができる。だといふのに、

「・・・・・・・・今更、人が作った力なんて」

「君ねえ……」

ミハイルは呆れた様にため息を吐き、しゃがんでレッドイーターの頭を撫でる。

暖かい手だ。レッドイーターは目を細める。と、同時に両頬を抓られ、左右に引っ張られた。

「話を聞きなさい！」

「ふいーふあーういーでーふー（いーたーいーでーすー）！！」

座っている上に、両手が大きな袋で封じられ、抵抗できずにレッドイーターの頬はぐにゃぐにゃと形を変える。少し目を開けると、映るのは笑顔のミハイル。彼は明らかに楽しんでいた。

とりあえず、オラクル操作能力によって作り出された第3、4の腕でミハイルの腕を掴む。そして、ようやく両頬つねつねの刑から開放された。

「あうーうーうー」

作り出した腕を消すと同時に、レッドイーターは袋を床に置き、開放された両手で抓られた頬を撫でる。すると、ゴトツ、と何か硬い物が落ちるような音が床から鳴る。

目を落とせば、そこには二丁の拳銃が落ちていた。全体的にシルバーとゴールドで塗装され、グリップ下部と銃の先端の下部は、綺麗なカーブを描くパーツで繋がれていた。どうやら袋の中身はこの拳銃らしい。

それを確認したレッドイーターはミハイルに言う。

「……あの、銃なんて大量に持っているんですけど」

連合軍から奪った物が9割9分（99%）であるが、と心の中で呟いておく。しかし、それを聞いたミハイルは人差し指を横に振る。

「チツチツチ、レッドイーター君、ちょっと耳貸しなさい」

ミハイルはそう言い、レッドイーターの耳に口を近づける。傍から見たら危険な関係に見えるだろう。主にミハイルが。

レッドイーターの額から、ぶわっと汗が噴き出る。それを気にせず、ミハイルは口を開いた。極めて小さな、しかしレッドイーターが聞こえる音量で。

「（……これは、『神機』だ）」

「はあ!？」

つい大声で驚きの声を上げてしまう。ミハイルは、人差し指を自身の鼻の前に沿え、静かに、と言う。とりあえず話を続けるために質問した。

「(・・・神機って、1人1台しか適合しないはずじゃ?)」

「(……君忘れた? 君の偏食因子は特殊だって事。君の腕輪はただの保険、君は腕輪無しでも神機と接続できる。この世全てのを、ね)」

確かに、通常のゴッドイーターと違い、神機に引つ張られる感覚は一回も経験していない気がする。だが、いくら何でも接続のための媒体である腕輪無しで接続ができるとは前代未聞だ。

自分のことを何一つ理解していないレッドイーターは、突如放たれた衝撃的事実に目を丸くする。

「(これは、最先端技術を導入している。銃モードと剣モードに使い分けられる上に、持ち運びが楽だ)」

確かに、拳銃サイズなら持ち運びは楽だろう。しかし、ケンモード? ジュウモード? その二つの単語によって、レッドイーターの頭は真っ白になった。

「(これはシックザール支部長の報告を聞いて、急いで作った代物さ。要領は可変式神機と似ている。ただ変形しろって考えるだけで良(う)い)」

彼は、火力は劣るけどね、と苦笑し、レッドイーターの手を取り、共に立ち上がる。

「（君の変式神機を完璧に調整する。その間はこれを使用すると良い。名前は）」

ミハイルはレッドイーターを抱き寄せた。突然のことにレッドイーターは顔を上げ、彼の笑顔を見詰める。

彼は告げた。世界に2つとない双銃の名を。

「（この神機の名は、『ツインガンソード』だ）」

第五十一話、新たな力、TGS（後書き）

TGS（Twin Gun Sword）……、

あ、そういえば東京ゲームショウ2011

たぶんあると思う、ゴッドイーター2（仮）

第五十二話、マルチガンアクション

翌日。

微かに残っている自然の香り。僅かに力強く生える草木。その中をレッドイーターは歩く。

つい最近、ザイゴートの群れが本部を囲むように大量発生し、その群れから離れた一部のザイゴートの殲滅。それが今回の任務だ。レッドイーターは周囲を見渡しながら、黒く巨大な卵殻を探す。

しばらくして、オオオオオオン、という、声でも鳴き声でもない、耳障りな音が聞こえた。レッドイーターは無意識の内に、腰のP53偏食因子製のホルスターに手を伸ばす。直後、

視界の端に、黒い卵殻が映った。

即座にホルスターからツインガンソードを抜き出す。この双銃は渡された後、手にとってよく見てみた。そして、この双銃の基本的な構造はリボルバー（回転式拳銃）に似ている事に気づいた。まだ挙げていない違う点といえば、銃の先端の銃口とカーブを描くパーツを挟み込むように左右に取り付けられた、ロボットの関節のようなパーツだ。

回転式弾倉の装弾数5発。だが通常の弾丸と違い、弾その物が高濃度のオラクル細胞を内包しており、神機が弾の中から一定のオラクル細胞を抽出、エネルギー弾に変換、そして射出する。

1発のオラクル内包量は、正式採用の神機の半分。つまり、正式

採用型が内蔵している、オラクル細胞を弾丸に変換できる数を100とすると、ツインガンソードの弾丸1発は50程度。

しかし、それは『1発分』の数字だ。回転式弾倉には5発。つまり、 $50 \times 5 = 250$ であり、正式採用型よりも長時間の戦闘が可能となっている。そしてこの神機は二台ある。250という数値は二倍に跳ね上がり、さらに長時間の戦闘が可能だ。

その銃を、黒い卵殻に女体を正面に取り付けたようなアラガミに向ける。

あちらも気づいたようだ。女体の頭の上半分が隠されおり、そのすぐ上にある巨大な目玉が、レッドイーターを発見するや、大きく見開かれた。

レッドイーターは地面を蹴り、高速でザイゴートとの距離を詰め、両方の銃の引き金を引く。

バチバチ、とスパークしながら放たれた弾丸は、ザイゴートの擬態である女体の腹に着弾し、小さな爆発を起こした。レッドイーターは立て続けに引き金を引き、その巨体に穴を開けていく。

「ギヤアアアアアアア！」

先程とは違い、明らかに鳴き声として取れる音をザイゴートは発する。

恐らく、仲間を呼んだのだろう。ザイゴートとはそういうアラガミだ。だが、

銃声と仲間の断末魔の叫び声を聞き取ったザイゴート達が、レッドイーターに殺到した。彼は難なく、そして確実にアラガミを仕留めていく。

しばらくして銃声が止み、その場はザイゴートの不可解な声で包まれた。

レッドイーターは眉を顰める。舌打ちとほぼ同時にツインガンソードから回転式弾倉が横にスライドするように現れ、オラクル細胞が入っていない、空の弾丸が弾倉から抜けた。

弾切れ

レッドイーターは右手のガンソードをホルスターに納め、バックパックからスタングレネードを取り出し、ピンを歯で抜き地面に叩きつけた。

『ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!』

耳の調子が悪くなるくらいの甲高い叫び声が、周囲から上がる。レッドイーターは左手のガンソードもホルスターに納め、キーン、と鳴る耳を押さえながら離脱した。

200メートルほど離れ、生えていた樹木に身を隠す。

「……………予備の『弾』は……………あった」

バックパックを開き、中からオラクル細胞を内包した弾丸を10発取り出す。

これが、ツインガンソードの欠点であり、利点だ。

確かに、刃や弾丸にするためのオラクル細胞が尽きれば、ツインガンソードはただの荷物だ。遠距離型神機とは違い、大気中を彷徨うオラクル細胞を回収する事はできない。

だが、再び弾丸を装填すれば問題は無かった。回転式弾倉は再装填に時間が掛かる。装填している隙に攻撃されたらひとたまりも無い。だから弾を込める為に逃げる。ツインガンソードには装甲など備えられていないのだから。

レッドイーターは再び弾を込められた弾倉を元に戻し、ツインガンソード本体をホルスターに納める。そして樹木から顔だけ出し、ザイゴート達の行動を確認する。

特に動かず、ただ周囲に目を向かせているだけ。

レッドイーターは鼻で笑う。樹木から飛び出し、両手にオラクル細胞を密集させる。走りながらそれを頭上に掲げると、オラクル細胞は金色に発光し、小さな『太陽』になる。

「……………喰らえ」

ザイゴートのほとんどがレッドイーターを見つけると同時に、彼は高々と跳躍し、ザイゴートの群れのほぼ中心に『太陽』を投げ込む。

小さな『太陽』は地面に激突した瞬間、大爆発を起こした。……
ザイゴート数体を巻き込んで。

爆心地は真空状態になり、そこに引き込まれるように辺りの空気が動く。地面は融解し、ドロドロに溶けていた。

レッドイーターは赤い板で空中に立ち、その光景を何の感情も覗かせない瞳で眺める。

チカ……ヲ……。

声が聞こえた。

棒立ちのレッドイーターに、若干警戒していたザイゴートは一斉に襲い掛かる。だが彼はそんな事には目を向けず、ただ爆心地を眺める。

チカラヲ……。

まただ、今度は良く聞こえた。

ザイゴート1体が、女体の乳房の付け根から大きく開かれた口をレッドイーターに向ける。レッドイーターは反射的にキルサイズで両断する。

モットチカラヲ……。

レッドイーターは顔を顰めた。自身の心に空いた穴を見つけたから。

は全滅していた。レッドイーターはペタン、と赤い板の上に座り込んでしまう。

赤い板を地面に移動させ、赤い板を消す。カサツ、と音を立てて着地した場所は、ザイゴートの鮮血によって赤黒く染まっていた。

モットダ、モットチカラヲ……！！

「黙れツー！！」

レッドイーターは誰も、アラガミもない場所で叫ぶ。虚無感など感じなかった。ただ、

頭痛がした。眩暈がする。喉が詰まって息が出来ない。

レッドイーターは無線機を取り出し、回収班に連絡を取る。無線機が暖かく感じる程、手が冷えていた。血の気の無い手はプルプルと震える。

『了解。そこで待機しててください。over』

プツツ、という音が無線機から鳴った。それがレッドイーターの耳に入る事は無い。ただ切れたと感じただけ。

「……………そうだよ」

裏が呟いているだけじゃないか、と納得のいかない答えに、レッドイーターは大声で、きつとそうだ！！と叫ぶ。

コイ、コイヨ……。

「黙れ、黙れ黙れ黙れ!!」

泣き喚くようにレッドイーターはツインガンソードを落とした手で、やや長い髪の毛を乱暴に掻き毟る。

頭痛が激しくなってきた。

ボクハ、ココニイル……。

僕？ とレッドイーターは声の主が裏の人格でないことに気づかされる。

そして悟った。この声は、自分自身だと。

「ッ!？」

胸が苦しい。何か、何かが、

(生まれる!?)

荒い呼吸を繰り返しながら、レッドイーターはその場に座り込む。座り方など気にしていなかった。

ただ、胸が いや、体全体が熱い。

そして、直後に放たれた言葉に、レッドイーターは消えかかりそんな意識を手放した。

第五十二話、マルチガンアクション（後書き）

作者の妄想

TGS、剣モード ランク6 切断200 神100

15秒ごとに、OP2消費 最大稼動可能時間は15×125＝1875秒（31分15秒）

×3 左手の剣で左袈裟に斬る 右手の剣で斬り上げ ジャンプし、両手の剣でX字に斬る（この時空中ジャンプ可）

×3 左手の剣を叩き込むように振り落とす 右手の剣で突き 敵から距離を取り、銃モードに移行すると同時に射撃

通常通りのステップ

左手の剣で縦に斬り上げ

左手の剣で突き

× ジャンプ

×（ ） 両方の剣をクロスさせ、全体重を掛けて突っ込む（ショートブレードと同じ）

× 左手の剣を空中で右から大薙ぎに斬る 右手の剣で左から大薙ぎに斬る

R 変形

L ロックオン

銃モード

貫通属性 × 2 . 0 0

破碎属性 × 2 . 0 0

火属性 × 2 . 0 0

氷属性 × 2 . 0 0

雷属性 × 2 . 0 0

神属性 × 3 . 0 0

時間経過によるOP消費無し。

弾切れを起こした場合、自動的に再装填される。15秒掛かる。

使用者の意思によって、弾丸の属性変化。

散弾（破碎属性） × 2 消費OP 3

通常弾（貫通属性） × 2 消費OP 2

長押し 十発（× 2）の通常弾を高速で発射 消費OP 20

ステップ

、又は ステップ射撃後にアドバンスステップ派生可

× ジャンプ

× 、又は 空中射撃

R 変形

L ロックオン（二丁拳銃のため、スナイプモードではない）

第五十三話、『NOVA』

「つもらん」

机に置かれた1本の蠟燭ろうそくに火を付け、ミハイルは目の前にいるスキンヘッドの白人青年に呟く。

煌々と輝く光は2人の横顔を照らす。青年は面倒くさいと言わんばかりにミハイルから目を逸らした。

「やつぱ、あれかなあ？ 1人で規格外の神機を2台も作ったからかなあ？」

「俺に聞くなよ」

「ジャック！！ 俺たち親友だろ！？」

バンツ！！ とミハイルは激昂して机を叩く。はあ、とジャックと呼ばれた青年はため息を吐きながら立ち上がり、ゆっくりとミハイルから離れる。

そして、カチっという音が聞こえた直後、2人のいる部屋が全体的に明るくなる。いや、ここは、

「病室では静かにしろ。あと電気点ける」

病室だ。

ミハイルは、だつて、と唇を尖らせて拗ねる。元氣そうで結構、

とジャックは内心そう思う。

いい歳したミハイルは上半身に服を着ず、それに変わって包帯で体を巻かれ、ベッドに寝ていた。ジャックは彼の痛々しい姿を直視して、片手を自身の顔に付け嘆息する。

ゴッドイーターでも、治安部隊や回収班でもない人間が怪我をするのは珍しい。最近では、ほとんどの仕事を機械任せにでき、人間はそれらの監視しかしないからだ。

「女の子に手を出すなら程々にな？」

「違うぞジャック。僕はそういう人間じゃない。これは、あの子を流れて抱き寄せたらそこら辺の骨を折られたただけだ」

「真顔で言うなよ」

ここで、どうしてミハイルがこんな怪我を負ったか、の件について語ろう。

1つ、本人の発言どおり、昨日レッドイーターさくじつを抱き寄せたら左腕と右足を折られた。

2つ、可変式神機に新機能入れるよ、と嬉しいお知らせをした後、口を滑らせて、2週間くらい掛かるけど……、と呟いたところ、2本の肋骨にヒビを入れられた。

3つ、レッドイーターにシロナの豊満な胸の感触を笑いながら聞いたら、無傷の肋骨3本にヒビを入れられた。

ジャックが見たところ、彼はまだふざけ足りないようである。ヒビの入っている肋骨を折るつか？ と指の関節を鳴らしながら思う。殺気を感じたのか、ミハイルは大粒の汗を包帯に染み込ませながら弁解を始めた。

「いやいやいや！ ほとんどの行為は単に親代わりとしてよ？」

「可変式神機の件は仕事だろうが」

「マイガッ！」

うつ伏せに寝て、ミハイルはしくしくと泣き始める。その頭にジャックの拳が叩き込まれた。

しばらく悶絶している間に、蝋燭の隣に置かれた無線機が鳴る。

「電話きてるぞ？」

「あ、ぼちっと。……はいはい、貴女のミハイルです。で、何ですか……、ツッ！？」

ジャックは眉を顰める。ミハイルののんきな顔が、一瞬で真剣な顔つきになったからだ。

（何かあったな？）

「分かった。病室に運ぶ前にスキャンをしておいてくれ」

「どっしたよ」

ミハイルが通話を終了させると同時に、ジャックは会話内容を訊ねる。

ミハイルは眉間に寄っていた皺しわを無事である右手で撫でる。そして、

「ここだけの話。あの子が倒れた」

「……………うえ、気持ち悪い」

レッドイーターは額を手で押さえながら呟く。

ヘリ内で目覚め、本部に着くなり体内のオラクル細胞の精密スキャン。その後オラクル細胞を安定させるための新薬を飲まされ、この有様だ。

まったく、一体何だったのだ？　と思わずにいられない。きっと、ミハイルもそう思っているだろう。

突然聞こえた『声』。そして最後の『NOVA』という単語。

(……………『NOVA』……ノヴァ？)

ノヴァといえば、サカキ博士が言い出し、いつの間にか一般人の間でも信じている者も少なくない『ノヴァの終末捕喰』なる人類の終末思想が有名だろう。ちなみに、何故一般人が知っているかとい

うと、この思想に感化されたカルト教団が大量集団自殺事件を起こしたからだ。

アラガミ同士が互いを喰らい合い、その捕喰の終点に誕生する巨大なアラガミ、『ノヴァ』が地球そのものを喰らう、という話だ。

レッドイーターはこの手の話に興味があった。故に、『ノヴァの終末捕喰』後の話も知り得ている。

『ノヴァ』は地球を捕喰した後、一個の巨大な生命体となり、地球の生命を再分配する。その後、再び原始へと戻った地球は、新しい歴史を築いていく。

もしも、人類が大気圏外に逃れることができれば、人間は新しい地球で再び繁栄するだろう。

ともかくだ、『NOVA』という単語が現れた以上、ここは森羅万象なんでも知っていそうな裏人格に訊くことにする。

(いやー、『NOVA』に関してはさすがの俺もびっくりだわ)

(……筒抜けって、やっぱり不公平じゃない?)

(じゃ、こっちで話し合おうか?)

レッドイーターの視界は白い光で包まれる。久しぶりの対面かもしれない。もちろん、表と裏、2人のレッドイーターのだ。

(……あ、白って結構良い色だね)

(そついや、お前の好きな色って暗黒だっけ？)

(..... Yes)

「さて、お前があ言葉の言葉を聞いている間に、俺の記憶は『NOVA』に関する知識を得た。あれは、LV3への道標だ」

「..... LV3?」

「LV3に覚醒するための条件をここに提示させてもらおう」

白い空間に、理解可能な単語が現れていく。表のレッドイーターはそれを読み上げていく事にした。

1つ、8歳以上。

2つ、神機との共振。

3つ、怒り。

4つ、偏食場パルスによる、オラクル細胞の不安定化。

「.....不安定化?」

「俺の考えだと、不安定になったオラクル細胞の結合を、強制的に再結合させることによってより強固な結合をするんだろう。動物で例えるなら筋肉が切れて、そこに前以上に強力な筋肉ができんのと

一緒さ」

なるほど、と納得しながら表のレッドイーターは先に進める。

5つ、憎悪。

6つ、腕hあ破#@い。

「これで全部」

きゃはっ！ と甲高い声を上げた裏のレッドイーターは、ピヨンピヨンと白い空間の中を跳ね回る。目障りな事この上ない。

しかし、だ。6つ目の文字化けした単語は何なのだろう？

腕、あ、破、い。この4つの文字は何かの繋がりを感ずる。うん、と首を傾げながら表のレッドイーターは考え始めた。

腕hのhに母音を入れていくと、腕は、腕ひ、腕ふ、腕へ、腕ほ、となる。

「……………よくわからん」

「えー？ 多分『腕は』をじっくり考えたら分かるんじゃない？
とりあえず」

表のレッドイーターの背後を取った裏のレッドイーターは、彼の背中を軽く擦る。

「無茶すんな。いざとなったら俺が出てやる」

「……………ツンデレ狙った気か？」

振り返り、白々しい目で裏のレッドイーターを睨みつける。だが殺意や敵意の類は一欠けらもない。

実際、彼無くしてレッドイーターは生き残れなかった。もしかしたら、『レッドイーターを守護すること』が彼の存在理由なのかもしれない。

「……………ねえ」

「あ、ばれた？」

問う前に、裏のレッドイーターは手を口に沿え、顔を背ける。口元に笑みは浮かべていない。これが演技なら良い線行けるのでは？と、つつい表のレッドイーターは思ってしまう。

裏のレッドイーターはその場に寝転がり、腕を枕代わりにしながら口を開く。

「でもな、俺は俺が生まれつきつけかけを知らないんだ。お前が任務で殺人をしたから。お前の防衛本能が1つの人格を形成したから。こんな考えだって、沢山浮かんでくる。毎日のように……な」

「……………というか、本当にお前は『守護人格』なのか？」

「そんな事、俺にはわからん。ただなあ」

骨格が歪んでいるように見えるほど、邪悪な笑みを裏のレッドイ

ーターは浮かべる。

「生命をこの手で強引に破壊するのが、楽しくて楽しくてしょうがないねえ」

「ツツ!?!」

血液が凍ったかもしれない。そう思えるほど、背筋が固まる。ゴクリ、と飲み込む唾は暖かい。

裏のレッドーターは、寝ながら手を振る。物足りなさや安心感が、もう終わりか、という言葉で片付けられた気がした。

「ばいばい」

表のレッドーターの目に映るのは自身と瓜二つの顔と、白い光。

第五十四話、教官はやはり鬼（前書き）

パソコンやっとな繋がったです。遅れました赤の川です。

いや、ほんつとくに遅れましたごめんなさい。

まあ、たぶん今日から今までと同じペースで更新していくと思いますので、よろしくお願いします！

第五十四話、教官はやはり鬼

12月26日

「せやアあああああああああああああー！」

「行けッ！！」

本部の訓練場からは剣が空気を引き裂く音や床を蹴る音、並びに銃声が鳴る。

言つまでもなく、彼らはゴツドイーターになつたばかりの新兵たちだ。彼らは額や頬に浮かぶ汗すら拭う暇すら与えられず、ただひたすら、教官に設けられた合格点を超えるために神機を振るい、引き金を引く。

そんな事をする教官 いや、もはや鬼教官と呼ばれるプログラムを組んだのはレッドイーターである。

そんな鬼教官はどこで新兵たちの訓練を見ているのかというと。

「レッドイーター君。君の好みの女性のタイプは何だい？」

「……………すみません。聞いてませんでした。僕は10人までしか話を聞き取れないんで」

「君は聖徳太子の生まれ変わりかッ！？」

『……………せめて聖徳太子に呂布を足して、2で割ってください』

『無理だわッ!!　そして君には織田信長も入れるべきだと思うよ!?!』

『……………とゆうか、何故に東洋の人物に詳しいんですかね?』

天井に備えられたスピーカーから2人の声が溢れ出てくる。またやってるよ、と誰かが呟いたのは気のせいではないだろう。

広さだけではなく、天井も高めに設定されている訓練場の壁。訓練中の彼らの姿を一眸できる高さの所の壁は防弾ガラスに変わり、その向こうに鬼教官と開発部長がベッドに横たわりながら駄弁っていた。

正直、訓練生の彼らは見慣れてしまった。ちなみにレッドイーターが男子だという事も承知している(口を滑らして、彼を女の子と言った男が殴り倒されたため)。

ほぼ毎日の訓練で、骨を折られ療養中のミハイルが何かレッドイーターに話題を振り、それを何か理由を付けて返答するとミハイルがそれに突っ込む。

たまに面白い話題を面白い返しでし、それに面白い突っ込みを入れることがあるが、彼らに笑っている暇はない。それほどレッドイーターが組んだ訓練内容が過酷なのだ。もっとも、最初から過酷な訓練なら体を壊す者がでるため、徐々に合格点を上げていく訳であるが。

「はア、はア、はア」

そんな汗臭い訓練場から、女の荒い息が聞こえる。

シロナだ。

最もレッドイーターが個人個人に出した合格点に、あと少しと食いついているのが彼女だ。他の訓練生以上に激しい運動を繰り返し（そして胸が揺れて）、レッドイーターに叱られるほど熱心に訓練している。

何故そこまでして頑張るか？ その場にいる汗臭い野郎共は思う。女子陣は理由を知っているのか、一休みしている間に彼女を応援する。

ある時、レッドイーターは訊ねた。男性が女性のプライバシーを訊くのはいかなものかと思うが、良いのだ。鬼教官レッドイーターにそんな遠慮など存在しない。

彼女はこう言った。

『私には兄がいて、あの人はずっと私のことを守ってくれていたんです。両親がアラガミに食べられちゃって、唯一の肉親だからなのかもしれない。でも、いつまでも守られてばかりじゃいけない。そう思ったんですよ』

強い意志。それを聞いてから、レッドイーターは彼女を叱らなくなった。自分の好きにしる、そう言いたいのだ。

どこにでもいるような神機使いなら、既に体を壊しているかもし

れない。だが、彼女の適合率はレッドイーターを除けばかなり高い。世界中に展開されている支部の中でも、彼女のような適合率を示す者はそういない。

適合率が高い。故に体は丈夫なのだ。タツヤさんを思い出すなあ、とレッドイーターは呟く。

タツヤにも結構なスパルタ教育を施していた。だが、限界と違って、その限界を少し超えるまで休まないで、というレッドイーターの指示通り、彼はグングンと成長した。

シロナたちをぼんやりと見て、ミハイルの質問に軽く返し、何時間経っただろうか。ジャックと呼ばれている、ミハイルの友人が来てようやく現在時刻に気づく。もう訓練生たちは合格点を超えていた。

レッドイーターはマイクに口を近づけ、

『……皆さん、ご苦労様です。そして、合格、おめでとうございました』

訓練場から喜びの声が上がる。防弾ガラス越しとはいえ、彼らの目を見れば感情の起伏など手に取るように分かった。

ある者は力を認められた事に喜び、またある者はもうすぐ実戦だと体をカチコチに固める。

それを見て、レッドイーターは一息吐いた後、

『3日後に、アラガミ防壁を抜けてアラガミの討伐に向かいます。』

『……らしいので、僕も同行する事になりました』

12月29日

「……よし、行ってください」

「「「「いやいやいやいや!」「」「」」

その場にいる男女全てが突っ込む。極めて小さい声でだ。

どうして? と言わんばかりに首を傾げるレッドイーターは可愛い
いが、同時に結構憎たらしかった。

背中を見せながら浮遊するザイゴート3体に指を向け、レッドイ
ーターはGOサインを出す。だが、新兵たちは神機を地面に一旦置
き、一斉に腕をクロスさせ、無理、と答える。

剣身をP53偏食因子製の包帯で巻いた神機を肩に担ぎ、レッド
イーターはため息を吐く。そして、

「……なら見ていてください。まだ結構な数がいるらしい
のだ」

スナイパータイプの銃身 アルバトロス を1体のザイゴ
ートに沿え、すぐに銃口からレーザーを放った。もちろん、本当の光
ではないので目で追えるスピードである。

くとも、目の良い神機使いには破裂した原因が分かった。

ここで、バレットについて軽く説明する。

バレットは、支部のメインコンピューターのサポートを受けながら作成する事が出来る。バレットの構成には多様性があり、1発のバレットの攻撃力の底上げや、複数のアラガミを巻き込む攻撃。味方のオラクル細胞を一瞬だけ活性化させ、回復錠などと同じ働きをする回復弾系。近接式神機の適合者には無縁だが、これを趣味の1つにする神機使いは少なくない。

効率重視のレッドイーターなら、尚更なほさらバレットの構成を調整。

つまり、放たれた弾丸に『プログラム』された別の『弾』が、ザイゴート体内に侵入すると同時に起動し、内部から破壊したのだ。

一瞬だけザイゴートの内側から見えたのは青い霧。それは『爆発系』の攻撃だ。広範囲に渡る氷属性の爆発の威力は、スナイパータイプの銃身だが氷属性の射出力もあり、十分な火力を誇れる。

黒い卵殻の破片は、細胞の崩壊が間に合わず、地面に衝突しコロコロと転がる。

アラガミの最期を見届けたレッドイーターは、見てて気持ち悪いという感情を顔に出さず、背後にいる新兵達に振り返った。

「……………コアさえ破壊できれば、アラガミなんてこんなものです……………あれ？」

再び首を傾げる。振り返れば、そこにはシロナ・アリアス以外、

精神的に危うい者も出てきた。目の焦点があっていない人は危険だ。

だが、本当に危険なのは、

「ちよちよちよ、ストップストッププー！」

「「「「どうした!?」「」「」」

先頭を走っていた少年が急に立ち止まる。それに合わせて、全員その場で足を止める。だが、どうした、と訊いて2秒後には、皆が自身の身の危険が迫っている事に気付いた。

確かにあの鬼教官は怖い。性格的にも実力的にもだ。何度殺されかけただろうか。今になってみれば懐かしい記憶だ。

だが、彼と離れなければよかったと、今更ながら思ってしまった。

少年少女、彼らの目に映るのは黒い卵殻に女体を付けたようなアラガミ『ザイゴート』の群れ。そして、

銀色の甲冑を取り付けたような、西洋の騎士のようなアラガミ（
・・・）2体がこちらに向かって行進していた。

第五十五話、新米搜索

やりすぎたな、と頭を掻きながらレッドイーターは神機を引きずる。彼の傍にシロナはいない。

幸い、ここは本部からそう離れていないエリアだ。1人にすくらいなら、本部へと引き返してもらった方が良い。故に彼女には装甲車で帰ってもらい、搜索部隊の要請を頼んだ。

彼女は真面目だが、少々のおとな性格であるのが心配である。が、今はそちらの心配より、新米兵たちを見つけることの方が優先だ。

ザイゴートは、オウガテイル、コクーンメイデンと同じく単体の戦闘能力が低い。低ランクレベルのアラガミとも呼ばれるほどにだ。だが彼らの本領は、大型アラガミの援護にある。

雑魚とてアラガミ。大型アラガミの出現報告はまだ受けていないが、もし現れ、戦闘に入った場合。随伴していた小型アラガミによる死角からの攻撃は、ベテランの神機使いでも死へと繋がるケースが非常に高い。なので、フェンリルはそれ自体の危険性が低くても、小型アラガミの討伐ミッションを出してくる。

その小型アラガミとの戦闘さえ、足が震えるような新米たちだ。早く発見しないとアラガミの奇襲を受けて殺されるかもしれない。そう考えると、レッドイーターは自身の愚かな行動に頭痛がしてきってしまう。

元々、初陣という緊張感で体が固まり、レッドイーターの戦闘能力を目の辺りにして震え上がった彼らが、アラガミに勝てるわけが

無い。

剣身に巻かれた包帯を取り除き、神機の柄を握っていない左手にガンソードを握らせる。そして立ち止まると同時に、神機を変形させた。

「オオオオオオン」

「……………来たか」

そう呟く頃には、レッドイーターは宙を舞っていた。

いつの間にか背後を取っていたザイゴートは、叩き潰されるかのように強化ノコギリの一撃を受け地面にめり込む。

1体だけではない、数体のザイゴートが宙を漂い、レッドイーターを取り囲む。そして、地上からはコクーンメイデン数体が体を出し、既に着地しているレッドイーターに向けて砲口を向けていた。

しかし、地上への攻撃しか（・・・）できないコクーンメイデンなど、レッドイーターの能力の前では無力と言えよう。

半径約10メートル以内にいたコクーンメイデンの、地下に隠れている本体付近に爆発が生じる。大型アラガミなら蚊に刺される程度の攻撃だ。だが、それだけでコクーンメイデンは力尽きる。

大型アラガミのような、単体の『質』にこだわる訳ではなく、複数のアラガミによる『数』を主体にしているからだ。単体での脆さがオラクル操作能力の攻撃によって露になっている。

残ったコクーンメイデンは彼を危険な戦闘能力だと判断したのか、すぐさま砲口からレーザーを放つ。だが、包囲網を崩された今、これを避けて攻めに転ずることなど苦でもない。

「らあああっ！」

再び空を舞ったレッドイーターは、強化ノコギリの鉤爪のような刃を上手く利用し、ザイゴートを剣身に引っ掛けてハンマーのように振り回す。空中のザイゴートは蹴散らされ、引っ掛けられたまま地面に叩きつけられたザイゴートは血を撒き散らしながら絶命する。

「オオオオオオン！」

蹴散らされたザイゴートは、吹き飛ばされながらも体内の毒ガスを液体に変換し、狙いも付けずに放つ。それが地面にいたコクーンメイデンの目の前に落ちる。

「ちいっ」

惜しい。狙ったわけではないが、あの毒はアラガミにも有効だ。上手く当たってくれば手間が省ける。だが、この世界がそんな幸運など認めるはずも無い。

着地の際の受け身で隙を見つけたのだろうか。コクーンメイデンは再びレーザーを放つ。それを紙一重で避け、左手に握ったガンソードの通常弾を、時間が認める限り何発も撃ち込む。

死んだかどうかは確認してられない。別個体のコクーンメイデン何体もがレーザーを放つ。ただ発射や距離の関係で、レッドイーターの元へ辿り着くのに時間差が生じた。

神機の柄を逆手に持ち、装甲を展開する。装甲を巧みに動かし、レーザーを逸らしていく。

「……………時間がないんだ」

第2波、3波のレーザーを逸らしながら呟く。

「だから死んでくれ」

走りながら神機を捕喰形態にし、メインユニットから解放されたオラクル細胞が形作る黒いアギトでザイゴートを丸呑みにした。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ！！」

レッドイーターは咆哮を上げ、地面を蹴って空中を飛び大剣を横に一閃！オラクル操作能力によって伸びた剣は、易々とザイゴートたちを斬り裂き、そのまま身を捻ることによってコクーンメイデンを叩き潰す！！さらに地面に突き刺さった剣を軸に、レッドイーターは空で逆立ちをし、ガンソードで残りのコクーンメイデンを撃つ。

弾に込められたオラクル細胞を使い切る頃には、小型アラガミの殲滅は完了していた。

空の弾丸を弾倉から排出するよりも早く、神機を銃形態にし引き金を引く。

そう、ほぼ真後ろに。

刹那、爆風がレッドイーターの体を吹き飛ばす。

「かはっ!?!」

地面を何回もバウンドし、ようやく勢いが弱まったところで肺から空気が搾り出された。反射的に目を閉じたため、あくまで推測しかできないが、

(クアドリガ!?)

ならば爆風の発生源は、クアドリガの放ったミサイルである。もし直撃を受けたら、レッドイーターの体など髪の毛1本と残らないだろう。

目蓋を開けようとしたところで、レッドイーターは自分でも理解できぬまま地面を転がる。

直後、先ほどまでレッドイーターが転がっていた地面が沈む。まるで巨大な杭に打たれたかのようにだ。

「っっ」

ようやく目蓋を開き、攻撃してきた敵を確認する。

太陽に照らされるアラガミは、サソリのような風貌に、白銀の鎧で身に包んでいる。

(クソッ! ボルグ・カムランか!)

レッドイーターが攻撃を避けた事によって、ボルグ・カムランの

「りゃあああああつっ!!」

そして足を左へ、装甲を右へずらす事によって、ボルグ・カムランの進行方向を変える。脚を止めるのに手間取った。その一瞬の隙にレッドイーターはボルグ・カムランの懐　死角　に入り込み、強化ノコギリを振り上げた。

隙を突かれ、絶命したボルグ・カムランの血が雨のようにレッドイーターの肌を、服を、神機を汚す。それを拭わずに、レッドイーターはその場から離れる。直後、立て続けに爆発が起きた。

ボルグ・カムランが死に、残された1体のクアドリガが背部に付いている箱状のミサイルポッドより小型ミサイルを、計6発放ったのだ。

避けた時間だけ、相手は次の行動に移る。

そう考えた瞬間、レッドイーターはクアドリガに向けて、体中が痛みながらも駆け出す。クアドリガは前面装甲を開き、装甲内から生えるように現れる大型ミサイルを放とうとしているにも関わらずだ。

いつの間にか落としたガンソードを拾うことなど考えず、ただレッドイーターはクアドリガに向けて駆け抜ける。

大型ミサイルが放たれる。それを即座に展開した装甲に当て、あえて（・・・）爆発を起こす。

「ぐ、うおおおおおおおっ!!」

これで一通りの殲滅が完了した。後は新米たちを見つけ、連れて帰ればいい。

「はあはあはあ」

荒い息をしながら、1人の少女は廃家に身を潜める。

まったく、聞いていなかった。まさか、

まさか、ボルグ・カムランが2体もいたなんて……！！

今は離れ離れになっているが、彼女の他にも、多数の同僚がいる。だが、彼らの安全など気にしていられるほど、彼女は頭が回らなかった。

唯一手放さなかった神機を抱きかかえるように、その場で縮こまる。

今も、外からアラガミの鳴き声が聞こえる。聞きたくない、故に脚で神機を挟み、両手で耳を塞ぐ。

幸い、ザイゴートは聴覚よりも視覚の方が発達しており、1方向の索敵能力が飛びぬけている代わりに、広範囲の索敵能力はあまり高くない。大きな音さえ出さなければ、このままやり過ごせる。それだけを信じて、息によって発せられる音をできるだけ大きくせず、体を丸める。

「え」

ケモノの鳴き声のようで、本質が全く異なる鳴き声を聞き、無線機に伸ばした手を止め、少女は適合した近接式神機　ロングブレード　を反射的に構える。

冷静になると、警戒しつつ呼吸を繰り返す。

「きゃっ！」

しかし、雪に足を取られてその場に座り込んでしまう。しまった。そう呟いたのと同時に、彼女の背後に巨大な影が現れる。

頬から顎へ向かうのは、一粒の汗。

レッドイーターの耳に響くのは、数回連続で鳴るコール。そして、彼の後ろにはここまでの道中で保護した新米たち。どうにか全員、身も神機も揃っている。

「どうですか？」

「………出ないですね」

恐る恐る、といった感じの少年の質問にレッドイーターはそのままの事を言う。

彼は再び神機の剣身に包帯を巻き、左腰のホルスターにガンソートを納めていた。可変式神機は、本部が隠蔽するオラクル技術の一

つだ。たとえ神機使いであろうと、その存在を知られるのは非常に不味い。

リンドウさんたちは幸運だな、とため息混じりに呟いたこともあった。懐かしい。早く本部周辺のアラガミを殲滅して、アナグラに帰りたいと心底思う。

懐かしい、といってもごく最近の思い出を掘り返していた所で、背後からエンジン音が聞こえる。すると、手に握っていた無線機が震えた。迷わず通話のボタンを押し、耳に付ける。

『 あ、レッドイーター君？ ミハイルなんだけど、そろそろ迎えが到着したんじゃない？ 』

「 …… ええ、ちょ・う・ど、五月蠅いエンジン音を鳴らしながら装甲車が来ましたよこの野郎 」

アラガミに見つかったらどうする？ と言いたいが、たとえ現れたとしても、レッドイーターの戦闘能力を持つてすれば、第二種接触禁忌アラガミ程度までは大丈夫、とでも判断したのだろう。

そうなのか？ と問う前に、ミハイルは自身のペースを崩さずに会話を進める。

『 じゃ、全員保護できた？ 』

「 …… いえ、あと1人探しています。僕はもう少し辺りを探すので、彼らには先に帰ってもらいますね 」

『 了解了解。じゃ、また後で〜 』

「ええ、手料理作ってあげますから、覚悟して待っていてください」

『 オツシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ツン』 プ

耳が痛い。解決策は通話を切る。

手料理を作るの久しぶりだなあ、と呟き、レッドイーターは新人たちに装甲車に乗るよう命令した。

第五十五話、新米搜索（後書き）

風邪ひいた

ひいてしまいましたorz

第五十六話、アラガミバレット

しばらく歩くと、頬に冷たい液体が付着した。

もっと先へ進むと、あたり一帯は白で染まる。

「……………雪か」

空を見上げれば、降ってくるのは白い雪。もう本格的に冬だな、とレッドイーターは白い吐息を口から漏らしながら思う。

(……………それにしても見つからない)

雪から頭を守るために、レッドイーターはフードを被る。その後、無線機を取り出し、ミハイルの無線機へと掛けた。暇だったのか、彼はすぐに出てくれる。

『見つかったの?』

「……………いえ。ちょっと頼みたい事がありました」

銃身を降り積もっていく雪に突き刺し、辺り一帯を見渡す。人の、いやアラガミの気配は感じない。ただ念のため、といったところだ。

安全だな、と確認したところで、ポケットからレーション(プリン味)を取り出す。

「……………腕輪、P53アームドインプラントって発信機が内蔵されてましたよね? それで、彼女と僕の位置と距離を教える

くれませんか？」

『 OK。ちょっと確認する時間をくれない？』

「（ポリポリ）…………ふあやくしてください」

『 君って意外に緊張感無いよね？』

早くして、と伝えたかったのだが、腹が減っては戦はできぬ、と随分達者な日本語を知っているレッドイーターはレーションで胃を満たす事を優先し、判りづらい言葉を発してしまう。

無線機を耳に付けたまま、レッドイーターは口でレーションを挟み、空いた手で神機を引き抜く。

（…………今のうちにバレットのチェックをしておこう…………ん？）

神機のシリンダーを回し、入れてあるバレットを確認していく。その中に、見たことのないバレットが納まっていたので、口で挟んだレーションを落としそうになった。

これはなんだとミハイルに尋ねる為に、レーションを丸ごと口に入れて咀嚼する。そしてプリン味のレーションを胃に流し込んだ。そこで、再びミハイルが言葉を発する。

『 レッドイーター君。君の位置から北東に173メートルの所に腕輪の反応を確認したよ』

「……………そうですかありがとうございます。ところで、この

いつの間にかシリンダーに入っていたバレットは何ですか？」

『 あー、やっと気付いてもらえたよう！』

無線機から少し耳を離し、耳鳴りする状態を予防したことによって苦しまずに済む。どうやら、レッドイーターが正体不明、中身不明のバレットを発見してしまったことが、マイルにとってはとても嬉しい事らしい。

『 前に言ったよね？ 神機に新機能入れるって』

笑いを堪えようとしているのだろうか、とりあえずレッドイーターにとつてはイラツとする口調だ。ミシツ、と無線機から鳴ってはいけない音がしたのは、気のせいだと思いたい。

業を煮やして、早く言え、と文句を言うと、すんなりとマイルは語り始めた。

『 それは《アラガミバレット》さ。アラガミの体を捕喰した際に、奪取に成功したオラクル細胞に詰まっている情報を元に、通常バレット以上の高威力バレットを神機が作成する新システムさ！アラガミ、彼らの繰り出す多彩な攻撃は現代科学では解明できない点があるんだけど、その力を僕らが扱えるようになったら、戦いは幾分か楽になるんじゃないかな？ その発想を元に、可変式神機担当スタッフ総動員で完成に成功させたよ！！』

「・・・・・・なんと」

驚きをあまり表に出さず、軽く受け流す。とはいっても、このシステムは成功していればとてもありがたい事だった。

ようは、仮にオウガテイルを捕喰したとする。するとオウガテイルの体を形成していたオラクル細胞の情報量と呼ばれるモノを神機が解析し、自動的にシリンダー内で特別なバレットを作り、発射を可能とするのだろう。

神機もアラガミ。喰らったものの情報を読み取る。そして、この神機が剣形態と銃形態のどちらも使用可能だからこそ、このシステムは存分に効果を発揮する。

「でも注意事項として、アラガミバレットは無限には生成できない。なにせ捕喰したオラクル細胞で作るんだからね。僕達の計算だと、通常の捕喰なら3発。攻撃中に繰り出すコンボ捕喰なら1発生成できる」

「……つまり、バンバン捕喰して、アラガミバレットというものを放てば、迅速に戦闘を終わらせられる……と？」

「いや、僕の予想だと、仮にクアドリガを生きながら捕喰したとする。多分だけど、その際ミサイルかなんかのアラガミバレットが生成されるんだ。だが、爆発っていうのは一般のバレットで言う、火属性の可能性がある。クアドリガは火属性への耐性が高い。つまり効果が薄いかもしれないんだ」

アラガミバレットは強力でありながら、相手によっては軽傷、又は効果が無いと言いたいのだろう。

ここまでで、自身が喰らってきたアラガミを思い出す。サイコート、そしてクアドリガだ。

「……でも、別に火属性だけではないのでしょうか？ どんなバレット……いや、アラガミの攻撃手段にも、破碎属性か貫通属性の力があると聞いています。僕の記憶が正しければ、クアドリガのミサイルは破碎属性を含んでいた筈です。それなら属性を気にせず、奴の前面装甲にアラガミバレットを叩き込めば良い話です」

現場で戦うものだからこそ分かる。故にアラガミバレットの含む属性や威力は安易に予想できた。

レッドイーターの頭には、戦闘済みのアラガミに関する情報が詰め込まれている。頭の固い大人ではなく、まだまだ成長する子供だからこそ、記憶力は非常に優れているのだ。

シリンダーを回転させ、通常のバレットとアラガミバレット、その2つを固定設定し、ミハイルの言葉通り北東へ向かう。

「……とりあえず無駄話はこれで終わりです。彼女に動きは？」

「ちょこちょこ動き回っているね。もしかしたらアラガミと遭遇したのかもしれない」

舌打ちを鳴らし、通信を切る。そしてポケットにしまい、レッドイーターは一般の神機使い以上のスタミナをフルに使い、全速力で北東へと向かった。

嫌な予感がする。

そんな感想から湧き出る恐怖を強引にねじ伏せ、バックパックからOアンブルを取り出し、口に銜^{くわ}える。

目的地に着いたと思った瞬間、正面から大量のニードルが飛来した。それは通常のバレットでは捌ききれない程だ。

1拍以上の余裕がある。だが回避に徹しても、大量にばら撒かれたニードルに直撃してしまう。

(……さっそく、)

銃口をニードルの密度が非常に高い方向へと向け、引き金を引いた。

(使わせてもらっ……!!)

銃形態時では使用不可の装甲が、迫り来るニードルとは全く同じ、つまりレッドイーターの方角へと向いたかと思えば、ほぼ同時に剣身が下へと向く。

そしてメインユニットのオラクル細胞が、レッドイーターの意思に反して解放されたかと思えた瞬間、

(クアドリガの大型ミサイル!?)

銃口からミサイルが飛び出した。それはまっすぐ無数のニードルへと突っ込み、1本のニードルに直撃した。その後すぐ、ミサイルは爆発音を鳴らし、激しい爆風を巻き起こして周辺のニードルを木っ端微塵にした。

その爆風は、アラガミバレットの発射時間が長いこともあり、つまりニードルの接近を許したことにより、レッドイーターの体を軽く吹き飛ばす。

雪の中に体を埋め、本日二回目の爆風による吹き飛ばしに軽くシヨックを受けながら、レッドイーターは通常のバレット レーザ―を、ニードルが飛んできた方向に向かって撃つ。

カキンツ、と刃物を、岩のように硬い鎧に向かって当てた時と似たような音がする。

(.....硬いな。ボルグ・カムランか？ ならば)

倒れた状態のまま、レッドイーターは神機から放している手を白い雪の中へと潜り込ませ、掌から衝撃波を放つ。その反動で、彼は重力を無視したかのように立ち上がる。

〇アンプルを落とさないよう、しかし噛み砕かないよう、絶妙な力加減で改めて〇アンプルを銜える。

(.....空中ならば！)

レッドイーターは足元の雪を神の炎で溶かし、緑の草で覆われた大地を露にした瞬間、空を跳ぶ。

銃口を再び見えない敵に向け、引き金を引く。すると激しい衝撃が、神機の柄を握る手から腕へ、やがて全身へと伝わり、レッドイーターの体を後ろへと動かす。

その原因であるアラガミバレットは、地上での発射よりも早く発

射されており、また大型ミサイルの姿をしながら雪の中を突っ切る。

指で数えられるほど短い時間の間に、爆発音が聞こえた。

その爆発音が合図だとしても言わんばかりに、無事着地したレッドイーターはレーザーを放つ。何発も、何十発も。

「キシヤアアアアアアアアア！」

(・・・やっぱりボルグ・カムランか)

突如として聞こえた鳴き声で、推測でしかなかった偽りの神の名を、Oアンブルを挟んでいて使えない口の変わりに、心の中で呟く。

かのアラガミは、雪解け水で濡れた巨体を4本の足を器用に動かし、かつ一対の盾を合わせて突っ込んできた。

(んなっ)

その場にしゃがみこむ事によって、どうにかレッドイーターの小さな体は突進の直撃を避ける。空気を裂くような速度で突っ込んできたせいから、頭上を通り過ぎたボルグ・カムランにフードを脱がされる。首元に入り込む雪の冷たさに、レッドイーターは顔を顰めた。

Oアンブルのガラス管を思い切って噛み砕き、そのまま中身を嚥下する。ガラスの破片で切れた唇からは、少量の血液が溢れ出た。

痛いとは感じない。

否、感じている暇が無い。

どういう訳か、ボルグ・カムランは盾を合わせている時とそうでない時では、盾の防御力が違う。つまり、レッドイーターはそこを狙った。

2発目のアラガミバレットは、確かにボルグ・カムランの盾に直撃していた。だが破壊には至っていない。この時、ボルグ・カムランは盾を合わせていた。

3発目のアラガミバレットは、糸も容易く盾を破壊した。2発目でダメージを与えていたとはいえ、あまりにも簡単に破壊できた。この時、ボルグ・カムランは盾を解除していた（正確には、強制的に解除させられた）。

肉塊となった盾など盾にあらず。レッドイーター左腕の巨木を消し、その手にキルサイズを持たず。

距離を詰めるのに、時間を数える必要は無い。

ただ早く、迅速に、

神速に！

レッドイーターはボルグ・カムラン右側面を取り、もとたて防御力皆無の元盾を根本から切り落とす！

「ギ……シャアアア！」

右腕から噴出すアラガミの血が、元々汚れていたレッドイーターの皮膚や服を汚す。血を見るのに慣れた彼は、ただ殺す事を優先す

アラガミバレット発射の反動で、レッドイーターはボルグ・カムランから離れる。目の前のアラガミは、足を小刻みに震わせながら、口から、背から、大量に血を噴出す。

そして、遂にボルグ・カムランの足から力が抜ける。ドスン、と大きな音を立て、その際生じた風圧が、舞い降りる雪を一瞬だけ吹雪へと変貌させた。

第五十六話、アラガミバレット（後書き）

赤の川の暇つぶしver1

この先は大人の話やネタバレ（神の子シリーズ関係無し）を含みます。見たくない人は回れ右してくださいww

2065年

ゴッドイーターについて詳しい人なら知っていますよね？

そう、プロモーションアニメでソーマ君と雨宮姉弟が活躍した年です。そして同時に、アリサの両親が黒猫に喰われた年でもあります。

で、ここからが本題なのですが。

第二十三話の後書き、皆さん覚えているかなあ（汗）

あれで、なんで主人公の入隊が1月なの？ と思った方もいるかと思えます。

早い話がアリサ・イン・アンダーワールドの影響です。

2070年

アリサがゴッドイーターになった年だったはず（うる覚え）です。で、細かい話は省きますが（ヘルマン最高!!）。

オレーシャ戦死。おそらく2071年ですが、アリサはまだまだ新米。なのに、もう新しい年を迎え、極東に飛んでおります。

つまり主人公が入隊したのは西暦2071年序盤（少なくとも1月か2月か）と予想できる。

ザ・スパイラル・フェイト

リンドウとサクヤの子、レン（と思われる）が誕生したのは12月。

これは、まあ、なんだ。

例えるなら（分からなかったらごめんなさい）、？（ヴィクトリー）ガンダムの、マーガレット×オリファーと似ていますね。

リンドウは、M I A（行方不明）になる前に、サクヤと（略）しており、その時に妊娠したと思われるですねえ。

出産したのは、たぶん2071年終盤（11月か12月と赤の川は思っている）。妊娠してから約10ヶ月で出産なので、本編のかなり早い時期に妊娠したと予想。

以上、アリサ・イン・アンダーワールドとザ・スパイラル・フェイトからの推測でした。ww

第五十七話、合コン

フエンリル本部は、一言で言う頭の良い研究員が集う場所としてまた新式の神機適合テスト所として、他のどの支部と比べてもより高度なオラクル技術を持っている（また、その大部分を隠蔽している）。

そんな中、ひとつの問題とも直面していた。

研究員や神機使いのストレスだ。

仕事熱心とはいえ、その日を生きるために頭をフル回転させているのだ。ストレスなど、すぐさま溜まってしまっていた。

それを重要な問題として頭を悩ませていた本部の幹部達は、近年、娯楽の新施設を広大な本部施設内に設けた。

施設、というよりは店レストランといえは分かりやすい。

その店の名は、『Bees^{ベス}』。

ベスとは、古代エジプト神話の舞踊と戦闘の神。だが、今はそれを語る時代ではない。

第一に、この神に見捨てられ、偽りの神々に喰い散らかされた世界で、世界中の神の存在理由を語る者、それどころか知る者は非常に少ない。

ベスは和風、洋風、その他の国々の料理をたった一店の店に押し

込めたような所だ。店長はアラブ人で、働く従業員には接客が非常に重要、と教えている中年のちょび髭。通称マスター。

そして、無事新人全員の保護をレッドイーターから告げられ、他にも溜まっていた仕事を終わらせたミハイル（片腕以外ほとんどギブス装備）とジャックは、今日もこの店に訪れた。

「マスター、いるー？」

ミハイルは良く通る声でマスターを呼ぶ。すると、

「いらっしやい、ミハイル君とジャック君」

待っていましたといわんばかりの柔和な笑みで、ちょび髭のオヤジが現れた。

驚きもせず、二人は空いていた席に腰を落とし、ミハイルはコーヒーを、ジャックは紅茶を一杯頼む。

「それにしても。今日は顔が疲れているね」

「あ、分かりました？」

無事である手で頬を掻きながら、ミハイルは苦笑する。それを見て、ジャックは長いため息を吐いた。

「あんまり世話を焼かせるなよ。こっちだって暇じゃないんだからな」

ギロリとミハイルを睨みつけるジャックからは、神機使いも真っ

青な殺気が飛び出していた。隠すつもりはないのだろう、とマスターもたまたまず苦笑を浮かべた。額に浮いた汗は若干冷たい。

そういえば、とマスターは助け船を出す。

「この前ミハイル君の話していた子供。今回の戦闘で極東への帰路を開いたんじゃない？」

「お、さっすがマスター！ その通りです！ て、いたたあ……」

ヒビの入っている肋骨に響いたのが、ミハイルは体を丸める。だが、そこに容赦無い鉄拳がお見舞いされた。彼はたまたまず悲鳴を上げる。

ジャックはまた長いため息を吐き、ミハイルを殴った拳を掌で擦る。

「飛行機は出せるとしても、今日と明日は大雪だ。止むまで飛ばせないぞ？」

「ぐう、そうだった……！ なら、この残り少ない時間の間に……」

「「間に？」」

ジャックとマスターは首を傾げる。ミハイルは息を吸って、吐いて、吸って、

「明日の午後3時頃、ここでレッドイーター君お別れ会という名の、ゴウコ痛い痛い痛い……」

言い切る前に、ジャックのアイアンクローがミハイルの顔面に食い込んでいく。

「お前妻子持ちだろうが！」

「僕は主催であって参加者にあらず！」

「普通に会話できるなんて、ミハイル君、それはいかなものかと」

「とりあえず、明日は合コンぎゃあああああああああああ

(パキユ) ぐふ」

乾いた音がしたかと思えば、ミハイルの腕から力が抜ける。ちょうど、マスターがコーヒートを淹れ始めたときにだ。

「……………相変わらず、変わらないなあ」

あらゆるアラガミから人々を守る防壁を抜けてすぐ、装甲車の助手席に座っているレッドイーターは呟いた。

彼の目に映るのは、その日をどう生きるかを思うしかない人々の、貧しい暮らしだった。

それは見慣れた光景のはずなのに、しばらく間を置いただけで懐かしさを感じさせた。

あらゆるモノを喰い尽くすオラクル細胞は、人間の生存可能域を大幅に減少させた。

今、人が生きられるのは、アラガミ防壁の内側だけであり、何処も生産できる生活物資に比べて、遙かに人間が多かった。

当然、それは貧困を呼び起こす。

ゴッドイーターの優れた嗅覚が、僅かに漂う死臭を嗅ぎ取る。こういった事実が、フェンリルへの不満を爆発させ、テロを起こす。

それ故に、対テロリスト対策チーム、レイヴンシールドが発足した。テロリストのような邪魔者を消すくらいなら、まだRED・EATERのコードネームではない頃の彼を部隊に入れようと幹部達が騒いでいた。結果、その始末を 6としてやらされることになった。

しょうがない必然であり、しょうがない結果だ。

だが、先ほどの戦闘で大量のザイゴートを落とした。これでツバキ達が待つアナグラに帰れる。そう思うと、レッドイーターは不敵な笑みを浮かべる。

それにしても、と溢れ出そうとしている感情を取り払うかのよう
に、レッドイーターは気持ち切り替え、後ろの座席に寝る少女を
見る。

実は、少女自体に目立った外傷はなかった。

しかし、

(.....しかし、何故あのボルグ・カムランは神機を喰って

いた?)

目的は知らない。理由も知らない。

ただ、殺したボルグ・カムランのコアを抜き、残った肉塊が結合崩壊を起こした後に、奴の体内から少女が適合した神機が出てきたのだ。

オラクル細胞が結合崩壊しても、喰われた神機は残る。

これが何を意味するのか。それは後でじっくりと考えることにする。

唐突に、ぐぐ、と腹が鳴った。レーションを食べて間もないというのに、恥ずかしさでレッドイーターは頬を紅潮させる。

「……………あつう」

早く、早くご飯を食べたい。

外部居住区の人々に悪いと思いつつも、レッドイーターは、この後食べられる料理を思い出しながら装甲車で腹を鳴らした。

12月30日

「まあ、全員軽い自己紹介が終わったところで さあ！ 始まり
ました始まってしまいました！」

「「「「イエイエイエイエイツ!!」「」」」」

ミハイルの声を聞き、新人の神機使い数人が喜びの声を上げる。

「第一回! さようなら、また会いましょう! レッドイーターとのお別れ会!」

「「「「イエイエイエイエイエイエイエイエイエイエイエ
イエイエイツ!!」「」」」」

「……いや、これ目的が違つてでしょう」

野郎が叫ぶ中、何故か女子陣の方に座らされたレッドイーターは迷わずツツコム。ちなみに、彼の正面はマスターだったりする。昨日ミハイルに紹介されたため、会話は普通にできる。

ジャックはテーブルに肘を着け、ただこの状況を傍観している。使えない奴だ、とレッドイーターは吐き捨てる。もちろん心の中で。

「とりあえずう、飲みましょ」

「……マスター、もう酔っている人が現れました。って、シロナさん? シロナさん? そのゴスロリはどこから出したの?」

「こんな事もあるつかと」

「どんな状況!?!」

「レッドイーターちゃんのために、似合いそうな服を持ってきましたあ〜」

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

座っていた席から立ち上がり、すぐさまそこから離れる。だが、

「遅いですよう」

「怖い！ 今までこんな恐怖を抱いたこと一度も無い!! って、キヤツ!?!」

押し倒され、レッドイーターの、実は最近伸びて肩甲骨辺りまで届きそうになっていた絹のような、綺麗な髪が乱れる。

傍から見たら、シロナはロリコン（正確にはシヨタコン）と認識されても間違いはない、危険人物だ。

「あれ、ジャック君、その鼻血はいつたい……?」

「日射病」

「いや、ここ一応室内なんですけど」

思ったとおりに行動できないシロナは、その胸にレッドイーターを埋める。ジャックとマスターの声は聞こえたが、今はそれどころではない!

シロナさん、と言おうとしても、大きな二つの乳房に正面から挟まれ、息すらできない。じたばたしたり、無線機で適当に誰かの無

線機に連絡を取っても、だれも助けてくれなかった。

万策尽きたか、と諦めながら、暗くなっていく意識を自ら、

(気持ち良いii!)

「でやがった!！」

繋ぎとめた。

シロナを軽く押し返し、レッドイーターは裏の人格との会話を始める。

(貴様ツ！ 俺の幸福な時間をどうしてくれるんだ!?)

(僕のプライドがそれを許さないと理解して欲しい!)

そんなレッドイーターを無視して、ミハイルと新人の神機使いの男女は盛り上がる。

「くはははは！ フェンリルの科学力は宇宙一!！」

「よっ！ 決まってますよ開発部長!！」

「あれ、ジャック君、その額の血管はいつたい……?」

「花粉症」

「いや、まだその季節じゃないんだけど」

今日のベスは、いつも以上に賑やかだ、とマスターは微笑みながらその光景を見つめていた。

「ふえんりるの科学りよくはあ、うちゅうちゅ」

「いええ〜〜い……」

約一時間後、その場はレッドイーター、ジャック、マスターを除く、全員にアルコールが回っていた。

しかし、この日のために用意した、とミハイルが言っていたビールはまだ半分以上残っていたりする。

床に正座しているレッドイーターの腿には、寝ているシロナの頭（膝枕状態）。

ジャックのスキンヘッドには、どこから出したのか、吸盤の機能しか持たない遊び道具。

マスターには、特に目立った被害無し。

ほとんどが酔いつぶれているというのに、このビールを全て飲む、というのは不可能なんじゃ？ とレッドイーターは背中に冷や汗を掻きながら思う。

助けを請うような目を、酔っていない2人に向ける。

ジャック、及びマスターとの簡単なアイコンタクト。どうやら2人とも、この状況を打破する結論を導いたようだ。

((君が全部飲め))

(あんたら、それでも大人か!?))

軽く絶望しながら、レッドイーターはシロナをゆっくりと腿から引き離し、自分の席に再び腰を下ろした。

コップに注がれたビールを目にし、常識的な、飲酒は二十歳はたちになつてから、という言葉が脳裏を過ぎる。

だが、贅沢できる者としては、贅沢をしたい、という欲求に駆られて、目の前のコップをゆっくりと掴んでしまった。

そして、目蓋を閉じ、レッドイーターは意を決してビールを飲んだ。

「い、一気飲みだと!?!」

「れれれレッドイーター君、大丈夫!?!」

心配してくれた2人に、レッドイーターは目を開けて問題ないと答える。

案外、美味しかった。

赤ちゃんはビールが好きだ、というのは聞いたような気がするが、レッドイーターの歳で美味いと感じるのは少々ずれているだろう。

構わず、二杯目をコップに注ぎ、またビールを飲んだ。

「（うぐうぐうぐ）……………うん、美味しい」

ボソツ、と2人に聞こえない程度の高さでレッドイーターは呟く。
続いて三杯目、四杯目と、どんどんビールを消費していく。

そして、皆の酔いがちょうど醒めた頃には、全てのビールが無くなっていた。

ジャックとマスターは拍手をしながら、コップを放さず、ただ俯いているレッドイーターを褒める。

「ふわあああ……………ん？ どうしたのレッドイーター君」

目を擦りながら、ミハイルはレッドイーターの顔を覗き込む。

その瞬間、ミハイルの体が消えた。

「……………何事!?」「……………」

ジャックとマスター、そして酔いが醒めた者たちが驚く。遅れて、レッドイーターが消えたことにも全員気がついた。

「下! 下に寝転がっているわ!」

「……………なにい!?!」「……………」

レッドイーターのすぐ隣に座っていた女性のゴッドイーターが叫び、皆がテーブルの下を覗く。すると、そこには想像を絶する光景

が映っていた。

ここから先は、酔いが醒めた何者かによって襲われたため、全員その時の記憶がない……。ただ、記憶に残るのは

赤い死神。

第五十八話、出迎え（前書き）

風邪って怖いな。治ったと思ったら、またひきましたよorz

故にまた遅れたようわああああああんっ！！（泣）

余談ですが、教師陣のほうにも拡大中との事w

あと治っていません（笑）

第五十八話、出迎え

1月1日

年も明け、久しぶりに顔を見せる太陽が積もりに積もった雪を徐々に溶かしていく。

まだ早い時間だが、子供達は、絶えないアラガミの襲撃でいつの間にかできていた平地を遊び場とし、新調することもできないボロボロのボールを投げ合っていた。

そして、仕事に着けない大人は子供達のいないところで、次のフエンリル本部に対する抗議の案を出し合っていた。中には力で訴えようなどと口にする者もいた。

そんな、『表』と『裏』が満ち溢れている本部周辺を歩いていたレッドイーターは、つまらなそうに、この鳥籠の中の『家畜』たちの行動を見ていた。

何年もこの光景を見ていると、彼らの行動には意味が無い、と思ってしまう。特に、『裏』の仕事をさせられてきたレッドイーターは常人よりずっとそう思う。

だが、こんな本部周辺の外部居住区を見るのは、またしばらく無いだろう。

なぜなら、今日でレッドイーターは再び極東に向かい、その地に住む偽りの神々と殺し合いを演じなければならぬのだから。

ちなみに、アナグラへはツインガンソードは持っていけない。簡単な理由は、調整や本格的なオーバーホール施設が無いからだ。オジナルの神機にはよくあること。別に驚いたりすることではない。そして昨日、本部長の部屋に呼び出され、今後の方針を長々と話される中、オラクル操作能力の使用も極力控えるように、とも言われてしまった。

その場で本部長を殺そうにも、フェンリルの長おさがいる部屋だ。簡単にいくわけがない。なので、渋々と了解してしまったりする。

確かに、オラクル操作能力は目立つ。武器なら外見が、エネルギー弾なら爆発時の余波が。

「……………はあ」

思い出せば、すぐにため息が出る。これだからここは嫌いなのだ。

解放感を求めて、外部居住区にでてもしっかり変わらない。

「……………戻るか」

レイドイーターは肩を落としながら、重い足どりで踵を返した。

まずレイドイーターは、命と食料の次に大切な神機を受取りに次世代神機開発施設に訪れた。

可変式神機の整備はジャック（愛称とのこと）に押し付けたため、

自動ドアを開くと同時に目を動かす。

最近聞いた話なのだが、彼は可変式神機の開発スタッフで、ミハイルと同じくらい偉い人らしい。

軽く目で探した程度では見つけれなかったので、レッドイーターは一步、足を前に出した。

奥に進めば進むほど、騒音で耳を塞ぎたくなる。あからさまに舌を鳴らし、レッドイーターは歩くスピードを上げていく。

「ん？」

と小さな声を上げ、レッドイーターは足を止める。目に留まるのは、1人の役員。

(………こんな人はいなかったはず)

ただでさえ就職の競争率が高いのに、何故、この高い技術力を持たなくてはならない職場にいるのだろうか。

よく周囲を見渡せば、最後に訪れたときより人数が増えている。

ミハイルが入れたのだろうか？ と最初に思いつくが、違う、と直感的に思う。

彼は別に上層部の人間ではない。それに彼は、時々疑うが、人を見る目が優れている。

ならば幹部の人間が入れたのだろうか。どちらにせよ、レッドイ

「ターという『モルモット』の権限では情報を引き出すことは不可能だろう。」

「ここは黙って見過ごすことにし、ジャックやミハイルがいないことを確認してレッドイーターはその場を去った。」

「いいのかい？」

「何が？」

マスターの問いに、ミハイルはキョトン、とした表情で質問を返す。

「いや、ジャック君があの子の神機を預かっているのに、彼を極東から出迎えに来るへりを迎えに行かせて」

「いいじゃないか。楽しみだしね」

「人が悪いよ」

苦笑をしながら、マスターはコーヒーをミハイルに出す。

「楽しみ、とミハイルは言ったが、彼の性格を理解していれば、その言葉が何を意味しているのかが手に取るように分かる。」

つまり、神機が返されていない事に苛立ったレッドイーターが、ジャックの骨を折る。という結果を期待しているわけだ。

マスターは目を瞑る。ミハイルの痛々しい格好が気の毒すぎるのだ。

神機使いではない彼が、この数日間に骨折を完治できるわけがない。ギプスで行動を制限され、ほぼ全身が包帯で巻かれている。

話を聞く限り、この悲惨な結果は自業自得といえるだろう。

だがしかし、それを理由にジャックにまで同じ目にあわせるのは、既に人としてどうかとマスターは思う。

「まあ、ジャックは体を鍛えているしね。あれだよ、うん。幼いゴッドイーターと最強の人間が闘ったらどうなるかな」ってやつですよ。はい」

「……………本音は？」

「ジャックも同じ目に遭ってしまえ」

「やっぱじ」

「こういう時に、接客商売は疲れが溜まってしまつ。」

「結果はともかく、何で極東支部の人がわざわざ出迎えに来るんだい。」

先ほどまでの話は無かった事にし、マスターは別の話を振る。

それに対して、うーん、とミハイルは鼻を鳴らす。

「あ、レッドイーター君のファンが、待ちきれずに迎えに来たとか?」

「いや、そうかもしれないけど、たとえそうだったら殺すけど、僕は細かいところまで聞かされてないなあ」

途中の物騒な発言に、マスターは苦笑するしかなかった。

「……………あ、やっぱりここにいた」

と、困っていたマスターの所へ、可愛らしい天使が来店した。

レッドイーターは、マスターの表情を見て、その後ミハイルの顔を見て、嫌そうな顔をする。

「……………またくだらない話でもしていたんですか?」

「はい正解」

「ちよつとマスター!?!」

「……………すみません。ちよつとこいつを借りていきます」

そう言い、レッドイーターはフェンリルチップfcでコーヒー代を支払い、彼の骨折など気にも留めず、ミハイルを店から引きずり出していった。

「……………で、ジャックさんを出迎えに行かせたと?」

「はい」

「……神機がないと、僕はフェンリル極東支部に行けないのですが？」

「はい」

「……今回の件、反省はしていますか？」

「いいえ」

「歯を食い縛れこのゲス野郎」

ドンツ ミシィツ！

「骨がつ！ 顔の骨が陥没したような痛みがつー！」

骨に異常を発生させるほど強く踏んだわけではないが、レッドイーターが思っていたよりもずっと痛かったようだ。

現在の状況を簡潔に言うと、レッドイーターはミハイルをロープで拘束し、彼に対する質問の答えを聞いた後、押し倒して顔面を踏んだのだ。

「……とりあえず」

レッドイーターは激痛にのたうちまわるミハイルの胸ぐらを掴み、そのまま引きずる。目的地はもちろんヘリポートだ。

「……ブツブツ こちとらP53偏食因子製の銃器

のパーツを仕入れるのに頑張っていたんで、これ以上面倒事を増やさないでくださいよ　ブツブツ　」

レッドイーターは長々と独り言を呟きながら長い通路を歩き、しばらくして外へと繋がる自動ドアまで辿り着き、ドアを開くと同時にまずミハイルを放り出して、それに続くようにして外へ出た。

ヘリポートには、雪など微塵もない。ただ複数のヘリコプターが並んでおり、その全てがいつでも出撃できるよう整備が行なわれている。

そして、レッドイーターの頭上　彼の目測で50メートルくらいの高度に一機のヘリが飛んでいた。

ゴスツ「お前俺を殺すきか？」ガスツボフツ「痛い痛いっ！　貴様、僕の骨折れてるの忘れてるだろ！？」ゴスツ「知るか」ゴスツゴスツゴスツゴスツゴスツ「キャインツ！！」ゴスツゴスツ

ヘリのローター音ではつきり聞こえた訳ではないが、どこからか雑音が聞こえる。最もよく聞こえたのが、腹にストレートパンチが連続で決まる音だったりする。

「……………あれがお迎えかな？」

もちろん雑音は無視するに限るので、ここは迎えと思われるヘリに注目することにした。

ヘリはその場で大きく旋廻し、徐々にヘリポートに近づいてくる。

だが、無事着陸することはかなわなかった。

警報が鳴る。これは不測の事態が起こったのだと、レッドイーターには判った。

もちろん、不測の事態などアラガミの接近以外考えられない。なので雑音が聞こえる方へ、仕方なさそうに、それと面倒くさそうに振り向いた。

予想通り、生命の安否にヒヤヒヤしていたジャックが、その元凶であるミハイルを殴り倒していた。少し皮膚が切れたのだろうか、少量の血液が床に付着している。

「……………えーと……、おい、その？　？　？（八本足）と変態科学者」

「？　？　？？」

「うん。中々マニアックだね。つまりジャックはタコだ　ゲファツ！？」

「……………とりあえず神機返してください」

「ナイスストレート。じゃ、急いで行ってくる」

ジャックが手を出すよりも早く、痺れを切らしたレッドイーターがミハイルの言葉を遮った。一名行動不能に陥ったが、本部の機能に支障が出ることはまずないので、特に気にすることも、言葉を掛ける事もなく流す。

ジャックが走って神機を取りに行っている間に、緊急放送に耳を

傾ける。

放送を纏めると、出現アラガミは墮天種含めるオウガテイル神種六体。アラガミ防壁は攻撃こそされてはいないが、その周辺を何かを待ち構えるようにして歩き回っている。万が一に備えて討伐した方が良い、という事だ。

何だ雑魚か、とは誰も言わない。

いつ、何時なんどきアラガミ防壁を突破してくるかわからない以上、このまま放置するのは外部居住区の住民を死へ誘いざなうのと同義。

しかし、防壁の門ゲートを開き、そのまま突っ込まれても意味が無い。アラガミ防壁は偏食が合致するアラガミを近づけさせない魔除けであって、門を開いてしまえば、偏食云々など関係なくなる。

これで装甲車は出せない。

最も安全で、かつ戦場を変えられる方法。それは、

「……………へりを出すしかない……………か」

空中から神機使いを出し、そのまま羊飼いのように上手く誘導し、アラガミ防壁から随分離れた場所で殲滅。これしか考えられない。

レッドイーターならばオラクル操作能力で一気に殲滅ができるが、第一種接触禁忌アラガミのスサノオなど出てくれば、赤子同然。手も足も出ず、尾先の二つ又の大剣か神機の捕喰形態に似た腕で殺されるだろう。

だが、馬鹿みたいに死ぬのは嫌だが、無力な人間が殺される方がもっと嫌だ。

この二つを守るためには、やはり神機が必要不可欠。レッドイーターはその場で横たわっているミハイルに問う。

「……………変態科学者。へり、出せますか？」

「出せるけど…………その呼び方、ちょっと止めて」

「……………OK。あ、ちょっとそこ整備士さん、あのへりにこう言っておいてください」

大変だ！ やら、整備急げ！ などと慌てているも、的確に迅速に作業を進めていく彼らのうち、1人の整備士に命令する。これはレッドイーターが、神機使いは一般人と比べれば身分が高いと知っているからである。

「さっさとそこから離れる。邪魔だ。…………と」

返事も返さず、その整備士は極東支部から来たへりに連絡を試みようとして、専用の無線機を取り出した。

これで、後はジャックが神機を持ってくれば良いだけ、となった。

「待たせた」

「……………遅い。よってミハイルさん共々死刑」

「僕もか……！？ ジャック、ここは協力しない？ このままじゃ僕たち可哀想な撲殺死体になっちゃうよ！」

「てめえ……！ 殺るならこいつだけを殺れ！！」

「ジャック……ありがとう！ 違う！ それってよく考えると、僕を売って自分だけが助かるうとしているだけじゃないか！ 普通そこは殺るなら俺だけを殺れじゃないの！？」

「………たいした度胸ですね。良いでしょう。こいつだけをあの世へと誘います」

「誰か」

「ッ！？」

「………まあ、軽い漫才は止めて、まずはアラガミを蹴散らしてきますか」

「まずは！？ 結局殺されるの！？」

第五十九話、雑魚にあらず

「……………先に防衛班が出たのかな？」

へりに乗り込みながら、先に出撃した二機のへりを遠目で確認する。ジャックよりも早く駆けつけたのは、それなりに実戦を生き抜き、この戦いの手順を熟知している証拠だ。すなわち、それは極東支部で言う第二部隊 防衛班なのだろう。

だが、支部からそこまで離れることのない防衛班には、ゴッドイーターになって日の浅い少年少女がいる。適合条件が厳しいが、それをクリアして得た力 神機使いはなるべく失いたくない、というのは全国各地に展開されている支部共通の考えだ。

相手はオウガテイル6体。前回の出撃ではコアを大量に破壊してしまった為、そろそろコアを摘出して技術班のご機嫌を取っておきたい、と思ったレッドイーターは神機ケースを担いでへり機内の椅子に座る。

扉を閉めてすぐローター音が鳴り、へりはへりポートからゆっくりと離れる。

そして、防衛班が乗っているであろうへりに続き、外部居住区を含める支部全体を囲ったアラガミ防壁の上を通る。

直後、レッドイーターを乗せたへりが大きく揺れた。最初はただの操縦ミスだと思った。しかし、止まる事のない揺れが大きくなるに連れ、無意識にレッドイーターは銃身を包帯で巻いた神機をケースから取り出し、近くにある有線通信機を手に取った。

予想通り、想定外の攻撃に操縦士は驚いていた。とにかくアラガミとの戦いで錯乱した状態では危ない。レッドイーターは彼の気を静めようと、必死に語りかける。が、

『こんな攻撃、何回も受けたら装甲が持たない！早く出撃してくれ！』

「チツ！」

結局失敗したことに舌打ちをする。レッドイーターはガラス越しに緑より茶や灰色が多くなった外を眺める。そこには白と黒、計6体のアラガミ。オウガテイルがその大きな尾を振りながら、荒れた大地を走り回っていた。

空を飛べないアラガミの攻撃は、ある程度の高度を超えればまず当たることはない。それがセオリーであり、安全に神機使いを運ぶのに最も重要な事だ。だが、

だが、日に日に人間の知識や化学力が進歩するスピードより、あらゆる物質を喰らい、その形質を取り込み、やがて群体として細胞同士を結合、増殖するオラクル細胞の方が遥かに進化するスピードが早い。この事実は、毎日のように全人類を驚愕させる。

そして、レッドイーターはその一部を目の当たりにした。

外見上はただのオウガテイル、そして局地適応型のオウガテイル墮天の二種。新人の神機使いにとって、最もレベルの合った低ランクアラガミ（だが初陣で彼らに殺される神機使いは多い）。

レッドイーターは、できるだけそのアラガミたちを視界の中央に据え、じつと観察する。

目は離さなかった。

なのに1体のオウガテイルは、一瞬でその場から消えていた。

否、消えたのではない。

つまりは遙か上空。ヘリが飛んでいるほどの高度ではないものの、オウガテイルはそれに近づこうと、発達した脚力を用いて跳躍したのだ。

空中に飛んでいられる時間は非常に短い。その間に、オウガテイルはアラガミらしい、人では到底敵わない強力な攻撃を仕掛けた。

知らず知らずのうちに傷ついていたヘリの装甲を、オウガテイルの尾から放たれたニードルが貫く。といっても、機内に入った瞬間レッドイーターの神機の餌食になり、それ以上の破損は防げたのだが。

しかし、これ以上はヘリそのものが持たない。ニードルで空いた穴から、レッドイーターは飛び降りる。

それに見せられたかのように、防衛班の面々もヘリから飛び降りる。

「ああああああああああああああっ！！」

まず、レッドイーターは1体のオウガテイル墮天に向けて強化ノ

コギリを振り下ろす。直線的な攻撃だったからか、オウガテイル墮天は尾で地面を殴り、その衝撃で巨体を後ろへステップさせる。

レッドイーターの手に握られた神機は、当然の如く地面に突き刺さる。それをボルグ・カムランのように高速で引き抜き、すぐさま追撃の体勢に移った。

敵を屠ろうとする巨剣が振り下ろされる。それと同時に敵を葬ろうとする巨大な尾が横に振られた。当然、強化ノコギリはその尾を引き裂き、本体であるオウガテイル墮天の命を散らせた。野性味たっぷりの断末魔と共に、レッドイーターは次のアラガミを標的にする。

オウガテイル墮天の断末魔に反応したのか、他の個体はレッドイーターに向けて一斉に尾を横に振りニードルを放つ。そして勢いに乗せた尾に引っ張られるようにしてその場を離れた。レッドイーターは、姿勢を低くし、持ち上げるようにして強化ノコギリを一閃する。硬いニードルはそれに跳ね返され、氷のニードルは粉々になり消え失せる。

その後すぐ、先ほどまでオウガテイルたちが立っていた大地に赤青、紫のエネルギー弾が飛来した。今の攻撃を事前に察知していたのならば、このオウガテイル神種は一味違う。

地面にエネルギー弾が着弾したのとほぼ同時に、防衛班の神機使い達は戦場へ降り立った。

焦ることは無い。ただ目の前の邪魔者を良くて討伐、悪くて撃退すればいい。と、彼らの目から、その確固たる思いが漏れていた。

ジリジリとゴッドイーター達がオウガテイルと距離を詰め始める。

だが、数秒もしないうちに5体のオウガテイルは踵を返して、神機
使いでも追いつけない速度で逃げて行った。

「どうします?」

防衛班の、近接式の神機に適合している男性は隊長に問う。レッ
ドイーターとしては、技術班のご機嫌を取るために追いかけたいの
だが、一人だと心細い。ここは追うぞ、という言葉を放って欲しい。

「いや、撃退できたならいいさ。もし、あいつらがアラガミ防壁を
突破するような存在なら、またあっちから仕掛けてくるはずさ」

「う……うー」

本当は分かっていた。子供のわがままなど通用する訳が無いと。

頭上からヘリのローター音が聞こえる。撃ち落とすぞと脅したい気
持ちは堪えて、どこまでも続く蒼い空を見上げた。と同時に、1つ
の影がレッドイーターに向かって落ちてくる。討伐部隊のゴッドイ
ーターか、と誰かが呟く。しかし、その声に確信は無かった。

目を細める。だが太陽のせいでも見えない。目が痛いので再び
視線を地へ戻し、そして涙を拭って左手にスタングレネード握りな
がら再び空を見た。

スタングレネードのピンを抜いて投げる。周囲から、何やってん
の!? と突っ込まれるが、彼自身、何故スタングレネードを取り
出したか分からない。とりあえず地上にいるゴッドイーター達は目
を閉じた。

目蓋越しにでも分かる莫大な閃光が、宙を舞っていたスタングレネードを中心に飛び出した。

ドスンッ、と神機使いの着地にはやや乱暴な音が響く。スタングレネードは一瞬だけしか光らないので、レッドイーターはゆっくりと目を開く。

目の前には茶色い髪。そして突き出した尻があった。少なくともこの茶髪には見覚えがある。

目を手で塞ぎながら立ち上がった茶髪の少年は、そのままゴシゴシと目を服で拭く。その間に聞こえた呻き声で、目の前の人物を判断する。

「……………え〜っと……………タツヤさん？」

「うう……………痛い」

タツヤ（予測）は、地面に突き刺さった『獣剣 陽 改』というショートブレードの剣身が接続されている神機の柄を手探りで掴み取り、ふう、と安堵の息を漏らす。

レッドイーターは、わざとらしく音を立てながらバックパックの中に手を突っ込む。

「……………さて、もう一個スタングレネードは」

「はいいいいいいいつ!？」

目の痛みを堪えて、タツヤ（確定）は神機を手放しレッドイータ

ーに敬礼をする。レッドイーターを目で捉えている所からすると、失明はしていないようだ。

「……………すみません。冗談です」

応急キットと回復錠を取り出し、敬礼を止めたタツヤの左手に握らせる。右手の掌が切れていたからだ。神機使いに怪我は付き物だが、変な事で怪我をさせて、それが原因で戦死されては頭が上がらない。

それにしても、極東支部からわざわざ迎えに来たのがタツヤだとは思ってもしなかった。現在の極東支部はスサノオの搜索に力を入れていると思っただが、勘違いなのだろうか？

「……………それにしても、久しぶりですね」

「あはは、一ヶ月もたってないですよ？」

「……………何で緊張しているんです？」

その問いに、タツヤは困ったような笑みを浮かべる。何か変なことを吹き込まれたのだろうか。

むう、と頬を膨らませて、レッドイーターはタツヤを睨みつける。

「な、何でしょう？」

「……………本部に居る時の僕は荒れているとでも吹き込まれたのですか？」

「え、え〜つと……」

さらに困ったのだろうか、タツヤは真実を語ろうとはしない。だ
がいい。今さつき軽いトラウマを埋めつけておいたのだから。

レッドイーターはスタングレネードを無言で取り出す。

「サカキ博士に吹き込まれましたっ!」

「よし」

残念だ。帰ったら、アラガミによる世界の完全崩壊を食い止めた
天才をこの手に掛けなければならぬのだから。

実に残念だ、と言葉にも出しているレッドイーターは、神機を捕
喰形態に変形させオウガテイル墮天の死体に喰らいつかせる。結合
を噛み砕き、コアを抽出した。これで少なくとも技術班のご機嫌は
取れそうだ。

「……あ、防衛班の人たち、お疲れ様でした」

「あ、ありがとう」「お、おう」「お疲れ様」

「?」

何故皆して目を逸らすのだろうか。レッドイーターは首を傾げ、
強化ノコギリの刃に付着した血を拭う。

とりあえずお土産は多いほうが良い。それに、少くくらは本部
上層部の連中に見せ付けられるだろう。と、ポジティブに考えなが

ら、レッドイーターはオウガテイルたちが逃げ去った方向へ歩みだす。

「「「「いやいやいやいや!」「」「」

ところがタツヤと防衛班の隊員が、レッドイーターを強引に止めた。

「もう戦闘は終わっていますよ!?!」

「無理して行くなよ。死にたいのか!?!」

「報酬を独り占めする気か嬢ちゃ「死刑」ゲフツ!?!」

「レッドイーターさん。帰りましょうよう!」

飛び出してくるのは、引き止める言葉ばかり。途中からは、キン、としか聞こえないほど説教された。

「………まあ、そんな訳で短い間ありがとございました
&馬鹿」

「「「こいつと一緒にするなっ!」「」

昼食を食べ終え、ヘリポートでレッドイーターは不覚にも世話になったミハイルとジャックに頭を下げる。どうやらこの言い方では駄目なようなので、しばらく感謝の挨拶を考えることにした。

「で、君がレッドイーター君の？」

「おいミハイル、貴様ポケットの中で何を握っている？」

「ジャック黙りなさい」

一見すると柔和で人懐っこい笑みを浮かべているが、明らかにその笑みはレッドイーターの裏人格と同質の殺気に満ちた笑みだ。そして白衣のポケットから、何か、銃口のようなものがタツヤに向けて突き出していたりする。

返答次第で殺す気満々のミハイルのオーラなど気にも留めず、タツヤは口を開いた。ジャックは耳を塞ぎ目を閉じる。レッドイーターはまだ、うーん、と言葉を検索していた。

「弟子です」

「ははは、だよねえ。レッドイーター君の歳で異性を意識する訳が無いよねえ H A H A H A !」

「止まれミハイルさん！（バキュンッ！）」

問題発言に反応したレッドイーターが即座に拳銃を取り出し、安全装置を外し、引き金を引いた。ミハイルの髪の毛が宙で揺らぐ。

「危ねえっ!?!」

「………僕の性別は男ですからね？ そちら辺をよろしくお願ひしますよ?」

「……………はい」

ヘリポートに差し込む日光が、黒光りする銃を持つレッドイーターを格好良く見せる。

「まあいいか。1年後か2年後には本部に移動するの確定らしいし」
なのにミハイルの言葉のせいで雰囲気は台無しになった。一同揃ってため息を吐き、極東支部の神機使い二人は無言でヘリに乗り込む。

時はフェンリル本部を出発して数時間後。もう夜だ。

「で、本部では何があったんです？」

「……………現在質問には答えられません」

チヨコン、とキャビンに座り、膝の上に載せたサルミアッキ入りの箱で頭が隠れたレッドイーターは、すぐ横で開けてある窓に顔を向かせながら不満げに答える。

現在進行形で、レッドイーターとタツヤを乗せたヘリは極東に向けて、途中にある補給施設に寄りながら帰っていた。

リンドウの希望通りサルミアッキは購入しておいた。何故売れ残っているかは気にしない。この箱に入っているはずなのに、臭ってくるアンモニア臭を除けばだ。仕方ないといえば仕方が無い。箱とはいえ、アラガミ発生前と比べれば質は凄く悪いのだから。

他には煙草タバコを代表するその他もろもろの全ての質が悪い。と言っても煙草に関しては大人の世界なので、レッドイーターには関係ないのだが。

質を上げる、と苦情を出したくても、外部居住区の住民と比べたら良い生活を送らせてもらっているので誰も言わない。世の中そういうモノだ。

「むー、暇ですねー」

「……しょうがないですねえ」

「何ででしょう？ 自分より遙かに年下のおん」なの子と言ったらどうしよう？」「……子供に、しょうがないですねえ、って呆れられても全然シヨックじゃないのですが」

「……それは精神が麻痺しているんじゃないんですか？」

アンモニア臭のせいで涙目になっているレッドイーターは、苛立ちのせいで強気に指摘する。

恐らく出発前にミハイルの強烈な殺気を身に受けても平然としていたのは、レッドイーターの殺意を受け続けたからだろう。だが、レッドイーターの殺気には敏感に反応する。そういう所が解せない。

とりあえずだが、話を始めようとしていたのでそのまま進行することにした。

「……まあ、最近の話だと　　ヴァジュラの新種を殺りま

したね」

「え、どういのですか？」

「……名前はプリティヴィ・マータ。ヴァジュラのあの硬そうな顔面が女性のような形になっていてですね、何故か乳房も付いていましたね。殺した後見ました」

「すみません。吐きそうです」

「……大丈夫ですよ。ここから先は気持ち悪くない話ですから。花のような6枚のマントは水色で、その器官から連続で放つ氷の槍やら氷鎚を発生させます。そして怒りで活性化すると、結合崩壊していない部位が硬化して攻撃が入りにくいです。その他は、あまりヴァジュラと大差ないですかね。耐久力半端ないですけど」

だが、そんな耐久力を無視し、怒りで硬化した際に不味いと思いちやっかり瞬殺した記憶があるので、その前にプリティヴィ・マータが仕掛けてきた攻撃を思い出しながら話す。どうせ極東には発見報告がないのだから、しばらくは遭わないだろう。

「……あと新しい神機を貰いましたね。極東じゃ整備できないから持って行きますけど」

ツインガンソードは今頃、強制睡眠状態で神機保管庫にでも入れられているだろう。これも仕方がない。

「え、でも神機って理論上では一人一台しか適合しないはずじゃ？」

「……僕の偏食因子のお陰らしいですよ。名前も決まって

いない観察用の偏食因子ですけどね凄いですねー」

後半からは既に棒読み。全然凄いと感じていないだろうとタツヤは思う。サカキ博士がP103偏食因子と仮とは言え名付けたが、レッドイーター本人はそんな事など聞かされてはいない。

自分の力を卑下するレッドイーターは、他に話はないか、とアンモニア臭で嗅覚を狂わせられながら考える。

「……………うーん、あとはあ……………新人の訓練？」

「へえ。で、どうでした？ こう、グツとくるゴッドイーターはいましたか？」

自分の後輩の結果を知りたがるタツヤの素直な眼差しを、レッドイーターは居心地悪そうな口調で、

「……………いや、あんまり手応えなかったですね」

と答える。

タツヤは、一人はいると思ったのに、と落胆する。だがレッドイーターは実地演習で逃げる奴らに良い評価などしない。本当に厳しい評価だが、それでもしないと彼らは成長しない。

新人といえば、シロナは何故あんなにも積極的に自分に接してきたのだろうか？ と疑問を口には出さず、レッドイーターは大きく首を傾げる。またそれを見たタツヤも首を傾げた。

後は悪い思い出しが残っていない。合コンとか合コンとか合コン

とかだ。

嫌な思い出ほど、掘り返したときに頭に染み付く。

「え〜と、合コンをやった？ ……………」

「……………」

と、そこでタツヤが箱の陰になっていない場所からレッドイーターの目を覗き、彼の心を読んだ。

「……………」

「……………」

長い沈黙。タツヤはやってしまった、と自身の愚かな行いに冷や汗を掻く。それに対してレッドイーターは瞬きをせず、タツヤの目を大きく開いた目で見つめていた。

レッドイーターはタツヤの言葉を思い出し、よく噛み砕き、ちゃんと理解しようとする。

沈黙を置いての沈思。そしてようやく原因分かった瞬間、

「……………（ピキッ）」

「すみませんでしたあ

っ！！」

額に血管を浮かべたレッドイーターにタツヤは土下座する。咄嗟の行動だったので、少しだけヘリが揺れ、サルミアツキを詰め込ん

だ箱が床に落ちた。

「……………知られたからには……………しょうがないですよね？」

レッドイーターは、今度こそ表情から感情を完全に消して、そう言った。いつもよりも殺意78パーセント増しでだ。タツヤは蛇^{ヘビ}に睨まれたかのように硬直する。

だがレッドイーターは、表情から感情を消しても意味が無いかな、と思う。目は、そうしたものは別なのだ。ゴッドイーターが質の高い連携が取れるのは、相手の目を見て心を読む^{すべ}術に長けているからだ、という説もあるくらいなのだから。

「……………そうですね。では何で、合コンなんていう旧人類の行いをしたか、について教えましょうか？ それは自称主催者のミハイルさんが僕達に持ち出したからですよ。あの人、アラガミ発生前には中学か高校を卒業してる歳の方ですよ、知識としては普通に持っているみたいですね」

文明が減んでも、人の蓄えられた知識は語り継がれればずっと残る、とでも言うべき事なのだろう。その『知識』が変な方向性ならば潰れるべきだろうが……………。

「ふわぁあああつと」

どちらにせよ、ここから先は黒歴史にしたい話が満載なのでレッドイーターはわざと欠伸をし、サルミアッキの箱をキャビンの中に（取り出すときのアンモニア臭には目を閉じるしかないと考えながら）入れて、それと入れ替えるようにして掛け布団を取り出す。そして再びキャビンに座り、壁に背中を密着させ掛け布団を膝の上に

乗せた。それに倣ってタツヤも掛け布団をキャビンから取り出す。

ローター音が鳴っても寝れる。慣れとは怖いな、と微笑を浮かべながら、レッドローターは日の無い、暗黒の大地を窓から見下ろした。

「うん？」

その時、レッドローターの目には五つの影と、紫色に発光する紋様のようなモノを持つ大きな影が見え、それが自分たちと同じ、極東 日本へ進んでいるのように見えた。

第五十九話、雑魚にあらず（後書き）

明日と明後日は休み。久しぶりの2日連続で休みだー

なんだろう、なら早く更新しろという声が聞こえた気が……w

第六十話、再会

1月4日

基本的に別の支部から派遣されてきたゴツドイーターも含める役員らは、派遣先の支部長に直接会い、話を通さないといけない、といういわば掟に近い規則がある。なので、ようやくフェンリル極東支部

アナグラに到着したレッドイーターとタツヤは、区画移動用エレベーターに乗り、役員区画へと向かっていた。

死体が腐ったような悪臭で満ちた『外』とは違い、『中』の中の『中』である支部内は空気が美味しく感じられる、とそんな間にエレベーターは目的地に辿り着き、金網状と金属の二重扉が開く。

本部施設内とはまた違う、見慣れた光景。通路を歩く、見慣れた役員達。どれも、変わってなどいなかった。

2人はエレベーターから抜け出し、そのまま足を動かし支部長室へまっすぐ進んだ。

支部長室手前まで着いた所で、タツヤが身長の高いレッドイーターの代わりにベルを鳴らす。

入室許可を取り、そのまま入ると同時に通った自動ドアは閉まる。

「長旅、ご苦労だったね。……いや、里帰り、と言っべきかな？」

壁に下がった、巨大なフェンリルのシンボルを染め抜いた旗の前

に置かれた肘掛けつきの高そうな椅子に座って、ヨハネス・フォン・シックザールは微笑をレッドイーターに向ける。

レッドイーターは、それに無表情で、

「……………止めて下さい。吐き気がします」

と返した。

「ふむ。これは失礼な発言をしたね。すまない」

シックザールは人としての感情そのものを消したような口調でそう言い、冷めた目つきでレッドイーターの表情を窺う。

その行動に、レッドイーターは苛立ちを感じた。口をへ字に曲げ、シックザールの目を睨みつける。

「そう怖い顔をしないでくれ。それに、君にはやってもらいたいことがあるんでね」

「……………アラガミの討伐ですか？」

「いいや。悪いがまた長旅になるかもしれない」

レッドイーターは不思議そうな顔をし、タツヤを見る。しかし、彼も何のことだかさっぱりらしく、首を傾げていた。

シックザールは告げる。

「最近によくアラガミが防壁を突破し、その際に出る民間人の犠牲

者が多くてね。これではゴッドイーターに成りうる因子を持った人材が減っていく一方だ。なので、まずはこれを見てくれ」

そう話しを区切ると、執務用の机の引き出しから一枚の紙を取り出した。

何だろう、と思い。レッドイーターは紙に書かれた内容が良く見える位置まで進む。タツヤに関しては、その書類が何なのか既に知っているらしく、ただ黙ってレッドイーターの行動を見ていた。

その紙には、現在アナグラにいる神機使いの名前が書かれており、横に伸び、縦に降りる複数の長方形の中に4人か3人の名前がずらりと書き込まれていて、最後の欄に『雨宮ツバキ』『雨宮リンドウ』『黒沢タツヤ』と載ってあった。

「最後の欄には君の名前も入る。無論、他の神機使いに可変式神機を見られるわけにはいかないからだ」

中々本題に入ろうとはせず、レッドイーターからはシックザールは話の流れを逆走させているように見えた。

しかし、一つの班（個人個人が、ある程度の戦闘能力が認められると最大4人まで）は、一つの部隊の隊長の指名で決められるので、支部長自ら決めるわけではない。

そして、外部居住区の住民が少なくなってきた、という話から察するに、

「……遠い集落まで行って、そこに住む若者を集める班のリスト……ですか？」

「合ってはいる。だが惜しい。これは別の目的のためのさ」

シックザールは微笑を崩さない。

アラガミの発生からもう10年以上は経つが、それでもアラガミの脅威から逃げ、小さな村や家を建てて生活する者もいる。てつきりそれらの人々を極東支部へと入れるのかと思ったレッドイーターは首を傾げる。

「これは『スサノオ』の搜索と討伐を兼任する班のリストだよ」

「!？」

スサノオという名前を聞き、レッドイーターは目を見開き固唾を飲み込む。

「まだエイジス計画は始まったばかりで、これから先は、あの島を大きくしていかなければならない。だがそれもアラガミの手で破壊される可能性もある。そのためには、少しでも多くの偏食因子の情報を集めなければならない」

「……そして、僕達には追加ミッションとして外部居住区の住民として、集落の人々を誘う……という訳ですね？」

「話が早くて助かる。まあそういう所だね。現在、このリストの一番上の班が搜索に当たっている。期間は一週間以上。もちろん新人はリスト（戦力）外だから、作戦には参加させていない」

「短くて……5週間後？ いや、全滅した場合はもっと早くなりま

すね」

レッドイーターは呟く。額に浮かんだ汗を拭わず、ただその紙を見て脳裏を過ぎるスサノオの全身を、行動を思い出す。

圧倒的なパワーに強力な偏食場パルス。偏食場パルスさえどうにかできれば、と苦言を吐きたいくらい前回の接触では一方的に攻撃されたため、ふつつつと怒りが体の芯から溢れ出る。

「それまでは今までと同じだ。どうぞ頑張ってくれたまえ」

「……………了解」

敬礼をし、レッドイーターは踵を返す。すると、

「失礼するよ」

プシュン、と自動ドアが開いたかと思えば、正面からサカキ博士が相変わらず細長い狐目と笑みを絶やさずに入ってきた。レッドイーターは、邪魔になるので博士が通りやすいよう、と横に避ける。

博士は、ありがとう、と眼鏡のブリッジに指を当てながら言う。レッドイーターは博士がシックザールの目の前に歩んだ後、タツヤを連れて退室した。

「それでヨハン……君は彼を『餌』として使うつもりかい？」

「ペイラー。言い方を変えて欲しいが、そんな所だよ」

「確かに、私の目に狂いが無ければ、彼の肉体と神機は君の育てている『アレ』とほぼ同一。「器」と『力』の二種を合わせ、それがようやく一つの「神」になる。……と言っても、彼にそんな自覚があるとも思えないけどねえ？」

「どちらにせよ、今は使える物を全部使うだけだ」

「もし彼が『アレ』として覚醒し、発動の鍵⁺たる《特異点》を取り込んだらどうなるかぐらい、君なら分かっている筈さ。なのに、それを野放しにして、もし《特異点》と接触しそれを捕喰したらどうするんだい？」

「まず《特異点》自体、発見報告やセンサーに反応が無い。まだ生まれていないと見て間違いはないだろう」

「そのために、彼と『アレ』を餌にしてアラガミをわざと進入させ、《特異点》として育てる？」

「君は言った筈だ。《特異点》はアラガミにのみ捕喰本能を働かせ、それ以外の物質には興味を示さないと。そのためにはありとあらゆる物を喰らわせ、成長させるしかない、とね。それに、こちらの『頭』達の考えも同じだったのだ。この手以外に人類救済は叶わぬ」

「……………何度も聞くよ。本当に止める気は無いだね？」

「これは人に与えられた試練だ。失敗した場合は私達は滅びる。だから止める訳にはいかない」

「よう、久しぶり」

飄々とした第一声が、エントランスに着いたレッドイーターの耳に入る。それは信用できる仲間の一人、

「……………リンドウさん。ただいま」

レッドイーターはリンドウに駆け寄り、頭を下げた挨拶をする。それにリンドウは頭を乱暴に撫でる、という行動で返した。

「……………ツバキさんも、またお世話になります」

「ああ」

その次に、リンドウの後ろで微笑みながらそれを見守っていたツバキに、レッドイーターは挨拶をする。彼女はぶっきらぼうな返しをするが、それには身を包むような暖かさが感じられ、とても居心地が良い。

やはり本部とは違い、ここは今、世界で唯一安心でき、心の支えになり、幸福な時間を与えてくれる。それは恥ずかしいので口には出さないが、いつか彼らにその想いを伝えたい、とレッドイーターは思う。

「まあ、とりあえず。最近近くにまたアラガミの群れが現れたらしいから。コミュニケーションの一環として行かないか？」

「……………良い提案ですね。乗りましょう」

リンドウの言葉にレッドイーターはあっさり同意する。タツヤも、最近戦闘に参加していない分、そろそろ懐が寂しくなってきた、と言う理由で同意する。

残るツバキに、皆視線を集め、彼女の結論を聞く。

「ん、そうだな。私も神機の強化をしたいと思っていた所だ。リンドウの提案というのは癪に触るがな」

「姉上きつびしー」

リンドウは、ヘラヘラと笑いながらエントランスの地下二階へと続く階段を降りる。レッドイーターは、その間に自室に送っておいでもらった神機を取りにいった。

前よりも荒れた贖罪の街に、一台の装甲車が着く。そこから四人のゴッドイーターが降りた。

一人は赤いチェーンソウ状の大剣を装着した神機を持ち、

一人は雷獣の素材を使用した短剣を装着した神機を持ち、

一人は強化に強化が重ねられたアサルト型の神機を持ち、

一人はノコギリの巨剣と今は格納されている細長い銃身を持った次世代の神機を手握っていた。

「今日のミッションはヴァジュラ2体とそれに随伴するオウガテイ

ル複数、及びザイゴート複数だつてさ」

「また面倒臭いミッションを受注しましたねえ」

リンドウのなんとも無い、ただ軽い発言に、タツヤは肩を落とす。レッドイーターとツバキは、アラガミの襲撃に警戒しつつ、今の会話で無駄な緊張を解ほぐさせてもらう。

前を歩いていたレッドイーターは銃形態のまま、BエリアからCエリアに入る。寸前に神機を握っていない左腕で、ストップ、の指示を出す。

贖罪の街という戦場の中で、最も広い空間のあるC及びDエリアにはアラガミの群れが居る場合が多い。その次に広いとされるE・Fエリアも同じだ。

片目だけで見れるように、レッドイーターは顔を少しだけ出す。やはりミッションの討伐目標であるヴァジュラ2体とザイゴート複数が徘徊していた。

「……………オウガテイルがいませんね」

「(他のエリアに索敵しに行っているんじゃないかねえのか?)」

レッドイーターの小声に、リンドウも小声で話す。

「(なら私とタツヤがオウガテイルを探す。ショートブレードとなら弾切れを起こすことも無いだろうしな)」

「……………じゃあ、タツヤさんとツバキさん。僕とリンドウ

さんという組み合わせで)」

「(了解です)」

タツヤは頷き、既に会話を切って歩き出したツバキの後を付いて行く。リンドウと2人きりになったレッドイーターは、バックパックスの中身を確認し、

「……………それじゃ、行きますか？」

「(OK)。レッドイーターはザイゴートを撃ち落してくれ)」

無言で頷き、二人は同時にCエリアへと突入する。

「行けっ」

照準を合わせ、レッドイーターは引き金を引く。直後、アルバトロスの銃口から放たれたレーザーが、2体のザイゴートを貫く。コアに直撃しなかったためか、まだ息がある。

突然の奇襲に怯んだザイゴートに、再びレーザーが放たれる。正面のザイゴートはコアを破壊され、貫通して直撃したザイゴートは地面に墜落する。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

レッドイーターとリンドウの存在に気が付いたヴァジュラは、ザイゴートの鳴き声を消すほどの咆哮を上げる。その隙にリンドウは接近し、ブラッドサージでヴァジュラの巨大で硬い前足に斬りかかる。

チエーンソウの刃が回転し、ヴァジュラの前足に深く突き刺さる。深追いをすると痛い目見る、とリンドウはいつの間にか思い、すぐに神機を引き抜いて後方へとステップした。

その後すぐ、低空飛行しながら大きな口を全開にしたザイゴートが突っ込んでくる。それをレッドイーターが撃ち落とし、リンドウがヴァジュラに再び接近すると同時に斬り裂き、絶命する。

「オオオオオオアン」

ザイゴートの警戒色の鳴き声、リンドウの雄叫び、ヴァジュラの大雷球のスパーク、もう1体のヴァジュラの咆哮、レッドイーターの神機の発砲音。それらが混じりあい、C・Dエリアは一瞬で殺気が膨れ上がる戦場と化した。

第六十一話、存在理由

「グギャアアアアアアアアアアウウ!?」

一発のレーザーが、いくらゴッドイーターとはいえ、ずば抜けて凄く高速戦闘をするリンドウを狙い、大雷球を放とうとするヴァジュラの左眼を射抜く。ヴァジュラの潰れた眼から大量に血が溢れ出した。それは血の涙のよう。

狙われていたリンドウは空中のザイゴートを踏み台に、できる限り高所での戦闘を優先する。これなら下からヴァジュラの攻撃が迫っても、ザイゴートを盾にできる。

良い判断だな、とレッドイーターは神機を剣形態にしながら呟く。

「……………もっとリンドウさんを楽にさせるには」

レッドイーターはその場から走る。彼は一直線に、レーザーの直撃を受けたアラガミに接近する。

「ヴァジュラを潰すっ!」

踏み出して、高速でその場から離れ、何回もステップしながら、それに翻弄されるヴァジュラの左後ろ 死角を取る。

そして、ヴァジュラとの距離を零ゼロに縮め、強化ノコギリを縦に振り下ろす。それは吸い込まれるようにヴァジュラの二枚のマントに直撃し、叩き割った。

「もう一発っ！」

それだけでは終われない。

振り下ろした神機の柄を強く握り、体を捻り横に一閃！ ヴァジユラの左後ろ足が宙を舞い、数秒後、大きな音を立てて地に墮ちる。

他人から見れば、レッドイーターがヴァジユラを圧倒しているように見える。

いや、圧倒している。だが実際、神機から手へと伝わる感触からして、このヴァジユラは強力な個体と化している、と、レッドイーターは不機嫌そうな顔をしながらも推測しており、神機を振りぬくと同時に後ろへ下がる。

そこで、もう一体のヴァジユラが動く。

大きく一步前へ出て、近距離戦の射程に入ったレッドイーターに向けて右前足を大雑ぎに振るう。それをレッドイーターはステップで避け、ブレイキを掛けず勢いだけで何度も後ろへと下がる。

「……………プレデターフォーム捕喰形態」

その声に応じるように、神機は捕喰形態へと変貌し、その形を…
…獰猛な獣の様なアギトを保つ。

「ギユアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

「……………喰らえ」

自身も捕喰時の構えを取り、追撃してきた片脚片眼を失った、惨めで醜いヴァジユラの右顔に神機のアギトを喰らいつかせる。初めて喰らう攻撃だったのだろうか、それともカウンターで怯んだのだろうか、そのヴァジユラは脚を止め、激しい激痛を訴えるような呻き声を口から漏らす。

ネチャネチャと、その肉を美味しそうに食す音を聞くと、レッドイーター自身も食欲が消えていき、潜在的な力を封印する鍵が開けられたような不思議な感覚に陥る。

「……………ごちそうさま」

不敵に笑い、レッドイーターは神機を一瞬で元の姿へと戻し、両眼を失ったヴァジユラの鼻を強化ノコギリで切り落とす。あと意図的ではないが、鼻のついでに下顎も本体から切り離せた。これで敵を捕捉するための器官を失い、喰らうための口まで破壊されたヴァジユラは動く肉塊とほぼ同じ。

あとは簡単。全方向攻撃をさせる前にコアを破壊か、もしくは摘出するだけだ。

もう1体のヴァジユラがさせまいと大雷球を放つ。それをヴァジユラの顔を持っていたアラガミを盾として利用して防ぎ、すぐさま捕喰で向上した身体能力で一刀両断の裁きを目の前のアラガミに下す。

断面図を覗き込めば、明滅するコアすれすれであった。安心したレッドイーターは、

「リンドウさん！ 降りて！」

「あいよっ！」

レッドイーターがスタングレネードを取り出すと同時に、リンドウは命令に従ってザイゴートのコアを破壊し地面に着地する。それを確認したレッドイーターは、スタングレネードのピンを外し地面に叩きつける。

閃光が弾けると同時にレッドイーターは目を瞑ったまま、再び神機を捕食形態にさせた。光が収まると、レッドイーターは目の前のコアを神機に喰わせる。

解放したメインユニットを元に戻すと共に、着地したリンドウと短いアイコンタクトを交わし、2人同時に目を眩ませているヴァジュラへと顔を向ける。

先にリンドウが右に動く。それに続いてレッドイーターは左に動いた。2人は眩暈が解けたヴァジュラに急接近し、挟み込むようにして斬りつけ始めた。

ザシュ　　ザシュ　　と音が鳴ると、連続して斬られた部位から少量の血液がほつとも出るようになる。だがこうして集中して攻撃を続けていれば、先のヴァジュラと比べれば神機への抵抗力が高く、傷を負わせにくいことがよく判る。

「オオオオオオオオオン」

「オオオオオオオオオオンッ！！！」

遅れて視界が元に戻ったザイゴートたちがレッドイーターとリンドウを見るや否や、反射的に数体が体内で生成される毒ガスを液状にし、吐き出す。それは波状攻撃に混乱しているヴァジュラの背中に着弾するという、レッドイーター達には好都合な攻撃となった。

次に突進してくるザイゴートがレッドイーターに迫った。彼は神機を振るいながら、それを興味無さそうにため息を吐く。

刹那、レッドイーターに接近していたザイゴートたちは次々と血を噴出させながら墜落する。息も絶え絶え、と言った感じだろう。だが今はヴァジュラだ。

ヴァジュラはマントを広げる。埒が明かないと判断したのだろう。バチバチッ！ と聞こえる音を発光したマントから立てるヴァジュラは、

「邪魔だ（ぜ？）」

跳躍した2人は一撃で全六枚のマントを、全て叩き割る。彼らは着地すると同時に攻撃を再開した。

四肢、尻尾と頭、と同じ方向に走り回りながらレッドイーターとリンドウは、ヴァジュラを攻撃していき、その巨体を削りに削って小さくしていく。

「ウ、ガ、アアアアアッ!？」

ヴァジュラは怯む。食物を体内へと運ぶための口から大量の血液を漏らし、レッドイーターを睨みつける。当然、それはリンドウに注目していないということだ。

「こいつで止めだ」

その隙にリンドウは、一度大きく呼吸を行い、神機の柄を握る手に力を込め、神機を肩に担ぐ。そして、ギンツ、と目を見開いた。

「でやあああああああああああああつー!!」

咆哮と共に振り下ろされるブラッドサージが、遂にヴァジュラのコアを破壊する。

ヴァジュラは叫ばない。ただ塵のように細かくオラクル細胞が結合崩壊し、触ると柔らかそうな砂山に近い姿へと変貌するのだから。

その壮絶な最期を看取ることも無く、2人は、絶賛墜落中と浮遊中の複数のザイゴートに向けて疾走する。

608

「いやあ、お疲れ様」

「……………何用ですか？」

戦闘も無事終了し、レッドイーターは強化ノコギリの刃を紙鏝かみやすりで研いでから部屋を出ようとしたところで、当たり前のようにサカキ博士が訪れた。

彼の狐目も、少し久しぶりに見るので面白い、というのは内緒である。

「ちょっと付いてきてくれない？」

「……………えと、僕これから用事が……………」

「いいからいいからっ」

人懐っこい口調で博士はレッドイーターの手を取って部屋から引っ張り出す。

エレベーターを呼び出すボタンを押し、その間に博士は裾に手を突っ込み、ごそごそと漁る。

何を探しているんだろう、とレッドイーターは博士の顔を覗き込む。何故かその顔はいつも以上に、好奇心と茶目っ気さに満ちていた。

「え〜っと。ああ、あつたあつた」

ちょうどエレベーターが到着したことを伝える音が鳴る。少しそちらに目を向けた瞬間。

「うわっぶ!？」

視界が暗黒に染まり、何かを顔に付けられた事を皮膚から送られる情報から推測する。

そして、背中を勢いよく押され、流れるままにエレベーターに乗らされた。

「手荒な真似してごめんねえ？」

「……………とりあえず外していいですか？」

場合によってはタツヤの言葉を聞いた時に考えた、サカキ博士を消す、という事を実行せざる終えないかもしれない状況な気がしてきたので、オラクル操作の能力で

（使ったら本部になにされるか分かんないぜ？）

（……………そだね）

ルナティック・ツインを作り出そうとしたが、こんな監視カメラが置いていそうな場所で使ったら、本部に報告された後、命令違反で自身の身が危なくなる気がしたので止める。

すまない、と裏の人格に謝っておき、剣にするために集めたオラクル細胞を消す。

「……………それで、どこに向かっているんです？」

「ははは。内緒だよ」

（プスプス）

「……………」

（プスプス）

殺気を膨張させるレッドイーターは、事の始まりをあえて口にす
る。

「何で俺達の体でも耐えられない電流を流し込んで来るんだよ！
並みの新人類ゴッドイーターなら死ぬわっ！！」

「そして生命の危機に直面した君達は、主な人格の方が気絶すると
同時に交代、その力で生命維持を行なった訳ね？　じゃあはじめま
してだね」

「認めねえっ！　旧人類にんげん如きにやられたなんて認めねえっ！！」

憤慨するレッドイーターは、その長くて赤い髪を掻き乱しながら
サカキの行動を否定する。

サカキが言ったから分かると思うが、今のレッドイーターという
身体を操っているのは『裏人格』である。リンドウらと仲の良いレ
ッドイーターは、サカキのスタンガンのせいで気絶中である。

「まあまあ。彼が気絶している間に聞きたいと思っていただよね
え？」

「俺答えねえからな？」

「良いよ？　君が答えなければ肯定という事にするからねえ」

「ちょっと話し合いましたよ、素敵な狐きつねおじさん？」

舌を巻くようなサカキの行動に、レッドイーターは渋々と応じる。

「では、問い一。コンゴウ墮天の群れとの戦闘で、リンドウ君らがレッドイーター君を発見した時には重症。とはいえ、何故そんな状況下で報告された数を全滅させられたか？ 戦力差なら1対40くらいのはずなのに？ それは君が出たから。合ってるよね？」

「ああ、間違いねえな」

「では、君はどうしてそのタイミングで出現したんだい？ ……僕の推測はこうだよ。何者かによって、あらかじめもう1つの人格である君が作りだされた。その人格は本人が生命の危機に陥ったときのみ表に出て、身体を《守護》する。その時以外の設定は人間らしいわがままな性格をするよう設定されており、主人格たるレッドイーター君には普通の『もう一人の自分』にしか見えない。違うかい？」

「アンタみたいのが推測でモノを語るなんて考えもしなかったよ。

…… そうだなあ。その答えは保留にしといてくれ」

軽く受け流し、じつくりと今の質問の答えを考える。自身の存在と理由。そして表に出れる条件全てを一斉にだ。

正直、ずっと今まで目を逸らし、逃げ続けていた項目だった。これの答えが、自身の不利益にしかない気がしたからだ。

だって……だって……、

世界はいつだってわがまままで、理不尽な選択とかしこ要求しない

いんだから。

第六十二話、夜（や）の襲撃

サカキの面倒臭い質問の回答をしている間に、日も落ちてすっかり遅い時間になってしまった。しかも主人格の方は未だに目を覚まさない。

それら全てに苛立ちを隠せないレッドイーターは、一目で不機嫌だとわかるような歩き方で自室に向かう。

（クソツ。身体を動かしたくなってきた）

歯軋りしながらレッドイーターは踵を返す。ここらへんで身体を動かせるのは一箇所しかない。

そこは訓練場。

エレベーターに乗り、エントランスへ向かう。その間に、いつものレッドイーターの演技の練習をする。

「……あ、あー。……あいつはもっとテンション低いよな？
……あー、あー。うんOK」

テンションの違いで正体がばれては意味が無い。Lv2^{レベル}の状態を解除し、髪と瞳を黒に戻す。発声練習や、腕の振り方や歩き方。表情の変え方。全てを毎日のように見ている主人格と同じように調整する。

「……コードネーム、レッドイーターです……完璧だぜ」

無表情かつ主人格と同じ口調のまま、いつも自身が発している言葉使いで言うが、演技の方はほぼ完成の域に達している。これほどまで早く真似できるとは、さすがは常に共に生きる存在だ。

そしてちょうど、彼を乗せたエレベーターはエントランスに到着し、ご丁寧^{ゴテイジヤウ}に到着音を鳴らす。

(良い機会だな。新しい武器でも作ってみるか?)

身体を動かすだけでは芸が無い。どうせなら時間の有効活用をした方が良く、新しい系統の武器を創ってみたかったのだ。

オペレーターと話し、訓練場の使用手続きを済ませ、再び区画間移動用エレベーターに乗る。そして目的の区画に着き、ある程度歩いて訓練場に続く扉を開く。

内装は、本部のモノとあまり変わらない。壁だって特殊合金を使っているし、その置くには教官やらが見学するための別室がある。

「そんじゃ」

すぐさまいつもの強気な表情に戻り、Lv2を発動させる。そして大気を漂うオラクル細胞を操り、各所に設置されている電子機器(主に監視カメラ)の重要な部分を破壊する。

そしてそのオラクル細胞を周囲に集める。

「今更だけど、『突き』に特化した武器無いんだよね」

とりあえず槍^{ランス}などの突きで有名な武器(形は無骨で実用性皆無)

ピキピキイ、と板に亀裂が入り、その亀裂から気持ち悪いほど血が噴き出す。そして木っ端微塵に弾け、完全に消失する。

「よし採用！」

レッドイーターは地面に着く前にハンマーを消し、ガッツポーズを取る。

「あとは実用性のあるフォームにして、あれ（・・・）を取り付けるだけだ」

オラクル細胞を再び結合させ、想像を膨らませる。打突面に巨大な邪眼を作り出し、その逆の部位に推進エンジンに近いパーツを作り出し、柄を2割ほど長くする。塗装は黒と赤のカラー。どうやら邪眼と塗装は裏人格の嗜好らしい。

型が決まり、その形状や重さを記憶に刻み込む。

そして数分後、一思いにハンマーを消し、オラクル細胞を周囲にまた漂わせる。それでもって物足りないのか、そのオラクル細胞を掌に集結させる。

「防御は適当に作ればいいし、斬ったり殴ったり武器は出来たし……」

考えられる選択肢が案外少ない事にため息が漏れそうになる。

オールレンジ攻撃やトラップタイプ等の考えもあるが、どちらも今の状態では創り出すことは不可能。結果、彼の考えは一つだけとなった。

「……………早く」

頭上で大きな輪リングを形成していたオラクル細胞を球状に結合させる。

「……………早く」

それは凝縮もしないまま、大きく膨らみ……………、

「早く鍵を開けやがれ！」

ビ　　！！　　ビ　　！！　　とサイレンが鳴る。慣れた者なら誰もが理解する。

外にいたアラガミが防壁を突破した。

食堂にてサイレンが鳴る。

「ん？」

「……………アラガミが防壁を突破したみたいだな」

神機使いになって日の浅いタツヤは、鳴り止まないサイレンに首を傾げ、それに呆れたような目つきでツバキが冷静に事の発端を口にする。リンドウも目を細め、手にしていたフォークを食器の上に置いた。

ツバキの発言とリンドウの表情を見て、タツヤもアラガミが来た、

と自身に言い聞かせ、

「敵のタイプは？」

リンドウとほぼ同時に、同一の質問をする。リンドウは冷静に、
タツヤは反射的に言ったようだ。

リンドウは、やっちまった、と言いたげな表情で頬を掻く。当然
だ。アラガミが進入してまだ一分も経っていないのだから誰にも答
えられない。

「とりあえずお前達は出撃の準備を済ませて、神機を受け取りに行
け」

「あいよ了解」

リンドウはまた飄々とした表情に戻り、自信のペースで食器を片
付けに行く。どうやらフォークを置いたと思ったら、速攻で完食し
たようだ。タツヤは困った笑みしか浮かべられない。

タツヤも、のんびりしてられない、と呟き、目の前にある皿を
左手で持って右手に握ったスプーンで一気に食い尽くす。

無理に勢いで食べたせいか、少しだけ嘔吐感がある。それを無視
して食器を持ってリンドウの背中を追う。

緊急事態のためか、役員達も急いで食べて返却口に群がっていた。
それでも神機使いは特別だ。

リンドウとタツヤの顔を見るや否や、次々と道を作りために彼ら

は動く。リンドウは微笑み、ありがとう、と包み隠さず感謝の言葉をはつきりと言った。

他人とのコミュニケーションはこの世界では重要だ。ちなみにアラガミとレッドイーターは別次元の生命体なので除外である。

「ほら、もたもたしないで行くぞ」

「あ、はい！」

リンドウの言葉に後押しされ、タツヤは急いで返却口に食器を置く。

「じゃあ、僕は神機を！」

「ああ、早く行ってこい」

振り返る事無く走り、階段を駆け上がって通路に出る。そしてエレベーターに乗り、エントランスへと向かった。

北からコンゴウ、オウガテイルの群れが、中央のフェンリル支部に向けて何も（・・・）捕喰せず（・・・）走る。

北東からザイゴート、ヴァジュラ。その他の群れも同様。

人間や建造物は一切無視し、重心を前に倒して突進に近い速度で走る。

(奴らの目的は何だ？)

肘掛け椅子に座り、ただその報告が表示されるノートパソコンを凝視する。

極東の長、ヨハネス・フォン・シックザールはいつもとは打って変わって焦っていた。

この支部の地下には、愛する妻が眠っているからだ。それは数多のコアを喰らい、現在進行形で大きくなっている。

それを奪いに来たというのか、彼らは？

まだエイジス島は隠れ蓑になるほど大きくはない。

そして何より、彼女は(・・・)まだアラガミの頂点にすら立っていない。

何故狙われる？

何故引き寄せる？

あの子供と神機のを考慮しても、ここまでおびき寄せるなんて計算外だ。それに彼らも同じ、まだアラガミの頂点には立っていない。

ならばどうして？ 何故？ 理由は？

勝てるかどうかではない。この事態はあまりにもイレギュラーすぎる。もしかしたら本部に勘付かれるかもしれない。なぜならアラ

ガミが捕喰を行なわないからだ。

一体、このアナグラで何が起きた？

「俺が起こした」

「ッ！？」

シツクザールにしては珍しく、その心情を顔に出し、しかも驚きを隠せないといった感じの声を漏らす。

ノートパソコンから目を離し、声のした方に顔を向ける。

首を動かすだけなのに、何故ここまで遅いのだろう？

視界に黒い塵が揺れる。

視界に赤く、綺麗に伸びた髪が踊る。

そして、

視界に、醜悪な笑みを浮かべたレッドイーターが不気味な処刑鎌を携えて立っていた。

生存本能に従い、いつのまにかシツクザールは執務机から拳銃を取り出していた。だが引き金を引けない。

彼は既に人類に絶望していた。

だが彼も人間、知性と感情ある生物なのだ。それはどんなに酷い行いをしていても、心がまともな人間なら引き金を引けない。それに相手は子供だ。本部からの預かり物なのだ。

おかしい。

過去に関する情報や今までの彼の態度を見ても、ここまで悪魔、もしくは死神のような表情は出さない。映像で別人格と変わったときだけだ。

そして、その入れ替わりの条件を知るのは自身と友人だけ。

「まさか……………」

まさか、友人が入れ替えたというのか？

アラガミという脅威の無い鳥籠の中、彼が瀕死の重症なんて負うわけが無い。それほどの戦闘能力だ。FSD前夜に襲撃してきたアラガミ信者のような、現代オラクル技術でも解明不可能な行為でもしない限りはありえない。

歯を食い縛る。

友人の遊びもせめて度が過ぎない程度にして欲しいものだ。

「どげよ」

レッドイーターは歩む。処刑鎌をしっかりと握り、変な行動でも起こそうものなら首を刎ねんとする目つきで歩む。

後ずさりできない。

計画を止めたら、だれが人類を100%生き延びらせると言うのだ？

非情になれ、と冷静さを装いながら、小さな声で呟く。

ここで止めれば、友人にも、彼女にも、

息子にすら顔向けできない。

「ん？ ……………、……………っ!？」

いざ引き金を引かんとした所で、レッドイーターは踵を返す。刹那、シクザールとは逆に、開きっぱなしのドアの向こうから2本のカッターナイフが彼の眉間に向けて飛んでいた。

レッドイーターは処刑鎌を振るい、その凶器を斬るのではなく捕喰して消し去る。

「てめえは……………失敗作!！」

攻撃された怒りに飲み込まれたのか。レッドイーターはドアを通り通路に出て行く。

シクザールは安堵するよりも、カッターナイフを投げ、今レッドイーターから逃げる人物を見つめる。

「……ユーマ？」

第六十二話、夜(や)の襲撃(後書き)

久しぶりに武器名募集かな？

第六十三話、化け物

無数の足音がアナグラの中央に向けて直線的に、連続して響く。それには人や時代に生き残った生き物、そして防壁を突破したアラガミも含まれる。

「無視すんなっ！」

リンドウはコンゴウと平行して走り、その身体を斬りつけていく。しかし同速度で走りながら斬りつける経験はまだ浅いため、決定打にはならない。

タツヤとツバキもオウガテイルの足止めを行なっているが、遠距離型のツバキはともかく、リンドウと同じ近接型の神機で、しかもショートブレードでは決定打以前に手数が稼げない。他の神機使いも同様に、この事態は初体験のため対応が送れ、アラガミの行進が進んでしまう。

それに、現在ゴツドイーター達にはスサノオ搜索の任務があるわけ、その先発隊が行ってしまっている分、こちら戦力がいつもより寂しい事には変わらない。

この区画だけでもこの数なのだ。いつまで押さえられるか分かったものではない。

「止まれってんだよっ！」

ブラッドサージを何度も振るい、攻撃の繰り返しで脆くなった胴体はあっけなく貫かれ、その巨体は大地に崩れ落ちる。

これで何体目だろう、と口にする暇も無く、リンドウはオウガテイルを倒せないタツヤの元へ駆け出す。神機の柄を握る手の感触を確かめながら、

「リンドウさん！」

「任せろおっ！！」

オウガテイルの進行方向に先回りし、頑丈なブーツで踏ん張りを利かせながら 神機をオウガテイルの脳天に向けて振り下ろす！

「グオオオオオ！？」

直撃と同時にチエーンソウの刃を回転させ、そのまま正中線に沿って斬り裂いていく。血を撒き散らしながらも抵抗するオウガテイルの頭を踏み、地面を抉るまで振り下ろすと同時にブラッドサージをオウガテイルの体内に突き込んだ。

全身の半分がぱっくりと割れたオウガテイルは動くことも無く、その残されたコアを明滅させる。

「ボケツとするな！ 次行くぞ！」

「姉上は速すぎんだよ！」

大声を大声で返し、次に迫ってくるアラガミを確認する。

「ってクアドリガじゃねえか！！」

あの装甲の破壊はレッドイーターという破碎係がないと厳しい。どうにか落ち着こうとリンドウは無理に笑みを作る。

まず先に、クアドリガに随伴していたザイゴート数体の群れを標的にする。

「遠距離班、任せませ！ 行くぞ！」

遠距離式神機適合者のゴッドイーターは皆、銃口をザイゴートの群れへと向ける。

まだ距離がある。実弾のように威力の減衰がないバレットならば、射程範囲内に入りさえすれば引き金を引くだけで良いのだ。落ち着いて、外さないように狙いを定め、

「つてえっ！！」

遠距離式の神機使いの誰かの掛け声と共に、銃口が光り、様々なバレットが撃ち出される。それは射程範囲に入った全てのザイゴートを射抜き、墜落させる。

墜落することを信じて、いつの間にか走っていたリンドウたち近接式は、ザイゴートに一気に距離を詰めて捕喰体勢に入る。

神機解放後、メインユニットから出現した黒いアギトで黒い卵殻を喰らう。ガブツ、という効果音に変えて欲しいくらいのグロテスクな音が連続して響き、捕喰者である彼らは雄叫びを上げ、ザイゴートに止めを刺す。

「行くぞおおおおおっ！！」

気合の籠った声に続き、リンドウも残ったクアドリガに接近する。もちろんバーストモード状態のため、それは一瞬の出来事。

クアドリガに神機使いたちが集まってすぐ、一分以内にその巨体をバラバラに分解し、戦闘不可能な状態へ追い込んだ。

「次は隣の区画だあつ！」

遠距離型神機を携えたゴッドイーターの青年の声に導かれ、その場の約半数が彼に続く。残った半数といえば、危険が去っていない別方向の区画に向けて走り出す。

外部居住区はドーナツ状のため、円を描いて回れば、ほとんどのアラガミに遭遇できる。それならば二手に分かれても大して問題ではなかった。むしろ効率が良いとも言える。

遠距離型ゴッドイーターの青年の方へ行くことにしたリンドウは、ツバキとツツヤの顔を見て、ニツ、と微笑む。

「それにしても、何でレッドイーターさんはいないんでしょうね？」

「コラそこ。このリンドウさんが場を和ませようとしたところで、その発言は禁句だぞ」

不満気に言われて困ったツツヤは、苦笑するしかない。

1kmも走らないうちに、ヴァジュラとオウガテイルの群れを発見する。あれも先の戦闘と同じように、何も（・・・）捕喰せず（・・・）にただ走る。アナグラに向けて。

だが、まだ彼女を超えられる未来があるのだ。なので、

「……あー、もう、……いくぞ！」

とりあえず目の前の敵を倒す。皆に遅れを取らぬよう全力で駆け出した。

同時刻

ザシュ、と鋭い何かで斬られた音がしたかと思えば、少年の苦痛の音が通路に響く。そして床は赤で染まり、同色の髪を揺らす子供の高笑いが少年の声を打ち消した。

次元が違う。

ソーマは今、確かにそう思った。

同じ（・・・）化け物なのに（・・・）、何故ここまで力が違う。どうしてこの華奢な身体から（データしか見たことが無いが）アラガミ以上の力を出せる？

初対面のときは黒髪黒目、と、いかにも日本人らしい容姿だった。テンションも低く、生意気だが喧嘩となればかるく叩きのめすことが出来る自信がある、そんな弱々しい雰囲気は漂わせていた。

「痛ッ！」

奇怪な剣に裂かれた腹を手で押さえる。致命傷は逸れたみたいだが、血が止まらない。あっという間に床に広がる血が増えていく。

跪き、顔を地面に押し付け必死に腹を押さえる。すると目の前の化け物は自分の頭を踏んだ。

「……お前、邪魔なんだよ。失敗作の癖に……！　なんであそこで邪魔しやがる？」

「はあ……はあ……てめえだろ？　訓練場で変な球作つたの」

「へえ。お前見たの？」

楽しそうに言い、子供は禍々しい双剣を消してソーマの銀髪を鷲掴みにする。そして片腕の腕力だけで持ち上げ、神機使いの蹴りでも壊せない頑丈な壁に叩きつけた。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

鈍い痛みを背中から、止まぬ激痛が腹から、というサンドウィッチ状の痛みを受け、ソーマは絶叫する。化け物だって生き物。痛みを感じないのなら、それは既に死んでいるか、アラガミにでもなっているのだろう。

目の前には獰猛な捕喰者^{ゴッドイーター}　いや、捕喰神^{アラガミ}が赤い目でこちらの顔を窺う。笑みを消さず、痛めつけるのが最高の快感とでも言いたそうに。

「さて……どう喰らおう？」

いや、どうやら喰らうのが楽しみだったらしい。

ぶわつと汗を掻き、ソーマは必死に足で彼の腹を蹴る。しかし、よく判らない赤い障壁が蹴りを次々と受け止め、結局全部当たらない。

「一つ教えてやるわ」

無駄な抵抗をするのも、彼にとってはただの虫けらが暴れて、喰われるのを逃れようとしているだけなのかもしれない。だからこんな言動を取る。

舐められたものだな、と思い、つい舌打ちをしてしまう。

「あの球体は、かつてある研究者がアラガミを引き寄せる偏食因子を見つけてしまったのと同じ、アラガミを（・・・・）引き付ける（・・・・）アラガミ（・・・・）だ」

真実を告げた化け物の空いている手が、ソーマの首に向かって伸びる。抵抗できるはずも無く、その手はソーマの喉を圧迫し呼吸困難にさせた。

もう駄目だ。そう思いソーマは目蓋を閉じる。

ほとんど同時だった。

ビクンツ、と化け物の手が震えたように感じた後、喉を絞める力が緩み、髪の毛を掴んでいた手を離した。

「ク……ッソ……!!」

やがて喉を掴んでいた手から完全に力が抜け、ずるり、と壁に沿

うようにしてソーマは床に落ちる。そして咳き込み、目を開けて状況を確認した。

「……ハハッ！ ようやくお目覚めか、『神子』……君？ 失敗作、命……拾い、したな……ウグッ!?」

頭を押さえ、立ちながら悶絶する化け物は、

笑っていた。

「……あれ？」

目が覚めたら、寝ていたはずなのに立っていて、床は赤く染まっ
ていて、サイレンが鳴っていて、ソーマ・シックザールが倒れてい
た。

「……何事？」

「……てめえがやったんだろっが」

「……すみません、人違いのはずです」

「堂々と嘔吐くなっ！ ゴホゴホ！！ はぁぁ」

意味がわからない。とりあえずソーマ・シックザールは腹に怪我
をしているみたいなので、レッドイーターはポケットから回復錠を

取り出し、

「……………はいどうぞ(ポンッ)」

「ゲゴア!？」

真上に放り投げてすぐソーマの口を両手でこじ開け、落下する回復錠を見事、口の中に入れる。

ゴクリ、と喉を通る音がした後、ソーマは咳き込み、鬼のような形相でレッドイーターを睨んだ。

「何すんだクソッ!」

「……………こうでもしないと飲まない性格だと思って、つい」

「……………飲むだろ。こんな状況で飲まない奴がいるか？」

「僕」

「いやがった!」

そうこうしている間に、ソーマの裂傷は癒えて傷が塞がる。やはりP73偏食因子も強力だな、と実感しつつも、やはり自分の偏食因子の方が強力だ、と違ってしまう。

湧き出る子供心に浸かるのも無駄なので、心の栓を外して子供心を全て流す。

「……………で、状況を簡単に言っと?」

「お前が訓練場で変な球作ったせいでアラガミが押し寄せてるんだボケ」

「……………OK。理解しましたカス軍曹」

「カス軍曹って誰だ………よ？　！！　ゴホッ、ゴハッ！」

話せば傷が開くのに、何故この人はいちいち突っ込んでくるか、レッドイーターには理解不能だった。

しかし、今の会話で目的は決まった。訓練場に即刻駆けつけ、その球とやらを破壊すれば良いのだ。レッドイーターは神機取りに、（ソーマを放置して）自室へと向かった。理由は、一応ここは役員区画だからだ。

第六十三話、化け物（後書き）

作者、負傷

傷が癒えるまで更新が……（泣）

第六十四話、VSハリケーン（前書き）

お久しぶりです。

充電完了しまスタw

第六十四話、VSハリケーン

引っ張られるような肌の感覚に我慢しつつ、その引っ張るうとす
る主にレッドイーターは人差し指を指し、

「……………あれ？」

「……………そうだ」

隣で腹を押さえながらも淡々と質問に答えるソーマを見る。ちな
みに彼とは似たもの同士、つまり彼もまた、『引っ張られている』
ということだ。その割には我慢しているような素振りを見せない。

だがレッドイーターの方が、偏食因子の問題でなにかとこういう
事態には過剰反応する。なのであつと言う間に疲れた表情をし、指
の指す方向へと顔を向き直った。

目の前に広がる光景は、黒。

その黒が粉末のように宙を舞っている、という言い方も間違いで
はないが、どちらかと言うと災厄を起こすハリケーンのように黒が
渦巻いていた。

「……………球体なんじゃ？」

「……………俺が見たときより縦に長くなってやがる」

「……………あれ成長中なんですか……………なんて面倒な」

ため息を吐きたくしてしょうがない感情を踏み殺し、片手に握る神機（銃身は包帯によってカモフラージュ）の柄の感触を確かめる。感想はベストコンディションだ。

潰すか、それとも増援を呼ぶか、最終的にアラガミの殲滅という任務である事には変わりはないためどちらでも良いのだが、レッドイーターとしては未知数の相手とは集団戦の方が楽で嬉しい。

不意に、ぼすつ、と明らかに優しい手つきで肩に手を乗せた音ではない雑音が耳に入った。すると、

『ヴオヴオヴオヴオヴオヴオ……』

「離れ」「あ、なんか嫌な予感が」

ハリケーンの中心部から聞こえた声に近いモノにソーマとレッドイーターは嫌な予感がした。彼らが危険を察知し、言葉という行動を起こした一瞬、広い訓練場が眩く光り、渦を巻くオラクル細胞の壁に大きな穴が開く。その後一秒にも満たない刹那、

『ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！』

「っ　っ！？」

その穴の大きさに見合った大口径のレーザーが反射的にレッドイーターが展開した神機の装甲に吸い込まれる。もちろん衝撃に耐えられるわけもなく、レッドイーターは吹き飛ばされ、ソーマもレッドイーターが咄嗟に伸ばした手によって頬を引っ張られ巻き込まれる。

「クペッ！」

グシャ、という何ともグロテスクな音が立ったが、それは単にレッドイーターにクツション代わりにされ、超合金の壁に叩きつけられたソーマの身体から発せられた音であり、事実上怪我人は一人だけで収まった。

プシュー、という音を立てながら、自動ドアが閉まる。

「……………これじゃ勝てるわけないですねえ……………」

帰宅早々変な出来事に巻き込まれた自分の不遇さと、さつきから溜まっていく疲れ、そして先ほどソーマをクツション代わりにしたとはいえ少なからず受けたダメージによって、膝を着き、強化ノコギリでどうにかそれ以上体勢を崩さぬよう踏ん張りながらレッドイーターは呟く。

勝てる手段は使うべきだ。

2年前の懐かしい声が脳裏を過ぎり、レッドイーターはとりあえず訓練場の隔壁シャッターを降ろしてもらおうポケットから無線機を取り出した。

何故、隔壁シャッターを降ろすか。その理由は二つある。

一つは、あのオラクル細胞の塊が興味を示しているのが自分達アラガミと人の間に生まれた子供達（人類最初のゴッドイーター）で、他の物体には興味が無さそうだったからだ。その証拠に現在まで壁など、身近にある物質を捕喰した形跡がない。つまりシャッターを食べる可能性が薄い（可能性としては捕喰される心配もある）。

二つは、単に奴はまだ移動できないアラガミ（例として上げれば
コクーンメイデン神属）の可能性があるからだ。

移動できるならすぐに自身の元に来ればいいし、今現在、追って
くる気配すらない。

「……………後はオラクル操作能力　は本部命令で使えないん
だった……………ってオラクル細胞は？」

無線機片手に、レッドイーターは疑問に思う。

何年もの捕喰の末、遂に人類の文明を破壊した偽りの神々の細胞
は、食べ残した大地やコンクリートを、自然界における食物連鎖の
上下関係を無視して生物全般を、そして人を喰らって増殖し、結合
して神となり、神としての形で倒されればまた大気中に霧散し、大
気中にある程度の濃度で彷徨っている。風のある場所では、風に乗
って遠くへと移動する場合もある。

いくらフェンリル支部内では人の手によって濃度がとても薄くな
っているとはいえ、ただ薄いだけである。もしかしたら運よく高濃
度の状態になってアラガミになるかもしれないし、その単細胞生物
としての姿のまま、地道に壁などを捕喰していくかもしれない。

それがいないのだ。一匹も……………。

自身に置かれた状況よりも、そちらの方が気になって仕方が無く、
危うく掴んでいた神機を落としそうになった。落としそうになって
やっと我に返り、レッドイーターは無線機を投げ捨てて神機の柄を
強く握りなおす。

と、我に返ると同時に自身が持つ力を思い出す。

「……………勝てない……………訳じゃない」

倒れるソーマの傍らで微笑を浮かべ、レッドイーターは神機の銃身に巻かれた包帯を外し、手持ちのOアンプルを全て叩き割る。ガラス管が廊下に甲高い音を立て続けに立てながら割れ、一部、光り輝くように見えるガラスもあつた。

だがそれらに興味はない。

次は言葉で言う。勝てない訳じゃない、と。

(……………敵は動かないのだから、素早く移動をすれば少なくとも奴が放つ攻撃は当たり辛い筈)

体内のオラクル細胞の調子確かめながら、レッドイーターは考える。少なくとも一筋縄ではいかないだろう。高速戦闘を実行すれば、その速度で近寄つた際の回避行動や銃形態時の射撃精度が落ちるのは目に見えている。

それでも可能性は薄い、諸刃の剣を彼は選択する。何故なら、今、レッドイーターはある危険性を考えていたからだ。

それはアラガミを、より正確に言わせればオラクル細胞を集める悪魔（スサノオの偏食場パルスとは違う何か）の影響で、ソーマ以上にアラガミに近い存在の自身の『心』を壊されるんじゃないかという可能性。そして、それによって恐怖を感じさせるそれは、自己防衛のための破壊、という手段を本能的に引き立たせるのに十分で

ある。

「すう
」

大きく息を吸い、胸いっぱいまで空気を溜め込む。

「はぁーっ」

そして吐き、レッドイーターは鋭い目つきとなって身体中を駆け巡るオラクル細胞に可能な限り、最大にまで活性化させる命令を下した。

赤黒い瞳と髪、動作の一つ一つが残像のように目に映る軌跡、その身を守るようにして周囲に揺らめく紅蓮の炎、そしてメインユニットが赤黒く染まる。

神機を持ちながらLv2の状態になった際のもう一人の自分の痛みを訴える絶叫は聞こえない。ただ、神機から何かしらの感情のようなモノが流れ込んでくるような気がした。だがレッドイーターはそれを受け流し、以前より強力になったと感じられる神機を見て笑う。

神機に命令を下した。

変形しろ、ただそれだけで剣身は邪魔にならぬよう格納され、メインユニット下部に取り付けられている銃身とバトンタッチし、入れ替わった銃身は本来の姿へと形を変える。

ここまでは同じなのに、変形を必要とする時間タイムが違った。本来なら0.5秒必要とする変形時間が 僅か0.03秒となっていた。

今、レッドイーターは神機と同化していると言っても過言ではない。相手と自分の五感が繋がったような感覚がより鮮明になり、レッドイーターが戦いたいと思えばそれに応えるように激しく明滅した。

身を屈める。重心を前にし、目を訓練場に入るための扉に向けて、走った 訳ではなく、滑った（・・・）。床の上を遅い、歩く程度の速さで滑り、銃口を扉に向けて沿える。

本部に居た時も同じことをした。あれはミハイルを追いかけている時だ。

歩数と距離が一致しない、極めて奇怪な移動だっただろう。実は自身を中心に半径約5メートルの床と靴底にオラクルの膜を張り、接着することによって簡単な結合をし、前へ進む勢いで靴底をアイススケートのように滑らせる……厳密に言えばオラクル細胞がオラクル細胞を運んでいるのである。一步は加速、ただそれだけの行動。

細胞が結合していることもあり、壁や天井も滑ることができる。水上や波のある湖や海だろうと、膜を張れば滑ることができる。欠点といえば、結合のせいですぐに減速するという事だけ。だが床を歩く、というより蹴っていれば問題ない。

ちなみにこれはオラクル操作能力のため本部から出されている命令を違反してる事になるが、いまや、緊急事態の時に命令なんてクソ喰らえ、の針路に至ったレッドイーターはすっかり忘れてる。

ゆっくりと滑りながら、レッドイーターは神機の引き金を引いた。

ドンッ！ 一筋の閃光が神機から解放され、扉の中央に直撃する。

扉は向こうに吹き飛ばされ、それを確認する時間も割かずにレッ
ドイーターは床を蹴り、一気に加速する。止まったら負けである。

時速100キロにも近い速度で突入し、飛来した小口径の、無数
にあるレーザーを小さなカーブを描きながら横に滑ることによって
回避する。やはり対応が遅い。

変形はさせず、神機を片手に持たせながら敵を中心に大きく曲が
る。そして減速しないよう、もう一度床を蹴る。それと同時に銃口
をハリケーンの中央、よく見ると光が明滅している部分に向け引き
金を三度引いた。

三本の氷のレーザーは直進し、渦を巻くアラガミの中に飛び込む。

……変化が起きない。

一秒待っても二秒待っても変化が起きない。外したか、それとも
違ったか。どちらにせよレッドイーターの攻撃手段など斬るか撃つ
程度のため、撃つが消された今、斬るの行動しか取れない。

神機を変形させ、ハリケーンに向けて進路を変更する。

一瞬という言葉が似合いそうな速度で渦に近づき、目障りなそれ
に強化ノコギリを横に一閃する。

あまりにも速い速度で振ったためか、強化ノコギリを振り切った後に生じた突風がオラクル細胞の壁を糸も容易く吹き飛ばす。

Lv2は、あのスサノオを十分に圧倒できる戦闘能力を得られる程の力を秘めている、とレッドドクターは予想している。

体内のオラクル細胞の結合を再構成、それによって本来のしなやかさと強靭さが向上し、かつバーストモードなど足元にも及ばない程の活性化を起こす事によってその身体能力は底上げされている。

また副産物として、その活性化が磁石のようにオラクル細胞を集め、皮膚の上からパワードスーツのように身体を覆い、補強し、ゴッドドクターとしての防御力と身体能力を向上させている。瞳と毛の色が一時的に変色するのはこのためである。

欠点としては、その活性化によって第一種接触禁忌アラガミの出すパルスの影響を強めてしまう事だろう（これを本能的に知っていたレッドドクターは戦闘時にこの力を使用できなかつた）。

そんな常識外れの一撃で空いた穴をレッドドクターは直進する。迷うことは無い。自分の行動は正しいのだと信じて。

「っ！！」

しかし進入を待ち構えていたかのように前左右から強い光が発生する。レッドドクターは咄嗟の判断で球状の壁で身を防いだ。

ドゴンッ、という音と共に強い衝撃が襲った後、強い熱波が密閉空間と化していた壁の中に吹き込む。

汗が溢れ、思考能力を代表に意識が薄れていく。そんな中で状況の打開策を考える。

立て籠もっていても最終的に負ける。これは言うまでもない。

だから、一瞬の隙を突いて突破するしかない。

そう考えたのを見越してか、後ろからも、ドゴンツ、という音が鳴り、壁の中という空間は更なる熱波で暑くなる。引き裂いた渦の壁が元に戻り、他と同じくレーザーを放っているのだろう。

ベゴツ、と、前方の壁が凹む。想像以上の破壊力に軽く絶句しながらも、レッドイーターは強化ノコギリを前方の壁に突きつける。

床にへばり付くオラクル細胞を手元に集め、強化ノコギリに集合させる。

敵にオラクル細胞が引かれるのもあつてか、想像以上に作業が難航する。その間にもレーザーを防いでいる左右の壁が凹み、熱波が強くなる。

だが、逆に凹んだ際にできた僅かな隙間から、レーザーが霧散して誰からの制御下にも置かれていないオラクル細胞を大量に確保できれば形勢は逆転する。

まさにレッドイーターはそれを実行し、

「クッー！」

チャージクラッシュとほぼ同等の破壊力を誇る巨剣にへと変え、

壁を一本の、禍々しいとも言える黒い巨剣で貫通させた。それは貫通と共に空中を漂う大量のオラクル細胞と結合して伸び、最終的に第二層の渦の壁に突き刺さる。

ふわりとした軽い感触を神機から受け取ったレッドイーターは微笑み、伸びに伸びた黒い巨剣の切っ先に新たな命令を飛ばす。

(・・・爆発しろ)

耳が音を拾えなくなるほどの音を立て、第二層の壁に突き刺さっていた巨剣は大が付く程の爆発をした。

するまでもないが、前方からレーザーを放つオラクル細胞の群れは散り散りとなっただろう、とレッドイーターは予想する。

再び床にオラクルの膜を付着させ、高速で滑る。ちょうど自身を守っていてくれた壁が破壊されたのと同じだったのは運が良かった。

よく耐えた、とつい思ってしまう。

そしてふつつりと、レーザーの猛攻が止まる。変わりに引き裂かれた壁の向こう側にはヴァジュラが3体ほど入れる空間があり、同時に目が眩むほどの光が灯っていた。

眩しい閃光を放つハリケーンの中心部には黒い塵、今手玉に取っているオラクル細胞以外は見えない。

これといって害のない、まるで台風の目のようだ。

そんな事を考えたのもつかの間。閃光は徐々に目から頭に入って

第六十四話、VSハリケーン（後書き）

怪我は完治しました。

風邪の方は病院で見てもらい、レントゲン撮ったら肺に何かあると
のこと。

はっきり言いましょう。マジでびびりました（泣）

何せ親戚のおじさん2人が肺の病気で亡くなっているのでorz

精神世界5

白い、純白の閃光が目が焼けるような痛みを残して頭の中に入ってきた。

はっ、と驚き、目を見開けば。そこは、いつもの、あの、もう一人の自分との顔と顔を合わせる場。

どこまでも続く白。

それは少しづつ、少しづつ黄色い色合いになっていき、

『やっと……、ここまで来られた……』

「っ！？」

贖罪の街で、ボロボロになりながらもある程度原形を留めていた教会の中、突然、とても中世的な顔立ちの少年が目の前に現れた。しかし、少年は自分の事など見もせず、右へ歩き始める。

そして少年の隣。金色が混ざったような茶髪にF正式 コバルトの上下を着たゴッドイーターの青年がそれに続いた。青年は一見、気軽に話せるような、とても優しい顔立ちをしている。

だが、何故か今、彼は何かを決意したような面つらで薄明の空を思わせる蒼穹のパーツで構成された神機の柄を強く握り締めた。

その神機に一瞬、強い近親感を抱く。

剣身は、ブレードを基調とした青白い大剣。ロングブレード

装甲は、対属性バックラーを基調とした青みのある黒い小盾。バックラー

そして、最も親近感が抱いたのが、メインユニット下部に取り付けられた銃身。それは剣身と同じく青白く、ガトリング砲を基調とした軽弩。アサルト

装備しているパーツこそ違うが、それは明らかに自分のと同じ、可変式だ。

事態の把握が出来ていないレッドイーターは、少年の歩いた方向へ目を向けた。そこにあつたのは、居たのは、黒くて茶色い、フェンリルの部隊長のみが着用を許されるF指揮官を着た一人の青年だ。

部隊長に支給されるロングコートを着くずしており、袖を巻き、露出する腕は鍛えに鍛えられてある。前を開いたロングコートから覗くのは、ニット地のジャケット。ロングコートの機能性とは逆に、こちらは肌触りや着やすさなどが優先されているように見える。

足は動きを制限しないように幅のあるズボンを穿き、その裾は邪魔にならないよう悪路でも踏破できる丈夫なブーツ内にぴっちりと入れられていた。

彼は崩れた天井の瓦礫を背に力尽き、座り込んでいる。見覚えのある髪型だが俯いていてよく見えない。

そんな時、少年が口を開いた。

『リンドウ（……）はここですと……、自分の中の』

その一言は、レッドイーターにとって今までで一番驚かせるものだった。

リンドウ。確かに少年はそう口にした。声色には、悲しみ、愛情、そして怒りが詰まっているようにレッドイーターは捉えた。

「リンドウさん……！」

レッドイーターは走り、すぐさまリンドウの手を取るつとする。

『アラガミ（……）と戦いつづけてきたんですね……』

しかし、握ろうと伸ばした手は、リンドウと呼ばれた男の手をすり抜けた。

だが、少年は違った。

男の横で片膝をつき、左手を伸ばして男の頬を優しく撫でたのだ。

そしてその手を引っ込め、こつ話す。

『でも、もう限界です……。彼の意識は消えかかっています……』

その言葉と先ほどのアラガミという単語。レッドイーターにとって最も嫌な未来。

それは仲間のアラガミ化。墜ちた者フォールマンになること。

「い……やだ。そんな、嫌だよ……」

『あ………』

「！！」

涙が目から零れ落ちたところで、男、リンドウは苦しそうに口を開いた。

その顔は、何かを抑えようとして、頑張つて、封じ込めているけどもうすぐ表に出てくる化け物に毒されているような表情だ。

ピクリとも身体を動かさず、微かに開いている瞳で頬を撫でた少年を見る。

『お前、誰だ……？　ぐうつ……！！』

呻き、まるで大怪我を負ったときの様に自身の右腕を掴むリンドウを見て、少年は立ち上がり、

『つれないね、リンドウ……。せつかくの再会なのに台無しじゃないか………』

と言った。

彼と青年が誰なのか、そしてリンドウの服装は何なのか。全てが疑問に包まれたとき、何を思ったのか、少年は表情を変えずに踵を返し、ゴッドイーターの青年の正面に立った。青年の顔がより一層強張るのが目に止まる。

レッドイーターは耳を澄ます。もちろん、この状況を説明してく

れると信じて。

だが、少年が口を開いた瞬間、再び白い閃光がレッドイーターの目を襲った。

「ぐあああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああ
あっ！！！！！！」

激しい痛みが、目から頭に。頭から全身に行き渡る。

再び白い光景に戻り、また徐々に黄色い色合いになっていく。

『暴走……だと？』

いつの間にか横に立っている白衣を着た美しい女性が、冷や汗を掻きながら呟く。

「……………アドルフイーネ・ビューラー？」

片目を押さえながら、レッドイーターは女性の顔を睨みつける。

憎むべき、本部の研究員である女。

彼女がどんな職場にしているかなど知らないが、彼女は救世主^{メシア}を創るやら何やら言っていた、とレッドイーターは記憶している。最も、その救世主^{メシア}になるような才能を持つゴッドイーターがどんな者かなど、彼は知らない。

だが、全く進展のない彼女の救世主^{メシア}の研究はレッドイーターにと

って居心地の良いの一言に限る。

そんな女は片腕を大きく右に振って、

『他の被験者達はどうした！？ 早くヤツを止めさせるんだ！！』

と叫ぶ。だが、

『駄目です、全員応答がありません！』

何らかの連絡係を引き受けていたであろう男はそう答え、アドルフイーネ同様、嫌な汗を流しながら再びモニターに対して向き直った。

くっ、とアドルフイーネは苦虫を噛んだような表情をし、自身の手前にあるマイクに向けて大声で言い放つ。

『シルバっ、応答しろシルバ！ 早くヤツを止めるんだ！！ 聞こえないのか？ シルバっ！！』

切羽詰ったと言って良いほどの口調に、先ほどのリンドウと少年の会話のシーンで悲しみに染まっていた表情を、レッドイーターは喜びに変えた。

彼女がこれほど力を入れるとなれば、救世主メシアを創るという研究は進んだのだろう。そして、今はその研究が全て水の泡になるとき。

愉快だが、同時にその救世主メシアとなる筈であろう神機使い達のことを考えて、再び悲しみに心が濡れる。

レイドイーターは壁に設置された大型のモニターを覗き込み
そのあまりにも酷い光景に絶句した。

11人の男女、腕輪をはめている所からして神機使いであろう彼らは、胸から出た球体から発生する黒い雷で宙に浮かべられ、ピクピクと痙攣を起こしていた。

だが例外もその場に居た。

一人は太い巨木にも見える触手で腰から下を覆い、それを地面から生やして数メートル上で奇声を上げる長髪の男。もう一人は、その惨劇の場で呆然とする、研究協力者用の服を着用した黒髪でツンツン頭の少年だ。

『がああああ、あ……あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ』

バキバキ、と乾いた音を立てながら、皮膚に亀裂が入り、長髪の男は口を全開にまでして声を上げる。そんな光景に、

『何故だ、何故暴走する！？ 事前の検査では何も問題はなかったハズだ！？』

アドルフイーネは疑問を隠しきれず、大声で怒鳴り散らす。そして連絡係と同時に何らかの画面を目の前にキーボードを器用に叩く男の座る椅子に近寄り、無言で報告を求める。

『わかりません……、全てのパラメーターが振り切れてモニターできません。ただリンク時に収束したエネルギーが制御を失い……強力な力場形成して膨張し続けています。このままでは……』

『チイツ』

動揺しているが、冷静に話す男の報告にアドルフイーネは舌打ちをし、開いている出口へと足を進めた。今更だが、レッドイーターは、ここは特殊ヘリの機内だと気付く。

「はい、終わり！」

何の前触れも無く背後から聞こえた声と共に、ふつと今まで見えた景色が消え、白い空間に戻される。振り返ると、そこには裏の人格が、ぜえぜえ、と荒い息遣いで立っていた。

レッドイーターは目を細め、再び握られていた神機の柄を強く握る。殺意は無いが（殺せないから元から意味が無い）警戒色のある敵意を放っていた

「そう力入れんな。あとLv2解け。こちらら頭痛いんだぞ？」

手を頭の後ろに置き、裏の人格は苦しそうな顔でレッドイーターに要求する。明らかに相手には敵意が無い。直感でレッドイーターはそう思った。

制御下に置いていたオラクル細胞を自由にする。それによりオラクル細胞は血液中の結合を一度解き、また滅茶苦茶な配列に戻っていく。

磁石のような役割をしていたオラクル細胞が効力を失ったことで、身体の表面に付着していたオラクル細胞も剥がれ落ち、神機のメインユニットも通常の黒一色へと戻った。

そうになると、裏の人格の表情は和らいでいき、最終的にはいつもの強気な子供の表情になる。ほっ、と彼は安堵の息を吐き、頭に置いていた手を気だるそうに離した。

レッドイーターは、暗い表情でそれを傍観し、数分掛けてやっと口を動かした。

「……………今のは？」

「遊び気分で実行したら出来たという奇跡……………かな？」

「……………奇跡？」

数歩後退りし、裏の人格と距離を取る。

彼は特に気にした様子も無く、それどころか背を向けて、告げた。

「オラクル細胞は《捕喰本能》のせいで忘れられがちだが、ちゃんと物事を考える生物。だが仮に、その本能を抑制できたらどうなる？」

サカキ博士のような科学者が考えそうなことを、あえて口にし、レッドイーターに問う。

「……………どうなるって……………」

「ヒント。アラガミは物質を捕喰すると、その形質を覚え、それをその身で再現する。いや、再現すると言つのは多少ずれているか」

「……………情報量とかに関係あるの？」

「お！　そうそう合ってるぜ。そんな感じで考えな！」

意地の悪い笑みを浮かべ、その場で胡坐を掻いて観察する裏の人格から目を離し、レッドイーターは首を捻る。

「……………捕喰本能を抑えたら、オラクル細胞は人間より知識を多く蓄える。つまり、それだけの『脳』がある。そして、僕の『脳』はオラクル細胞を操ることが出来る力を持つ。当然、炎や木とかはオラクル細胞の『脳』に詰められた情報量から引つ張り出すから……………ああ、なるほど」

「正解だ。そう、今、俺達の身体を中心に渦巻く大量のオラクル細胞の『脳』と俺達の『脳』が共鳴し、超高度な未来予測をしたってわけなんだなこれが」

「……………そしてそのオラクル細胞の塊が電波のような発信源となり、空中を浮遊するオラクル細胞にも共鳴、中継をさせ」

「世界中のオラクル細胞と未来を考えた。アドルフィーネの未来がその代表だな。ありゃ北欧のどっかだろうし」

そんな便利な力があるのなら、とレッドイーターは下唇を噛み、訴える。

「ならリンドウさんの未来の続きをっ！！」

「駄目だ。これ以上やったら脳がオーバーヒートする。それに、もう破壊しちまってるぞ？」

「
.
.
.
.
.
.
え?
」

精神世界5（後書き）

リンドウさん、レンきゅん、ディケイン、アドルフイーネ&彼女の部下の台詞と順番はうる覚えですので、間違っていたら容赦なく指摘お願いします。

自信は無いです！！w

第六十五話、接近する神（前書き）

ひさしぶりの一日更新

第六十五話、接近する神

ピキィッ

そんな乾いた破壊音と共に、現実リアルの意識が徐々に晴れていく。

目の前には巨大なコア。緑や青、黄や白など様々な色に変色し、明滅している。

自身が握る『アラガミ』が立てた牙が、コアの表面に亀裂を走らせているのに気付いたのはどれくらい後だろう。ぼんやりと、意識レベルが低下しているのは理解できるのにいまいち頭の整理がつかない。

後に、バキンッ、という音が鳴り、コアは『アラガミ』に咀嚼され、細胞指令群としての機能を失いながらオラクル細胞の補給といった感じで喰われて行く。

バリバリ、ボリボリと、慣れたとはいえここまで虚無感を覚えたのはどれくらい前だろう。そんな事すら思い出せないまま、『アラガミ』は神機に戻り、自分のコアを明滅させる。

ハリケーンとして渦巻いていたオラクル細胞は、細胞全体の指揮を行なうコアの消失によって訓練場を黒い霧となって勝手に彷徨う。

その状態を、ゴッドイーターやオラクル細胞の研究をしている科学者が見たならばこう叫ぶはずだ。

危ない、と。

その危ないのが何か、危ないとは何か、今のレッドイーターには全く理解できない。

いや、理解できないのではない。理解したくないのである。

超高濃度オラクル細胞散布下による未来予測。その中に仲間の苦しむ姿があったのだ、無理も無い。

本当に危ない、危険なのは見えない未来。それがどれだけ重く、後に自分を苦しめるかなんて誰にもわからない。

昔、国という単位が存在したときの映画には、影で軍と軍の戦争と、それに加えて登場する主人公たちを思いのままに操る人物がいるというモノがあった。架空とはいえ、そんな主人公たちとレッドイーターは似たようなものではないか？

未来が怖い。

誰にも束縛されず、変わらぬ永遠の今日が欲しい。

いつの間にか、霧散していたオラクル細胞が結合して、オウガテイルやザイゴート、コンゴウとなり周囲で捕喰本能むき出しの獣声を上げていた。

変わらぬ今日。

「オオオオオオオオソッ

グギャアアアアアアアアアアア

アアアッ！！」

変わらぬ今日。それはアラガミを斬る、撃つ、喰らう、殺す日々。
飛び散る鮮血。引き裂かれる胴体。断末魔の悲鳴。

これがあるからこそ、生きている実感が持てたのではないだろうか？

もし麻薬のような物が比較的簡単に栽培できて、売ることができれば、ゴッドイーターでない者、生きている実感の持てない人々は麻薬漬けになるだろう。

だからこそ、ゴッドイーターは《人》として生きている実感が持てるから、人喰い細胞とも呼ばれるオラクル細胞を体内に摂取してでもなりたいたいと思う人がいるのだろう。

なら、生まれながらにしてゴッドイーターになる運命である自分は幸福か？

他人とは明らかに違う運命。

例えるのならば、争いの無い裕福な家庭で育った子供と、戦争や災害による貧困の中を無我夢中で生きる子供くらいの差。

皆が神喰らいとなることを望むなら、レッドイーターはそれを望まない。

ゴッドイーターになることが不幸で、そうでないのが幸福。

一瞬だけ切り離された気がした。この死の世界に。

そんな自分を引き止めるモノはどういったものだろう。レッドイーターは無意識にそんな事を考える。

気が付けば、床には無数のアラガミの死体と血溜まり。鼻をツンとする臭いが訓練場に蔓延し、強化ノコギリを突き刺されたオウガテイルの呻き声が無音の空間の中で大きく聞こえる。

アラガミを殺す。

そうして誰かが助かる。

助かった人は助けた人に感謝する。

それが世に言う幸福なのだろうか？

少し違う。

自分が求める幸福。何だろう？

他人と違い裕福になり、肥え太ること？ 違う。

身体を鍛えて他人を追い越すこと？ 違う。

なら、アラガミを殺したときに感じる満足感？ 違う。

自分がここに居るのは、世界に存在するのは、

ただ、皆と一緒に笑顔で暮らしたい。それだけだった。

未来に抗うのが怖い？ とんでもない。

その幸福のためなら、生還率1パーセント未満の作戦にだって参加する。

もう、リンドウに言っているのだ。あの時の言葉の意味を思い出す。

世界が平和でありますように、と。

世界は、アラガミがいなくて人間や生命に溢れた自然がある。

平和は、生きている実感。

あの言葉はそういった意味合いを持っているのだ。リンドウにはどう聞こえたのだろう。レッドイーターの心を完全に読むなど、誰にも出来ない。逆に、レッドイーターからも他人の心を完全に理解できない。

いつかは聞きたいと思う。彼にとっての世界の平和。この世の生

きがいを。

翌日。

アラガミの殲滅はどうにか終了。

昼飯時、アナグラで待機しているゴツドイーター全員に緊急招集が掛けられた。支部長は、いつもと変わらない様子で集まったレツドイーターに何かを言いたそうだった。そう見えただけであるが。

重い空気が、支部長とレツドイーター、そして毎度何故かいるサカキ博士をを除く全員の肩にのしかかる。

昨日のアラガミの大量突入。最初は神機使いすら無視してアナグラに直進していたアラガミだが、ある時間を境にいつも通り、物質を捕喰する本能のままに暴れまわるようになり外部居住区での戦いになった。

直進している間に数を減らしたのが幸を呼んだのだろう。戦死者はゼロ、建築物への被害もいつもと比べれば少なかった。

ただ、その分ゴツドイーターは重労働となり、昼までぐっすり寝ても疲れが癒えていない者が多かった。

そんな彼らには、考える力もなく、ただ呼ばれたから仕方がなく来た者もいる。

「（おい。レツドイーター）」

「……………ん？」

そんな沈黙の空間の中、隣で立っているリンドウが話しかけてきた。

「（今回の召集、何か聞いてるか？）」

「……………いえ、何も」

「（昨日の訓練場の事なのかな？）」

「……………それは無いですよ。そんな皆が知っている話をわざわざする意味、ありますか？」

「……………確かに……………」

レッドイーターが単独で訓練場に湧いたアラガミを殲滅した話は、とうに支部全体に知れ渡っている。銃形態を使わなかったため、ある一部の神機使いからは適合神機が矛盾している、などと騒がれることとなったがリンドウらが同じコアを神機ごとに取り換えていると（大嘘の）説明したため特に大きな話題にはならなかった。

「……………昨日のアラガミだって最初は変な行動起こしていたけど、しばらくして普通に戻ったから問題ないし、そこらへんは科学者の仕事です」

「（じゃあ、何だ？ 一体なんの話をするんだ？）」

「……………忙しい支部長職の仕事の時間すり減らしてまで集

めたんです。結構ヤバイ事態にでも陥ったんじゃないんですかね」

首を傾げる2人を見て、ツバキは呆れたような眼差しを向けてきた。むっ、となってレッドイーターは何かを言おうとする。が、

「どうやら、皆集まってくれたようだね。では、唐突だが聞いて欲しい。決して取り乱さないように」

と、支部長が話を始めてしまったので、開けようとした口を反射的に手で隠す。

だが支部長が何かを口にする前に、裏の人格（よりもよっていつも以上に元気）が何とも意味不明なことを言った。

（よし釣れた！！）

（・・・・・・は？）

何が釣れたかなど、レッドイーターには判らない。しかし、とても満足感がヒシヒシと伝わるそれは、絶対何かあるだろう、と思わせてしまうほど気になった。

支部長が一拍言葉を切り、裏の人格が言いたかったこと、そしてほとんどのゴッドイーターを絶句させることを言い放った。

「昨日の戦闘中のことだ。スサノオ捜索のために出撃していた先発隊が……スサノオと戦闘した」

「え」

それにはレッドイーターも絶句した。

スサノオの戦闘能力は、直接対峙した者にしか分からない。

その戦闘能力は、モデルとも言えるボルグ・カムランと比べれば天と地ほど離れている。そう思えるほどの威力があつた巨体に秘められていた。でなければ通常の神機使い以上の戦闘能力と生命力を併せ持つレッドイーターがあつた二発の攻撃で沈められるわけが無い。

搜索なのだから、逃げれば良い、と言わざるを得ない。

だが、現場はそれよりも過酷だつた。

「脚力が異常発達したオウガテイル種が5体、スサノオに随伴していたようだ。そのオウガテイルが逃げ道を塞ぎ、結果 全滅」

「神機を喰われ、負傷したが1名生存。2名戦死。そして、1名…
…アラガミ化したらしいよ」

支部長に続き、サカキ博士も結果を教えてください。

アラガミ化。いわゆる『ゴッドイーターにだけ掛かる不治の病』。発症例はP53偏食因子の過剰投与などが挙げられる。

スサノオとの接触はオラクル細胞が不安定になる、くらいの情報は持っていたはず。今更ながらその偏食場パルスの凶悪さが分かつた。

だが、レッドイーターほど極端な影響は受けないだろうし、じわりじわり、と毒のような存在からして長時間パルスの影響を受けた

と易々と予想できる。

一名生存。それは奇跡だが、神機を喰われた上にパルスを受け続けた以上、『引退』いんたいは確実だ。

それが誰だか、一人として問わない。怖いのだろう。誰かが生き、だれかが死ぬ現実には。

だから、代わりに訊く。

「……………シックザール支部長。その、生存者の名は？」

「……っ!?」「」「」

固唾を呑みこむ者。顎に力が入らず口が開いている者。何かを言いつつも出そうとする者。反応はバラバラだが、これで全員が事実を知りたがらないのは確実だ。

支部長は目を細め、こめかみを指で撫でる。

「……………貴方でも、迷うんですか？」

誰かが死に、悲しむ人がいれば、それと同じように、誰かが生き、喜ぶ人がいる。

レッドイーターは、その喜ぶ人が多いと信じて訊ねる。

「……………生存者は？ 誰です？」

「……………ももた百田ゲンだ……………」

支部長は焦らす必要も無いと判断したのか、あっさりと生存者を口にする。レッドイーターはその瞬間、ツバキ達の表情を窺う。

死者数の方が多いが、どうやらその百田ゲンというゴッドイーターはとても信頼されているようだった。ツバキとリンドウは少しだけ安心した表情になり、ほっと胸を撫でる。

他の神機使いも同様で、大半の者が安堵の息を吐いていた。

「だけど、もう搜索部隊は出しにくいねえ」

くいつ、とサカキ博士は眼鏡のブリッジを持ち上げ、支部長を見る。

脚力の発達したオウガテイルが随伴しているのだ。当然と言えば当然か。

「ん？」

とそこで疑問に思う。

支部長は脚力の発達したオウガテイルが5体いると言った。それは、本部から極東に帰る日に戦闘し、生き残っているオウガテイルの個体数と合致する。

「……………タツヤさん」

「……………あ」

ずっと考え込んでいたいたのか、無言状態を維持していたタツヤはようやく我に返る。

戦闘に参加していないとはいえ、あの脚力は見ていたはずだ。恐らくウアジュラ相当の脚力を持つため、下手するとタツヤ程度の経験では死ぬ。しかたがない、という感じでレッドイーターは名乗りを上げることにした。

「……………支部長。そのオウガテイルは多分、僕が本部で止め損ねた奴だと思えます」

「はあっ？ 本部から極東^{（北）}までわざわざ来たのか「リンドウ黙ってる」……………はい」

ピシヤリ、とツバキの一言でリンドウは黙る。

だがリンドウのツッコミは最もである。しかしこう数が揃っていると、そうとしか考えられない。

「……………だから、スサノオと共にオウガテイルの殲滅も任せてもらえないでしょうか？ これ以上戦力を投入して、削られても支部が壊滅するだけです」

「……………覚悟はあるのかい？ 君は」

「……………支部長。続きは皆さんを退出させてからでお願いします」

「ああ、すまない。では疲れの癒えてないところを呼んでしまっすまない。今日はゆっくり休んでくれ」

第六十五話、接近する神（後書き）

未来が怖い。変わらぬ永遠の今日が欲しい。（レッドイーター）

「変わらない明日は嫌なんだ！」

種ガンのキラ君とは逆思考のレッドイーター君でしたねw（赤の川は信者ではないがアンチでもないのご安心ください）

本編のゲンの言動から察するに、彼にとってスサノオはトラウマ、又は世界で最も憎い相手と考えられるため、こんな感じになりました。

あ、ちなみに言っておきますが。

小説、『GOD EATER 禁忌を破る者』（以降、禁忌）の世界は、個人的にはパラレルワールド扱いです。

理由は、GEBの終盤にて、リンドウは過去に特務でスサノオと単独で戦闘している事がミッションで明かされています。（主はレンきゅんと2人で挑む）

しかし、禁忌ではリンドウはパルスの存在を知らず、スサノオとの戦闘経験がありません。

ようするに、禁忌を本編の世界観に取り入れるなら、その矛盾のある部分を消す、または改変させる必要があります。

第六十六話、昇進

「……さて、君はどうしたいんだい？」

「……とりあえず案はあります。支部の機能が麻痺する上に莫大なコストが掛かりますけどね」

正面からレッドイーターと支部長は見詰め合い、よくよく考えたと沢山の疑問が隠されている質問にレッドイーターは無頓着に答える。

含まれているものの中で、いま最も重要だと言える事について話し合う。下手に別の質問に答えると、足元をすくわれる気がしてならなかったからだ。

「……スサノオの戦闘能力くらいは報告されているはずですよ。未知の敵に正面から突っ込んで殺されるのが落ち。ならどうすればいいと思います？ サカキ博士」

皆が退出しても唯一退出しなかったサカキに、レッドイーターは話を振った。サカキは口癖であろう、実に興味深い、をまず言い、その表情を研究者、もしくは探求者のソレに変えた。

「そつだねえ。正面からやり合うのが無謀なら、超長距離からの砲撃が最も安全に倒せるんじゃないの？ 他支部の報告を見る限り、銃への耐性が極端に高いわけじゃないらしいしね」

「……名答。まさにそれです」

冷笑を浮かべ、目を細めてパチパチと拍手をする。

「超長距離からの砲撃。既存の戦いではなく、一方的な攻撃をしようという簡単かつ安全な戦略だ。」

だが、旧文明の技術とオラクル技術を同じにしてもらっては困る。

「だけど、オラクル細胞をエネルギー変換した弾は空気抵抗による威力減衰は無いものの、発射されてある一定の距離を^{ライン}超えると消えてしまっただよねえ」

鉛弾のように、発射されて重力や空気抵抗のせいで弾道が下へ下へと傾くことの無いエネルギー弾の最も忘れがちな欠点。

仮に100あるオラクル細胞の内、4を消費して弾を生成、発射するとする。そのエネルギー弾は、破壊力を重視されているバレットだった。飛距離はどうなる？ 当然、弾速が遅い上に高出力のバレット構成なのに消費量がたったの4なら、それ相応の飛距離となる。

簡単にバレットの性能を、飛距離、破壊力の二つで考えれば、弾の破壊力がまず優先され、その弾を飛ばすための飛距離は消費したオラクル細胞から破壊力に優先された余りで決まる。

式にすると、全体から消費したオラクル細胞 - (マイナス) 弾の破壊力に注ぎ込まれたオラクル細胞の量 // (イコール) 飛距離 となる。

2消費して、弾の威力に2を投じれば弾が飛ぶことは無い。逆に弾の威力を0にして、余りである飛距離に2入っても、それは単な

る不発。どちらもクラッカーよろしく銃声だけのバレットになる。

だから、消費するオラクル細胞を再び4とし、破壊力に3、飛距離に1が入れば高威力エネルギー弾になるが弾速は遅めで飛距離は短い。その逆として破壊力に1、飛距離に3入れば低威力エネルギー弾になるが弾は高速で発射され、飛距離も長くなる。

基本的に、皆は破壊力に2、飛距離に2の1対1の中間タイプを使用するため、例だがこういった偏ったバレットはあまり使わない。

「……超長距離砲撃は、その飛距離相応のオラクル細胞を消費し、かつあのスサノオを良くて一撃で倒せる破壊力じゃないといけないんです」

「……結論を聞こう」

「……発電に使われるオラクル細胞を全て砲撃に回し、それだけでなく、近接式の神機使用の方々にはアラガミからオラクル細胞を大量に奪取してきて欲しいのです」

支部長も話を聞くに連れ、薄々とは気付いてはさだらう。だがまだ必要なことがある。

レッドイーターは支部長の目の前でVサインを作る。

「……この案を成功させるには二つ必要なことがあります。一つは先の話の通りです。そして二つ目が問題です」

二本（人指し指と中指）だけ立てているが、その話を区切ると同時に中指のを曲げる。

「……そのオラクル細胞を制御し、かつその大威力に耐えられる銃身が必要です。だけど、極東支部には新兵器開発区画のような所は存在しません。そんな場所を持っているのは」

「本部かい？ あそこは新世代の神機の研究をしている区画があったよね？ 支援を求めるとかい？」

また眼鏡のブリッジを持ち上げ、微笑を崩さずサカキは軽々しく先の先まで言い放った。支部長の眉が3ミリほどずれたのは気のせいだ。

「……ええ」

サカキの発言通りだ。頼れるのは本部の 認めたくは無いがあの馬鹿野郎の手を借りるしかない。

冷笑など今の会話でとうに崩れ去り、今はとても嫌な事を自分からやらなくてはいけないというのもあってか、暗い、駄々をこねる子供のようなオーラを放つ。実際、本当ならそういう歳なのだから違和感を持つ必要は無い。

むしろ、何故、彼の人格は肉体年齢のわりに精神年齢が高いのが不思議なのだ。

（……まあ。何とかなるでしょうね、少なくともあの人がけなら）

ため息を普通に吐ける場なら、とうに吐いていた気分である。それをしない程度には彼は大人のつもりだ。

最後に、自分がやれることを腹括って支部長に告げる。

「……………あと本部との交渉、僕にもやらせてもらえませんか？」

「……………何？」

今度は明らかに眉が動いた。驚いているのだろうか？ 腹の底が見えない男のため、どうなのかは定かではない。

彼は顎に手を添え、考え込む。結論をすぐ出すような事ではないと判断してくれたのだろう。正直安心した。

「……………回答は、別に今日じゃなくてもいいです。僕の用事はこれだけなので……………失礼します」

だが安心すると同時に、どんどん居心地が悪くなってきたため、レッドイーターは踵かかとを合わせ敬礼する。そして踵を返して早足で支部長室から出て行った。

「それで、どうするんだい？ 彼の二つある人格は少なくとも記憶の共有はしていないみたいだけど、互いの存在を知っている事から会話とかもしているんじゃない？」

「いや、あの様子だと聞かされてはいないみたいだ……………ここは素直に従ったほうが良さそうだな。子供とはいえ本部の人間だ」

「君の計画を知って、本部に報告なんてされたら厄介だろうにねえ」

「むしろ、君なら私の計画の失敗させる側に加担するんじゃないかい？」

「スターゲイザー星の観察者でなければ、積極的にそうしていたと思うけど？」

「とはいええ、反省とかはしているのかい？ 彼の人格を呼んだのは君だろう？」

「ああ、まさかアイーシャの存在に気付くなんて思いもよらなかつたよ。それに、話を聞いた限りだと彼の力はいつもの彼よりもワンランク上らしいし、昨日のアラガミの行動もなんらかの形で彼が手を入れたと見て問題無さそうだしね」

「……訓練場に湧いたアラガミも気になる。そろそろ監視係もつけるべきかな」

「良いのかい？ 彼は物心付いた時から戦闘訓練させられていたらしいよ？」

「なら、こちらもそれなりに強い人間を配置に着けるまでさ」

「どちらにせよ、本部と手を組むなんて考えられないねえ」

「全くだよ。本部から人が来るとなれば、例えあのスサノオのコアを入手できても地下深くで眠る彼女にはあげられないだろうな」

「誰が来るかは分からないけど、彼の様子だと彼と関係のある人間と考えるべきだね。君のカリスマ性に惹かれた本部の人が来る可能

性は低めだ。エイジスの防壁データのアップデートをするしか道は用意されていない」

「これを断つても、今の戦力でスサノオと強力なオウガテイルを殲滅できるとは考えにくい。……はあ。……今回は我々の負けだ……」

2月19日

一ヶ月以上経って、それは唐突にやって来た。

支部長室に呼ばれ、渡された書類を自室に置かれたテーブルの上に放る。

お茶を飲んでいたツバキ、リンドウ、サクヤ、タツヤが、どうした、とこちらの表情を窺ってくる。勘弁して欲しい。

「……………はああああ」

レイドイーターはやや長いため息を吐き、ふらふらと歩き、ベッドに倒れこんだ。

激しい睡魔が襲ってくる。

任務から帰ってきて、疲れが溜まっている所に更なる追い討ちが来たと言えは良かろうか？ なにかと理不尽な世の中でも、歳に合わない物を貰ったって嬉しくもなんともない。

ただ、本部の人間達の脳味噌は腐って鼻から飛び出している
か思えない。

「何だ、これ？」

「……これはっ……!!」

「えっ？ ツバキさん分かったの？」

「みんなあゝ、私にも見せてよ……ええっ!？」

女性陣が驚愕する中、自然とレッドイーターの綺麗な目から涙が
出てきた。鼻水も少々出て、慌てて鼻をすする。

「これは……」

できれば言わないでくれ、とレッドイーターは明らかに言わなく
ていい事を話そうとしているツバキに言いたかった。しかし、今は
精神的な疲労で叫ぶ気力というものが湧き出てこない。

ちらりと皆の方を見れば、ツバキが資料を読み漁っている。本当
に止めて欲しいとレッドイーターは思う。

そんな中、ツバキの唇が動くのが確認できた。自我が芽生えた頃
から訓練に訓練を重ねたレッドイーターには、読唇術が備わってい
ることを誰も知らない。

ツバキの口はこう語っている。

< コードネームレッドイーター。フェンリルキョクトウシブニ
オケル、スサノオトウバツミツシヨノシキカントシテニカイキュ
ウトクシントスル >

日本語に訳すと、コードネームレッドイーター。フェンリル極東
支部における、スサノオ討伐ミッションの指揮官として二階級特進
とする。だ。

基本、フェンリルは企業でありながら軍としても機能している。

だが実際の軍と比べて低い階級は省かれたり、変えられている場
合が多く、通常の軍の最下級が一般的に二等兵と言われるのなら、
フェンリルにおいては新兵と称される。

そして新兵の一つ上の階級が上等兵。一等兵を省いているが、ア
ラガミ発生前、世界で一番か二番目に強い国としてアメリカ合衆国
なる国が存在しており、その陸軍では、Private^{プライベート}と一等兵と
二等兵の俸給は異なるものの階級呼称は同じになっており、恐らく
は、アラガミに対抗できない古臭い連合軍とは違う、とフェンリル
本部の幹部らが二等兵と一等兵を一つの括りに纏め、消す事によっ
て一等兵という階級が無くなったのだらうとレッドイーターは予想
している。

その次は曹長。基本、約2年から4年以上生き残り、フェンリル
の軍規を守るか、成績の良い戦果を叩き出せばなれる階級だらう。

曹長からさらに出世すると、准士官の階級呼称が無いためそのま
ま少尉にへとなる。後は中尉、大尉、少佐、中佐と順に階級が上が
っていく。

しかしながら、ゴッドイーターにはある一定の戦果を挙げられれば、ゴッドイーターとしての仕事を『引退』^{引たい}でき、大抵の場合は大尉に昇進するほどの存在が当てはまり、それ以上階級を上げること
はあまり見られない。

引退した彼らは支部内で作戦を現役ゴッドイーターに伝えるのを代表に、新人教育の教官をしたり、ミッション報告の書類の作成などの仕事に着ける。

加えて通常の役員よりも上位の待遇を受けられ、与えられる部屋のスペースが現役時代に使っていた部屋よりも広い、など基本、ゴッドイーターよりも偉い存在にいと見える。

そんな引退の階段に、レッドイーターは急接近してしまった。

曹長からの二階級特進。つまり、今日からゴッドイーターの中では現場で最も上位指揮権を持つ中尉（先も言ったがほとんどの大尉は現役を引退しているため）になったのだ。

「中尉……ねえ」

サクヤが面白そうに頬を膨らませ、レッドイーターを見ないよう
に顔を逸らす。

馬鹿にしているのではない。ここまで女扱いされているのだ、彼女の心境など見え見えである。

リンドウ達もツバキから一通り説明を受け、少しだけレッドイーターを見て、サクヤのように顔を逸らした。プチ、と怒りを抑える

沢山の糸のうち289本が切れた気がした。

まあ、ここまで同じ事を考えている人が集まるのも珍しいといえ
ば珍しい。ちなみに彼らの考えていることは、あんな可愛い顔して
最も偉いのか、である。レッドイーターも同じ立場ならそう思うだ
ろう。だからこそ……ムカついた。

ベッドからゆっくり起き上がり、皮膚にへばり付いて邪魔な髪を
手で撤去していく。

「……いいもん。どうせツバキさんももうすぐ中尉になっ
てくれるだろうし」

髪を撤去しながら、ツバキを見る。

彼女の戦果は同僚から見ても目を見張るものがある。指揮も完璧
といえるし、銃形態の神機の扱いも彼女の方が上だ。

だが、現実はあまりにも酷かった。苛めと同じくらいではあるが。

「特SSS級ライセンスって、ここに書いてあるのだが？」

ツバキは一枚の書類をレッドイーターに突き出す。

文面には、支部長からの報告には、単独での任務でありながら多
数のアラガミの殲滅やコアの回収を成功させている。このことから、
貴君のスサノオ討伐ミッション指揮官という立場もあり、作戦成功
まであらゆる現場で最高指揮権の特SSSの特権を使うことを許可
する。と書かれてあった。
スリーエス
ライセンス

「特SSSか、凄えなあ」

「この世はもう破滅だあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああ
あああああああああつ！！！！」

資料全てに目を通していなかったから今まで気が付かなかった。

ライセンス
特権とは、強いて言うなら、隊長権限とも言える代物だ。これがあれば、ミッション同行者をライセンス持ちの神機使いが指名できるという利点がある。

3つの架空の部隊があったとする。どの部隊にも部隊長、リーダーとして指揮権を持たなければならないのも併せて考える。

例えば、あるX部隊で今のところ最高階級である曹長が3人いるとする。だれが隊長か、という事態に発展する可能性があるのは予想されており、そんな事態を未然に防ぐためにフェンリル側から隊長を指名、任命する。その際与えるのが特権ライセンスである。

その隊長に選ばれたA曹長に特B級の特権ライセンスの使用許可が下りたとしよう。

続いて、同じく曹長が複数いるY部隊でも、フェンリルから隊長に選ばれたB曹長に特A級の特権ライセンスの使用許可が下りた。

そんな時、ミッションの人員が足りず、他の部隊から神機使いを借りてこようとA曹長がY部隊の神機使いに話しかけた。その神機使いはB曹長の特A級ライセンスで既にミッションの受注を済ませる直前だったとする。

A曹長は、特B級ライセンスを使おうとするも、使えない。

B曹長の特A級ライセンスは、A曹長の特B級ライセンスよりも上位に存在するため、その特A級ライセンスで指名された神機使いに命令しても意味が無いのだ。

一見強い上下関係を持つように見えるが、実は少し違ったりする。

最後に特B級のライセンスを持つC少尉がいたとする。所属はZ部隊だ。

こちらにもミッション人員が少なく、Y部隊の神機使いを借りようとB曹長に話しかけた。

先ほどのA曹長はライセンスの差で負けたが、今回はB曹長が負けた。

簡単だ。たとえライセンス持ちでも上官命令は絶対だ。つまり階級が上なら、ライセンスで負けていても命令できるのだ。

しかし、神機使いは無限にいるわけではない。むしろ少ないといえる。

そのため職権乱用で、ある特殊なミッションの出撃を待っていた神機使いを引き抜くと、戦略や戦術の建て直しが必要となるわけだ。

その特殊なミッションがプリティヴィ・マータの群れの討伐だとする。

人員が減れば、その分残された神機使いに掛かる負担は大きくなり、結果として紙一重の差で全員戦死したとする。

そうすれば、そのミッションから何故、神機使いを抜いたか引き抜いた神機使いは問われ、最終的にライセンス没収、つまり隊長解任となる。使い所を弁えるとはこの事だ。

そのライセンスの中で最上位の特SSS級ライセンス、そして中尉の階級の座に座ったレッドイーターは、ありとあらゆる点で優遇される。

「レッドイーター。これらが渡された意味、分かるよな？」

頭を押さえるレッドイーターの後頭部を、書類で叩きながらツバキは訊く。

「……それは……」

「私達以外のゴッドイーターともミッションに出て、駒の強さを覚えろって事だ」

「……よりもよって何で駒？」

第六十六話、昇進（後書き）

バレットの隠された謎だったと思う（考えるのに最も苦労した）

ライセンスはオリジナルですが、GE本編にある

^{プレイヤー}主、ソーマッチ、サクヤ嬢、タツミ兄貴の階級が、一時期少尉で重なっていた。

でも、同じ部隊長同士である主と兄貴は、一方的に主が兄貴を振り回すことが可能という点があったので、こうなりますた。

小説版主（神雑YOU君）の場合は、心優しすぎて、ライセンスをあまり使わないという妄想設定。（なんか兄貴に防衛班の仕事に駆り立たされているらしい）

第六十七話、地獄の対人訓練 (前書き)

a l a n / m y l i f e
を聞きながら書きました。

ああ、GEやっててよかった。ねえ？ シオ……。

合宿前日。手抜きと全力が入り乱れてますw

第六十七話、地獄の対人訓練

人が人らしく生きるということは、『何か』をすることだ。

何もしない人間とは生きているとはいえない。

たとえば呼吸すること。

たとえば食事をとること。

たとえば眠ること。

人はたえず、『何か』をしているのだ。

もちろん、最低限の『何か』をすることで生きていくには生きていける。

けれど、人間とはそれで満足できるような生き物ではないのだ。

もっとうまいものが食べたい。

もっとうまい酒が呑みたい。

もっといい家に住みたい。

もっといい仕事がしたい　と、挙げていけばキリがない。

だが、それは決して間違っていないのである。

『何か』をしているからこそ、人間は生きているという『実感』をもてるのだ。

逆に言えば、何も出来ない人間は生きてはいない。あるいは生きていくことに、なんの意味も見出せないのではないのだろうか？

フェンリル極東支部も、世界中のほかの支部の例にもれず、アーコロジーという施設である。これはオラクル細胞やアラガミの侵入を防ぐため地下深くで稼動する食料プラントにより、その支部だけで自給自足を達成できるということだ。

ただし生産には限界がある。よって生活物資は配給制であり、全ての住民に潤沢にいきわたることは無い。

物資が無ければ、それを元とした経済活動もありえない。つまりは、仕事がないということだ。そして、仕事がないということは、今の環境から脱却する手段もないということだ。

ゴッドイーターにさえなれば、数々の義務と引き替えに、一般の住民には手が届かないような恩恵を得られる。

だが、それも簡単ではない。

製作にオラクル細胞を用いる神機を扱うには、まずそれに適合できるだけの肉体的素質が必要である。適合するかどうかは、まさに生まれ持った資質がものを言うわけで、既にこの時点で、大多数がふるいにかけられる。

仮に、この狭い門を突破したとして、その先に待っているのはアラガミとの過酷な戦い。ゴッドイーターの新兵の死亡率の高さがそれを実に物語っている。

なににせよ、ゴッドイーターの資質を持たないその時点で、人々が辿るべき道は決まってしまうのだ。

人類の最後の砦であるフェンリルは、そういった希望を砕く場所でもあるのだ。

それでもこんな時代だけに、生きていられるだけでも幸せだというものはいる。だが、いずれは気付くものだ。

ここは、外周をアラガミ防壁で覆われた箱庭。

何もすることがない。

何かしたくてもできない。

できるのはせいぜい、配給を待つ行列だけ。

もしかしてこれは生きているのではなく、ただ生かされているだけではないか？ と。

残念ながらそれならまだ生易しい表現だ。

これでは飼われているようなものだ。家畜のように。

力の無い人間は家畜。最低限の食料^{エサ}だけを配給さ(あたえら)れ

て箱庭で生きていく。そして稀に育つ素質のある者　美味い肉だけが力ある者、フェンリルに招かれる。

多くの人間は、ただ死ぬまで生き続けるだけ。

それに気付くと、人間は無気力になる。現に、外部居住区では稀に逃げず、アラガミに喰われるのを待つような行為をしている人間がいるのだ。

もちろん前向きに、未来を夢見て今を変えようと、懸命に死ぬことに抗い続ける人間もいる。

だが、その夢の傾向は、時には人に害を及ぼすものにもなりかねない。アラガミ信仰宗教。まさにそういった者が大半を占めている。

フェンリルに家畜として生かされるのに反発し、自身が夢見る未来を神アラガミに叶えてもらおうと。

そもそも狼は狩られるのが運命と豪語する者だつて存在する。

皆わかつている。自分達を取り巻く環境が、諦観と絶望に彩られていることを。

そして、そこに一旦はまってしまった以上、そこから這い出ることは容易ではない（その証拠に、アラガミ信者の矯正は失敗続きである）。

だが、救いの手ぐらひは存在してもいいのではないか？

日が昇る三十分ほど前。

コンコンコンコン、と、2回ではなく4回扉をノックする音が、ボロ雑巾のような布団で寝ていた家主の耳にはいる。

救いの天使が降りた。

それは、初めてそのノックを聞いた後、扉の外にいた子供を見て以降、毎回思った感想だ。

家主には体の弱い、病弱な娘がいる。

フェンリルには病院の類に属する施設が存在する。だが、風邪にかかった娘の症状を見てもらうには、『金』^{かね}が必要だ。ゴッドイーターたちがミッション報酬でもらえる通貨、フェンリルチップである。

働くにも競争率の激しい現世、勝者と敗者を分けるのなら、彼は後者に属する人間だ。

金を稼げない。ただ配給物資を積んだ車にできる行列に並ぶことしか行動を起こせない一人だった（・・・）。

去年の6月の中旬辺りからである。

外へと繋がる扉の先に、一人の子供が立っていた。

艶のある黒髪。

人を冷静に見定めているような、綺麗な黒い瞳。

そして近所のヒカルという少女にも後れをとらない、とても整った、落ち着きある顔。

その子供を見た妻の第一声が、天使である。

フェンリルの制服に隠れるようにして右手首にはまっている物は、赤い腕輪。

ゴッドイーターに憧れる幼い子供が、ゴミにしかなくなつたダンボールで作るのをたまに見かけるが、その子供がはめているソレは実物だった。加えて出撃するゴッドイーターの腕輪とは違い、小型でもある。

その子供は、右手に握つた、棺桶をまるごと入れられるサイズの袋と、左手に握つた、外から見てもゴツゴツとした袋を持ち、

『……しばらくの間、預かってもらえませんか？』

とても澄んだ、透き通るような声で言った。

まず、左手に握つた袋を家主は受け取る。

中を見てもいい、そう言われ、恐る恐る袋を開け、夫婦共に絶句した。

中身はフェンリルチップの山だ。それは十万Fcはくだらないほど、沢山詰まっていた。

そして、右手に握った袋を地面に下ろし、中身を取り出す。またもや家主たちは言葉を失う。

アラガミ防壁と同じ光沢を持つパーツでできた、昔の電動式ガトリングガンだ。

子供は、その金を渡す条件に、この武器を隠しておいてくれないか？ と家主に訊ねた。

娘は病弱だ。たとえ銃器を持っていたとしても、現世では犯罪にはならない。たとえ盗まれても、その銃器には弾は詰められていなかった。この条件は、比較的安全で、自分達にとって都合が良かったのだ。

相互の利益のために子供が出した小さな手を、家主は泣きながら握った。

隣で寝息を立てる娘を一瞥し、自身と同様にノックの音で起きた妻と共に起き上がる。

床の下には、渡された銃器を隠すために掘った穴がある。小さな保管庫とでも呼ぶといい。

二人は足音を立てず、その穴を開くための床を剥がした。家主は銃器が劣化しないよう、できるだけ新鮮な空気が入るよう床に隙間を空けている。これが目印だ。

まず家主は、よっこらせ、と穴の中に降りた。

18キログラムのガトリングガンを家主が持ち上げ、妻がそれを

支える。アラガミの襲撃で家が壊れることがよくある所為か、自然と二人とも筋肉が付いていたりする。

そして家主が穴から出ると同時に、妻はそつと手を離し、すぐに扉を開く。

外で大きな袋を片手に持って待っていたのは、相変わらず可愛いとも凛々しいとも言える端整な顔立ちの天使だった。

2月21日

その日、ゴッドイーターだけが誰一人として廊下を歩いていなかった。

それだけではない。ミッションの受注をして出撃した者もゼロ。食堂にも居ない。

ならどこにいるか？

「がはっ！」

大の大人が吹き飛ばされ、壁に激突する。その男は、斬られたわけでも撃たれたわけでもないの、少なくとも外傷は見受けられない。

殺風景だが空間に余裕のある訓練場ではなく、墜ちた者との戦闘が想定される期間の際に使われる、模擬訓練ができる簡素な第二訓

練場。

第二訓練場は、近接式神機使いが剣術を磨くなどの理由で使われることもあるので、木製の床は綺麗に清掃され、稽古用の木刀もきちんと整備されている。一部の人からは、道場と呼ばれたりもしていた。

なのに、その綺麗な第二訓練場は何処にやら。

神機に見立てて作成されたエアガン（ゴッドイーターたちが感じる重量や銃口の位置、造作は同じ）から発射されたペイント弾が壁に付着したり、口内を切った後に口から出てしまった血が床を汚してしまっている。

一目見れば、一般的に使われる訓練場で教官に絞られる新兵を見た時以上に地獄の様だろう。実際、吹き飛ばされるゴッドイーター（……）たちはそうだと思っている。

始まりは、本当に些細な発言だった。

日が上がって間もない朝、レッドイーターは暴徒を止めるために使用したM134を見たこともないスナイパーライフルをアナグラ内に持って帰ってきた。彼は、デザイン時のままだろうがチューニングした物だろうが、定期的に見てやらないと駄目だ、と語り、自室に引きこもった。大量の銃器関連のパーツをテーブルに並べて。

それを聞いたタツヤとツバキは、先に事情を知っていたリンドウが待っている食堂に先に行くことになった。

食堂に着き、リンドウと合流しようと2人は歩き回る。そんなときだ。

「なあ。スサノオと接触してアラガミ化した先発隊のヤツの目撃情報、聞いたか？」

ある一角のテーブル。

野太い声で話す筋肉質なゴッドイーターの男が、目の前で座る筋肉質ではないが、それなりに鍛えられている体を持つゴッドイーターの男に訊ねる。それは2人の耳に偶然にも入り、つい、意識を傾けてしまった。

「ああ、全然耳に入ってこないな。どこに潜んでいるかも分からない、危険なアラガミが増えたつてのに」

ツバキは少しだけ、険しい表情になる。あのアラガミが進行してきた夜、同時にスサノオをアナグラに近寄らせていたというのは紛れも無い事実だ。

だが、その訳も、原因も、何一つ解明されていない。

二人は知らない。これが、レッドイーターの裏の人格が考え、実行したことなんて。

ただ、レッドイーターにはもう見抜かれた。

未来を見るなんてただの副産物にすぎない。未来を見たって簡単に干渉できるわけではないから当然だろう。

アラガミを引き寄せるアラガミを創造した目的は、スサノオを近寄らせること、これだけだ。

今のレッドイーターにとって、だいたいのアラガミは彼より弱い。いや、脅威になっていないのだろう。彼の体は半分以上アラガミの細胞に近い性質を持っている。

それは、フェンリルが培養したオラクル細胞よりも純粋な細胞を体内に秘めていることになり、結果としてゴッドイーター対アラガミではなく、知性あるアラガミと本能のままに生きるアラガミの戦いのような構図となっている。

本能で戦うアラガミは、高いレベルの行動パターンで獲物を混乱させたり、遠距離攻撃を短時間で正確に、又は獲物の立っている座標に攻撃をしかける程度の脳しか発揮していない。

それとは逆に、半分かそれ以下程度だが人間としての細胞を持ち合わせ、敵の攻撃や弱点を見抜いたり、的確な戦術パターンで仕留めるレッドイーターはアラガミよりもあらゆる点で優れる。余談だが、アラガミの細胞も持つということは、彼らの特徴である知識を蓄えるのは得意で、そのせいである同年代よりも（たまたに子供になるが）やや大人びた性格になった可能性もある。

ならば、そんな彼の精神や肉体に干渉し、能力を無効化できる第一種接触禁忌アラガミと戦闘したらどうだろうか？

攻撃を難なく避けても、広範囲に飛び出しているパルスを避けるなんてことは不可能だ。レッドイーターが自分から殲滅作戦に加わることは、それすなわち自殺にも等しい。

だが、同時に次の段階へ覚醒する可能性もある。

怒りや憎しみ、それはスサノオに倒されていく仲間を見たレッドイーターなら無限に湧きそうなもの。もしかしたら、偏食場パルスが引き金になるかもしれない。

相手の戦闘能力の都合上、彼以外にも殲滅作戦に参加するゴッドイーターは絶対にいる。これらを利用してしようとするともう一人のレッドイーターは悪魔にでもなりたいたいのだろうか。

第一にレッドイーターの性格、その次として作戦の都合、偏食場パルス。全てが思い通りに事を運んでいく。もう止まらない。いつかスサノオは再び目撃され、ゴッドイーターと戦う可能性は極めて高いと言えた。

スサノオの討伐を完了させた支部は存在するものの、それはスサノオ発生当初のものらしい。

アラガミは捕喰して、短時間で形態を変えていく化け物だ。彼らにとつては少ない時間でも、その形態の見直しをし、戦闘能力を増強させる自己進化の時間となる。

神属性への耐性の低さは改善されていないと報告されてはいるが、進化の過程で変化、もしくは消えたかもしれない。あのスサノオの襲撃から、もう数ヶ月経つのだ。何が起きても不思議ではない。

そんな中で、問題が増えた。

神を喰らう者から一転して墜ちた者へ、一人、この世界から脱落して化け物となった。

体の一部が全身がオラクル細胞に変質するためゴッドイーターよりも身体能力が高く、かつ人間時代の経験から反射的に攻撃を避けたり、状況を考えて逃げようともする厄介な敵だ。

「あいつの神機、確か遠距離式だっけ？ 融合している状態なら遭遇したら面倒だよな」

「走つたらまず負けるし、正面から戦つても駄目。視力や聴覚も発達して隠れても見つかりやすい。もうまんまアラガミだな」

「あの『鬼』の話だと人間の原型を保っているらしい。でも俺達、本格的な対人訓練なんてしたことないからまずいだろっちなあ」

鬼とは、負傷し、引退した百田ゲンの支部内での二つ名。

自衛隊員、つまり軍の訓練を受け続けていたため、ピストル型神機と適合したとはいえ体術だけならアナグラでもトップクラスのゴッドイーターだった。

でも、そんな事を知らない人間が今の話を聞いたらどうするのだろうか。

ツバキは、今さっき配給された食糧が載った食器を片手で持ち、タツヤの肩にそっと置く。もう行くぞ、という合図だ。

「お？ ああ二人とも遅いぞ」

待つのに飽きたのだろうか、リンドウの方がこちらを探しに来た。それを見てツバキは一言。

「お前……席は？」

「ん？ ああ問題ない。サクヤのヤツに守っとしてって言ったから」

何とも問題なさそうに、リンドウはあいかわらずの調子で言う。ツバキは毎度のごとくやれやれと呆れた様子にし、食器を持っていない自由な手でこめかみを撫でた。

あははは、と乾いた笑いしか出せないタツヤを見れば分かるが非常に気まずい。

リンドウも無意識のうちに一步後退し、ツバキの行動を細かいところまで見ている。。

数秒の（3人だけの）静寂。これを破ったのはタツヤだった。

「あ、そそそ、そういえばあ！ さっきあの人たちが対人訓練とかやっとした方が良さげなこと話し合ってたよねえ！ 今日はレツドイーターさんに色々教えてもらっても良いんじゃないんですかね！？」

「……………ああ、別に良いですよ？」

慌てるタツヤの体が、血液が冷えて氷になったようにピタッ、と止まる。

焦って最初の方で言葉を発するのに苦労したタツヤとは対照的に、極めて冷静な声色で言う子供がツバキの後ろに立っていた。

テンシヨンの低さや雰囲気、いるようでいないような独特なもののため、その場にいる面子はそれが誰であるかすぐに気付いた。

その人物はつい最近、フェンリルのゴッドイーターでも階級が高いとされる中尉に昇進し、最高の権限を手に入れたレッドイーターである。

さきほど部屋に籠ったはずなのに、どうしてもうここにいる？

という問いがすぐには浮かばなかったリンドウ達を置いて、レッドイーターは不思議そうな表情で手に持った食器のバランスを崩さずに上半身を右に傾ける。

「………ちょうど、その話を支部長から言われたから伝えに来たのですが、やる気があるみたいですね？」

「あ、ええと。まず詳しい話をしてくれないか？」

ツバキは戸惑いながらも訊く。レッドイーターは姿勢を直し、無言で頷く。

「………フォーلمانの件もあって、少なからず対人用の訓練を積んでる人もいるみたいなんです、自主的にする気もなく、いつも通りアラガミを喰っているゴッドイーターでも、対人訓練を少しでもやろうと思っっている人がいれば、強制的にでもいいから指導してやってくれないか、と銃の分解を始める前に頼まれました」

「ああ、そういうこと」

リンドウは納得したように首を上下に動かす。

その時、レッドイーターは目を細め、小悪魔のような笑みをうつすらと浮かべていた。

「……………そんなわけで、アラガミのミッションもさきほど確認したら珍しく無かったので、今日、一人でもやる気のある人がいれば皆で訓練ですよ」

少しだけ、一定の範囲内の時（ゴッドイーター限定）が止まる。それは食事をしていながらもレッドイーターの可愛い姿を心の中で愛でていた者や、4人の周りを歩いていて、望まずとも耳に入った者が主である。

そして、ギロリ、と全員の視線がタツヤに向けられた。

「……………あ、ちなみに相手は僕がしますから、よろしくお願ひしますね」

最初は、支部長の命令で気だるそうに集まり、相手が子供だと知った瞬間、全てのやる気を失った者もいた。

仕方なく、まずリンドウとツバキのペアがそれぞれ木刀とエアガンを持ち、レッドイーター（木刀装備）に挑んだ。もちろん瞬殺され、それを見て良い練習相手だと悟った少数のゴッドイーターが名乗りを上げて勝負するもレッドイーターは難なく全員倒した。

その後、束になっても良いとレッドイーターが皆に許可し、しか

もレッドイーターちゃんLOVEの会（まだ存在していた）に所属するゴッドイーターたちも暴走して戦線に加わり、阿鼻叫喚の地獄絵図の中で巻き込まれたゴッドイーターたちも遂に堪忍袋の緒が切れて参加、というまさに一種の戦争状態になった。

皆が戦いながらも地獄（であるがレッドイーターちゃんLOVEの会員に限ってはマゾヒスト化し天国とも受け取っている）と思うのも、レッドイーターがバランスよく攻撃を仕掛けてくるため、無我夢中で応戦するしかないからである。

だが、そんな多人数を相手にレッドイーターは一度も攻撃を受けてはいない。

そもそも、銃のような形状を持つ武器相手なら、元の身体能力や行き過ぎた訓練のせいで『撃たれた弾を視認してから避けている』のである。

撃たれれば瞬間移動したと錯覚するほどのスピードで避け、着実に距離を詰め、殲滅し、

木刀を振られれば、片手に握った木刀でソレをいなし、身体能力の高さを生かした蹴り技でその名の通り、蹴散らしていく。

圧倒的であった。

1を連続して10にぶつけても、10は減らず、1だけが消えていくのと同じである。

ゴッドイーターの基本であるスタミナの量、剣術、体術、その全てが基準を遥かに上回っている。リンドウ達は、今になってその戦

闘技術の差に焦っていた。

だが本来、これは墜ちた者との戦闘を想定した模擬訓練なので、本当の墜ちた者とほぼ同等かそれ以上の戦闘能力を持つものとの戦闘というのは訓練としては成功だとも言えた。

壁まで吹き飛ばされたツバキは、体を少しだけ休める間に、何も考えずに武器を振るう仲間たちへの指示を考える。

「これじゃ勝てねえぞ姉上!!」

リンドウがレッドイーターの木刀を抑えながら、見向きもせずに言う。

そして、レッドイーターは木刀を弾き、サマーソルトでリンドウの顎を蹴り上げた。

「クツ！ 遠距離部隊はレッドイーターを足止め！ 近接部隊はこうちに集まれ!!」

ツバキの指示に従い、了解、と第二訓練場全域から聞こえ、遠距離神機型エアガンを携えたゴッドイーターが弾幕を張り、近接部隊を集める時間稼ぎをする。

集まる近接型の神機使いに、ツバキはレッドイーターに声が届かない程度に抑え、以下の命令を下した。

「レッドイーターだって人間だ。スタミナの限界もある。だから、スリーマンセル一組三人で連続攻撃を仕掛けるんだ。スタミナの疲労を感じ取ったら、最後のヤツが最初にやられて体力回復したヤツが止めを刺しに

「行け、行けるか？」

「「「「おうつー！！」「」「」

「では援護する。行け！」

ツバキはエアガンをレッドイーターに向け。未だに弾幕が張られているところを見ると、多少手こずっている見える。

だが、一瞬だけ床が激しく揺れたかと思うと、その場には既にレッドイーターはおらず、左右を見ても視認できない。

「ツバキ、上だっ！！」

そんな時、先輩のゴッドイーターが叫んだ。それとほぼ同時に、目の前で綺麗な黒が現れ、揺れた。

直後、また壁まで吹き飛ばされる。

遅れてきた痛覚によって意識はほとんど刈り取られ、背中にズンと、感じた痛みと同時にさらに視界が暗くなってく。どつやらここまでのようだ。

今、気絶したツバキの出した何らかの命令で、ゴッドイーターたちの行動に変化が生じた。

三人の近接式神機使いが全員別方向から突っ込んできて、木刀を次々に振るう。レッドイーターはそれを一撃の下でねじ伏せ、次の相手が誰か確認する。

すると、また三人の神機使いが突っ込んできた。同じパターンを連発する意味だけなら簡単だった。

つまり自分の気力と体力をすり減らすつもりだ。

先ほどとは違い、統率の取れたその陣形がそれを物語っている。

次に繰り出される攻撃は、ワントンポごとにずれた攻撃だった。最初の一太刀をどう対処するかで、結果が著しく変化する。実にいやらしい。

ならば、とレッドイーターは振り出す構えを取っているゴッドイーターに目を付ける。

木刀で振り下ろしてきた手を叩き、木刀を落とさせ、そのまま姿勢を低くして自身を取り囲んだゴッドイーター三人を足払いで倒す。

1、2、3で繰り出される攻撃は、テンポさえ乱してしまえば何の問題も無い。単純な攻撃で倒せると思ってもらっては困る。

次はタツヤと……レッドイーターを影で愛でてる変態二人だった。タツヤの表情にはすでに気力など無いように見える。

哀れみの目でタツヤを見ながら、レッドイーターは自ら接近し、木刀を大薙ぎに横に振るう。

タツヤは事前に攻撃を察知し、足を止めたことで難を逃れたが、他二人は踏み込みすぎてあっけなく薙ぎ払われた。

「タツヤ！」

「っ！！」

リンドウはレッドイーターの死角にどうにか入り込み、全力で木刀を振るう。

反応が遅れ、木刀で防御したレッドイーターは体格差もあり、徐々に押されているのが自覚できた。

普通なら、足で踏ん張る。だがそれは結局、力で押されているのに違いが無い。

相手の姿勢を崩す。

リンドウは木刀を握る手に力を込め、グググ、と押そうとしているのなら、それは結果として木刀以外に注意が向いていないことになる。

レッドイーターは木刀に力を込めて弾き返すと同時に、横蹴りでリンドウの足の関節を強制的に曲げる。姿勢が崩れ、無防備となったリンドウは木刀でガードを計るが、レッドイーターはその木刀をすくい上げるように蹴り上げ、そのままリンドウの腹へと足を落としました。

「ガアッ！！」

仰向けの状態になり、木刀から手を離れたリンドウはその後、実戦だろうが模擬戦だろうが致命傷か即死となる場所を狙われる。

レッドイーターはリンドウの腹を体重を入れた足で押さえ、木刀を振り上げる。

狙うは頭。

一瞬、レッドイーターの双眸が赤く光った。

だが、リンドウの頭を見るうちに、ある思い出が脳裏を過ぎる。

視界がピカツと光る閃光で染まると同時に、今、訓練に全く関係の無いけれど、忘れられない、忘れようにも忘れられない過去の思い出がフラッシュバックした。

第六十七話、地獄の対人訓練（後書き）

もう明日には合宿ですので、今日ずっと考えていた『アマテラス誕生論』を語りたいと思います。

アマテラス誕生論

ウロヴオロスでの複眼部分に位置するアマテラスの女神像ですが、攻略本などをみていると、それがアルダノーヴァである可能性があまりありません。

なので今のところ、2つ仮説を立てました。

1、失敗作として嘆きの平原付近に破棄されたアルダノーヴァのプロトタイプ（後にアルダノーヴァ墮天の元と言われているタイプでこの時はコアを持たない）を、平原の覇者であるウロヴオロスが捕喰。

その強力な形質を取り込み、第一種接触禁忌種へと変貌する。

これは、禁忌を破る者において通用するものですが、発生地が極東なので、もしかしたらアマテラスの最初の一体は極東では発見されず、別地域で初遭遇されたモノと考えるしかありません。ノッキン・オン・ヘヴンズドアでは、アラガミは海を泳ぐのがコウタのおかげで解明しているので、可能性としてはある。

2、こちらは禁忌を破る者をパラレルと考えて立てたものです。まず、でてくる難易度がアーク事件後。そして戦闘地域がエイジス島という点に注目。

ウロヴオロスの墮天種が初めて発見されたのがエイジス島なので、

そのウロヴオロス墮天の一部がノヴァの触手に残されたアルダノ
ヴァのプロトタイプ（ザ・スパイラル・フェイトより）を食べた結
果、変異したものと考えられる。

基本的に、後者のほうが可能性が高いだろうと思います。

第六十八話、思い返せば（前書き）

わーい。久しぶりの更新だい！
時間取れたよ（泣）

第六十八話、思い返せば

「もう、一年経とうとしているのか……」

「ん？」

本部に、全世界中に存在するフェンリル支部の中でも食糧生産区画と同じく特に重要な施設。

神機の本格的な整備のために、ソレ専用のカプセル内に注いだ培養液で浸し、カプセル内に存在するアラガミ発生の2050年までに進化したロボットのアーム（もちろんP53偏食因子製）での大まかな作業を見守っている最中、男　ミハイルは呟いた。

白衣をとりあえず着ているような、そんなだらしなない男は遠くを見つめるように続ける。

「あの子があ那部隊以外で唯一頼った、本部の科学者」

「……の死から一年、か」

ジャックは自分の担当しているカプセルに入っている培養液を抜く指示を出しながら、ミハイルと同じように昔を思い返す。

ミハイルとジャックには、ある子供の偏食因子の解明に力を注いでいた（……）師がいる。

毎年、本部所属の多数の科学者達が行なった、ゴッドイーターでも5回は死ぬるような実験をあの子には一切せず、極度の人間不信

に陥っていたあの子の心の扉を少しとはいえ開いた、尊敬すべき男。

今のあの子が仲間とちゃんとやれているのも、彼のおかげ。

あの子がゴッドイーターとして、アラガミから人々をちゃんと守っていられるのも、彼のおかげ。

そして、

あの子の母親を止めたのも、彼。

そんな善人、いや、実験を止められなかったから本当の善人かどうかは人の判断では決めづらいが、何故死んだ（殺された）か？
今もその理由が知りたいジャックの肩に、数枚重ねた書類を丸めたミハイルが無言で叩く。

「……なんだ？」

「昨日、あの人のデータベースからこんなもん見つけたよ。読んでみれば？」

「あ？ あの人のデータベースのパスワードは知っていなきゃ絶対に解けない仕組みだぞ？ どうやって見たんだよ」

「さあ？」

ジャックは、チツ、と舌打ちした後、力任せにミハイルの手元から書類を奪った。神機の整備の速さが支部の命に関わるので、さっさと上から下まで目を通す。

一枚目には、人の、それも子供の身体測定した際の平均的な数値であろうものが人体の骨格と共に書かれている。二枚目には『器』と書かれた、こちらにも骨格とともに数値が記されている図があった。唯一の違いといえば数値の桁だろう。

「つか……器って、おいおい」

「はいはい次行こう次行けっ！ 行けよ！ さっさと行けハ」
「っせーよ！！」「ゲ いてエッ！」

ジャックはノーモーションで蹴りをミハイルの無防備な腹ノイガードにお見舞いし、結果として悶絶する馬鹿一人の隣でイライラしながら三枚目を見ることにした。

あーあ、またやってるよ、なる周囲からの痛い目線にはある程度慣らされている（……………）ので気にすることはあるまい。

三枚目は文章だ。短いが、思いつきり現コードネーム『RED EATER』に関する記事だ。

あの子の母から抽出した赤いコア、いや、もう加工したから赤いアーティフィシャルCNSか。

言うまでもないが、アレはサカキ博士が導き出した真の終末理論、ノヴァの終末捕食に必要不可欠のものだ。

進化の袋小路の中でも終末のトリガーとされる『特異点』。

絶対に接触させるなどは言わない。

ただ、そのアーティフィシャルCNSにはどんな事があっても喰
らわせないよう、注意して欲しい。ジョンもミハイルも重々承知し
ていると思うがな。

どうせあの子にしか適合しない代物のはずだ。面倒なことではあ
るまい？ 二人とも。

ちなみに、あの子は数万年に一度誕生する新人類、本物の神を喰
らう者であり神の子だ。現極東支部支部長、ヨハネス・フォン・シ
ツクザールとその妻、アイーシャ・ゴーシュが実行したマーナガル
ム計画で誕生したP73偏食因子適合者、ソーマ・シツクザールの
ような人工物とは訳が違う。

いつの時代でも、人の技術力という力を自然の力が打ち勝つ事例
が多々ある。アラガミを形成するオラクル細胞も、ある意味、自然
の産物のようなもの。

ついでに言わせてもらうと、旧人類である我々は滅ぼされる運命
にある。それは、突如現れた知能、身体能力共に優れた新人類も生
まれたての自然だからだ。古い物より新しい物。これこの世の摂理。

だがしかし、あの子は人としての感情を持つ。自然という、偶然
と必然の積み重ねではなく、人特有の未知なる力が。その点に関し
ては旧人類となんら変わらない。驚いたりしたときの声かたまに、
その、とても女の子っぽいがな。あれだよ。男の娘だよ。

んあ、ならばどのような理由であの子が我々を滅ぼすか触れとく
か。

あの子の肉体の約八十二パーセントはオラクル細胞に近い細胞構造しとる。しかも、父親のDNA情報が一パーセント足らずときたもんだ。うわあ、悲しいねエ。つまり、あの子はDNAに記された動物の本能のせいで、いつオラクル細胞の「捕喰本能」を表にさらけ出すかわからん。

ああ、どんな形で出てくるかは知らん。そして知れん。

捕喰、つまり日本でいう、いただきます、というものか？ あの子のために結構勉強したんだが、ぶっちゃけあまり自信ないぞ。睡眠強制教育を受ける歳でもないし、ミハイルの方が詳しいと思うんだがな。妻が妻だったし。

すまんすまん。話し逸れた。

つまり彼らの捕喰イコール生き物を殺す、と考えて欲しいわけだ。あれ？ 生き物限定じゃなくて、ありとあらゆる物質じゃね？ まあ気にすんな。というか初歩中の初歩だから飛ばしてもいいぞ。

なので、捕喰本能イコール殺害への衝動ってわけ。

しかもオラクル細胞を含む毒性、というレベルじゃないが、あの子の偏食因子が何故か頭部と肩甲骨付近に多く存在するんだ。しかもそこだけ九十一パーセントほどオラクル細胞に近いし。

これ、つまり強靱な肉体じゃ物足りず演算能力とかも通常の人間とは違うのか？ スポンジに水を含ませるようにあの子の脳は情報を吸収するし。どうなんだろう。

ああ！ もしかしたら超能力使えたりしてな！！ ヴァジュラム

たいに雷を周囲にバチバチイツ、て!!

っと、もう時間のようだ。もう少し話したい事があるんだが、神様は俺の事情を無視するらしい。

もうお前達に会えない事が癪に触るが、これもあの子をここから少しでも解放するためだ。許せ。あと最初に言ったことを絶対に守れ。

それにしても死ぬけどあの子を解放できる…… ナイス神様!!
やっぱ息子は大事ですよねえっ!!

2062年4月25日 あの子を最も愛した男、ウィリアムより

PS

ちゃんと言ったとおり、あの子を極東に行かせられたか？

そして、四枚目。

「って、まだ続くのか」

「あれエ!? この文に涙一つ流さないの!？」

「……泣ける要素が無い上にいつもの彼のテンションに飲み込まれたんだよ馬鹿」

ドン。

口にくわえた猟銃の引き金を絞り、男の頭に弾が入り込む。そして頭が割れ、そこから血が一瞬で噴き出て壁を赤で染め上げる。

脳漿のうじょうの匂いがむつと部屋に立ち込めた。

ドン。脳みそが天井に飛び散る。ドン。辺りに血なまぐさい臭いが。ドン。自身の心が漂白した日。ドン。その一瞬が狂ったように連続して繰り返される。ドン。

ドン。

ドン。

ドン。

ドン。

ああ、あの人の頭が弾ける。

ただ繰り返し返される、始めて見る、人が自殺する光景。永遠の衝撃。

自身が見たことがある死体、もしくは死に方は二通りだった。

人通りのない路地で餓死していた人間はたくさん見た。だがそれは『世界』に殺された人間であって、自分から望んでそうになったわけではない。

フェンリルという組織に逆らう愚かな人々が受けた『肅清』後の

死体もたくさん見た。その場合は『世界』に順応できない人間……いや、クズだ。

そんな厳しい『世界』で行動する人間は、どんな過酷な状況でも自らの命を自分で断つ行為はしなかった。

数秒経って、ようやく人が声を上げる。

もちろん、この場には自身と、自殺した男の二人しかいない。

それは悲鳴だった。

高い声の叫び声。絶叫。

もう一人の人……自分は、その場で泣き崩れた。

情報密閉のためのミッション。

そのミッションが出た理由なんて分からないし、密閉する情報の内容を聞く権利など自分にはこれっぽっちもない。

それに逆らったら『失敗』の烙印を押されて処分されるのだ。まず、逆らえない。

だけど、これは許せなかった。そしてこの瞬間、本ミッションの目的が分かった。

頼りにできたのは、自分以外フェンリルに『所属』していない傭兵部隊と、目の前で自殺した男のみ。

男は自分を救うと約束した。

男は自分を解放すると約束した。

男は自分の生きる理由を教えてくれた。（これは、当時あまりよく理解できなかった）

それを踏まえて、研究に研究を重ね、出世し、男は本部でもあともう少しで幹部になる所まで登り詰めた。

そして、自分達の権力が失われること危惧した現幹部らによって、殺害するためのミッションが出た。もう一つ理由があるなら、男を殺させる事によって、本当に自分を手駒にしたかったのだろう。

だが男は自殺した。

確かに、これなら『サンプル観察対象』だが並みの神喰らい（ゴッドイーター）よりも遥かに高い身体能力を持ち、かつ人としての心を持つ『自身』の精神は不安定になり、幹部らを虐殺するという可能性が出る。

そして、それを見越した上層部は魔の手を伸ばすことを止めて自身を戦場、つまり本部とは遠く離れた場所で戦うようにさせる。というのが死んだ彼のシナリオ。

だからこそ許せない。

この道しか用意されていなかったというのなら、そもそもの原因である奴らを殺してやる……！！

そして、自身を解放することを拒んだ、惜しんだ幹部らが出てきた。男のシナリオ通りには行かなかったからこそ、自分はこう思った。

馬鹿なやつらめ……殺してやる。

最もバッドなシナリオ展開だ。

そして殺した。殺してやった……！！

猫や犬やカラスの餌にでもなれと、外部居住区に肉や眼球、脳みそを骨から引き剥がしたり、穿って放り捨ててやった。

そして被害を抑えるために、遂にこんな指令が下った。

密室で毒ガスを充満させての処分でもなく、解剖して教本にするわけでもなく、

ゴッドイーターになれと。……遂に男のシナリオ通りになった。

男の約束。

男は自分を救うと約束した。ゴッドイーターになり

男は自分を解放すると約束した。本部から離れた小さな島。

お前の血の生まれ故郷へ行き

男は自分の生きる理由を教えてくれた。 自分以外の大切な仲間を作れ。

一瞬で膨れ上がった殺気が、割れた風船のように消えていく。レイドイーターの瞳は、黒に戻っていた。

フラッシュバックしたからこそ、ちゃんと思い直せる。

ここでの生活は、シックザール支部長、サカキ博士、アラガミ信者さえいなければどこにでもある、幸せな日々である。

幸せじゃなかった分、幸せになったときの反動はあるかと思っただが、すんなり受けいられた。

見下ろせば馬鹿一人。

木刀を握った手から自然と力が抜ける。（もちろん得物を落とすほど抜けたわけではないが）

「……………あーあ。疲れました」

だらんと腕から力が抜けて振り子のように、肩を中心として腕がゆらゆらと揺れる。

アナグラに今いるゴッドイーター全員をまとめて相手をしたのだ。無傷なのが逆に凄い。

そんな無気力状態のレッドイーターの足元から声がした。

「あ……の、もしもし？ レッドイーターちゃん？」

「……………はいはい」

疲れて、ちゃん付けされても怒る気にさえなれない。

リンドウの腹を押さえていた足をどかせてあげる。レッドイーターは小馬鹿にしたように、ふっ、と鼻で笑った。

去年の4月終盤からこれまで、随分と自分は変わった。そんな感じがする。

いてて、と上半身だけ起き上がるリンドウの二の腕付近の服を木刀を掴んでいない、自由な手で握り、

「……………やりすぎたみたいですね」

「ああ、サンキュー……って、ちょ、痛いんだが？」

痛いと言われても気にせず立たせる。

気絶したツバキの方を見ると、彼女とは別のゴッドイーターが、頬を軽く叩いて起こそうとしていた。本当にやりすぎたようだ。

レッドイーターの視線に気付いたリンドウは笑いながら一言。

「すぐに起きるさ。そんなことより飯だ飯。タツヤ」

「……あ、はい！」

「さつきからずっと動かないから心配したんだが、大丈夫そうだな」

ちなみに、一瞬とはいえ、レッドイーターから放たれた莫大な殺気を意識レベル低下中だったリンドウとは違い、結構近い距離にいたタツヤ（意識レベル正常）はもろに受けて金縛りにあっていたりする。もちろん、リンドウはまだまだ未熟なゆえに気付いていない。

あはは、とレッドイーターは乾いた笑い声のまま困ったような表情を浮かべ、頬を掻く。

ひとまず、終了の合図を出し、集まっていたゴッドイーターたちを解放する。時間も時間らしいので、大半は真っ先に美味しいものを先取りしようと走って出て行った。

ただ一人、ポツンと第二訓練場に残るレッドイーター。

第二訓練場は、レッドイーターの足止めのために撃たれたが回避されて床や壁に付着したペイント弾によって、とても汚されていた。（なので室内全体マール模様化）

彼は周囲を見渡し、つい出てしまったかのように呟く。

「……………この汚れは……………ずいぶん骨が折れそうです」

結局、レッドイーターが食事を取れたのは3時間後であった。疲れの上乗せで、くたくたの状態になったレッドイーターを見た極東支部所属の神機使いと職員の間が驚いたらしい。

第六十九話、墜ちた者（前書き）

あかん。

阿部鬼が頭から離れない W W

第六十九話、墜ちた者

3月4日

「クワアアアアアアアアアアアッッ!!」

教会の中。

青い巨人が地を蹴り、空へ跳ぶ。

肩から生える、その大きな翼手を大きく横に広げ、そのまま地面と平行になって滑空した。その巨体を正面から受ければ、いくらゴッドイーターでも軽く瀕死状態に陥るほどの威力を持つ攻撃。

迫るのはアラガミ名、『シユウ』。

迫られる側にいるのは、『レッドイーター』。

……ぶっちゃけてしまうと、殺される側はシユウであったりする。

レッドイーターは滑空するシユウを飛び越えるのに十分な高さまで跳躍し、装備している強化ノコギリの重量を利用してちょうど真下を通り過ぎるうとしていたシユウの翼手に剣を突き刺す。結果、見事に地面にその巨体を突っ伏させた。

後は簡単である。

シユウというアラガミは、今現在突き刺されている翼手の攻撃が

中心であり、そのほかの部位は移動用でしかない。

「……………喰らえ」

ポツリと呟く一言と共に神機が異形な変形をする。

メインユニットのオラクル細胞が解放され、黒いアギトを形作る。そのまま剣に突き刺さっている翼手に噛み付き、レッドイーターは確認と同時に神機の柄を動かし力任せにシユウの肩から生えるソレを？^もいだ。

バリバリと？いだ翼手をアギトが喰らい、そのままメインユニットが元に戻る。

耳鳴りがするほどの甲高い絶叫が教会の中で木霊する。

胸の前に組んでいる腕が人と似ているように、シユウは現在、最も人に近い形態を取っている。

イコール、音源は頭部である。

一回目の戦闘ではないレッドイーターは元に戻った神機ですぐさま首から上を刎ねる。

これで視力と聴覚。特に視力が優れているシユウは翼手の次に大切な器官を失った。

死滅したオラクル細胞の血なのかどうかは定かではないが、シユウは肩と首から噴水のように赤い体液を飛び散らせながら、残った最後の片翼手を大振りに振り回す。そのときにはとっくにレッドイ

ーターは遠くへと離れ、神機を銃形態へと変形させていた。

一秒も待たないうちに、暴れまわるシユウの全身を冷気を纏ったエネルギー弾が貫く。

ぐうの音も上げず、脚から崩れ、そのまま組んでいた腕を解いて地面へと伏せた。もう動かない。

レッドイーターは、確認するまでもない、と言いたげな表情で神機を持ったままポケットから無線機を取り出す。

報告だ。ただし、ミッション完了の、ではない。

そもそもシユウは討伐目標ですらない。

「……こちらコードネーム『RED EATER』。目標、今だ発見できず。搜索を続行する」

『了解しました』

無線機越しにタツヤの荒くない、平静を保っている声を聞き、あちらの方も『目標』の尻尾すら掴んでいないと知る。

この贖罪の街と愚者の空母では、あるアラガミを計七人。『目標』の発見報告のあった愚者の空母に四人、そして愚者の空母に最も近い贖罪の街では三人に分かれて探していた。

もちろんスサノオ 別名『神機喰らい』、『神機使い殺し』
のようなゴッドイーターの天敵を探しているのではない。

スサノオと比べれば危険度は低いが、そこらにいる格下のアラガミよりはとても強力で危険で、放っておくと洒落にならないアラガミだ。

墜ちた者、フォールマン、そう言えば分かるだろう。

人間の手で培養されたオラクル細胞は、外界で物質を捕喰し自然に増えていくオラクル細胞とは違い、非常に危険な変異をする場合がある。

ごく最近の話だそう。

あるフェンリル支部で、一人のアラガミ化直前のゴッドイーターがいた。

そのゴッドイーターは、人型を保ったままのアラガミ化という段階ではなく、両腕が神機の捕喰形態のような姿へと変わっていたとされる。

もちろん、既にその報告は世界中の支部へと伝達されており、階級が上がると同時にそんな情報をデータベースからレッドイーターは手に入れてしまっている。

本部の大学で学習はしていたが、もはや理解の範疇を逸脱している。

ゴッドイーターからのアラガミ化は、百パーセント体内組織がオラクル細胞に喰われ、交代されている。

FSD前日のアラガミ信者の男のような生半可な変異ではなく、

完全なるアラガミ化。

アラガミに自我を喰われ、体に乗っ取られ、怪物となった、まさしく墜ちた者。

そして先の報告から察するに、そのゴッドイーターはゴッドイーターの天敵になりうるスサノオへの道を開いていた。だから放つてはおけない。

なるほど、とレッドイーターは思う。

何故フェンリルがアラガミ化しかけている患者を細かい理由など言わずに処分させるか、合点がいった。

サンプル入手のために放置する本部の科学者もいると聞くが、その変異の末に自分達を滅ぼされては意味が無い。

宝を壊して価値を無くすような行為だが、だからこそ……、早急に処分する必要があるのだろう。

だから、まだスサノオの個体数は未だに少ない。

だから、アラガミ化を抑える方法も見つからない。

『レッドイーターさんは、次は何処に向かわれるのですか？』

「……ちょっと待ってください。ええつと……」

贖罪の街周辺の地図をバックパックから取り出し、広げて考える。リンドウとタツヤは西。レッドイーターは東の区画を調べていたの

で

とその時だった。

急に、こめかみ辺りがジンジンしてきた。

アラガミが近くにいる。それもとて殺気立っていて、激しい飢餓感を持ち合わせたヤツが……。自然とレッドイーターの目つきが攻撃的になるほどである。

レッドイーターはなるべく声を小さく、けれども無線機がちゃんと音を拾い、タツヤの無線機に音を送れる程度声で、

「（…………アラガミが近くに来ました。通信を切りますね）」

『了解しました。討伐目標のアラガミでしたら、隙を窺って集合を掛けて下さいね？』

言つまでもない、と無言のまま通信を切る。

カチャ、と神機の柄を握り締め、ボロボロの教会に唯一、人が通れる道の方角へと歩んだ。

警戒を怠らず、一瞬で引き締まった表情のまま耳を濟ませる。

すると、ツン、と鉄のような臭いが鼻をつついた。

クチャクチャ、と、教会の 中で（…………）咀嚼する音がする。

レイドイーターのようなゴッドイーターの中でも群を抜いた超人でも、敵の位置を完全に把握するとなるとそれ相応の集中力を発揮しなければならぬ。音が聞こえたのは位置の特定を始める直前であつた。

故に驚く。

心臓が胸から飛び出そうなくらい一気に心拍数が上昇する。

フードの中に隠している長い髪が振り返ると同時に踊り、広がつた。

何を咀嚼しているかなど見るまでもないのに、あえて見てしまう。

機能不全に陥つたコアの影響でピクリとも動かないシユウを、

赤みの混ざつた茶色い髪で、

れっきとした人型の、

フェンリルの制服を着た男が、

喰つていた（……………）。

「……………来ましたね……………！！」

恐らく、教会のケモノ道から進入したのだらう。よく逃げたアラガミが利用するケモノ道なので、ゴッドイーターの間で知らないものはいない。

レッドイーターは神機を変形し、男の繰り出す右手　の一部が
変形した籠手状の刃物を装甲で弾く。

大きな進化は遂げていないとはいえ、アップデートを重ねてそれ
なりに強化されているはずの対貫通バツクラー　硬の表面が、大き
く抉られた。まともに喰らえば致命傷なのはまず間違いない。

レッドイーターは弾かれて大きな隙を生んだ墜ちた者に攻撃を加
えるため、装甲を閉じ、シユウの体液がこびり付いている強化ノコ
ギリを縦に振り下ろす。

墜ちた者はそれを受け止めようと籠手の付いた右手を振るわれる
強化ノコギリと水平にする。つまり攻撃側がいるのなら防御側が存
在するのだ。

だが、

「……………仕返しですよ」

『ガッ!?!?』

カキン、と硬い物同士がぶつかった音が鳴り響いてすぐ、レッド
イーターは強化ノコギリを籠手から下にスライドさせた。

すると強化ノコギリの刃が籠手を引っ掛け、されにレッドイータ
ーが自慢の腕力で振り落としたことによって籠手という身体の一部
を引き剥がした。

鮮やかな鮮血がフォルマンの右手の甲から溢れる。

墜ちた者の目が、明確な殺意を持つようになった瞬間であった。

『ギアアアアアアアアアアア
ツツツ！！！！！』

贖罪の街全域を震わすほどの雄叫びをあげる。

あまりのでかい音量に片目を瞑り、踏み込みすぎか、と一旦距離を取ろうと地面を蹴ったレッドイーターに向けて、墜ちた者は無傷の左腕を音速に近い速度で振るう。

『ギアアアアアアアアアアア
ツツツ！！！！！！』

ビクウツツ！！ とMエリアにいたタツヤとリンドウはその咆哮に声も出せずに反応する。

音が聞こえた、というよりは、音で身体が震えたから（……………）
（、）というのが正直な感想であった。

「な、なんだあ！？」

リンドウは驚きながら、（音が大きすぎて神経が少し鈍ったようで、フラフラとした足どりで）音源と思われる方角の東に向きながら呟く。

走っていたところで、再びケモノ（墜ちた者と推測）の音が耳に入る。……かなり近い。つい足を止めてしまう。

声が止んだ　　と思つた瞬間！！

ドゴン！　ドガガガガッ！！　ドスン！

と、どういつ訳か西側であるイエリアからそんな破壊音や落下音が鳴る。

『うおおおおおおおおおっ！！！！』

ガキンッ！！　金属同士で叩き合ったような音がイエリアから絶えず鳴り、もしや、とリンドウは一緒に立ち止まったタツヤにアイコンタクトし、俺が様子を見に行くと言えた。

「ッ！！」

左腕に隠した攻撃か……と思つたらキックという原始的なフェイクをされ、その後、一方的に墜ちた者が攻撃する側となった。

右手の箆手は既に修復している。これは、この元ゴッドイーターの身体が単細胞生物『オラクル細胞』に変質し、大気中で浮遊しているモノや建造物を侵食している同一の細胞をかき集めることが可能となったからだ。

他にも細胞を急速に分裂させる、という方法での修復も可能である。そもそもが群體故だからだろう。

元はGエリアとIエリアを結んでいた道。そこは天井が崩れて道を塞いでしまっていた。そしてそこに、レッドイーターは背を付く。攻撃を今のところ全ていなしたところで形勢逆転などできない。

追い詰められたのは百の承知。

だが、追い詰められて殺されるのは少し抵抗があった。……そういう年頃なのである。

『キアア』

掛け声なのだろうか。

墜ちた者は右手そのものを形状変化させ、とても鋭利そうな四本の爪クローを作り出す。その爪は、突けば対象の体を易々と貫くような雰囲気雰囲気を容易に放っていた。

突きに出るか。

刹那の時間に考えている暇などない。

突きと予想して装甲を展開する。また、その表面上に命令違反だがオラクル操作能力でとても硬い追加装甲を施す。

『アアッ！！』

相手の攻撃は

第六十九話、墜ちた者（後書き）

レッドイーターの装備。赤の川も忘れそうなので書いておこうw

強化ノコギリ

アルバトロス

対貫通バツクラ― 硬

装甲に関して言えば、全く名称を出さないもんだから忘れがちですな（ウオイ！？）

第七十話、毒（前書き）

前の話を本当に少しながら修正しました。

まあ、気にするほどでもない部分ですけどね……

見つけられたら凄いな、くらいちょびつと

第七十話、毒

ガキンツッ！ ガキイガキンツッ！！

金属同士が叩き合う音が絶えず二人の間で鳴り響く。だが、片方は普段と比べて目に見えてその重い巨剣を振るう速度が落ちていた。

ガキンツッ！！ 擦れあつた際に発生した火花が散る。それと同時に、

「うぐうっ!?!」

レッドイーターの右手から血が、より正確には切られた右上腕部から血が溢れる。

久しぶりに感じた激痛を押し殺し、再び神機の柄を握りなおして強化ノコギリを横に一閃する。

このような結果を招いたのは判断ミスであつた。

近距離で戦う神機使いは、『ステップを踏んで攻撃を紙一重で回避するのより、確実性のあるガードをする』というある種の先入観が存在する。

ただ、レッドイーターのような教科書と我流を混ぜ込み、敵の攻撃の鋭さ（スピード）、得物の強度、追尾性、自身の装甲の耐久値と脚力を分析し、『相手の攻撃後に来る次の行動を考えて』対処する者ほどごく稀に致命的なミスを犯す。……それが今回の結果を招

いたのだ。

一通り説明するのであれば、まず、装甲を硬くしすぎた。

予想通り墜ちた者は四本の爪で突きを放ってきた。当然ながら、それは展開済みの装甲に吸われて行くようにまっすぐレッドイーターの体を目指す。

途中の障壁である装甲ごと破壊するつもりだったのだろう。だがその装甲には強固なオラクルの壁をも上乘せしている。

爪は、あっけなく盾に攻撃を防がれた。その後が重要だ。

相手の攻撃後に来る次の攻撃を考えて、それを考えるまでの思考を巡らせるための時間があまりにも短かった。それは逆に、攻撃する側は本能的に次の最善の攻撃を繰り出す隙を与えてしまうということ。

回避に転じれば、攻守逆転はしていただろう。

爪は折れた。四本とも残らず、全て。

だが、折れたのは爪だけで、それを操る腕、特に爪の根本は無傷。

墜ちた者は奇怪な笑い声を上げて爪を突き出した際の勢いを止めるに、爪も指も無い拳を装甲に繰り出す。硬くしすぎた装甲は、硬く、鋭いものに対しては大きな防御力があるが、そのような打撃系の攻撃に対しては衝撃を和らげきれない。

レッドイーターの華奢な身体は吹き飛ばされる。積もった瓦礫の

山を墜ちた者と共に突き抜け、墜ちた者の拳が装甲から離れると同時にレッドイーターは背中を壁に叩きつけられた。

さらに追撃。怯んだレッドイーターに対して墜ちた者は右手を左腕の手から肘にかけて形成されているオラクル細胞を利用、分裂させ、下部に取り付けられた剣部分がロングブレード並みに長い黄と青の色をした銃剣を作り出した。

これはまずいと反射的に開いたままの装甲で地面から足が離れた不安定な状態で身を隠す。

突き出される長剣。

弾く装甲。

空振りに終わったかと思えた長剣が、レッドイーターの右腕の二の腕（上腕部）を貫く。それは壁にまで届き、深く突き刺さることでレッドイーターという食物対象を捕らえるのに十分な役割を果たした。

だが、人外を、それもオラクル細胞を操ることによってオラクル細胞を殺す超能力者を舐めてはいけない。

「うおおおおおおおおおっ！！」

右手に握った神機は使えない。なら、左手にルナティック・ツインの片割れを作り出し、その黄金のエネルギー刀で長剣を中腹から根本までの間を切断する。

そして短剣を手元から消し、壁にまで突き刺さっている長剣を素

手で引き抜き、解放された右手に握られている神機を縦に叩き落す！

ガキンッ！ ガキンッ！ ガンッ！！ ガキンッ！！

両者共に引くことの無い戦い。墜ちた者の長剣は左肩までを利用して再生しており、強化ノコギリとの間に何度も火花を散らす。

だが、レッドイーターも完全にアラガミの体をしている訳ではないので、やがて体力が尽きる。

レッドイーターの傷は、貫かれたとはいえ命に関わるほどではないし、強力な変異を遂げているオラクル細胞が自動的に傷の修復を行なうため、あっという間に治る。ただし、体力を消費してだ。

手負いの状態だから短期決戦は難しく、かつスタミナの消費から考えるに長期戦すら不利。

仲間が駆けつけてくれれば状況は好転すると思うが、戦場では運など当てにはできない。

だから自分から切り開かなければならないのだが、

(クソッ！ 仲間を呼ぶ時間ぐらいくださいよ！！)

右上腕部の痛みにも歯を食い縛りながら、心からそう思う。

この状況は、バックパックに収納されてある信号弾に手を伸ばす暇すら与えてくれないほどの激しい攻防なのだ。

ガキン！ と何度目かも分からない剣と剣で攻撃を打ち消し合っている最中に、ピキイと、ヒビが入る音がレッドイーターの耳に入った。

強化ノコギリか？ いや違う。墜ちた者の銃剣だ。

『キキイイ……！！』

墜ちた者が先に後方へと下がる。どうにか回復するか仲間を呼ぶかの暇が取れそうだと、レッドイーターは適度な緊張を崩さず思う。

しかし、レッドイーターの神機のような、変形というギミックを必要としないのが銃剣だ。立ち止まっただけでは遠距離からの砲撃で蜂の巣にされてしまう。

出口は左へ行つてまた左へ曲がる、するとすぐ外に出れる。

レッドイーターは急いで走り出した。墜ちた者は逃がすまいと奇声をあげながら銃口をレッドイーターに合わせる。

すると、にやあ、と人が人に嫌悪感を募らせる表情を墜ちた者は本能か、それとも意識的にか不明だが作り出し、銃口に納まっているオラクル細胞の縮退を始めた。

飛来するエネルギー弾への恐怖から、レッドイーターの顔が珍しく本気になる。

「クツ！ 間にあ」

を一瞬だけ向上させる効果が最も低いとされる回復錠一錠飲んだだけで、傷はほぼ完治。今は皮膚の自己再生を始めている。

包帯は必要ないか、とレッドイーターは包帯を再びバックパックへと戻す。

『シャアアアア………』

じやり、じやり、とさも自分達を片付けたかのような足どりで墜ちた者が歩く音がする。

神機に付与されている消音効果の恩恵を生かし、神機を銃形態にして墜ちた者が出てくるのを待つ。

だが一つ忘れていないか？

そう、何か決定的に見えていないことが。

(………そうだ)

タツヤはどうした？

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

「タツヤ！ お前何突っ立てる!!」

墜ちた者が教会から飛び出すのに合わせてリンドウが剣を振る。長剣は自己修復が完了しており、リンドウのブラッドサージを正面から受け止める。

確かに、タツヤが棒立ちしていることは彼にとっても、そしてレッドイーターとリンドウにとっても危険な行いだった。

「・・・・・・・・チツ」

。 けど、タツヤは未だに人を斬ったことがない（・・・・・・・・）

リンドウにだって分かっているはずだ。人を、ましてや元々仲間だったゴッドイーターを斬り捨てるのに抵抗を抱いていると。

チェーンソウが回る機械音が鳴り始める。

ここで仕留めるつもりだとレッドイーターは察する。

「・・・・・・・・援護します」

墜ちた者は、リンドウよりも身長が高い。リンドウが百八十を超えていると聞いた事があるので、だいたい百九十センチと言ったところか。

レッドイーターへの近接攻撃は、身長差もあって前屈みになり、そのまま上から得物を振り下ろすか突きを繰り出すのがほとんどであった。が、リンドウほど背丈が近くなると攻撃の自由度が増える。だから姿勢を前屈みにしておく必要はない。

だから頭部だ。そこが最も狙いやすく、リンドウへの誤射の心配がない。精密射撃の見せ所である。

伊達に对人訓練を積んでいるわけではない。一撃で人の皮を被っ

た頭を吹き飛ばす！

視界を右にずらすと、タツヤが呆然として立っている。やはりここで決めないと面倒だ。

レッドイーターは無意識のうちに神機にシリンダーを回す指示を出し、装填してあるバレットから最も威力のあるバレットを選び、設定を完了させる。属性は氷。弾種はレーザー。

「……………今度は外さない」

大量の火花を散らしているチェインソウの大剣でさえいつまで押さえられるか予測が付かない。早急に処分しなければ、と、神機の照準を墜ちた者の頭部へとずらしていく。

極限まで高めた集中力。

それが、何かを察知する。

この後でた行動は条件反射のようなものだった。

「つつ！ リンドウさん離れてっ！！」

「んな！？ こっちは これで精一杯だったの！」

「その人のアラガミ化レベル、確かゲンとか言う人の話したと融合タイプじゃ」

リンドウと墜ちた者との間にオラクル細胞を集結。神機のエネルギー弾への変換を擬似的に再現させ、爆発を実行する。

「……………ごめんなさい」

「ぐあつ!?!」

威力は極めて低めにしたはずなのだが、どうも思い通りにはいかないようだ。爆風^{ブラスト}がとても強く、リンドウを大きく後ろへ押し出してしまふ。

手に持たせることや物体に『根本』を付けて操る以外での三次元の領域演算では、?軸、Y軸、Z軸を細かく調べ、把握しなければならぬ。しかも、そこにオラクル細胞を使ってアクションを取らせるとなると、さらに綿密に考えなければならない。それをたった数秒で行なうには、多少の誤差は出るとは思っていたが、予想以上だ。

『グギ……………!?!』

そして爆心地にいたのはリンドウだけではない。墜ちた者も同様に爆発のダメージを受けていた。

跪き^{ひざまずく}、長剣を地面に突き刺す。それは爆発の範囲などで行なおうとしていた威力よりも比べて桁違いに高かったことを示していた。

『フシユ ツ。フシユ ツ』

息が荒い。オラクル細胞がエネルギーを欲しているということだ。

いたって単純。先ほどまでの戦闘で繰り出してきた攻撃は何だったのだ。

単に、隙を見せることが少ないだけではないか。腹部を見る興味が薄れる。」

「……………つまらない」

もうネタはそれだけか？ と付け加えて嘲笑し、攻撃を避けるのにも余裕が出てきたのでそのまま視線を自身の右上腕部を見る。

「……………ヤドクガエル級の神経毒を付けていたみたいだけど、僕に毒は効きませんかよ？」

もはや滅茶苦茶、と一言で済ませられそうな攻撃を避け、避け、いなし、避ける。

レッドイーターの偏食因子は、毒に属するものであれば全てを瞬時に解毒する。

オラクル細胞の作り出した毒を喰らったのはこれで初めてとなるが、自分にとって死に至るような毒でも無い。

人を殺せる毒程度でこのヒト（・・・）を殺せると思つとは、とんだ筋違いだ。

「……………雑魚が」

もうよく観察した。後は続けても意味が無い。

レッドイーターの瞳が赤く染まる。

憎しみも悲しみもない殺意がレッドイーターを点としてその空間を支配する。

動きが止まる墜ちた者に、ゆらり、ゆらりとレッドイーターが歩み寄ったときだった。

(そんな出来損ないなんて目障りだよな?)

その通り。とても目障りだ。

(なら、殺せばいい)

「……………分かった」

レッドイーターはゆっくりと神機を持ち上げる。

微笑を浮かべながら見上げれば、そこには亀裂の入った、仮面のような醜い顔。

その顔を、タタキワツテアゲル。

ダメ、アナタハボクノナカマヲコロソウトシタンダヨ?

(なら、殺りなよ)

「……………うん」

レッドイーターは躊躇いも無く、神機を墜ちた者のこめかみに向

「リンドウさん……！」

「っ！ リンドウさん……！」

最後に自身のコードネームを叫んだのは紛れも無くリンドウであった。それも、大きな足音を立てながら近づいてくるように。

ポタリ。その音源をポーっとする視界に収めようと右へ向く。

「よお……リーダーさん。……お怪我はないかい？」

ポタリ。

リンドウの左手に、墜ちた者の腹から飛び出した針が刺さっていた。

彼は苦しそうな顔で、毒が回っているかのように、顔を青ざめながら、ふっ、と微笑を浮かべて提案をしてくる。

「……このまま、一旦、引かないか？」

「っ！……うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおっ！……！」

レッドイーターは右手に握っていた神機を振り上げ、リンドウの掌を貫いていた針と墜ちた者を繋ぐパイプのような器官を切断する。

第七十一話、v i r u s (ウイルス) (前書き)

あの墜ちた者、四本の爪とかタ ラントかよ
って友達から言われました。

バイハ１以外はあまりグロイとか怖いとか思わなかった自分
ずっと忘れてたタイ ント

第七十一話、virus（ウイルス）

神の体を引き裂き、鮮血の雨を降らせる者。

新たな生物として、全人類を殺すという血塗られた運命をDNAに刻まれた者。

「……だから、“レッドイーター”なのかねえ」

自室のソファで横になりながら、ジャックは遠くを見るようにして呟く。（視線は壁に備えられた薄型ディスプレイ）

常軌を逸脱した強靱な肉体に知能。加えて体内のオラクル細胞の進化に合わせての止まることのない成長。

放たれる、厳密には既存の偏食場パルスとは違う脳波で自由自在に操れる異能の力。

そんな彼が生まれる原因となったのは何なのだろう。今まで（・・・）、考えても考えてもありとあらゆる可能性があり、しかも情報の少なさから絞り込むことなどできなかつた。

だがあの人　ウィリアムはそれらの答えを、死ぬ直前に発見できた。

アラガミ化した人間の肉体は多大な負荷が生じ、内臓器官の強引な撤去などが原因でその他の肉体の変異が間に合わずに吐血することが報告されている。

もちろん、アラガミ化というのが一般的に知られたのはゴッドイーターが誕生してからだ。彼らのアラガミ化の心配という消えることなき業が、当時、科学者の卵だったジャックとミハイルにとっては衝撃的であった。

だが、権限の違うウィリアムはそんな現象などとうに知っていた。マーナガラム計画にて、アイーシャ・ゴシユ氏がアラガミ化した際に得ていた情報を頼りに、彼はアラガミ化したレッドイーターの母親が口から溢し、本部の床に付着した血液を独自に回収し、調べていたのだ。

教えてくれれば力になれたらどうか、などと当然二人は思う。

しかも、レッドイーターと似たような子供は他にもいた（……らしい）。

最も、オラクル細胞の高い代謝能力を前提とした身体である。オラクル細胞に近い肉体構造の約四十パーセントを下回る個体は強い肉体どころか、そもそも強い必要のない肉体として生まれるので、産まれて数時間後に死ぬか、奇形児として生まれ落ちた後に処分されるかだったらしい。

そして、約四十パーセントから約八十一パーセントの個体は、死にはしないものの、とても病弱な肉体、つまりオラクル細胞の新陳代謝が十分、もしくは全く働いていない状態のため、常人にとって寝れば治る程度の風邪でも死んでしまい 約八十三パーセント以上の個体はすでに人間の原形を留めておらず、生き物としても不完全なものであったとか。

この世に誕生し損ねた『失敗作』と、レッドイーターという八十

二パーセントの世界で最初に生まれて唯一の『完成品』を合わせてこの世に生まれ落ちた者は総勢百三人。今のところ生き残っている四十パーセントから八十一パーセントの個体は本部で確認されただけでも二人だけ。（片方は別の支部にお世話になっているらしい）

だが生まれ落ちにくいからこそ、完成体を使って増殖する方法があるはずだ。

そう、例えば……、

ウイルス。

ウイルスによって体組織が変化する事例など無い。人間の身体を構成する体細胞は約六十兆個。いくらウイルスでも、人の身体を全て変質させるなんて事はできない。そして白血球によって駆除され、何もなかったかのように人間や動物の身体は日常生活に何の害も出ないまま生活していく。

なら、ここにオラクル細胞を入れてみよう。

オラクル細胞がある種類のウイルスを捕喰した。後に、その形質を別のオラクル細胞と結合という形で自分の物にする。

そして、そのオラクル細胞を人間が吸い込んだ。または摂取した。

オラクル細胞の本質は考え、捕喰すること。

血液中の白血球など大した壁にもならず、そのままある行動を実

行したとする。

つまり、DNAを塗り替える。

ウイルスが細菌のように（生物としての最小単位である）細胞を持っていない代わりに、他の細胞に進入しDNAを作り変えてしまおう、という性質。だがさすがのオラクル細胞にも限界があったようで、ある一つの器官に目を付けたとする。

脳でもいいし、脊髄のような神経の集まりだけでも良い。

だが、それでもオラクル細胞には少しだけ長い月日を待つことになる。

だから子宮、厳密には受精卵に取り付いた。（ただし、空気感染が主なら患者や子供の数はとてつもなく多いはずなので、偶然なのかもしれない）

そして、オラクル細胞が受精卵に自身のDNAを組み込むことによって、より純粋なゴッドイーターが生まれると同時に、ウイルスまでもが血に流れることとなる。

そのウイルスが、実は我々が見てきたレツドイーターの体内で確認された偏食因子だったらどうだろうか？

彼の偏食因子を投与したモルモットは血液が沸騰し、破裂した後肉片がオラクル細胞によって急速に捕喰されていく現象が確認され、生物に対する投与は絶対に（・・・）不可能とされている。

それは　もしかしたら適切な方法ではなかったから、なのかも

しれない。偏食因子の暴走によって発生した莫大なエネルギーが血液の温度を上げたなんてことも考えられる。

そしてウィリアムが導き出した結論が、先ほど例えたウイルスだった。

今後は、このウイルスを極秘に調査することとなる。目的地が見えたような、妙な安堵感がそこにはある。そうジャックは感じている。

黄昏の『器』でありながら、新生の先駆けであるレッドイーターの偏食因子の解明の手間が少しだけ省けてよかった、と思いながら、ジャックは顔に似合わぬ苦笑をし、目蓋を閉じた。

旧フィンランドに存在するフェンリル本部の時間帯はもう日の出を迎えようとしている。だが今は寝ても怒られない。朝は何もなく、昼は仕事で山積みなのだから。

772

逃げられたのだろうか？ 逃げ切れたのだろうか？

墜ちた者は身体の欠損部位が多かった。アラガミでも引き際はちやんと引いていくので、そのまま逃げてもおかしくは無い。

逆に、こちらが逃げたのはリンドウの体に毒が入ったためである。

ゴッドイーターたちが、アラガミからの被害を受けなかったためブリーディングや自分達のポジションを決めるのに最も適している、と言っている高台の墓穴のような隠れ場所にレッドイーターたちは駆

け込んだ。

よいしょ、とリンドウに肩を貸していたタツヤが意識を失いかけている彼を地面に寝かせ、レッドイーターのバツクパツクに入っていたロープで、彼のつま先を結んだ後にリンドウの神機を先に隠すために上がっていたレッドイーターが引き上げた次第である。

「レッドイーターさん……」

タツヤはやっと、自分がアラガミと（……）戦っている、という自覚を取り戻したのか、心配そうに壁に背を当てて俯いているレッドイーターの顔を見る。

他人事では済まされない。けど、人を切り捨てるのに抵抗をちゃんと持っていたタツヤの心境なんてレッドイーターには見えていた。だから、逆に慰めの言葉を言う。

「……タツヤさんは、その心を大事にしてください。人を斬るなんて、リンドウさんだって抵抗があったはずですよ」

「あう……」

幼さが未だに残る顔に影を落として、タツヤの自責の念が手に取るように分かってしまう。逆効果だったようだ。

横にしたリンドウを見守る中、レッドイーターの頬を一滴の汗が通過する。……暑い。

贖罪の街は、元々、横浜という日本でも人口が二番目に多い県であったとノルンのデータベースに書いてあった。

だから人が住める環境、すなわち家が（旧東京地区ほどではないが）大量に建っている。異常気象で冬の冷たい空気がほとんど無くなり、旧日本において都会とされる地域には特に熱が籠る。

涼しい成分なんてカケラもない。草も、そもそもアラガミ発生直前まで人の手で伐採や草むしりなどで少なくされていたせいではないかと見かけないし、アナグラ周辺であるとすれば水辺くらいである。

そして、毒に蝕まれているリンドウにとっては地獄そのものである。

「うづう……！！」

「……あ、リンドウさん。大丈夫……じゃないですよね」

全身に苦痛が走っているのではないだろうか。呻き声の力の入り具合が妙である。

リンドウ、レッドイーターなどが扱うゴツドイーターの道具には、毒を消す錠剤が存在する。名称はデトックス錠。

これらの道具は、ゴツドイーターの命を支えるために重要な物資。だが、そもそも今現在確認されている毒を使うアラガミなんてザイゴート神種の基本種だけである。余談だが、あんな巨体で浮けているのは、その黒い卵殻の中に充満している毒ガスが空気より軽いからだと学者の間で口論されているような特殊な毒ガスである。

とにかく、今回のミッションにザイゴートの発見報告なんて無かったため、三人（毒がそもそも効かないから正確にはレッドイータ

ーを除く二人)ともバックバックを圧迫するという理由で持ち込んでいない。

今は、リンドウの精神力と体力が持つことを祈るしかないのだから。

この状況に直面したから、自分の弱点が露呈する。

結局、爪が甘いだけの子供なのだ。

(……さつさと殺しておくべきだった)

墜ちた者の姿を思い返しながら、戦闘力も、戦略も、状況判断能力も優れているという前提で、レッドイーターは拳を強く、強く握り締めながら思う。

リーダーと、リンドウは自身のことを呼んだ。

間違っている。自分にそんなリーダーが勤まるはずが無い。

リーダーというのは、ツバキのような高い戦闘能力と状況判断能力と威厳が必要なのだ。

甘い自分に、威厳など無い。

別に、リーダーに威厳が絶対に必要だとは言わない。リンドウのような飄々としながらも、戦闘時は皆をリードできる存在も、リーダーには重要だ。

何一つ兼ね備えてなんかいない。

新種が相手ならずコアを摘出し、大量のアラガミの群れを殲滅するなど、フェンリルの上層部にとっては主人の命令を守る賢い飼い犬なのだ。中尉なんて階級も、彼らの過大評価からきたものでしかない。

そんな自分に、リンドウ達は期待を寄せている。

何かして応えるにも、その方法が無い。

結局は、自分はその程度の人間だということか

(ばっかじゃねえの?)

「っ!!」

突如頭の中響いた声に、レッドイーターは驚く。

(はあ……何を言い出すかと思えば テメエツ!!)

初めてだった、彼 普段表面に出てこない裏の人格がこんな感情的に怒るなんて。

(……裏)

(そんなんだからお前は今さっきのあいつの声に耳を傾けちゃうんだよっ! テメエは何のために心がある!!)

(……殺人鬼なんかに言われたって)

(はん！ 今までの経験から殺すのは嫌だとか言っときながら、鉛弾ぶつ放^{ばな}して人を殺した数ならテメエの方が多いだろが！ 助けられるのに見捨てた命、何個あったかテメエは覚えていない！ それは偽善なんだよ！！)

(……………うるさい。僕たちになにができるって言うの?)

(チツ！ まだ分からねえのかよ……………。俺たちの神の力は、コアには未だ干渉できないほど弱々しいが、コアが無けりゃ……………
・)自由に操作できんだろが……………！！)

そこで、レッドイーターの表情に大きな変化が訪れる。

希望の光だ。

今、もう一人の自分である、裏の人格は『コアが無ければ自由にコントロールできる』と語った。

絶えず、嫌な汗を掻きながら横に寝ているリンドウを見る。

ゴッドイーターには、アラガミのようなコアは無い。

「……………行ける?」

行ける。そんな気がしてならない。

レッドイーターは、リンドウの体内のオラクル細胞を活性化させるために彼の、アラガミの生き血を吸い込んだように赤い神機を彼の右手に持たせる。

「……………リンドウさん。接続、いけますか？」

「ん……………ああ、大丈夫だ」

「……………苦しかったら、すぐに切っても構いませんからね？」

ああ、とリンドウは神機を握っていないほうの手で、レッドイーターの頭を撫でる。それと同時に、アーティフィシャルCNSから細い触手が飛び出し、リンドウの腕輪に空いている穴に入り込む。

神機が、体内のオラクル細胞を活性化させる。

そもそも身体の構造の大半がオラクル細胞に近いレッドイーターにとっては無縁の出来事。だが、この状態が身体に負荷を掛ける行為なのは分かっている。

それでも動揺せず、レッドイーターの神経は研ぎ澄まされていく。

リンドウの血管を流れるオラクル細胞を、一粒一粒感じていく。掌握していく。

命令は毒の除去。

アリガトウ。

誰のものかわからない声が耳ではなく、裏の人格との会話のように頭の中で流れる。

どこかで聞いたような声だった。

リンドウノタメニ、コンナコトヲシテクレテ、ホントウニア
リガトウ。

感謝の言葉より、リンドウに生きていて欲しい。ただそれだけを
願ってレッドイーターは頭痛に屈せず、解毒作業を密かに進めてい
った。

第七十一話、virus（ウイルス）（後書き）

cyclone さんが裏の人格のことが気になる模様。

安心して！ 裏君は登場する数が少ないけれども、それにはちゃん

とりy（ry

があるから！（押し通した）

今後の展開で回収していきますからね

第七十二話、過去の一部（前書き）

そんな腹の足しにもならんようなもん、僕はいらないね！

ドラマCD……これだけ長いと、リモコンを握る手が痛いw

ちなみに、最初書いていたのが消えてしまい、随分と遅らせてしま
つてごめんなさい！

復元させるのに手間取りました（なら消える前に保存しとけという
話になりますけどねw）

第七十二話、過去の一部

リンドウの解毒のために一度目を閉じて、集中力を高めているときだ。

『コラア ツ!!!』

これは？ レッドイーターは若干驚きつつも、人の声だったからか、ゆっくりと目を開ける。

靄のかかった、とても昔の記憶を見ているよう。場所は四方八方木造建築で、その一軒の小屋に置かれた地蔵の近くで、一人の老婆が十代に入ってしまった子供を怒鳴りつけている。

『リンドウ！ この悪ガキがあ ツ!!!』

『うえヤツベ！ ツフツ、ハツ、ハツ、ハツ、ハツ、ハツ』

『待ちなコラ!』

『 んぐう！ はな、離せてこのクソババアツ!!!』

『うづん？ それが目上の人間に『クソツ!』言う言葉かい？』

「……………未来予測の次は、他人の過去か……………」

昔から全く変わらないリンドウの髪形以外を見て、レッドイーターは呆れたような表情を作り、一言口にする。

主に違う点を挙げれば、顔はタツヤとレッドイーターの中間くらいの幼さで、性格も今の飄々とした雰囲気とは違ってやんちゃなクソガキ（……）である。

（レッドイーターから見ての）悪ガキリンドウは、なにをどうすればいいのか決まらないような顔で、

『ええ……つと、は、離してください、ナツおばあさん……』

『ふんっ……あなた、お供えのお餅を盗んだね？』

『はあ？ 知らねえな、何の話かな』 『ていつ！』 『って、痛て 何しやがるこのクソバ』 『ああ……！？』 『……ナツ……おばあさん』

最初の勢いはどうしたものか、最後の方でリンドウの声は蚊が鳴くような声にまで小さくなる。なかなかやるなこのクソババア、とレッドイーターは口を拳で押さえながら吹き出す。

『よし。さ、ポッケに入れたもの出しな』

『っわかったよお』

『……全部だよ、四つあるだろう？』

『……チイツ』

物音を立てながら、リンドウはポケットの中を漁る。この悪ガキがどういふ過程であんな男前になったかとても気になるところだ。

がさごそがさごそ、とポケットに突っ込んでいた手を引き抜き、
ん、と不機嫌としか受け取れない表情でナツおばあさんに餅を見せ
る。

『いよし。じゃ、もう一度、お供えするんだ』

『へいへい』

リンドウは彼女の指示に従い、とても気だるそうに仏像の前まで
歩く。

そのお供え物を置き、祭るための仏像の形を見て、レッドイータ
ーはここがどこなのか予想する。

「………廃寺区画付近なのかな？」

『いいかい。このお供えにはね、みんなの祈りが込められているん
だ。アラガミどもを恐れながら生きなくて済む時代に、早く戻りま
すように……ってね』

『……ふん、祈りなんて、くっだらねえ』

『なんだって？』

『だってそうだろ！？ 祈ってるだけじゃアラガミはいなくならね
え！ 俺は強くなってアラガミを倒す！ 俺らが生きるためには、
奴らを滅ぼすしかねえんだっ！！』

『まあ、ね。ま、その意気は良しだ。でも、だからってお供えを盗
んで良いってことには、なんないねえ』

『んむう……そりゃそうだけどさ!』

『確かに、あなたは強くなるかもしれない　いや、きっとなるだろう……。でもね、覚えておいで。強い者は、弱い者をないがしろにしちゃいけない。人がすがっているモノを踏みにじるような事は、やっちゃいけないんだ』

『祈りみたいな意味のねえもんでもか?』

『そうさあ……。それこそが、強さの源になるんだからね』

『はあ?』

『叶う当てのない、祈りや希望を、本当の事にできる力。それが、真の強さってもんなんだよ』

『……意味わかんねえよ』

『ん……あなたにはまだ難しすぎたかね。……っふ、ほら、これ、持っついていきな』

老婆は微笑み、手に隠していたであろう餅をリンドウに渡す。

『……え?』

『私が配給でもらったお餅だ。一つしかないけどねえ』

『でも、俺がこれ貰ったらナツばあは　』 『遠慮なんて腹の足しにならんようなもん、あたしゃ興味ないよ!　ほら!　いるのかい』

「らんのか！」

『うわ、いる！』

『よし！』

シユン、と風を切る音が鳴る。

「……………あれ？」

黙って聞いていた二人の声は無くなり、荒れた大地の上を走る風の音が何度も何度も耳に入り込んでくる。

記憶の閲覧は、もう終わりということだろうか。

そして解毒作業が終了したリンドウを寝かせ、彼が起きるのを待つこと数時間。

「ん、もう体は動きそうだな」

包帯で巻いた左手の痺れが無くなったのを確認しながら、リンドウは口に含んでいたレーシオンを喉に通す。

「それで、現時刻は何時でしょうか？」

「「あ……………」」

持ち込んでいたレーシオンで腹を満たしたゴッドイーター一同は

まず、一斉に太陽の位置を確認した。

若干の沈黙の後、まずレッドイーターが口を開いた。

「……………西寄りですね」

「……………さっさと終わらせないと飯が消えるな。隠した装甲車からここ、かなり離れているし」

リンドウの発言のせいか、レッドイーターはめずらしく気が抜けた表情になり、もうすこし美味しいレーション持つてくれば良かった、と腹をさする。しかし、一般人より食料の配給が優遇されている立場なので、数秒で手を止めた。

それで、だ。

「あいつは何処にいると思う？」

「……………難しい問題をチョイスされても答え難いですよ」

墜ちた者の痕跡を今から捜しに行くのだが、リンドウの神機を彼に接続してもらい、活性化させた体内のオラクル細胞を利用して毒を通常より早く解毒する荒業の代償として、自身のオラクル細胞の活性化が弱まったレッドイーターが彼らと別れて単独捜査するのは得策ではない。よって、三人一組での行動が強制されることとなった。スリーマンセル

レッドイーターが墜ちた者の両腕を引き裂いたので、恐らくはオラクル細胞を手っ取り早く回収する方法に出ると思われる。

その方法が、別個体のアラガミを喰らう。唯一の残った武器であるう腹部の、……思い返すと生々しさを感じさせる銃身でまず脚を潰し、攻撃用として形成されている器官を破壊した後に、そのオラクル細胞だけで作られている肉を口に含めばあっという間に腕を元に戻す程度にはオラクル細胞を摂取できるはずだ。

「……というか、あんな単調な攻撃ならベテランクラスのゴッドイーターでも余裕で避けれると思うのは僕だけですか？ はいタツヤさんどうぞ」

「ええっ！？ うーんと……もしかして外見的進化の道に迷っていたから？ だから、攻撃にもバリエーションがあまりなくて、慣れると単調、みたいなの？」

「ああー、それなら納得いく。うん、レッドイーターの話なら、短時間の間に三回は武器を変形させているらしいしそれが一番有力だろう」

アラガミの進化には複数のベクトルが存在し、外見的進化を一段落終えたら、内面的な新化を開始する。つまり、あの墜ちた者は人の形を保っていても、まだ外見的進化をしようとしているということだ。

こういった理由もあり、外見的進化を終え、これ以上強くなられる前に叩いておきたい。と考えているレッドイーターはアナグラに帰還する気など微塵も無い。

「……そっぴや、増援とか呼ばなくていいのか？」

リンドウは神機のチェーンソウの機能に問題が無いが、軽く拳で

コンコン、と叩きながら自分より年下の二人に訊ねた。だが、すぐに彼はふっ、と微笑を浮かべて神機を肩に担ぐ。

タツヤはさも不思議そうに首を傾げる。ツバキだけでも来てくれればかなり戦い易いのでは？ と頭の中で真剣に考えていたのだから。碧の目がそう語っている。

リンドウはタツヤを一瞥した後、レッドイーターに目を配る。

「距離で言うなら空母エリア付近に逃げたのも考えられる……と考えているのか？」

「……歩いていたり、オラクル細胞を摂取するためにアラガミとドンパチ起こしているなら空母付近にはまだ着かないでしょうからね。ギリギリまで張り付いてもらいますよ」

それであつちに出現したら、任せてしまっても良いですけど、とレッドイーターは暗い笑みを浮かべてリンドウに向けていた目を逸らし、高台から降りる方向を見つめる。

一方リンドウはレッドイーターの行動を理解したのか、タツヤの肩を叩き、降りる合図だ、と伝える。タツヤは頷き、地面に置いておいた神機を拾い上げた。

そんな彼らの行動に目を向けることもなく、レッドイーターは神機の柄を両手で握ると同時に、限りなく、ゴッドイーターの聴覚でも聞こえないくらい小さな声で、

「……………ミンチにしてやる」

外見に似合わない、とてつもなく物騒な発言を口から漏らし、高台から飛び降りた。それに続いて連れ二人も飛び降りる。

まずは最後に戦闘した左側（C、D）のエリアに進もうかと思っただが、もしかしたら教会の中に放置したコアを抽出されていないシユウの亡骸を喰っているかも、と淡い感情に従って勝手に身体が動く。

明るい間に打てる策を打っておく。これ以上長引いたら、夜間は防衛任務以外で戦闘をあまりしないゴツドイーターにとっては不利だ。ちなみにレッドイーターは約一年前まで夜中に行動をしていたというもあり、夜目が利くので問題ない。

それでも、不安は残る。

バックパックに入れてきた道具は、回復錠三錠（内、一錠消費済み）、Oアンプル三個、スタングレネード二個とアラガミとの戦闘で使う必要最低限の道具だけだ。タツヤはレッドイーターがバックパックの中身を気にしているのを察したのか、初めは小声で、

「（レッドイーターさんに回復錠を使わせるなんて……）あの単調な攻撃でも隙は少なかつたですし、大丈夫ですか？」

「……聞こえてますよ。あと、僕より大人なら気合で避けてください。又は、気合で回復錠を使う隙を作り出してください」

「……………」

今のタツヤの発言で、表面にこそ出さないがプライドを深々と傷つけられたレッドイーターはタツヤにしれっと無理を言う。それに

彼は何も言えず、リンドウに顔を向けた。……捨てられた子犬のよう。

え、俺？ と包帯で巻かれた左手で自分の頬を掻いているリンドウは、その場限りのフオローしか出せないようで、とりあえずレッドドクターの周囲に自然と集まってきている黒い塵（恐らくオラクル細胞）を見てげっそりしながら苦笑混じりに、

「落ち着けレッドドクター。さっさと帰ってバガラリーとか見たいだろ？」

バガラリー？ とレッドドクターは神機を肩に担ぎ、東側のエリアに入る直前で足を止め、振り返った。

バガラリーとは、『フェンリル・ブロードキャスティング・システム』略してFBSが放送している、アラガミ発生前から存在し、現在も放送している大長編娯楽映像である。（そして最も人気のある番組）

レッドドクターは昔のアニメーション（アニメ）映像の方が好きなので、バガラリーに興味を持ったことが一度も無い。彼にとっては本当にどうでもいいモノだ。だから正直にリンドウに伝える。

「……そんなもの興味無いです」

「んん……、意外とお前の私生活が謎に包まれまくっているのが実感できるなあ」

「……知ってどうします？」

「知人に報告する」

「……………困にしますよ?」

「ああすまんすまん。今のは無かったことにしてくれ」

「……………過去を無かったことにするのは、不可能です」

「こりゃ、また手厳しいこって」

レッドイーターに動じる事無く、とりあえずのポーズとしてリンドウは首をすくめる。今の言葉は、リンドウが過去の話を引きずっているか確認するためのものだが、彼のポーカーフェイスは装甲のように堅いみたいだ。

「……………はあ」

色々な意味も含めて、飽きない毎日が続いているな、と、そんな悠長な事を考えながらレッドイーターは肩を落とし、そのまま地面を見る。アスファルトなんて喰い消された茶の世界。掘ろうと思えば容易に掘れるくらい、地面はやわらかい。

「……………あ」

レッドイーターは地面を見たまま担いでいた神機を、元の構えに戻す。

「……………」

「ん? どうした?」

リンドウは、今にも東エリアへ身を乗り出そうと神機を構えながらレッドイーターの肩をつつく。するとレッドイーターは何の前触れも無く神機を銃形態にし、シリンダーを回転させ始めた。

その行動が後に何をもたらす？ とリンドウは思いつつも、レッドイーターのことだからもしや何かあるのでは？、とすぐに考えを改め、訊ねる。

「なあレッドイーター？ 何やってんだ？」

第七十二話、過去の一部（後書き）

これは昨日の話しです。よくある話かな？

今回は大漁だった。

スコア503、敵機撃破数6、被撃破数0。これはS取れるな……
そう浮かれていた頃だ。

バニング大尉が『前だ！』と敵からの攻撃が迫っており、僕に回避するよう指示を出した。咄嗟に僕はEXAM^{エグザム}発動中のBD-1で後ろへと下がる。

拡散弾、そういえば敵にギガンがいたな、と焦りながら僕は残り耐久値が僅かなBD-1で敵の行動を見ながら、まだ破壊されていない拠点へと引き返し始める。

そして、死神は訪れた。

『右だ！！』

ジャキンツ！！

大尉の言葉と同時に飛来した何かは、僕のモニターを暗くする。

まさか！ クナイ！？

比較的短時間でモニター回復。ヤケクソになりながら右に旋廻。そこにいたのは、いや、こちらにまっすぐ突っ込んできたのは……！！

気付いたときには既に遅い。滅多なことじゃレーダーに表示されないジオン製の黒いステルスMSと名高い、ナハト君でした。たった近接格闘2連でピチューン。

評価A……おおおおオ（頬を流れる無色透明な液体が、しょっぱかったツス）

うん、いろんな意味で元気付いた。GEBへの愛情も戻った。

キーボードを叩く元気も取り戻せました。

でも、Sは取りたかった。

第七十三話、再接触（前書き）

すいません遅れましたああああああああああつー！！
むああ！ 体育祭の時の日焼けで皮が、皮がああああああ
ああああああああ！？

……（ちよつと休憩）

では、久しぶりですがどうぞ

第七十三話、再接触

地面を力一杯蹴る音が聞こえ、チャキンツ、と硬い物同士が引かかる音が鳴る。

「はあああああつっ!!」

苦しくなるほど空気を含んだ胸から吐き出すように、大きな絶叫がビルの屋上を揺るがす。直後にして、ボルグ・カムランの尾が根本から多少離れた部分でスッパリ切り落とされた。遅れて噴き出す血が地面を塗らしたかと思う頃には、尾を切断した巨剣が縦一文字に振り落とされている。

巨剣がめり込んだ刺々しい頭部は金属片を撒き散らし、そこから雨のような血が残り少ない白の床を完全に真っ赤に染め上げた。

途中で折れ曲がった四本の白銀の脚から力が抜け、ほこりを巻き上げながら騎士が崩れ落ちる。

空気を切り裂く音と共に、アラガミの体液が付着していた巨剣から赤黒いものが綺麗に消えた。その巨剣、神機の持ち主であるレッドイーターは息を乱さずに屋上から荒廃した街を見下ろし、

「……いない」

と呟いた。

このビルの屋上にリンドウたちはいない。無意識で言った言葉など気にも留めず、コアを摘出していないボルグ・カムランに対して

レッドイーターは神機のオラクル細胞を解放した。

神機もアラガミ、と言われるように、その黒いアギトからは聞き取り辛いのが、空腹を訴えるような声が漏れていた。レッドイーターは鼻で笑いながらメインユニットをさらに解放し、そう、目の前に倒れているボルグ・カムランを丸ごと喰らうほどの大きさまで巨大化させる。

ボルグ・カムランとの接触は、レッドイーターにとってはとても喜ばしいことだ。

何故なら、変形という新世代の機能を有する代償として、変形機構の中枢メインユニットに使用するアラガミから食い干切った（変形しやすいようローションなどで多少手を加えた）素材の磨耗が激しいからだ。

使用する素材は、やはり品質や変形の阻害にならず、高い耐久度を誇るモノ。特に、ヴァジュラのマントやボルグ・カムランの盾は一級品である。

その実、小型アラガミしか討伐対象として報告されていない日は、裏市で使える素材を購入してたりする。ちなみに、その影響と、外部居住区の住民に重火器を預けているなどの所為で度々金欠になるが故にミツシオンを同じ頻度でこなしているという裏話が存在したり、しなかったり。

ともあれ、現在の寂しい懷を暖めるのには好都合なのだ。

バクリ、と神機が戦闘不能状態のボルグ・カムランをすくい上げようと丸呑みにし、オラクル結合を次々に噛み切っていく。その過程でコアを本体から引き離し、そのままアーティフィシャルCN

Sを含めた神機の兵装強化のために吸収した。別に悪いことではない。神機の強化はフェンリルにとっても有益な事であるからだ。

特に、偶然天敵である接触禁忌種と接触した場合の早急なる撃破が必須事項であるレッドイーターにしてみれば、何が悪い、とも言える。

「……………ふう　うお？」

神機から脳にダイレクトに伝わってくる満腹感に浸っている最中、ポケットが揺れる。咄嗟にレッドイーターは後ろを向いた。

「……………二人のこと忘れてました」

数百メートルほど離れた別のビル屋上に立っているタツヤが握る無線機を見た後、同様にレッドイーターも無線機を入れてあり、現在進行形でプルプル震える

携帯端末である無線機を取り出した。

『都会』と聞いて、アラガミによって朽ち果てかけている世界で生まれたレッドイーターは知る由も無いが、旧横浜市である贖罪の街で、同じくらいの大さを誇るビルなど珍しくもない。

無線機に耳を当てているリンドウは、しばらく下を眺め　全然、と口に出さず、首を横に振ることでレッドイーターに伝えた。それと同時にレッドイーターは通話ボタンを親指で押し、

「……………見ての通り、墜ちた者を探す以前の問題としてアラガミが出現し始めています。さつき下を一体のヴァジュラと多数のザイゴートの群れが通り過ぎた所から察

するに、僕らが仕掛けた『エサ』にヤツが引つかかる確率は薄いです」

『そこら辺で孤立したアラガミを襲えば、補給なんて容易だろうな。つたく、面倒くせ……』

「……むう。いつかオジサンっばいって言われますよ……リンドウさん？」

『そりゃヤだな。俺はまだ煙草すら吸える歳じゃないってのに』

呆れ半分、茶目つ気半分で言い放った言葉に、リンドウは頭を掻き乱し、大きく息を吸って、同じくらい大きく息を吐いた。そんな彼の隣で無線機に耳を当てているタツヤは少し肩から力が抜けたように、

『それでは、僕たちは予定通りこのまま上から捜し、レッドイーターさんがここからじゃ見えないところをしらみつぶしに捜す、ということでもいいんですね？』

「……はい。それでいいです」

『というかエサの配置場所から数キロ離れてんだけど……俺たちが設置したわけじゃないから何だが、レッドイーターは本当にあの罠を使うつもりなのか？』

「……どうでしょうねえ……別に時間掛かったわけじゃないですし。使えたら使っただけですよ」

『へえ……』

あつそ、と抱いていたであろう疑問を無い事にし、リンドウはその場で座り込む。そしてバックバックから双眼鏡を取り出した。そんじゃ、と、彼は明るい声で一言告げた後に通話を切り、双眼鏡を両目で覗き込んだ。

本当に呆れそうになる直前で、ピシヤリと頬を一度叩き、あれはゴッドイーターの視力でも見えない範囲をマークするだけじゃないか、とレッドイーターは自分にそう言い聞かせる。

『 どうかしましたか？ 』

「 …… いえ、緊張の糸が切れたというか何と云うか…… 」

『 あーなるほど 』

「 …… はあ。これ以上日が落ちるのを待つのもかったるい
です。行きますね 」

『 了解です。では後ほど 』

ツイッター、と相手との通話が切れるのを確認し、レッドイーターはポケットに再び無線機を仕舞う。そして重力に飲み込まれるように、

屋上から飛び降りた。

といつても、こんな事は移動用のヘリから日常茶飯事と胸張って
言えるくらいしているので、驚きもしないし、怖がりもしない。

『オオオオオオオオ』

『オオオオオオオオオオオオ』

強化ノコギリの一振りで、耳鳴りがするほどの甲高い断末魔と共にザイゴートを葬り去る頃には、近辺におり、高速で駆けつけた複数のザイゴート神種に囲まれていた。それに続いて、地響きを立てながら走り寄ってくるヴァジュラ。

普通の神機使いなら死を覚悟する前に、発狂するだろう。そして、力の使いすぎで、一般の神機使いほどではないとはいえ戦闘能力が落ちているレッドイーターも、発狂こそしないものの、少しだけ（・・・）死を覚悟した。

「……………逃げればOKですか？」

逃げていれば、この数のオラクル細胞に引かれるようにして墜ちた者、もしくは単体で強力なアラガミが横槍を入れてくると信じ、背後にある、今にも崩れ落ちそうな建築物の屋上を目指して跳ぶ。

五十メートル弱の高さを持つ建築物の屋上にギリギリで着地し、立て続けに約二十メートルほど離れたマンションの屋上へと助走無しで飛び移る。

『ググユアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！』

ズドーン、という音と共に吹き荒れた土ぼこりの中から、ヴァジュラの雄叫びが聞こえる。どうやら先ほどまで立っていた建築物を破壊したようだ。

広範囲を攻撃するというよりも守るのに有効な拡散弾：レーザーにセツトするためにシリンダーを回転させる。

レッドイーターとアラガミとの距離が、だいたい5メートルに迫った瞬間、銃口をザイゴートが密集している箇所に合わせて、撃つ。

七発の極細レーザーが次々とザイゴートに着弾、小規模な爆発を起こす。だが火力が少ない分、行動の抑止程度にしか使えない。だから二発目、三発目と何度も引き金を引き、抑止と同時にダメージを蓄積させていく。

撃っている間に、オラクル細胞の残量に気をつけようと、バックパックから残りのOアンプル二本を取り出し、一本をポケットに入れてもう一本を飲み干す。

そんな事をしている間に、一体二体と地面に墜落し、そのまま目から光が消える。

高エネルギー体に変換するためのオラクル細胞の残量に気をつけながら、さらに複数倒していき、Oアンプルを飲み、また撃ち始める。

そして数分後、

「……残り一体」

口で言う程度の余裕を取り戻したレッドイーターは、最後の一体が墜落すると同時に神機を剣形態にし、すぐさま捕喰形態へと移行させる。

痙攣して、目だけはアラガミの中でも群を抜いて特化しているのにも関わらず、閉じてしまったザイゴートに黒いアギトを近づけさせる。

だが……そろそろタイムリミットのようだ。

「……………来るの遅いですよ」

レッドイーターは神機の下顎でザイゴートの横っ腹を叩き、右を見て、数メートル離れたビル影からこちらに向けて光る赤い眼まなこを敵の目を見た。

捕喰形態の神機をその赤い眼光を遮るように移動させる。そしてボルグ・カムランを喰らったときと同様、巨大なアギトへと変貌させる。

『グルアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

空気を切り裂く音が聞こえた。

地面を蹴る音が聞こえた。

獲物を見つけて、歓喜に染まった。

巨大な、亜光速で近づいてくる第一波の弾丸が、レッドイーターの真横の地面を消滅させた。たまらず嫌な汗を掻き、捕喰形態のままの神機を構え、体内のオラクル細胞を自身でコントロールし、フル活性化へと誘う。その際に発生する強いエネルギー反応に呼応した大気中のオラクル細胞が、レッドイーターに付着、各々が結合していき、赤髪赤目へと姿を変貌させた。

アスファルトどころか土まで……抉ったのではなく、消滅させる。その神にも等しい力。この数時間でヤツはどれだけ進化したというのだ？

たとえ非凡な反射神経でも、亜光速という速度で飛び散る弾丸は避けられない。だが逃げるために背後を見せたら見せたで、放たれた弾丸に飲み込まれて体が消滅してしまう。

ヤツ。墜ちた者は腹から飛び出た長身の銃口をレッドイーターに合わせる。そして意思を引き金として、

「ッグウウワアアアアアッッ！！」

亜高速で飛ぶ弾丸を放った。

だが、神にも等しい力を出すことができる存在がオラクル細胞なら、それを限界まで活性化させて全能力を底上げしたレッドイーターはどうだ？

亜高速に体が付いていかずとも、大口を開けた神機にその弾丸を飲み込ませる。

バキィッ、と、神機から伝わってくる衝撃で骨が軋み、苦痛の聲が漏れる。

だが受け止めた。喰らえたのだ。狙っていたとはいえ成功するとは……九死に一生を得たと言うべきか。

あれだけの砲撃だ。墜ちた者は反動で硬直している。そこでレッ

ドクターはメインユニットを元に戻し、未だ痛みが残る両手で構えると同時に消えた（・・・）。

「行きます!」

『ギ
』

レッドドクターは墜ちた者の背後を一瞬で あたかも瞬間移動のように 取り、アスファルトの地面を強化ノコギリで切り裂き、そのまま墜ちた者の背中の肉をノコギリの刃で削り取る!! しかし、

（……………良い反射神経じゃないですか……………!!）

僅かに体を前に倒した墜ちた者へ放った一撃は、とても浅く、決定打に欠けていた。

『グルアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!』

墜ちた者は猛獣の如き叫び声と共に、レッドドクターに向けて、いつ回復したかも分からない、両腕の銃剣を振るった。

「おいおい……………さっきの叫び声、墜ちた者じゃないのか!？」

レッドドクターが墜ちた者と接触したのか、この地域そのものを揺るがすほど規格外の咆哮に、リンドウは狼狽していた。そしてリンドウが落ち着きを失っているということは、当然タツヤも右往左往しているわけで、

「どうしますか!?!」

「どうするも何も、レッドイーターの戦闘能力は落ちてんだ。行くしかないだろ!?!」

「でも、僕たちの目的は『エサ』にはめてからの確実な殲滅ですよ
ね? それに行っても足手まといにしかならないんじゃないんです
か!?!」

「ぐ……!?!」

確かに、戦闘能力がダウンしたレッドイーター一人でも、リンドウ、タツヤ、そしてツバキの戦闘力を足したような力が残っている。

そして角度的に見えないが、発射音と着弾音がほぼ同タイミング。当然、神機なわけが無いので墜ちた者が撃っていると見て間違い無い。そんな化け物相手にたった二人増援に入っただけではすぐに殺されてしまう。

だが、

(……俺は仲間を見捨てない。全員で必ず生きて帰る。そんな強い男になるって誓ってた……!?!)

リンドウは屋上から身を乗り出す。タツヤの止めの言葉にすら耳を貸さず、爆音と二人の咆哮が鳴る方向へと飛び出した。

リンドウさん、とタツヤが声を張り上げても既に着地し、走り始めたリンドウの耳には届かない。

アラガミ化した神機使いはどうしようもないが、そうでないレックドイーターは絶対に助ける。薄い唇を噛み、整った顔に皺しわを寄せ、リンドウはアラガミの血をたっぷり吸い込んだような色をしている神機を、掌の皮が軽く剥ける程強く握り締めた。

ちょうど息が荒くなる頃に、無線機を収納してあるリンドウのポケットが揺れる。リンドウの緊張の糸が、少しだけ緩んだ。

どうせタツヤか、とリンドウは荒い呼吸を繰り返しながら、立ち止まり、ポケットで揺れる無線機を手に取る。

さて、この無線機、基本的にはアラガミ発生前の人々が言う携帯電話と同じである。

当時は、電話らしく通話だったり、写真を撮ったり、娯楽のためだったり、電子メールであったりと、多種多様な機能が搭載されていたようで、物資が少ないとはいえ、生活が優遇されるゴッドイーターや一部の職員にはその機能の大半が導入されている。

「……メール？ 誰からだ？」

右手に握ってる神機を肩に担ぎ、無線機のボタンを押していき、届いたメールを開く。

『墜ちた者の左腕さでんの切断完了。逃走ルート作ったら正直に行ってくださいました。ただいま罾が仕掛けられているHエリアに向かっていますナウ』

「……………」

受信されたのはレドイーターからのメール。それを見てリンド
ウは完全に緊張の糸が切れてしまい、

「……………大丈夫そうだ」

少し気味の悪い微笑を浮かべて、そう呟いたのであった。

第七十三話、再接触（後書き）

赤の川は、GE2となにかと設定が被っている点に気づき、作成、消去、作成、消去を繰り返したとき

ウイルス 不治の病

内容は絶対違うけど、根本的には近いよね？

ハンマー（無名） ブーストハンマー

打突面とは逆の部分に推進器が取り付けられている点が同じ。

他にもあるけれど、今日はおしまいです。

第七十四話、アラガミがいるから（前書き）

活動報告でした内容から大幅（？）な改変をしました。
見てくれた方、ごめんなさい

第七十四話、アラガミがいるから

高いビルに挟まれた一直線の通路でその戦闘は続いていた。

一目見なければ分からないだろう。

光速で一方的に飛来する弾丸の斜線から華奢な体を大きく引き離し、カウンターを狙うかのようにサイドステップを連続して踏み続けながら、その長く伸びた銃身の口を墜ちた者に合わせようとするレッドイーターに内包された神の如き力など。

このバレットを使うか、と、シリンダーの回転を終わらせ、冷静さを持ち合わせながら身をかがめる。すると、ジュツ！ と後ろの地面が蒸発する音と共にレッドイーターは甲高い音を立て、引き金を三度引く。直進ではなく高性能タイプではないがホーミングするレーザーが三発連射され、銃口の中央に収まっていた墜ちた者の追尾をすぐさま開始した。墜ちた者は野生の勘とでも言うべき反射神経でそれを避ける。

左腕を切り裂かれている墜ちた者は、腹部中央から伸びる銃口をレッドイーターに向ける。光の速度で行なわれる、一撃必殺の弾丸を子供に当てるつもりだ。もちろん、それはアラガミの本能がそうさせているだけで、ゴッドイーターという人間だった頃の男の意志ではない。

(遅い！)

移動する度に発生する赤い軌跡を作り出しながら、レッドイーターはアラガミたちの捕喰でやや傾き気味のビルの壁に足を着き、そ

のまま駆け上がる。

直後、ビルの全体を支えていた根本がまるごと消滅する。コンクリート、レンガ、鉄骨、どんなものでも破壊するその威力は凄まじいの一言だ。

崩壊を始めるビルから跳び、レッドイーターは銃形態のままの神機から先ほどと同じタイプのホーミングレーザーを一発撃つ。それは角度的な問題で、紙一重で墜ちた者に当たらなかった。思わず舌打ちをする。

『ギギッ……!!』

すぐ目の前で敵の弾がアスファルトに直撃し、弾けたのが原因だろう。墜ちた者は一直線の通路をまっすぐ進み、レッドイーターと初接触した区画へと戻っていく。

馬鹿め、とレッドイーターは弾丸に変換するためのオラクル細胞が切れた神機を剣形態にし、そのまま空中から一回転して着地する。

本当に逃げるためだけに走った、と仮にアラガミに言われても、レッドイーターにはそれと同時に別の目的があることなど知っている。

「……そうだ。そのまま行け」

アラガミはアラガミを呼ぶ。先のザイゴートの行動がそれを示している。さらに言えば、それらの情報を収集し、命令を下しているコアがそれを担っていると考えられる。

だから単純で、神には程遠い存在なのだ、と、レッドイーターは嘲笑う。

無傷のコアがオラクル細胞を呼ぶなら、無傷のコアを大量に寄せ集めて引き寄せればいい。もちろん、他のアラガミに喰われるという可能性もある。だが、その可能性は低いと勘が告げている。

その勘は間違っではない。

あの第一種接触禁忌アラガミ『スサノオ搜索』に抜擢されるほどの神機使いが、同族であろうと見境無く喰い荒らし、強大な力と異常な進化を続けるアラガミになるのだ。

レッドイーターには分かる。アラガミも本能的にヤツを避けている。もしくは、勢力を拡大して食い倒そうとしていたはずだ。

そう言えば、とレッドイーターは苦いものでも口に含んだような顔をし、

(……ちよつと勿体無いことしたかな?)

協力は無理でも、上手く誘導すれば同士討ちも可能だったろうに、とレッドイーターは思う。ここら一带のアラガミの気配が、感じた当初よりも圧倒的に減っている。コアの回収以外でも殺しすぎたのだろう。気付かなかった。

ともかく、畳み掛けるられるチャンスは一度つきり。レッドイーターは身体への負担が掛かるLv2レベルを維持しながら跳躍し、見晴らしの良いビルの屋上に向かった。

男物の靴が乾いた音を立て、所々穴が開いた　オラクル細胞が
侵食しているのだろう　屋上に足を着く。彼は目を細くし、Hエ
リアに向かう墜ちた者の追跡を始めた。

『フウ、フウ、フウ　』

墜ちた者は、本能に従って一本道を走る。

だが逃げれない。

ほぼ真上にいるというのに、レッドイーターは発見されなかった。

(・・・ビルの屋上にいるからといって、ある程度なら気付
きそうなものを)

哀れむ必要性は無い。だが、

少しだけ……ほんの少しだけ楽しい(・・・)気がする。

もちろん勘違いだろう。命を懸けて戦って、その過程で楽しいと
思うなんてそうそう思わない。馬鹿げている。

だが、気を緩めると、表情は無表情から一変して笑みと化してい
る。カウンセリングでも受けるべきか、否か、どちらにせよそうな
ってしまふのだから誰かに見てもらおうしかないだろう。

世界で唯一……であるう赤い神機のコア　アーティフィシャル
CNS　は、レッドイーターが笑みを意識していると明滅する。
それがどうにも、自分をバカにしているように感じてしまった。

神機なんて所詮道具ではないのか？

はあ、と、ため息を吐くと同時に屋上の床に強化ノコギリを突き
刺す。

「……………相棒だからって……………瘤に障ります」

最後の声は、蚊の羽音のように小さい。顔を落として、これもま
た意識せずに悲しみに包まれた表情になる。

自分の事なのに自分ではどうしても理解できない。イライラする。
胸がはち切れそうだ。

「……………なんで、こんな気持ちになるのかな……………お父さん…
…お母さん……………」

痛い、痛いよ……………。

目から出るのは一滴の雫^{しずく}。それは枯れた頬を濡らし、顎に到達す
ると同時に落ちた。

自然な手つきで、レッドイーターは先日購入したロケットを服の
中から取り出す。その中に収められているのは二人の夫婦の顔だ。

皮肉にも、自分とほぼ同じ容姿をしたストレートロングヘアの美

女。そして彼女とお揃いと絶賛しそうな男性。

父の名は、かんなしめきり神無輝。

母の名は、くれなはすは紅一葉。

どちらも日本人であり、黒髪黒目だ。

家族のいないレッドイーターに家族のありがたみなどそこまで理解できない。ツバキらと共に過ごす時間が至福に感じるが、その至福とは大きくかけ離れた存在。

意識をロケットに集中させればさせるほど、涙が零れ落ちた。何滴も何滴も。すると、リンドウ達以上に慕った人を思い出す。

失くしたらわかる大切さ、って所か。

「……先生マスター」

もう、涙は止まらなかった。

「……なんで死んじゃったの？ 失ったら辛いつて、教えてくれたのに。僕は先生の期待マスターに応えられるよう我慢したのに」

鳴き声は上げない。

「う……う」

ロケットを握り締める手が震え、赤いコアが明滅する。そこで、またこの結論に辿り着く。

アラガミの所為で皆死んだんだ、と。

怒りが沸騰した。悲しみは空に消え去る。

逆切れだと分かっているにも、結局こんな世界にした奴らが憎い。

いつのまにか咆哮を上げていた。

「アラガミイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
」

ビクリ、と墜ちた者はこちらに反応する。

片手で自身の身長を遥かに超える巨剣を引き抜き、一度跳躍したところで空中に足場となる板を逆さまに（・・・）展開。それを蹴って一直線に墜ちた者に突撃する。

墜ちた者は大きく後ろへと下がる。だがレッドイーターは再び板を作り、それを蹴ることによって強引にコースを変更する。だが、

「逃がすかあああつつつ!!」

『ギ　　!?!?』

唯一アラガミを倒せる生体兵器である神機を振るわず、体を回転させ、左足から回し蹴りを放つ。当然、墜ちた者は反射的に銃剣で防御体制を取った。

その体を、巨漢の男を、

レッドイーターの細い足が蹴り飛ばす！！

ノーバウンドで数十メートル飛んでいく墜ちた者の銃剣は、錆びて朽ちたかのように消し飛んだ。

Lv2の副次的な効果である、『活性化したオラクル細胞に引き寄せられたオラクル細胞が皮膚表面でパワードスーツのような役割を担う』が故である。

つまり、今の一撃はアラガミの一撃と変わらない、通常の生物なら一撃必殺の攻撃なのだ。

一瞬で発生した赤い軌跡が、高速で飛ばされる墜ちた者を追い、仰向けに飛ばされた墜ちた者の背後に回りこみ、さらに蹴りを入れる！

『ギャッ
』

空へと飛ばされた墜ちた者は、そこが崖だったことも相まって、やっと崖上で着陸を果たす。それと同時に起き上がり、戦闘色の表情を作り出した墜ちた者は唯一残された武器、腹部の銃身にエネルギーを溜め始める。

当たれば即死の光速弾。

だが、それも発射できなかった。

アラガミの動体視力ですら追従を許さない動きを始めたレッドイーターは、崖を上ると同時に神機を投げた（・・・）。

それは軽々と、墜ちた者の腹部にある銃身を破壊する。

『グギイアツツ　　！！』

絶叫も、喚き声も、それすら許されない攻撃の数々。

銃身に直結しているコアを破壊されないために、レッドイーターの強化ノコギリが食い込んだ銃身を切り離し、上下に裂けた腹部を繋ぎ合わせる。

レッドイーターは適当に手を振るう。

その動作だけで起きた衝撃波が、崖上、そう、Hエリアの砂を巻き上げた。視界が茶で染まる。

『ツー！！』

視界が悪い中、墜ちた者はピクツ、と体を震わす。

墜ちた者は何かに気付いたようだ。何の前触れも無く走り出す。それを聴覚で悟ったレッドイーターは追撃の手を止め、急いで神機を拾い上げる。

砂埃が舞う中、墜ちた者は無謀すぎる。

走っていた墜ちた者の地面が崩れる。そこにアラガミという化け物は落ちていつてしまった。

レッドイーターは再度腕を振るい、衝撃波を発生させる。すると砂埃は消え去り、一瞬で視界が晴れた。そうすると、彼はゆっくりと目を動かす。

Hエリアにある、一つの、今までになかった穴。

地上を歩くものの最大の敵。

落とし穴である。

これが、レッドイーターが仕掛けた罠である。

エサは本日倒したアラガミのコア。オラクル細胞で綺麗に挟られた原始的な穴は、武器を持たない墜ちた者を拘束する。

レッドイーターは神機を携え、その穴に飛び込む。ヤツの脚はまだ生きているからだ。それに、オラクル細胞の貯蔵庫にも化している落とし穴に長居させるつもりなど無い。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

神機を逆さにし、強化ノコギリを落とし穴に、文字通り墜ちたアラガミに対して突き落とす。

『ギアアアアアアアアアアアッ!!』

ここにきて、墜ちた者の最後の足掻きだ。オラクル細胞を急速に分裂させて、右腕と四本の爪を作り出し、土の壁を抉りながら突っ込んでくるレッドイーターを迎え撃つ。

ギンツッ！！ 火花が散った。

墜ちた者の爪が、幸か不幸か、強化ノコギリの腹を貫いたのだ。

「だからどうした！！」

レッドイーターは壁に串刺しにされた神機の柄から手を離し、禍々しい大鎌、キルサイズを作り出した。それは紙を切り裂くようにして墜ちた者の腹を縦に裂き、コアを露出させる。

「死ねえ！ アラガミイツ！！」

キルサイズを消し、握りこんだ拳を、

墜ちた者の、黄色いコアへ飛ばした！

『ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！』

白に染まる視界と共に、墜ちた者の断末魔の叫び声が穴の中で響いた。

第七十五話、過去に残した、切なる思い（前書き）

ゲイの痴漢……消えればいいのに。

男の方も、その気のある痴漢に注意しましょう！

ちなみに僕は股間とお尻、どちらも死守しましたぜ！！

ちょっと切ない（？）物語に仕上がりました。

第七十五話、過去に残した、切なる思い

コンコン。

二回、唯一外界との行き来が許される自動ドアがノックされ、黒髪黒目の可愛らしい容姿をした子供はベッドから起き上がった。そして小さく微笑んで、ピンク色の唇を動かす。

子供の服は、母が幼い頃着用していたと聞かされている、紅葉を思わせるような色彩をした和服であった。

「^{マスター}先生ですか？」

嬉しそうに、愛おしい人の名前を言うようにして、^{くれないがすは}紅一葉の子供はすぐ傍にあるコントロールドアパネルを指で操作し、自動ドアの鍵を開けた。

プシュン、と乾いた音と共に、白衣を纏った金髪碧眼、加えて痩せ型の男性は、笑顔で子供に駆け寄り、抱きつく。体格差があるので中腰気味だ。が、子供はとても、とても嬉しそうにその男を抱き返した。

「はろはろ〜！ 目が覚めてたんだね。俺としてはちょっと残念だなあ。でも良い子だよ。君は」

「えへへ」

嬉しそうに、子供は男性とのハグを楽しむ。少し目を、壁に設けられた液晶ディスプレイ内に表示される時計に逸らして時間を確認

する。ちょうど朝の食堂が開く時間だ。

満足するまで抱きしめ合い、満足したところで互いに離れる。子供の頬はほんのり紅くなっていた。

私が最高に幸せだった時間。

そこにはいつも貴方が居て、

でも、

男は、器用に食器の上に積まれた皿を落とさず、それを両手で一組ずつ、計二組を持ちながら、一角にあるテーブルへと向かう。そのテーブルには、和服を着た子供が一人、椅子に座っていた。

子供は男に気付くと、俯かせていた顔を上げ、苦しそうに微笑む。

「……………またか」

男は敵意のある眼差しで、子供から離れる一人の女性を一瞥する。すると、ほぼ同タイミングでこちらを見た女性と目が合う。その瞳は余裕で満ち溢れており、野心を隠すことをせず、むしろわざと開放し、男に覗かせていた。

息を止め、奥歯を噛み締め、その女性が立ち去る姿を、彼女の後ろからじつと見る。

「……………」

数秒その状態が続き、女性が食堂から足を出したと同時に大きくため息を吐いた。

自分ではどうしようもない、上の指令。

また過酷な訓練を子供にさせるのか、という、ある種の憎悪を混じらせながら、彼の瞳が語る。そしてその感情に気付いた男は、首を大きく横に振って、気持ちを整理した。

まずはこの子と食事を楽しもう。そう自分に言い聞かせ、再び子供の顔を見て、ぎこちなく笑う。

「とりあえず食べようか？ …… おいおい、そんな悲しそうな顔するなって」

悲しそうに、顔を再び俯かせる目の前の子供に対する言葉が、途中で詰まる。

自分がどうにかする。そんな曖昧な発言をして、逆にこの子に失望させ、孤立させたくない。この子が信用しているのは、多分、この世界では自分と、例の傭兵部隊員の チームのみだろう。 チームと関わる時間は少なく、よって私生活などの時間では自分しかこの子を守れない。

だが、

子供としては、彼とずっと一緒にいたい。そういった感情が渦巻いており、男の感情を目から汲み取った子供は、椅子から下り、彼の足にしがみ付く。

「大丈夫です。いつつもへっちゃらですから」

ただ寄り添えば分かり合えた。

いつか話したい。この、出会えた奇跡に。

でも、

「あぐう あ……っ!!」

黒い、訓練用のフェンリル制服を着用した子供は、背中に直撃した鉄球で姿勢を崩す。そこに横から右頬を殴られる痛みが走った。

弾丸ほどではないが、並の人間なら即死であろう鉄球が、姿勢を崩した子供に向けて無数に、それも高速で放たれる。当然、避けられるわけもない。

綺麗な肌が切れ、血がにじむ。だが、それだけだ（……………）。

なんら致命傷にもなっていない。

『「こつも早く強化されるとはな……アラガミらしい進化だよ、化物」』

「……………つく」

殺意を込めた瞳で、強化ガラス越しに観察を楽しむ科学者を睨み

つける。それに動じることのない科学者の男は、気味の悪い笑みを浮かべ、

『そつだその目だ！ もつと見せてみる！ ……やれ！』

スピーカーから流れる声が終わった瞬間、いつの間にか終わっていた鉄球の嵐が、再び繰り返される。子供は鉄球が射出されるよりも早く起き上がり、回避行動に出た。

通り過ぎた鉄球が、事あるごとに風圧を放ち、子供の華奢な体を揺らす。だが、ひらり、と回避に専念する子供はその影響からも身を守る。

スピーカー越しに盛大な舌打ちが聞こえた。強化ガラスの向こうにいる男から発せられたものであることは、一目瞭然である。

面白みに欠けている、そんな感情がつい、表に出てしまったのだろう。彼は唐突に、鉄球の発射口の操作をしている部下に訊く。

『……おい、お前。アレ、もつと速度でないのか？』

『出せます』

無情にも返される一言。それはとても冷たく、人を突き放すような言動である。

(……………上司が上司なら部下も部下ですか)

子供は口元を拭い、警戒心を高めたまま中腰の姿勢になりながら心の中で、そう呟く。

ぎゅ、と拳を握り、ゆつくりと余分な力を抜いていく。そして、
耳を澄ませる。

ビュッ！！

「ッ！！」

正面から飛来する鉄球に即座に反応した子供は、驚異的な跳躍力で左へ、さも瞬間移動のように高速で動く。足を踏ん張り、ブレーキを入れる。だが、その間にも鉄球は次々と発射されてくる。

(さつきよりも……！！)

本当に速度が上がっていた。これはさすがに死にかなない。子供は逃げ回りながら、未だ掴めていない、発射口の位置の特定を開始し、発射される前に先手を打ち、全て避けるための分析を始める。

それは、科学者にとっても予想通りの展開だった。

『ほらさ！ おい分析係！ ちゃんと測定しろよ！ ククク……これが人とオラクル細胞、その二つの特性を得た人間の身体能力と知能だ！！ クツ……ハハハハハハハハハ！！』

男の高笑いは、肺に収まった空気が全て抜けるまで続いた。それを気にする暇もない子供は、黙々と鉄球を避ける。

それが何分、何時間も続き、超人的な身体能力を見せ付けていた子供にも息切れが生じてきた。そんなタイミングで、だ。

何重にもロックされている自動ドアが開き、一人の男が入ってきた。

『ここか！！』

『何！？』

「ウガッ！！」

腹に入った重い一撃が、子供の胃を締め上げた。頭と胸が苦しく、口の中に残る鉄っぽい味の血よりも、苦い胃液が味覚を支配する。その怯んだ子供に、また容赦の無い鉄球の嵐が殺到する。倒れた子供の周りは、転がる鉄球で埋もれていく。

あまりの激痛に、逆に痛覚が鈍り、意識が遠のいていく。その姿に、子供が先生と呼ぶ男は黙ってはいなかった。

『お前！ 今すぐそれを止める！！』

『お前ら、こいつに従うな！ これは我々人類が生き残る上で、重要なサンプルになる！！』

『貴様……！！ 輝の子供に何しているか判っているのか！？』

『何を言う！ あの化け物は既存のクローンとは全く違う、テロメア等に問題のない、人間に近い形をしたアラガミの子だ！！』

『違う！！ あの子は男と女、その両種の間にも生まれた二人の子だ！！ 世界が滅ぶ前に生まれてきてくれた、未来を作る人間だ！！』

『なら証明して見せる！！ おら！ あの化け物は虫の息だぞ！！
死にたがっていたら、知性を持つ人間らしいだろうなあ！！』

『おいそこのガキ！ 入口何処だ！！』

『ひっ！！』

男に気圧された、一人の下っ端科学者が反射的にドアに指を指す。
入口は、誰が開けたか、分かり易く全開になっていた。

「今……今行くからな！ 待っているよ！！」

「マス……タ」

ありふれた幸せを、貴方はいつも与えてくれた。

淡い愛しさ、それが私という人間に感情を吹き込んでくれた。

でも、もう貴方は……私の大好きな貴方は……

「……はい……はい………すみませんでした。本部長」

「……^{マスター}先生？」

遠のいていた意識が、薄明の朝のように上昇し、子供を覚醒させた。そして声をした方向へ、首を動かす。後頭部で形を変えているのは、枕だ。病室に運ばれたのだろう。

閉められたカーテンの向こうから声が聞こえる。

「……………っ！！ 何を仰っているんですか！！ あの子はまだ十にも満たない子供なんですよ！？ あの新世代の神機だつて、まだコア、及び構成オラクル細胞結合の調整中なんです。……………はい。確かに、この支部の八分の一の予算を割り当ててもらったことには感謝しています。しかし、それはあまりにも早いです！ ……………っく。了解しました」

ツー、ツー、ツー、という音。親指がボタンを押す音、歯軋りの音。壁を叩く音。壁を叩く音、叩く音。

起き上がりたい。

でも、体がそれを許してくれない。

こんなに愛している人の所へ行きたいのに……………！！

動かない手足の変わりに、胴体が大雑把に動かし、ベッドから抜け出そうとする。でも、被せられた掛け布団が重く、ただ無意味に汗を掻くだけだった。

カツカツカツ、と、靴底が固い床を叩く音が迫り、一度止まっただけ、カーテンが開いた。

「……………目、覚めたんだね」

「……………すみませんでした。先生^{マスター}」

「……………うん。大丈夫。君さえ生きていれば、それで良いんだ」

例え全ての人類が、動物が、皆、滅び去っても。そう彼は続けて言う。その後、両者共に頬が紅くなる。

彼は苦笑しながら、近くに置いてあった丸椅子を自身の元まで寄せ、落ち着いた動作で座る。

「……大好きだから……愛しているから。だから絶対に死なせやしない。天国にいるご両親も、きっとそう思っている」

「でも」

「ほいほい、ほいほい」

返事が、彼の突き出した人差し指で封じられる。唇に優しく触れている指は、温もりに満ちていて、眠気を誘った。

「……さあ。まだ眠いだろう？ 今日は何となくぐっすり眠れば良い。そうだなあ……子守唄でも歌ってあげるよ」

「……うん」

忘れられない思い出……。

失くしたくない想い　　せめて、貴方の女になりたかった。

私は人を愛した。

俺は人を憎んだ。

私は愛を学んだ。

俺は殺意を知る。

「あれ？」

一人の神喰らいは、白い空間で声を聞いた。

見渡す限り、地平線も何もない、どこまでも続く広大な空間。

それにしても、

「俺は……スサノオとやりあって……。っ！！ そうだ！」

自分は今まで何をしていたのだろう。

確か、百田ゲンの神機が喰われ、仲間が二人首を、胴体を斬り裂かれ、ゲンだけでも逃がそうと自分が囮になって

「あれ？ その後は？」

思い出せない。自分に何が起きたのか、ここは何処なのか、スサノオは倒せたのか、

全て、空白だ。

「そして俺は、それを奪って、消して、壊したアラガミを」

「あ」

背後から、子供の声が無音の空間で響いた。咄嗟に身構え、後ろに立つ人物を視認する。

そこには、俯き、結果血で染まった髪で顔が隠れている、ツバキらと行動を共にしているフェンリル本部の子供だった。どうしたのだ。首を傾げて訊ねる。

「そして、本当の神に逆らう人間を」

子供は、自分の質問をまともに返さず、淡々と自らのペースで意味の分からない事を呟く。本当に聞きたいのは、そんなどうでもいい事ではないのに。

少し歩いてみる。すると子供は口を動かしながら付いてきた。

「俺たちは新人類。キリスト。ブツダ。そんな実在し、神格化された猿とは違う、完成した存在」

妙な胸騒ぎがした。自分の防衛本能が、逃げろ、と叫んでいるようだ。

アラガミとの戦いでも、余裕があれば深呼吸くらいし、それを抑えられるというのに、何故それを実行できない？

「神にあつて人間に無い物は、命。限られた」

「……なあ、ここって何処なんだ」

自分の意識を飛ばすような激痛に、たまらず転げる。両手の関節の感覚は完全に無くなり、冷たさだけが続いて感じた。

(な……何が!? な、)

「何だよこれ!!」

手があるはずなのに、そこには殺すための道具、銃剣状の形をした物体があつた。否、生えていた。

「俺は、俺たちはお前達を滅ぼすんだ人間。そして、」

「うぐあああああああああ!! 手が! 手がアあああああああああああつ!!」

「クソツたれなアラガミもだ」

子供は笑みを浮かべ、両手に黒い瘴気を発生させる。まぎれもなく、それはオラクル細胞であつた。黒い瘴気は両手を包み込む。

「あ! あ! ああああああああああああああああああああ
!!!」

「殺してやるよ。十分、俺が満足してからだけどなあ!!」

黒い瘴気を切り裂くように、子供は両手にいつのまにか握られていた、鉤爪のような二尖三叉の漆黒の禍々しい短剣が現れる。自分がそれを認識した瞬間、子供はすぐ目の前まで迫っていた。

ガキンツ!!

「え? え!?!」

仲間に攻撃するつもりなんてこれっぽっちも無いのに、自分の手から生えた銃剣が、その双剣の一撃を防いでいた。

「そんな強度でなあ」

子供は、口の端を吊り上げ、

「勝てるわきゃねえだろおおおおおおおおおおお
お!!」

「ぎゃっ!?!」

手が粉碎骨折するような、そんな痛みが、まだ治まっていない始めの痛みに上乘せされる。目の前で砕け散ったのは、どうやら右腕の銃剣のようだ。

続けて、少なくともゴツドイーターである自分にすら目にも止まらぬ斬撃が脳天に振り落とされる。それを無意識に防御した銃剣も、砕け散り、またたまらぬ痛みが脳を貫いた。

痛みで目蓋を閉じる。そこに漬け込むほどの余裕があるのか、子供は蹴りを男の腹に喰らわせた。190センチメートルを超える巨体が、簡単に吹き飛ばされる。そのとき、

着用しているフェンリルの制服から写真が一枚、ひらりと出てしまった。

その写真には、自身の子供、妻、両親、義父母の顔が映っている。

「っ！ アンナー！」

手を伸ばそうと、人の感覚に慣れている男は神経に命令する。だが、手が無い。

白い、どこが地面かも分からない地面を転がりながら、絶望に染まった顔など隠せるはずもなく、すぐ目の前に近づいてきた子供が凶悪な笑みを浮かべた。

「ん？ おいおい……ククク」

倒れた男の代わりに、子供は落ちた写真に近づき、

「……家族写真かよ。おいおい。はは、話になんねえなあ……オイ
！」

その一言は引き金だった。

ドスツ！ と、倒れた男の腹を、子供はボールで遊ぶかのように蹴る。そんな無邪気な（……）子供は、自身を見下すような目つきで、何度も蹴りながら告げた。

「戦場でなあ、恋人や女房の名前を呼ぶときというのはなあ、瀕死の兵隊が甘ったれて言うセリフなんだよあっ！」

第七十六話、容疑者（前書き）

他人に興味を持ったことなんて、一度も無い

要はゲーム一筋なんですよね。自分で言うのもアレですけど痛い人すぎるなわっちww

色々な拘束時間、終了!!

赤の川！ここにふつか げふっ。

一ヶ月も遅れたぜ！主にペンタブという呪縛が大半の原因ですがね
！！
開き直つてすいませぺこりんちよ

第七十六話、容疑者

静音エンジンが体を揺する。レッドイーターは一時の夢を見ていたかのように、ゆっくりと目蓋を開けた。周囲は暗い。既に太陽は落ち、月光が地面を薄く照らす夜なのだろう。

「ふう」

気温が低い。

掛けられた毛布で身を暖め、自身の横に置いてある神機ケースに触れる。夜の冷めた空気で、氷のような冷たさを手から感じ取れた。それと共に、アラガミに墮ちた人間の奇声が頭を過ぎ去っていく。

自分が死んでいないという現実。弱肉強食。サバイバル。ありとあらゆる言葉が湧き水のように思いつき、消えていく。だが、これだけはしっかりと思えた。

(……勝てた?)

痺れている右手を気合で握り、掌にべつとりと付着した汗を取り払うかのように、手を開いて大雑把に、何度も適当に振る。これによって痺れが薄れる。だが軽い痛みがする。よく見ると、右拳には痣ができており、立派な戦闘をした証拠があった。

「……………ぐあ……………ぐう」

「……………?」

レッドイーターは、寝息のする方へと顔を傾けた。自分が乗っているのが装甲車の後部座席というのは言うまでもないので、背後にある運転席を確認する。そして夜目が利くレッドイーターは、運転席で装甲車を運転する一人の女性と、その助手席で自分と同じ、毛布を掛けて寝ている男性を視認した。

「……………リンドウさんに　ツバキさん？」

少年は目を丸くする。リンドウはともかく、ツバキと何故共にいるのか？　は少し考えれば簡単だった。

見慣れた地形から予測される東西南北のだいたいの方角と、月の位置から推測して、もうかなり遅い時間だろう。ろくに連絡をしないレッドイーター達を心配して、ツバキは迎えに来た　と、まあ悪い事をしたものだ、と内心舌を出しながらレッドイーターは額に手を付く。

そしてもう一人。

「あ、起きましたね」

「……………そこにいたんですか。タツヤさん」

神機ケースに阻まれて見えなかった。巨大なケースの反対側には、最近、やっと成長期に入ったと語るタツヤがいた。彼も、毛布を腰辺りに掛けている。

彼は空を見上げ、少し遠くのモノを見るように目を細めて、言った。

「落とし穴、あんなものがアラガミに通用したんですね。尊敬します」

「……空を飛べないほとんどのアラガミなら、少しは通用すると思っただけです。そう言えば、墮ちた者は？ コア……というかアーティフィシャルCNSの回収とか、再利用できそうなんですか？」

「……ええっと……ですね」

レッドイーターが返答し、続けて質問するとタツヤは悲しそうな顔をする。彼は、言葉を濁らせ、また空を見上げた。レッドイーターは首を傾げる。少し……いや、とてもじゃないが、いつも以上に頭に血が昇って、墮ちた者の腹をキルサイズで裂いた所までしか覚えていない。だから倒せたのか、否なのか、覚えていないのだ。

数秒沈黙が続いて、タツヤ以外の人物がレッドイーターの質問に応じた。

ツバキだ。

「……ああ。コアの抽出には成功していた。最も」

レッドイーターが不思議そうな表情に変わると同時に、ツバキは一度、言葉を切る。彼女は呼吸を整える。これ以上伝える気が無いのか？ とレッドイーターは怪訝そうな顔をする。だが、ツバキは続きを語り始めてくれた。

「アーティフィシャルCNSとしてではなく、それ以外の用途での再利用すらほぼ不可能と言われるほどの重い損傷。そして、墮

ちた者を形成していた大半のオラクル細胞の壊死による影響なのか、コアを形作るオラクル細胞群の極端な生命力低下の所為で、リンドウはヘリで駆けつけた回収班にはケチ付けられたらしい。と、まあ要は『神』とまで言われるほどの存在が、命を絶ちかねないほど何かしらの影響を受けた、と、そんな風に私たちは見えたわけだ」

「……んな馬鹿な」

「事実だ。リンドウがオラクル細胞の回収班に預けたが さつき、こんな現象見たこと無い、とサカキ博士からの通信が入ってきた」

「……ああ、あの人の目から逃れられるわけありませんよねえ」

狐ほど、掴みどころが無い存在ではないのだろうか？ と、冗談交じりに思ってしまった言葉に、溜息を吐く。レッドイーターの溜息を、優れすぎる、と皮肉を言われても仕方がない程である聴覚で拾い上げたツバキは、心配そうな口調で問いかけた。

「レッドイーター。もう動けるのか？」

「……心外ですね。僕の身体に何かあるくらい……もう知っているのに。大した事ありませんよ。墮天程度のアラガミとなら、まだやり合える力は残っています」

羨ましいな、とツバキは鼻で笑う芝居をし、装甲車のハンドルを回す。ガクン、と車体が揺れ、ゴッドイーター達の身体も同じく揺れる。それでレッドイーターとタツヤは軽く嘔吐感に晒されたのは言うまでもないか。

ブチッ！

そこは気が短いレッドイーター。当然のようにキレて、顔を険しくし、ツバキに吼えるように訴える。

「安全運転第一ですよー！！」

「ふむ……確かに元気のようだな」

「畜生！ 嵌めるとか止めてほしいー！！」

「ストップ！ レッドイーターさんスト おえええええ……」

タツヤは窓の無い装甲車から身を乗り出し、気味の悪い、いや、こちらの気持ちもだいたい悪くなるような行為を、不可抗力とはいえない行なってしまった。

ぶっちやけ嘔吐である。

タツヤのソレを直視せず、神機ケース越しにそれを聞き取ったレッドイーターは、ツバキへの恨み辛みをまあ少し置くとし、とりあえずとも言いたげな表情で、できる限りタツヤから離れた。口元をハンカチで拭い終えたタツヤはそれに過剰とも言える反応を示したのは一目瞭然である。

一瞬の自失状態から復帰し、レッドイーターに声を掛ける。

「え？ え？ え〜っと……どうして離れるんですかね？ えっと、何と言うか……仕方ないと思うんですけど」

「……………寄らないください」

「ちよ、ええ！？ 仕方ないじゃないですか！？ 神機使いだって人間だって事、皆さんお忘れ！？ 普通は気持ち悪くなるでしょう！？」

「「ああ……………うん」「」」

「溜めなつが！！ その場の空気読んだつもりでしょうけど、二人とも全然駄目ですからね！？」

「……………身体はともかく心は成長していないようだ」

「なんですかそのゲームの受け売りみたいな台詞！」

「……………おやバレましたか。帰ったらスー アミでマ オをやるんです」

「雑な会話が成立した！ というか何ですか！ その前にやることあるでしょう！…！」

「いや、どこからそんな古い物を手に入れたのかも重要な気がするんだが……………とゆうか使えるのか凄く疑問だ。約一世紀前の物だろうか？」

「……………あー、はいはいそうですねー。二人の言うとおりですよねえー。戻ったらゲーム機の前に事務処理……………チッ」

「……………む」

レッドイーターは気力が無い声色で返す。極め付けに盛大な舌打ちをしたため、ツバキの表情が少し険しくなった。そんな気配が背後からヒシヒシと感じ取れる。

そんな状況の中、タツヤは大粒の汗を額に集め、どうしたものかとレッドイーターを見つめる。するとレッドイーターはツバキに向けて口を開いた。

「……………極東支部に所属しているようで、僕の管轄はフェンリル本部。だから極東支部の中尉としての権限は一般よりもいや、まあ確かに中尉とかの階級になる前に戦死する神機使いが多いから比較なんて出来たもんじゃありませんが、大尉か少佐くらいの地位なんですよ。だから戦闘の経過報告、そこから出た書類の処理云々（うんぬん）をしなくてはならないって言うのは分かっていますよ。ただ……………ですね」

「？」

「……………今回、ちょっと命令違反……………しすぎたというか何と
言うか」

「ああ、あれか。レッドイーターの特殊な力の行使を一切認めない、
という本部の命令だったか？」

ええ、と、レッドイーターは気難しいツバキに階級を気にせず、
今まで通りの気楽な会話にしてくれという頼みを今の発言で止める
かどうか暇つぶしに考えながら、彼女の疑問に短い言葉で答える。

「リンドウに埋めさせた落とし穴もアラガミが喰らったような痕だ

「つたし」

「……………うん。ちよいと待ちましようか？」

「何故だ？」

レッドイーターは、別の理由で無言状態へと陥ったのタツヤと同じく、汗を噴き出した。

「いやいやいやいや！！ あの大穴を一人で埋めたんですか！？ 収集した雑魚のコアを放り込むために結構深くしてあったと思うんですけど！？？」

「ああ、お蔭様でもう夜の十時を回っているな。この疲れて倒れた愚弟が、自分から『今後の戦闘の障害になりかねない』と言いだしたものだから、奴らしくない発言に免じて埋めさせたよ……………一人で」

「鬼か！！」

「厳しくしなくては、こいつの頭は治らないさ」

「前言撤回。ええ、皮肉な事ですがその通りですね」

「そこは同意するのをお前……………」

「……………事実ですので」

「……………レッドイーター。お前とは、今後も仲良く出来そうだよ。とりあえず話を戻さないか？ 命令違反の件くらいまで」

「……………！！（ブンブン）」

正にその通りだといわんばかりに、タツヤが首を縦に振る。それを気にすることも無く、むしろ無視したレッドイーターは手を毛布に包^{くる}んで、賛成の言葉を述べる。そのレッドイーターの言葉を引き金に、ツバキは口を開いた。

「私が見た限りでは……………そうだな。あの穴と墮ちた者の」

だが、詰まる。理由なんて簡単で、彼女らしくない、そうレッドイーターは感想を持った。

「……………どつぞ」

「あ、ああ」

自分達の仲間が『処分』されたという現実を認めるしかない。そう遠回しに、最も墮ちた者の処分に貢献したレッドイーターは催促する。ツバキは一旦呼吸をし、言われた通りに続ける事にしたようだ。

「……………いや」

だがツバキは止めた。

軽い咳払いをすると、レッドイーターに今日最後の言葉を放つ。

「……………いい。この件は私よりも、上の方々が処理するだろうから……………な」

「度重なる命令違反　さて、レッドイーター君」

コードネームを淡々と述べ、シックザールはこめかみ辺りを指でなぞった。レッドイーターは背筋を伸ばし、失礼のないよう、はい、とだけ返事をする。

「本部長を含めた、本部長層部の人間はだいぶお怒りのようだ。今回の君の処分については、全て私に一任された。どういう意味か分かるかい？」

ただの子供だったら、首を傾げてわからないと呟くだろう。だがレッドイーターにしてみれば、見えすぎて逆に困るほど、内容がしつかりと理解できた。

(……本部は既に僕のことを死んでもいい存在だと判別した。いや。危険すぎて消えて欲しい？　そしてシックザール支部長の機嫌を損ねれば首を飛ばされる、が現状ですかね)

「まあ、そういうことなんだよねえ」

レッドイーターをシックザール支部長の執務机と挟むように、入口の自動ドアに背中を預けているサカキ博士は聞きなれた口調で笑う。レッドイーターは面倒臭そうに……いや、シックザールも同じく顔を顰めていた。

博士は、続きは？　とシックザールに問う。当のシックザール支部長は、しばし沈黙をし、

「レッドイーター君……」

「……………はい」

「君を」

レッドイーターは目を閉じた。独房入りかなんかだろう、と勝手に結果を予想し、それだと確信する。そう、レッドイーターは次の言葉が信じられないものであるとは、少しも、これっぽっちも考えてはいない。

シックザールは無情にも告げる。

「 本部に戻す」

「……………?」

一瞬、スサノオ討伐の話や、エイジス島発展の話が頭の中で、ヨーグルトをスプーンで掻き混ぜたように、ぐちゃぐちゃになった。冗談だろう、そう訊く前に、シックザールが机に置いてあるノートパソコンの画面をレッドイーターに見せる。

画面に映るのは 今日の新コースだろうか？ 録画したものと、画面の端にある時間を見て安易に予測できた。レッドイーターは、人を疑う眼差しで、シックザールの顔を捉える。

「……………これが?」

「少し待ちたまえ」

「……………了解」

明日の天気、気温。極東支部以外のフェンリル支部の外部居住区で起きた食料に関するデモンストレーション。連合軍の現在の行動どれも毎日のように見るニュースばかりだ。

だがニュースが中盤に差し掛かった頃である。

『昨日未明、極東支部外部居住区C区画にて三痕爪の犯行と思われる殺人事件が発生いたしました。被害者である家族は全員死亡が確認され、これで遂に300人を越える犠牲者となりました。三痕爪の動機は未だ不明であり、今後もフェンリル極東支部は調査を進め』

「……………三痕爪……………ですか？」

ピッ、と録画した映像を切る音と共に、レッドイーターは訊ねた。無論、自身を除いてここにいるのはシックザール支部長とサカキ博士のみである。

「そうだ。聞いた事はあるだろうか？ 犯行現場に残る、高熱で溶かされたような三つの爪痕の話は」

「……………はい。確か、稀に遺体にも同じ傷が残っているって随分前のニュースで流れていました」

自分には関係の無い、いや、内部居住区に住んでいる住民にとっては今の所、全くと言っていいほど無関係な事件である。だが、サカキ博士は眼鏡のブリッジを指で持ち上げながら発言をした。

「その容疑者がねえ……」

「君だ、レッドイーター君」

シックザールは自身の方向にノートパソコンの画面を再び向け、マウスを使い、次の録画した映像を流し始めた。レッドイーターは唾を飲み込むことすら忘れ、ただ目の前の状況に飲み込まれていく。

再び見せられる液晶画面。そこには

「え」

言葉を失った。

そこには自分がいたのだ。

どういうことだ！？ いや。ただ、見覚えがあるとすれば……！！

一瞬で数人の命が消し飛ぶ。四つのパーツに切断された人間達。奇怪な形状をしている、ルナティック・ツインと思われる三叉の双剣。叫ぶ人間達。間違いない。彼らは、あのFSD前日に襲来したアラガミ信者だ！ 複数の信者は震え上がり、

『トライエツシ
三爪痕！？』

都市伝説か何かなのに、その名前は赤髪赤目の人物 自分を指し示すかのように叫ぶ。

『てめえーじ』

レッドイーターは目を細める。疑いの眼差し。それがこの状況をどう変えるか、興味深くなった。

「……………この時から容疑者と疑うのなら、僕を捕まえて尋問するなりしたでしょうに。それとも」

答えが出た。

「僕に何かされると困る事が、この支部にあるんですか？ 支部長？」

「……………」

「……………沈黙は肯定ですか？ 用済みの犬に言う口は無いですか？ 新種のアラガミの討伐に駆り出される辺りからちょっと気になっているのですけど？」

「そんなことは無い」

嘘だ。

眉が数ミリ動いた。明らかに動揺している。彼も人間の感情を持っていて間違いはないのだろう。確認するようなことではないが……………。

だが調べようにも、その何か（……）がどこにあるのか検討が付かない。この支部には未だ謎がある。それだけは確かなのに、決定付けるモノと場所が無いのだ。疑いが確証へと変わるのには判断材料がまだ足りない。そう、足りなすぎる。レッドイーターが持つ情報だけなら、彼の妻であるアイーシャ・ゴーシュ氏がソーマ・シッ

クザールの出産と同時に『アラガミ化』した事。すぐ後ろで腕を組み、事を傍観しているサカキ博士が出した、実は世に一回っているのは別のものだと最近やっと気付いたのだが……正しい終末理論の方である『ノヴァの終末捕喰』。全ての人類の生存の可能性を引き上げ、アラガミに荒らされた世界から独立するために建設中の、神の盾の名を冠した『エイジス島』。

関連性の説を挙げてても、その中でも唯一ノヴァというアラガミの知識が皆無であるレッドイーターには何とも言えない。

「だが。まだ本部に返す予定は未定だ」

「？」

シックザールが嘲笑する。柔らかな笑みにすら見えてしまうのが、恐ろしいほど彼の『仮面』が丈夫である事を物語っていた。彼はその笑みを崩さずに、理由は、と口を開いた。

「今回の任務で、命令違反とはいえ多大な戦果と共に、君はそれに見合うコアを大量に持ち帰ってきてくれたからだ。それに、君にはまだここでやってもらいたい任務がまだある」

「……………スサノオですね」

「ああ。第一種接触禁忌アラガミ、スサノオ。これの討伐のためだけに、君は大出世をしているのだ。それ相応の働きしてもらわないと、この地を管轄する支部長としては困ったものでね」

「……………一つお尋ねします」

「……なんだい？」

冷静な口調で、シックザールは質問の許可を出した。そこにレッドイーターはすぐ反応する。

「……………スサノオの現在位置は把握していらっしやるのでしょうか？」

「いや。全くと言っていいほどで、尻尾すら掴めていない状態だ」

「こつちも色々な地方に調査隊を派遣しているんだけどねえ」

「ああ、博士の言うとおりだ。故に、このスサノオ討伐と、今回の事件が収まるまでは君は一ヶ月の謹慎処分とする。この支部で動いていいのは自室のみ。尚、食事等は………そうだな。ツバキ君達にお願いしよう」

「……………承知しました」

「おや」

サカキ博士が驚いたような声を上げる。だがレッドイーターは振り返らず、口を閉じる。ここはそういう場である事は、忘れてはならない。

「君がこんなに優しいところなんて、いつぶりに見るかな？」

そんなわけないだろ、とレッドイーターは決して口に出さない。出しても構わないが、信頼を寄せている戦友とは会わせてもらえないのならここは下手に動かない方が最善手だ。だがシックザールがこ

の方向性の話を入れるとは、予想外ではある。善意か、それとも本部から自身の手駒にするつもりか。

「とりあえず。容疑者である君には、訊ねたいことが多々ある。正直に話してもらえると助かる」

「………了解」

「では　ペイラー」

「おやすみ」

背中に何かを押し付けられる。瞬間、バチィッ、という音が支部長室で鳴った。

ゴトン。一人の子供の体が崩れる。

パシユンという音と共に、ドアから数人の人間が入ってくる。全員、ヘルメットで素顔を隠し、両手に安全装置が外れたアサルトライフルを持っている。彼らはレッドイーターを囲むと同時に、その銃口をレッドイーターの頭部に向けた。ただし、撃つわけではない。

「致死性のスタンガンを使用しても本当に大丈夫だったのか？　ペイラー」

「前は平気だったよ。少なくとも、身体のほうは」

「そんな遊びに、私の計画が潰されかけたのか……」

「ごめんごめん。星の観察者たるスターゲイザーが計画潰しの原因

になるのは可笑しいよね。それにしても」

「起きないな」

「もう一人の彼に、こちらの考えがバレちゃったのかな？」

「そつで無い事を願おう」

自動ドアが閉まる。それを期に、支部長室に、また長い沈黙が戻った。

「んだよオイ」

「知るかボケ」

互いに胸ぐらを掴み合い、同じようにガンのくれ合いを続けるのは二人のレッドイーター。片方の眼と髪は赤黒く染まり、どちらがどっちなのか、明確に判別できる。

「まあお前が分からない、表の世界の情報は俺にも来ないからよくわっかんねえけどさ！ 現れるなりいきなり何すんだボケナス！！」

「それはこっちの台詞だ！ お前、僕が知らない間に何しでかしてんだ！！」

「趣味だ！」

「外道か！」

裏の人格、裏と適当に呼ばれる少年は喚きだす。

「これでも無駄なことしない性格だと自負してんぞ!!」

「無駄な要素満載じゃないか!」

「なら勉強になることを教えてやる! そう。俺が大好きな戦いの話だ!!」

「最悪だよお前っ!!」

反射的に人差し指を裏の顔に向けたレッドイーター。それに、完全否定かよ、と裏は不貞腐れた反応を見せ、口を尖らせた。

「ぶうー。……とりあえずさあ。そろそろ、その口調を止めてくれ。気持ち悪い。演技はもう少し上手くなってから見せてくれ」

「んな!? この口調のどこが悪いって言うんですか!!」

「二年前くらいと比較したら本来の口調じゃねえよな。どこぞのクソ支部長よりは仮面という名の最終装甲が強固と見たり、にやり」

「もう黙れお前!!」

「ゴフッ!!」

乱暴な発言と共に放たれる殴打。それは裏の人格の頬を歪め、首を仰げ反らす。咄嗟に裏は頭突きをレッドイーターの額にクリーンヒットさせた。鈍い音が、二人の額の間で鳴る。血相を変えたレッ

ドクターは相手の服を握る手に力を入れた。

「痛いです!!」

「痛くしたんだ!」

「……………嘘ですごめんなさい」

「唐突な大嘘かましてんじやねえよ!! 痛いと思ってる限りは痛みがあるんだぞ! あ、やべ」

「……………なるほど あ、本当ですね。痛くないと思ったら痛くなくなりました」

「わざとですごめんなさい」

「オイ待てコラ」

何真似してんの、と伝える前に裏は動いた。

「待てと言われて待つのはバカだぜ! さらばだ!!」

「させるかあっ!」

「おっふっ!」

胸ぐらから手を離し、さらにその手でレッドドクターの手を払った裏は、即座に旋廻、走る。が、その足にレッドドクターが飛びついたことにより、逃走は未遂に終わった。裏の両脚を拘束したまま、レッドドクターは訊く。

「……………殺人犯はお前ですね？」

「敬語なのは変わらないとしても一人称と三人称がなあ」

「……………まだそれやるんですか？」

「へいへい。『堕ちた』仲間を簡単に殺せる神無家の子供は怖いねえ。誰に似たんでしょ　って既にいないか、そんな人物」

「……………関係ない。質問への回答を求めま　」

「俺だ……って返せばいいんだろ？」

「YES YES YES」

「棒読みって、実はけっくっくこう人の心を傷つけると思うんだけどね！　お前が分かってやってんのが判る分、俺すっごい傷ついた！！」

「……………では、僕は一ヶ月の謹慎処分を受ける結果になりますね」

「お前俺から聞いても黙っているつもりなんだから、そゆ事すらすら言えんのな」

失笑するレッドイーターは前髪を弄る。彼のもう一つの人格は今までの会話全てに呆れて、寝ながらレッドイーターに背を見せ、当たり前のように目蓋を閉じた。

第七十六話、容疑者（後書き）

ザックジャパン……負けてしまいましたね。

でも、まあ北朝鮮はアレですから。

負けたら強制労働所（？）行きですからね。モチベーションの違いなんでしょう。人権なんて存在しない国に生まれたくないね〜って他人事のように思いますが、想像しただけで怖いので、この考えは間違いで無いと信じたいですね。

そんなこんなで、ペントップを再び握りなおす赤の川でした。また遅れたらごめんなさい。

でもPCが最近やたら重くなって、執筆が進まない。不思議。

第七十七話、追跡される狼

4月3日

レッドイーターが謹慎処分宣告を受けて一ヶ月の前日となった今日。ミハイルとジャック、その他数人の科学者と護衛のゴッドイーター、及びある『特殊部隊』の一チームは飛行機に乗り、空の觀光を楽しんでいた。

とはいえ地上は地獄そのもの。時折、群れていたアラガミ同士で喰い合いをしているような場面も、数名の人間は見えていたようである。だが科学者達は別の兵器のパーツの構成を座席で資料に目を通し、頭に叩き込んでいたのであまり見ようとはしなかった。ある意味軽い性格のミハイルですら、ジャックと討論し合っており、外へと意識を割くことはできない。

「だ・か・ら、本部長にあの子の能力を使用したハイブリッド型の決戦兵器として開発を進めていたわけなんだよね。……でもさ、あの支部長が正直に発電用のオラクル細胞全てをくれんのかな？」

「知らないな。最低限の電気は地熱発電で補うことが可能なのが極東支部の隠れた特徴だから、問題ないんじゃないのか？」

「じゃあ、後は支部の設備の一部を借りて組み合わせるだけだね。らくちんらくちん」

「都合上作戦は朝から昼時限定だな。というか、そのらくちんなパーツを製造すんに新しい可変式神機の製造予算を割いたのか。思い切りの良いやつめ」

「だってえ。現状はレッドイーター君しか使えないしい。使えば使うほどモノが大量消費されていくんだよ？ 本部の戦力が色々あつて総合的に高くて、神機使い達に負担掛けたくないしさ？ 今は一台あれば十分なんだよ」

「その一台の特徴をこの決戦兵器だけで無駄にするんだがな」

「壊れるわけでも使えなくなるわけでもないからいいだろ」

「だからって弱点が消えたわけじゃないだろ。一つ、でかい。的になるし重い。レッドイーターの神機の性質も相まって、かなり狙われるかもしれない。二つ、レッドイーターにしか使えないから運用面では活用しにくい。三つ、戦術兵器に近いレッドイーターの力を戦略兵器として殺すから、前線の防衛力が著しく低下する」

「そこは承知してるけど、まあ極東支部にはレッドイーター君の頼れる仲間さんがいるみたいだから気にしない気にしない。きつと素で強いさ」

「……………」

「どつたよ？」

調子狂うなあ、とミハイルは手に持つ書類でジャックを扇ぐ。ジャックは強面の顔をさらに強張らせ、

「いや、俺達の極東支部内での護衛役の奴らって……確かあれだろ？」

「ああ、そういう意味？ 大丈夫大丈夫。皆さん大人なんだから嫉妬とか無いって」

「大人でも嫉妬深いやつかなりいるぞ」

「レッドイーター君！」

「かつこウィリアム氏限定かつこ閉じ」

「なんか嫌な記憶掘り起こしそうだからレッドイーター君関連に繋げんのやつば止めて！ いや、もうなんかやな記憶掘り起こしちゃうたかも！？」

「まあいい。問題なのはそれじゃないしな」

「あ、無視ですか」

「気にしたら負けだろ？ ジャックはため息を吐きつつ、失笑しながら自身の腿ももに肘を着いた。

「一番重要なのは、明日解除されるレッドイーターの能力を使った砲身の形成だ。予算の問題で、俺たちが作れたのは大量のオラクル細胞をいっぺんに集積回路で高エネルギー体に変える神機外付けの大型バレットだけ。つまりソレ単体では撃てないんだ。これには、レッドイーターの記憶力や想像力、演算能力全てが調子が良く、かつ緊張を無くさなければならぬ」

「まあ適度な緊張を保てるからだいたいクリアじゃね？」

「そう呑気なことと言えるのは、今だけなのでミハイルはあえて適当

たまたま休憩を挟み、ミハイルの声を聞いてしまった人々は、皆一斉にそう心の中で絶叫した。彼の心はいつでも晴れのようにである。もちろん、悪い意味で。

(めんどくせえ)

そして相棒のジャックの気苦労は、またまた溜まっていくのであった。

ミハイルがバカしてる同時刻。

ポヨン。

なんとも言えない癒し系の音と共に、白い帽子を被った鼻のてかおじさん風ドット絵が2D画面内でジャンプする。

「よく飽きないな」

「飽きれるわけがないと思いますけどね。個人的に、明日から切り替えがちゃんとできるのか心配なんだが」

「同意だ」

長いソファに腰を下ろし、テーブルに置かれた抹茶を飲んでいる。両宮姉弟はゲームのコントローラーを冷静に持つ子供を温かい眼で見守っていた。画面では赤いドット絵がおじさんの手である。ドットから連続射出されており、蟹歩きをする茶色い敵を倒していた。

ああ、ク　ボーが焼かれていく、とリンドウは冗談交じりに呟き、
ずずず、と茶を喉に通す。そして口からゆっくりと離し、背中を曲
げた。

「サクヤもフェンリルに入隊しちまって、姉上とかは任務に集中し
すぎて相手してくれねえし、ずっと支部内に居るレッドイーターは
ゲームに夢中だし……話し相手が最近やたら少ないというカオスな
状況なんだよなあ」

しみじみとリンドウは呟き、ポッドの丸い押し口を押してレッド
イーターの所持品である茶碗にお茶を注ぐ。

「姉上もいるか？」

「ああ、頼む」

「……久しぶりに非番なんだからさ、もうちょっと何か話そうぜ。
な？」

「私の話は面白くないと駄々こねる奴はどこの誰だ？」

「ぐっ！？」　だけどさ、やっぱ暇なんだよ！　最近は身体が悲鳴上
げてきて戦闘に参加したいというわけじゃないけどさ」

虹色に光りだしたレッドイーターの操作するキャラクターは、触
れるだけで敵をどんどん蹴散らしていく。ああ、俺もあれくらい楽
したいなあ、と呟いたリンドウは茶碗に注がれたお茶に少し目を配
らせ、押し口に置いていた手から力を抜く。今リンドウが使ったポ
ッドはもう古く、一秒間における水の出る量（つまり水を吸い出す
量）はとても少なくなっており、茶碗に三分の一注ぐのには通常よ

り少し時間がかかった。

リンドウはツバキから茶碗を受け取り、再び押し口を押す。

チヨロチヨロチヨロ。少しずつ水嵩が上がっていく。同時に、暖かさを失いつつあった茶碗に、再び温もりが戻っていった。

リンドウは、ふと一部の壁に内蔵された薄型液晶ディスプレイを見る。今日の日付を見て、また明日からか、とツバキに聞こえるように思いを告げた。(レツドイーターが使用しているゲーム機は、これまたどこから調達したかも分からない昔のボックスのような形状をしたカラーテレビに繋いである)

「……明日から、レツドイーターの謹慎が解かれると同時に本格的にスサノオ搜索が再始動だからなあ。気を引き締めていかないとな」

「本部の技術員と神機使いの応援は今日着くとはいえ、勝負の要かなめであるレツドイーター用の特殊な兵装は現地で組み立てるから、発見してもすぐには始まらんさ」

「俺たち近接型のみでの戦闘か」

「すまないな。無理をさせるようで」

リンドウは苦笑をする。ツバキのこういう所は、肉親として誇れるからであろつ。嬉しかった。

アナグラに貯蔵された発電用オラクル細胞。そして遠距離型神機に装填されるオラクル細胞。全てがレツドイーターの神機の力とし

て 名前も詳しい内容も決められていない 作戦に使用されるのだ。結果、遠距離式ゴッドイーターたちはすることが無い。それは責任感が人一倍あるツバキに大きいのしかかった。

「私も近接式なら参加できるのにな」

「しょうがないだろ？ 適合審査でそうなっちまったんだから。大丈夫さ、時間稼ぎだけなんだろ？ 俺、結構生きる願望が強いからな、生き残ってやるさ」

「望むなら、戦死者ゼロが良いな」

「ああ、仲間も死なせやしない。全員で生きて帰る。それが連携という必須事項を俺たちに使わせる」

「だが無理はするな」

「ああ、随分前にレッドイーターが言ったさ。死なない、死にそうになったら逃げ、それで隠れる。で、隙を見つけたらぶっ殺せ、つてな？ そうだったよな、レッドイーター？」

ポン。 テレッツ、 テテレレレン

画面の下にぽっかり空いていた穴に、おじさん風ドット絵が落下する。残りクレジットが一つ減り、ドット絵はマップ画面に戻された。

言うまでもなく殺気がどんどん膨れ上がってゆく。俺の所為かよ！？ と叫ぶのも出来なくなるほど、それはゆっくりというよりは、爆発に近い形で、

「……パーフェクトクリア、達成ならず……か。ふふふふ
ふ」

(じゃ、邪悪なオーラ撒き散らしながら笑ってるーっ!!???)

「じゃリンドウ。私はバレットの調整してくるから」

不穏な空気を察して立ち上がったツバキは、早歩きで外に出ようとする。それをリンドウは汗ばんだ手で彼女の紺色の服の袖を掴み、引き止める。

ツバキは微笑む。

「安心しろ」

「だ、だよな！ ターミナルならここにもあるもんな！」

「奴から銃器と刃物は没収してある」

「だ、駄目だ!!！ それだけじゃ何の安心感も得られねえっ!!！
むしろ急所狙われまくって将来不幸になりそうだ!!！」

リンドウの脳裏を過ぎるのは、初対面のレッドイーターの行動
金的である。

また立ち去ろうとするツバキの袖を、力の限り引っ張って止める。
リンドウは既に必死であるので、若干目に焦りが生じてきた。

「男はね！ いい姉上？ お・と・こ・は・ね？ 地味な部分に急

所があるんだぜ？ 俺レツドイーターと初めて会ったとき、やられたんだよ蹴り上げられたんだぞ！？」

「いや、なに口走っているんだこの愚弟」

「……ほんと、何を言ってるんですかねえこの雑菌だらけの口は」

「生まれて初めてそんな侮辱されること言われた気がするぞ！ といつか反論していい？」

「駄目だ駄目」

「最近タツヤから聞いたけど二人とも息合ってるなあ！ 何でだよ！！」

「頭の体操にもってこいだから」

「最悪だよあんたら！！」

あれ、デジャヴ？ とレツドイーターは首を傾げる が、そんな可愛らしい行動を無視してリンドウはソファに備えられてあるクッションを素早く抱きかかえ、顔を隠す。やりすぎたか、という表情を全くしないツバキとレツドイーターは、むしろさらに酷い哀れみの目でリンドウを見る。

沈黙……はしたが、逆にゲームのBGMが目立つ形となり、三人の表情は次第に緩やかになっていった。

「……まあリンドウさん達が訪れる前に既に二回死んでま

すけどね」

「じゃあ何で弄りに来たあああああああああっ！！」

決まっているだろう、とツバキは鼻で笑った。苦虫を噛み潰したような表情をするリンドウは、額に手を着いた後、テーブルの上に置いた茶碗一個を手に取り、勢いに身を任せてがぶ飲みした。そもそも量が少ないので、がぶ飲みじゃないだろ、と言われたらそれまでであるが、男は一気に飲み干した。

もう少し大人になって、仲間に安心をさせられる冷静さを持つにはまだしばらくかかりそうなリンドウを一瞥したレッドイーターは踵を返し、再びゲームのコントローラーを手に取る。それを見送ったツバキは、またソファに腰を下ろした。

「まあ気にすることではないだろう？ 子供は自分よりも大きなものに歯向かいたくなるものさ。お前なんて、ナツばあに罵声を浴びせては叱られてただろ」

「む、昔の話を出すんじゃないよ。だがナツばあか……何か、時間が経った気がするな」

「お前の夢は、世界中からアラガミを消す、だったか？ 少しは夢が叶ったんじゃないのか？」

「おいおい姉上、もう一つの『誓い』も覚えていてくださいよ」

「ああ、フェンリルの職員を私が止めている間にナツばあから言われたこと……か？ 私たち入職対象者以外は連れて行ってもらえなかったからな……」

「サクヤを守る。俺がナツばあに頼まれた、最後のお願いだ」

「……………リンドウさん」

「あ？」

ゲームのコントローラーを床に置いて、何かゴソゴソと二人が気付かぬ間にやっていたレッドイーターの手から、白い物体がリンドウに向けて放られた。リンドウは難なく受け止め、それを確認する。

「餅もちか？」

「……………慈悲深いナツおばあさんが、反抗期真っ盛りの貴方に渡した思い出の一つでしょ？」

「え、何で……………お前」

リンドウは驚愕した。いや、嬉しさも恥ずかしさも、驚きも正解には存在していない。ただ、疑問が心にポツンと立っていた。コントローラーを片手で操作する子供は、優しい微笑みを浮かべ、

「……………僕の力は無差別ですから。未来も過去も現在も、僕が望まなくても僕は皆さんの事を陰ながら知れてしまう。ほら、前にリンドウさんが堕ちた者から毒を貰ってしまった時なんですけど、解毒のために緊急手段で力を行使したら記憶の一部が見えたんですよ」

「それでナツばあを？」

「・・・・・・・・はい」

「確かに、それは無差別だな」

ツバキは不満気に言う。当然だ。自身のプライベートの事も筒抜けになってしまふのだから。そこらへんに厳しいツバキにしてみれば、説教の対象かもしれない。

……だがレッドイーターは言った。

「・・・・・・・・多分、ツバキさんの思っていることとは違うんだと思います。きっと、その記憶を見られた側の人にとって、幸福で大事だった時間、つまり記憶にしっかりと刻まれている思い出しか見れないんですよ」

「自身のミスから生じた事、結果として幸福に繋がれば見えてしまっつ」

「姉上……何、考えてる？」

はっ、とした表情になったツバキは顔を引きつる。同時に、リンドウは疑いの眼差しを実の姉に向けた。

「プライベートで良い事でもあったのか？ 彼氏できたとか？」

「それは無い」

「・・・・・・・・自分から即答しますか」

「レッドイーター……これは事実だし、私はフェンリルの軍人なん

だぞ？ そういった事に時間を割くくらいなら、こついった時間にリラックスをして精神を安定させるのが立て続けに舞い込むミッシェンで生き残りやすいのさ」

「……軍人イコール犬に聞こえてしまった事は忘れませんが、他人の恋愛とかには興味なんて無いですけど、ツバキさんはそろそろ視野に入れたい方がいいのでは」

「子供が口を挟むところじゃないさ」

リンドウは笑みを作って、会話を切らそうとする。言われた方のレッドイーターは、彼の行動の意味を悟り、ステージクリアを確認した後、後ろを向いた。

ツバキは背が高く、（普段着が分厚いのに関わらず、胸のラインが分かるほどの）巨乳で美人。そして戦果はレッドイーターと拮抗するほどではないが、純粋に極東支部所属のゴッドイーターとして見るなら一番の戦力だ。

人気は当然出る。彼女の美貌に惹かれた人間。力に憧れた人間。層は分かれるが、絶大な人気がある事は間違いない。（証拠としてリンドウはツバキがラブレターを受け取るシーンを目撃したことがある）

だがツバキはそれらに興味が薄いみたいだ。

意思疎通を果たしたリンドウとレッドイーターは、目を合わせ、表情を固めたまま胸の内のため息を吐くしかない。

（……何年経っても変わらない気がする……）

数分後。

ツバキが茶碗を手に取り、数回に分けて飲む音。そしてゲームを楽しむレッドイーターがコントローラーのボタンを押す音。加えて、そのゲームのBGMだけが、二人を探して部屋を訪れたサクヤが耳にした部屋の音であった。

夕焼けの空。

一体の巨人が開眼かいげんした。

妖艶な美貌を持つ女の目は目蓋で閉ざされており、口には笑みが接着剤で固められたように浮かんでいる。

その他は、異質の一言に限る。

女性の裸体が上半身を……そして、昆虫のような不気味な形状をしている巨大な下半身が、ソレを人間ではなく、やはりアラガミだと語っていた。全身の色合いは総じて緑に近く、女体の腕は途中から長い袖のようなスカートのようなモノに置き換わっており、下半身にもスカートに似た物体が装飾されている。

何より、このアラガミの特徴は『眼め』にある。

『眼』。それはどこか。両目は閉ざされ、開ける気配は微塵にも感じさせない。

そう、その『眼』は女性の額にあった。それは、既存のアラガミザイゴートとの共通点を匂わせる、一個の、黄褐色で巨大な『魔眼』。

一体の巨人は、フェンリルではこう呼ばれることになっている。

サリエル。アブラハム宗教の聖典や伝承に登場する神の使いすなわち天使の内、熾天使や大天使という階級に位置する天使の一人の名だ。そのアラガミは、魔眼をある一点に沿えた。

ローター音が空で鳴る。四機の軍用ヘリがフェンリル極東支部へと向かっており、現在飛行中であった。

『オオオオオオオオン………』

飛翔を始めたサリエルに着いてくるかのように、数体のザイゴートが突然現れる。ひらりと、巨体を優雅に一回転させたサリエルという名の新種は、空中で身体を前に倒し、移動を開始した。

その高度を、通常のゴッドイーターでは絶対に届かない範囲で保ちながら……。

第七十七話、追跡される狼（後書き）

やろつと思えばそれなりに早く更新できるのに何故遅いんだ、僕と
いう馬鹿はorz

おまけVer1

はい、こんばんわ

or

おはようございます

or

Hello!!

何だかんだで、今やっと執筆を再開した全裸ofキングではない赤の川です。

うん。今まで何やっていたかなんて…… やってました。

>i37018—2478<

っ、つかっれったい!

小説の更新よりも、こっちの方を優先していましたよ。ええっ!!
だって、ペンタブ買ったからには何か、一枚くらい作りたいもの!!

むあああ(泣)

優先順位間違えてるのか僕orz

寝る前に……更新できるか?w

おまけ Ver 1 (後書き)

次の更新まで……あと少しー!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8215q/>

G O D E A T E R 第一章 偽りの神を喰らいし神の子

2011年12月11日21時46分発行